京都府遺跡調査報告集

第135冊

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡
平成18・19年度発掘調査報告
時塚遺跡第15・17次

2009

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方の御理解と御協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は『京都府遺跡調査報告集』として、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて行った平成18・19年度に実施した国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡に関する発掘調査の成果を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深めるうえで、ご活用いただければ幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された農林水産省近畿農政局をはじめ、京都府教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成21年３月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター
理　事　長　　上　田　正　昭

例　　言

1．本書に収めた概要は下記のとおりである。

2．遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1．	時塚遺跡第15・17次	亀岡市馬路町時塚・筋違ほか	平18.9.4～平19.2.22 平19.4.23～平19.9.27	農林水産省近畿農政局	伊野近富 岩松　保 岡﨑研一 石崎善久 筒井崇史 松尾史子

3．本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第６座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

4．本書の編集は、調査第２課調査担当者の編集原案をもとに、調査第１課資料係が行った。

5．現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査第１課資料係主任調査員田中彰が行った。

本 文 目 次

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成18・19年度発掘調査報告
時塚遺跡第15・17次
はじめに ---- 1
１．時塚遺跡第15次 ---- 3
２．時塚遺跡第17次 ---- 116
おわりに ---- 205

付 表 目 次

付表１　15－１地区出土遺物対照表 ---- 65
付表２　15－３地区出土土器対照表 ---- 91
付表３　15－４地区柱穴出土遺物対照表 ---- 109

挿 図 目 次

第１図　調査地位置図および周辺主要遺跡分布図 ---- 1
第２図　時塚遺跡調査地全体図 ---- 2
第３図　時塚遺跡方形周溝墓復原図 ---- 4
第４図　１地区検出遺構配置図 ---- 5
第５図　15－１地区方形周溝墓実測図 ---- 6
第６図　ＳＤ534遺物出土状況図 ---- 7
第７図　15－１号墓埋葬施設ＳＫ449実測図 ---- 7
第８図　ＳＤ198遺物出土状況図 ---- 8
第９図　ＳＤ534遺物出土状況図 ---- 9
第10図　15－３号墓埋葬施設ＳＫ551実測図 ---- 9
第11図　ＳＤ523遺物出土状況図 ---- 10
第12図　15－４号墓埋葬施設ＳＫ558実測図 ---- 10
第13図　15－５号墓実測図 ---- 11
第14図　15－７・８号墓実測図、ＳＫ209実測図 ---- 13
第15図　ＳＤ517遺物出土状況図 ---- 14

第16図　1地区出土遺物実測図(1)----17
第17図　1地区出土遺物実測図(2)----18
第18図　1地区出土遺物実測図(3)----19
第19図　1地区出土遺物実測図(4)----20
第20図　1地区出土遺物実測図(5)----21
第21図　1地区出土遺物実測図(6)----23
第22図　1地区出土遺物実測図(7)----24
第23図　1地区出土遺物実測図(8)----25
第24図　1地区出土遺物実測図(9)----26
第25図　1地区出土遺物実測図(10)----27
第26図　1地区出土遺物実測図(11)----28
第27図　1地区出土遺物実測図(12)----29
第28図　1地区出土遺物実測図(13)----30
第29図　1地区出土遺物実測図(14)----31
第30図　1地区出土遺物実測図(15)----32
第31図　1地区出土遺物実測図(16)----33
第32図　1地区出土遺物実測図(17)----34
第33図　1地区出土遺物実測図(18)----35
第34図　1地区出土遺物実測図(19)----36
第35図　1地区出土遺物実測図(20)----38
第36図　1地区出土遺物実測図(21)----39
第37図　1地区出土遺物実測図(22)----41
第38図　1地区出土遺物実測図(23)----43
第39図　1地区出土遺物実測図(24)----44
第40図　1地区出土遺物実測図(25)----46
第41図　1地区出土遺物実測図(26)----47
第42図　1地区出土遺物実測図(27)----49
第43図　1地区出土遺物実測図(28)----50
第44図　1地区出土遺物実測図(29)----51
第45図　1地区出土遺物実測図(30)----52
第46図　1地区出土遺物実測図(31)----55
第47図　1地区検出遺構配置図----56
第48図　掘立柱建物跡ＳＢ１－01実測図----57
第49図　掘立柱建物跡ＳＢ１－02実測図----58
第50図　掘立柱建物跡ＳＢ１－03実測図----58

第51図　掘立柱建物跡ＳＢ１－04実測図----59
第52図　掘立柱建物跡ＳＢ１－05実測図----60
第53図　掘立柱建物跡ＳＢ１－06実測図----60
第54図　掘立柱建物跡ＳＢ１－07実測図----60
第55図　掘立柱建物跡ＳＢ１－08実測図----61
第56図　掘立柱建物跡ＳＢ１－09実測図----61
第57図　ＳＫ220実測図----62
第58図　１地区出土遺物実測図(32)----63
第59図　１地区出土遺物実測図(33)----64
第60図　１地区出土遺物実測図(34)----66
第61図　１地区出土遺物実測図(35)----67
第62図　１地区出土遺物実測図(36)----68
第63図　２地区検出遺構配置図----69
第64図　２地区方形周溝墓平面図----70
第65図　ＳＤ531遺物出土状況図----71
第66図　ＳＤ542遺物出土状況図----71
第67図　ＳＫ547実測図----72
第68図　ＳＫ617実測図----72
第69図　ＳＫ552実測図----73
第70図　ＳＤ02実測図----73
第72図　ＳＫ70実測図----74
第73図　時塚３号墳実測図----75
第73図　２地区出土遺物実測図(１)----77
第74図　２地区出土遺物実測図(２)----78
第75図　２地区出土遺物実測図(３)----79
第76図　２地区出土遺物実測図(４)----80
第77図　時塚３号墳出土遺物実測図(１)----81
第78図　時塚３号墳出土遺物実測図(２)----82
第79図　２地区検出遺構配置図----83
第80図　掘立柱建物跡ＳＢ２－01・02実測図----84
第81図　掘立柱建物跡ＳＢ２－03・04実測図----84
第82図　木棺墓ＳＫ34実測図----85
第83図　２地区出土遺物実測図(５)----86
第84図　３・６地区検出遺構配置図----87
第85図　ＳＰ521実測図----87

第86図　３地区出土遺物実測図（１）----88
第87図　３・６地区検出遺構配置図----88
第88図　掘立柱建物跡ＳＢ３－01実測図----89
第89図　掘立柱建物跡ＳＢ３－02実測図----89
第90図　ＳＫ11実測図----90
第91図　３地区出土遺物実測図（２）----92
第92図　４地区検出遺構配置図----93
第93図　４地区方形周溝墓実測図（１）----94
第94図　ＳＸ122実測図----95
第95図　ＳＤ31遺物出土状況図----96
第96図　ＳＫ143実測図----96
第97図　ＳＫ147・65・185実測図----97
第98図　ＳＤ121遺物出土状況図----98
第99図　４地区方形周溝墓実測図（２）----99
第100図　竪穴式住居跡ＳＨ32実測図----100
第101図　竪穴式住居跡ＳＨ68実測図----100
第102図　４地区出土遺物実測図（１）----101
第103図　４地区出土遺物実測図（２）----102
第104図　４地区検出遺構配置図----103
第105図　掘立柱建物跡ＳＢ４－01実測図----104
第106図　掘立柱建物跡ＳＢ４－02実測図----104
第107図　掘立柱建物跡ＳＢ４－03実測図----104
第108図　掘立柱建物跡ＳＢ４－04実測図----105
第109図　掘立柱建物跡ＳＢ４－05実測図----105
第110図　掘立柱建物跡ＳＢ４－06実測図----106
第111図　柱列ＳＢ４－07実測図----106
第112図　ＳＤ30東端土坑遺物出土状況平面図----107
第113図　ＳＫ37実測図----107
第114図　４地区出土遺物実測図（３）----108
第115図　４地区出土遺物実測図（４）----109
第116図　４地区検出遺構配置図----110
第117図　木棺直葬墓ＳＸ20実測図----110
第118図　竪穴式住居跡ＳＨ16実測図----111
第119図　Ｌ５地区出土遺物実測図（１）----112
第120図　５地区検出遺構配置図----113

第121図　掘立柱建物跡ＳＢ５－01実測図----114
第122図　掘立柱建物跡ＳＢ５－02実測図----114
第123図　ＳＤ13実測図----115
第124図　５地区出土遺物実測図（２）----115
第125図　時塚遺跡17次調査区全体図----117
第126図　時塚遺跡17次調査区方形周溝墓復原図----118
第127図　Ｌ１地区検出遺構配置図----119
第128図　竪穴式住居跡SH01実測図----119
第129図　掘立柱建物跡ＳＢ01実測図----119
第130図　Ｌ１地区出土遺物実測図----120
第131図　Ｌ２地区検出遺構配置図----121
第132図　Ｌ１・２地区方形周溝墓平面図----121
第133図　時塚14号墳実測図----122
第134図　時塚14号墳実測図----123
第135図　時塚13号墳実測図----124
第136図　竪穴式住居跡ＳＨ07実測図----125
第137図　Ｌ２地区出土遺物実測図----127
第138図　Ｌ３地区検出遺構配置図----128
第139図　時塚11号墳実測図----129
第140図　時塚11号墳遺物出土状況図（１）----130
第141図　時塚11号墳遺物出土状況図（２）----131
第142図　時塚12号墳実測図----132
第143図　Ｌ３地区検出遺構配置図----133
第144図　掘立柱建物跡ＳＢ01、柵ＳＡ01実測図----133
第145図　Ｌ３地区南半部遺構配置図----134
第146図　Ｌ３地区出土遺物実測図----135
第147図　Ｌ４地区検出遺構配置図----136
第148図　竪穴式住居跡ＳＨ62平面図----136
第149図　ＳＫ48実測図----137
第150図　時塚５号墳実測図----138
第151図　時塚５号墳遺物出土状況図----139
第152図　時塚６号墳実測図----141
第153図　時塚７号墳実測図----142
第154図　時塚７号墳遺物出土状況図----143
第155図　時塚８号墳実測図----144

第156図　Ｌ４地区出土遺物実測図（１）----145
第157図　Ｌ４地区出土遺物実測図（２）----147
第158図　Ｌ４地区出土遺物実測図（３）----148
第159図　Ｌ４地区検出遺構配置図----149
第160図　掘立柱建物跡ＳＢ01実測図----149
第161図　掘立柱建物跡ＳＢ02実測図----150
第162図　掘立柱建物跡ＳＢ03実測図----150
第163図　ＳＫ49実測図----150
第164図　Ｌ４地区出土遺物実測図（４）----151
第165図　Ｌ５地区検出遺構配置図----152
第166図　Ｌ５地区方形周溝墓平面図----153・154
第167図　ＳＤ02・ＳＤ139遺物出土状況図----155
第168図　木棺墓ＳＸ160実測図----156
第169図　17－１・２号墓周溝断面----156
第170図　ＳＤ133遺物出土状況図----157
第171図　木棺墓ＳＸ01実測図----157
第172図　ＳＤ136断面図----158
第173図　ＳＤ136遺物出土状況図----159
第174図　ＳＤ135Ｂ・125Ａ遺物出土状況図----160
第175図　木棺墓ＳＸ161実測図----161
第176図　17－６号墓周溝断面----161
第177図　ＳＤ126遺物出土状況図----162
第178図　17－６号墓埋葬施設実測図----163
第179図　17－７号墓周溝断面----164
第180図　ＳＤ155遺物出土状況図----165
第181図　17－７号墓埋葬施設実測図----166
第182図　ＳＤ76断面図----166
第183図　木棺墓ＳＸ68実測図----167
第184図　ＳＤ76遺物出土状況図----167
第185図　ＳＫ149実測図----168
第186図　17－９号墓埋葬施設実測図----169
第187図　17－10号墓周溝断面----171
第188図　ＳＤ77遺物出土状況図（１）----172
第189図　ＳＤ77遺物出土状況図（２）----172
第190図　17－11～13号墓周溝断面図、ＳＤ84遺物出土状況図----173

第191図　木棺墓ＳＸ183実測図----173
第192図　17－14号墓周溝断面、遺物出土状況図----174
第193図　17－15～17号墓周溝断面----175
第194図　17－17号墓遺物出土状況図----176
第195図　17－18号墓周溝土層断面・遺物出土状況図----176
第196図　Ｌ５地区出土遺物実測図（１）----177
第197図　Ｌ５地区出土遺物実測図（２）----178
第198図　Ｌ５地区出土遺物実測図（３）----179
第199図　Ｌ５地区出土遺物実測図（４）----180
第200図　Ｌ５地区出土遺物実測図（５）----181
第201図　Ｌ５地区出土遺物実測図（６）----182
第202図　Ｌ５地区出土遺物実測図（７）----183
第203図　Ｌ5地区検出遺構配置図----184
第204図　木棺墓ＳＸ143実測図----185
第205図　竪穴式住居跡ＳＨ123・124実測図----185
第206図　掘立柱建物跡ＳＢ01・02実測図----186
第207図　掘立柱建物跡ＳＢ03実測図----187
第208図　掘立柱建物跡ＳＢ04実測図----187
第209図　掘立柱建物跡ＳＢ05・06実測図----188
第210図　掘立柱建物跡ＳＢ07・08実測図----188
第211図　Ｌ５地区出土遺物実測図（８）----189
第212図　Ｌ６地区検出遺構配置図----190
第213図　ＳＫＢ・ＳＫＣ実測図----190
第214図　木棺墓１実測図----191
第215図　土器棺墓１実測図----191
第216図　時塚４号墳実測図----192
第217図　掘立柱建物跡ＳＢ01・柵ＳＡ01実測図----192
第218図　掘立柱建物跡ＳＢ02実測図----193
第219図　掘立柱建物跡ＳＢ03・柵ＳＡ02実測図----193
第220図　掘立柱建物跡ＳＢ04実測図----194
第221図　掘立柱建物跡ＳＢ05実測図----194
第222図　ＳＫＡ実測図----195
第223図　Ｌ６地区出土遺物実測図（１）----196
第224図　Ｌ６地区出土遺物実測図（２）----197
第225図　Ｌ７地区方形周溝墓実測図----199

第226図　Ｌ７地区方形周土層断面図----------200
第227図　ＳＤ15実測図----------200
第228図　竪穴式住居跡ＳＨ05実測図----------200
第229図　時塚９号墳実測図----------201
第230図　時塚９号墳遺物出土状況図----------202
第231図　時塚10号墳実測図----------203
第232図　Ｌ７地区出土遺物実測図----------204
第233図　Ｌ５地区ＳＫ169実測図----------205

図 版 目 次

図版第１　（１）時塚遺跡全景（上空から、上が西）
（２）時塚遺跡15次調査地全景（上空南から）
図版第２　（１）15－１地区　７・８号墓全景（北から）
（２）15－１地区　15－８号墓全景（西から）
（３）15－１地区　15－７号墓全景（北から）
図版第３　（１）15－１地区　ＳＤ517北西部遺物出土状況（東から）
（２）15－１地区　ＳＤ198遺物出土状況（北から）
（３）15－１地区　ＳＤ534遺物出土状況（北から）
（４）15－１地区　３・４号墓全景（東から）
（５）15－１地区　北東部遺構検出状況（南から）
（６）15－１地区　北部建物群（南から）
（７）15－１地区　南半遺構検状況（北から）
（８）15－１地区　ＳＫ220（南から）
図版第４　（１）15－２地区　時塚３号墳全景（南東から）
（２）15－２地区　南半部遺構検出状況（東から）
（３）15－２地区　掘立柱建物跡ＳＢ２－02（東から）
図版第５　（１）15－３地区　調査区全景（南から）
（２）15－３地区　掘立柱建物跡ＳＢ３－01（西から）
（３）15－３地区　ＳＫ11（東から）
図版第６　（１）15－４地区全景（北東から）　（２）15－15号墓全景（南から）
（３）15－16号墓全景（南西から）
図版第７　（１）15－16号墓ＳＸ122検出状況（北から）
（２）15－16号墓ＳＸ122掘削状況（北から）

（３）15－４地区　ＳＤ31遺物出土状況（北から）
（４）15－４地区　ＳＤ121遺物出土状況（北から）
（５）15－４地区　ＳＫ143検出状況（東から）
（６）15－４地区　ＳＤ30東端土坑検出状況（西から）
（７）15－４地区　竪穴式住居跡ＳＨ32掘削状況（西から）
（８）15－５地区　ＳＨ16中央土坑遺物出土状況（東から）
図版第８　（１）15－17～19号墓全景（北東から）　（２）15－17・18号墓全景（北西から）
（３）15－５地区全景（北から）
図版第９　（１）15－５地区　竪穴式住居跡ＳＨ16全景（北から）
（２）15－５地区　ＳＸ20完掘状況（東から）
（３）15－５地区　溝ＳＤ13・15全景（西から）
図版第10　（１）時塚遺跡17次調査地全景（南上空から）
（２）時塚遺跡17次調査地全景（北上空から）
図版第11　（１）17次Ｌ１～３地区全景（上空から、上が東）
（２）17次Ｌ１地区　竪穴式住居跡ＳＨ01（東から）
（３）17次Ｌ１地区　掘立柱建物跡ＳＢ01（南から）
図版第12　（１）17次Ｌ２～３地区全景（南上空から）
（２）17次Ｌ２地区全景（北から）
（３）17次Ｌ２地区　時塚14号墳全景（盛土除去前、南西から）
図版第13　（１）17次Ｌ２地区　時塚14号墳全景（盛土除去後、北西から）
（２）17次Ｌ２地区　時塚13号墳全景（南西から）
（３）17次Ｌ２地区　竪穴式住居跡ＳＨ07全景（東から）
図版第14　（１）17次Ｌ３地区全景（南から）
（２）17次Ｌ３地区掘立柱建物ＳＢ01（北から）
（３）17次Ｌ３地区　時塚11・12号墳全景（北から）
図版第15　（１）17次Ｌ３地区　時塚11号墳遺物出土状況（東から）
（２）17次Ｌ４地区全景（上空から、上が東）
（３）17次Ｌ４地区全景（上空南から）
図版第16　（１）17次Ｌ４地区　ＳＫ48遺物出土状況１（南から）
（２）17次Ｌ４地区　ＳＫ48遺物出土状況２（南から）
（３）17次Ｌ４地区　時塚５号墳全景（南から）
図版第17　（１）17次Ｌ４地区　時塚５号墳周溝内遺物出土状況（南から）
（２）17次Ｌ４地区　時塚６号墳遺物出土状況（東から）
（３）17次Ｌ４地区　時塚７号墳全景（北から）
図版第18　（１）17次Ｌ４地区　時塚７号墳遺物出土状況（北から）

（２）17次Ｌ４地区　時塚８号墳周溝（東から）
（３）17次Ｌ４地区　掘立柱建物跡ＳＢ01（南から）
図版第19　（１）17次Ｌ４地区　掘立柱建物跡ＳＢ02（西から）
（２）17次Ｌ４地区　掘立柱建物跡ＳＢ03（北から）
（３）17次Ｌ４地区　ＳＫ49（南東から）
図版第20　（１）17次Ｌ５地区全景（南上空から）
（２）17次Ｌ５地区全景（上空から、上が東）
図版第21　（１）17次Ｌ５地区　17－２号墓全景（南から））
（２）17次Ｌ５地区　木棺墓ＳＸ01（西から）
（３）17次Ｌ５地区　17－３・４・15号墓（南から）
図版第22　（１）17次Ｌ５地区　ＳＤ136遺物出土状況（南から）
（２）17次Ｌ５地区　木棺墓ＳＸ161（東から）
（３）17次Ｌ５地区　17－１・６号墓全景（南から）
図版第23　（１）17次Ｌ５地区　ＳＤ125Ａ遺物検出状況（南から）
（２）17次Ｌ５地区　木棺墓ＳＸ153（西から）
（３）17次Ｌ５地区　木棺墓ＳＸ154（東から）
図版第24　（１）17次Ｌ５地区　木棺墓ＳＸ150・151（東から）
（２）17次Ｌ５地区　木棺墓ＳＸ67（東から）
（３）17次Ｌ５地区　17－７・15・16号墓（東から）
図版第25　（１）17次Ｌ５地区　木棺墓ＳＸ68掘削状況（西から）
（２）17次Ｌ５地区　17－９・17・18号墓（東から）
（３）17次Ｌ５地区　木棺墓ＳＸ162（北から）
図版第26　（１）17次Ｌ５地区　ＳＫ149遺物出土状況（北から）
（２）17次Ｌ５地区　17－10～14号墓（北から）
（３）17次Ｌ５地区　ＳＤ77北西部遺物検出状況（北から）
図版第27　（１）17次Ｌ５地区　ＳＤ133遺物出土状況（南から）
（２）17次Ｌ５地区　木棺墓ＳＸ138（南から）
（３）17次Ｌ５地区　北東部掘立柱建物跡群（南から）
図版第28　（１）17次Ｌ５地区　掘立柱建物跡ＳＢ06（北から）
（２）17次Ｌ５地区　掘立柱建物跡ＳＢ05（東から）
（３）17次Ｌ６地区全景（南から）
図版第29　（１）17次Ｌ５地区　ＳＫ169（北から）
（２）17次Ｌ６地区　土器棺墓１検出状況（南から）
（３）17次Ｌ６地区　ＳＫＢ（南から）
（４）17次Ｌ６地区　ＳＫＣ（南から）

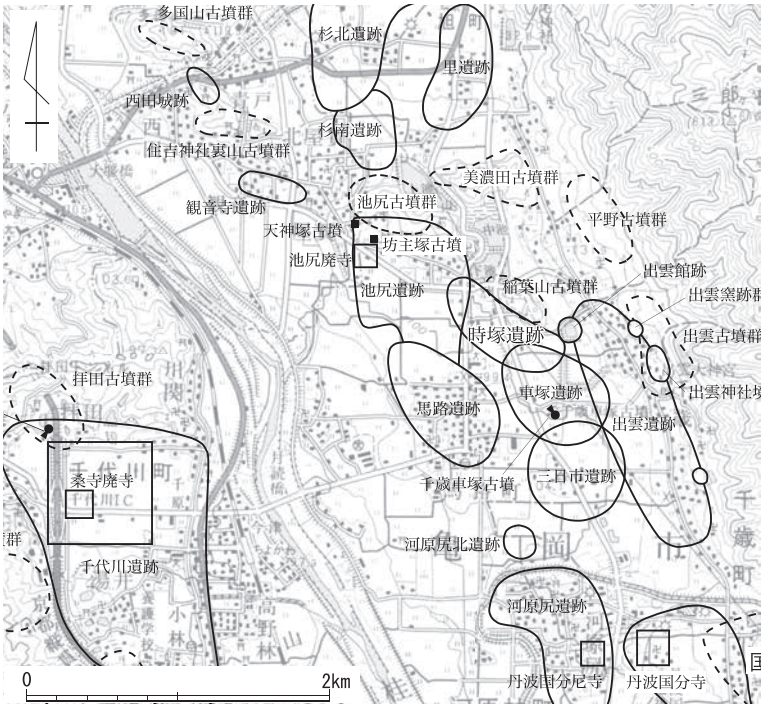
（５）17次Ｌ６地区　時塚４号墳全景（西から）
（６）17次Ｌ６地区　掘立柱建物跡ＳＢ01、ＳＡ01（北から）
（７）17次Ｌ６地区　南西部掘立柱建物跡群（南から）
（８）17次Ｌ７地区北排土置き場遺構露出状況（東から）
図版第30　（１）17次Ｌ７地区全景（上空東から）
（２）17次Ｌ７地区　東半部遺構検出状況（西から）
（３）17次Ｌ７地区　17－20号墓（東から）
図版第31　出土遺物１
図版第32　出土遺物２
図版第33　出土遺物３
図版第34　出土遺物４
図版第35　出土遺物５
図版第36　出土遺物６

国営農地整備再編事業「亀岡地区」関係遺跡
平成18・19年度発掘調査報告
時塚遺跡第15・17次

はじめに

時塚遺跡は京都府亀岡市馬路町時塚・筋違ほかに所在する。今回の調査は農林水産省近畿農政局が計画、推進している国営農地再編整備事業「亀岡地区」に伴って実施した。

時塚遺跡は桂川東岸の段丘上に立地しており、稲葉山の南麓に展開する。周辺には多数の遺跡が存在し、これまで当調査研究センターをはじめ、亀岡市教育委員会、京都府教育委員会がこの事業に伴う発掘調査を実施し、多数の成果を挙げている。その成果については大部分がすでに報告済みであるため本稿では割愛する。



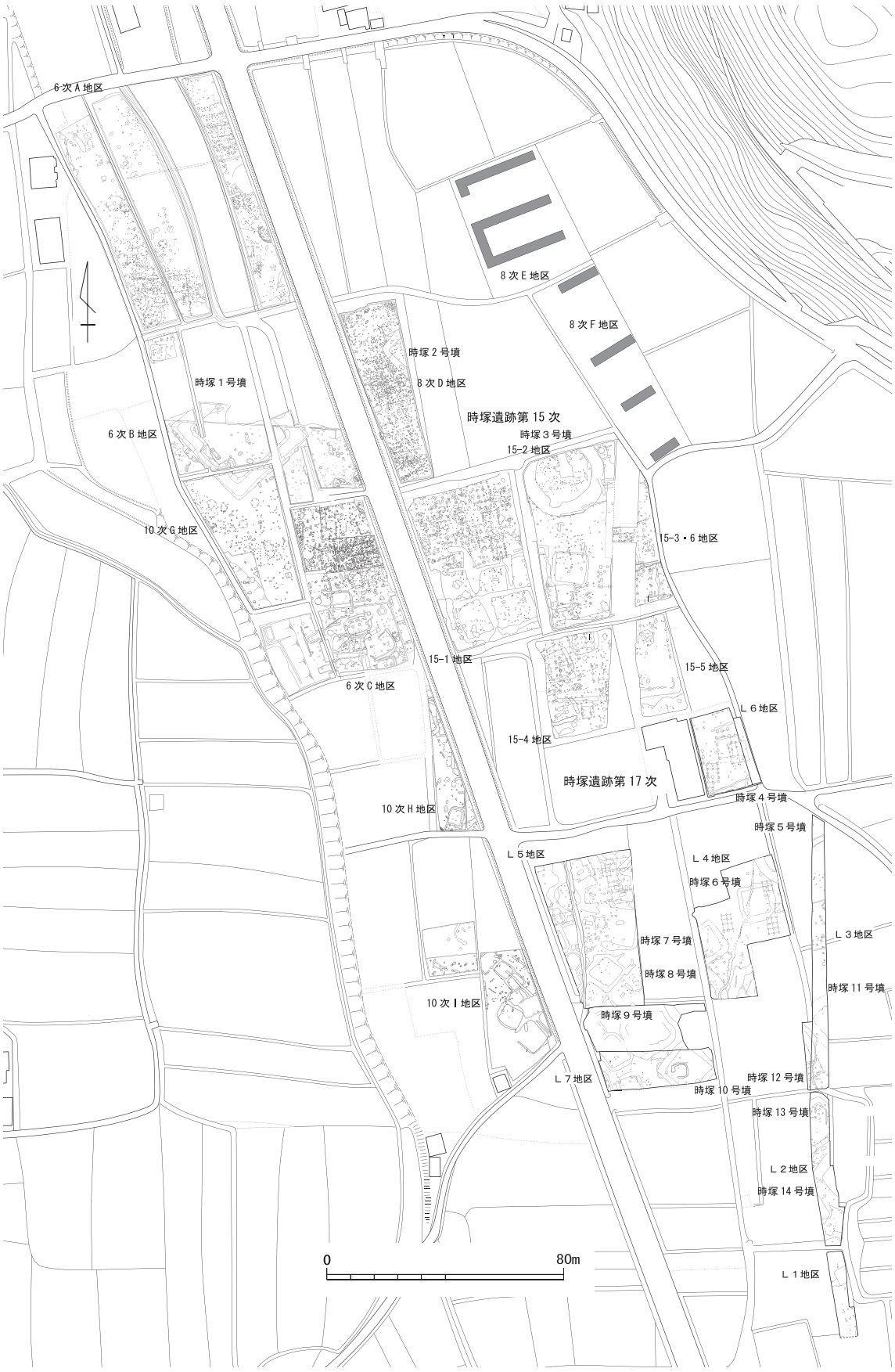
第１図　調査地位置図および周辺主要遺跡分布図(1/50,000)

時塚遺跡の調査は、当調査研究センター、亀岡市教育委員会、京都府教育委員会が調査を実施し、平成６年の西園部京都送電線工事に伴う調査を第１次調査とし、17次におよぶ発掘調査が実施されてきた。その結果、時塚遺跡は縄文時代中期からの遺構、遺物が確認され、弥生時代中期には集落と墓域が展開し、古墳時代中期には特異な盾持ち人形埴輪をもつ時塚１号墳を中心とした古墳群が展開すること、そして奈良から平安時代にかけては掘立柱建物群を中心に集落が営まれることなどが明らかとなってきている。

今回、報告を実施する時塚遺跡第15次は平成18年8月17日から平成19年２月22日にかけて、第17次は平成19年４月23日から平成19年9月27日にかけてそれぞれ調査を実施した。

なお、現地調査を実施するに際して様々な面でご指導、ご協力を頂いた、地元自治会をはじめとする関係諸機関、ならびに調査に参加いただいた作業員・補助員・整理員の皆様方に謝意を表する。本稿の執筆は、各担当者が行ったほか、立命館大学大学院生谷上真由美が分担し、各項末尾に執筆者を記した。

（石崎善久）



第２図　時塚遺跡調査地全体図

１．時塚遺跡第15次

（１）調査経過

時塚遺跡第15次調査区は府道郷ノ口余部線の東側に設定された調査区であり、当調査研究センターの実施した第８次調査Ｄ地区の南に隣接する。調査は亀岡市教委員会と京都府教育委員会の実施した試掘調査の結果を受け、造成により遺跡の損壊する部分を対象に京都府教育委員会との協議を経た上で実施した。

現地調査は当調査研究センター調査第２課調査第１係長小池寛、同次席総括調査員伊野近富、同主任調査員岩松保、同専門調査員黒坪一樹が担当した。

調査区は１～５地区に分けて調査を実施した。また、調査途中で３地区と２地区の間に６地区が追加され、最終的には合計６地区に分けて調査を実施することとなった。

調査は平成18年９月４日に着手し、重機による表土掘削を実施したのち、人力により順次、遺構掘削、記録作業を実施した。現地説明会は平成19年１月27日に行い、多数の参加者を得ることができた。現地調査は平成19年２月22日をもって終了した。調査面積は5,400㎡である。

今回の調査地の基本的な層序は時塚遺跡第６・８次調査と変わることなく、耕作土・床土・遺物包含層・クロボク層・黄褐色系粘質土もしくは砂質土の地山である。クロボク層は３・５地区を中心に認められたが、その他の地区では地山面上で遺構を検出した。

遺構はピット、竪穴式住居跡、古墳、方形周溝墓などを検出した。調査段階では各トレンチごとに遺構番号を通しで付していたが、整理作業段階では、古墳の周溝および周溝墓には新たに番号を付すこととした。古墳は時塚３号墳とし、方形周溝墓に関しては、周溝墓を構成するとみられる複数の溝から復原的に15－１号墓のように周溝墓を復原した上で番号を付し報告を行う（第３図）。また、方形周溝墓の規模に関しては原則として、溝の心々間距離をとる。なお、報告においては方形周溝墓番号と、遺構番号の両者を併記することとする。

遺物の取り上げに際しては、東西方向にＡ～Ｚ、南北方向に１～25の４ｍメッシュを座標に沿って設定し、小地区とした。遺物は原則、このメッシュにしたがって取り上げ作業を実施した。そのため、方形周溝墓などでは正確な出土位置が把握できていない遺物が存在する。

以下、各地区ごとに報告を実施する。なお、小規模なピットや性格不明の溝などからは弥生土器の遺物が少量出土しているが、これは下層の遺構の遺物が混入している可能性がきわめて高いものと判断された。そのため、原則として、整理作業段階で帰属年代の明らかとなった弥生・古墳時代の遺構・遺物と、飛鳥時代以降の遺構・遺物に分けて報告するが、弥生土器の小破片などを出土する時期不明遺構については後者に含めて報告することとする。また、方形周溝墓や、掘立柱建物跡のように複数の地区にまたがる遺構に関しては、どちらかの地区でまとめて報告を行うこととする。

（伊野近富・石崎善久）



第３図　時塚遺跡方形周溝墓復原図(1/500)

（2）15－1地区

15－1地区は今回の調査対象地の中でも北西に設定した調査区である。調査区では上層遺構として掘立柱建物跡群や土坑・性格不明のピット・溝を、下層遺構として弥生時代の方形周溝墓を検出した。古墳時代に属する遺構は確認できなかった。

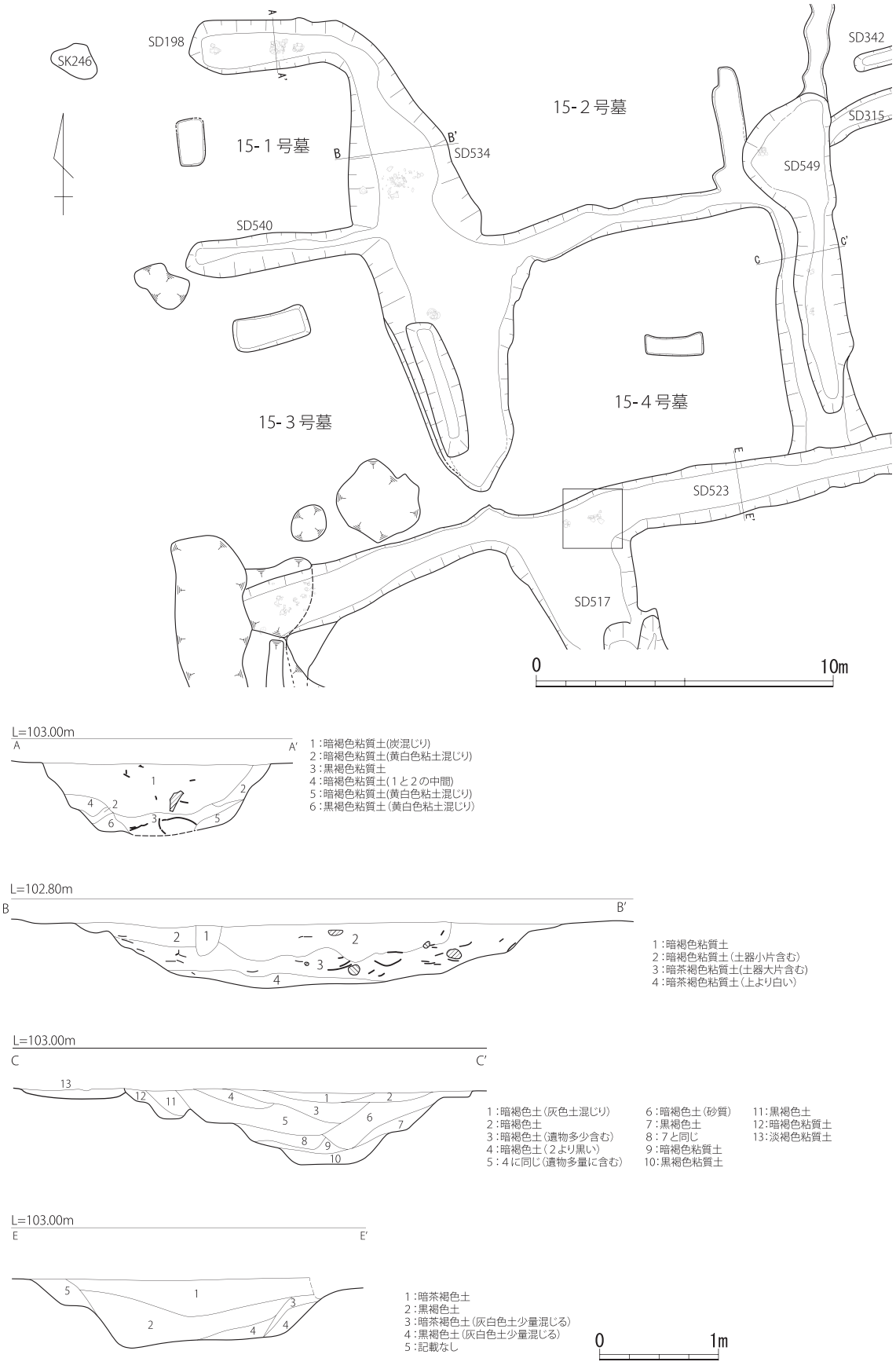
1）弥生時代の遺構・遺物

A．検出遺構

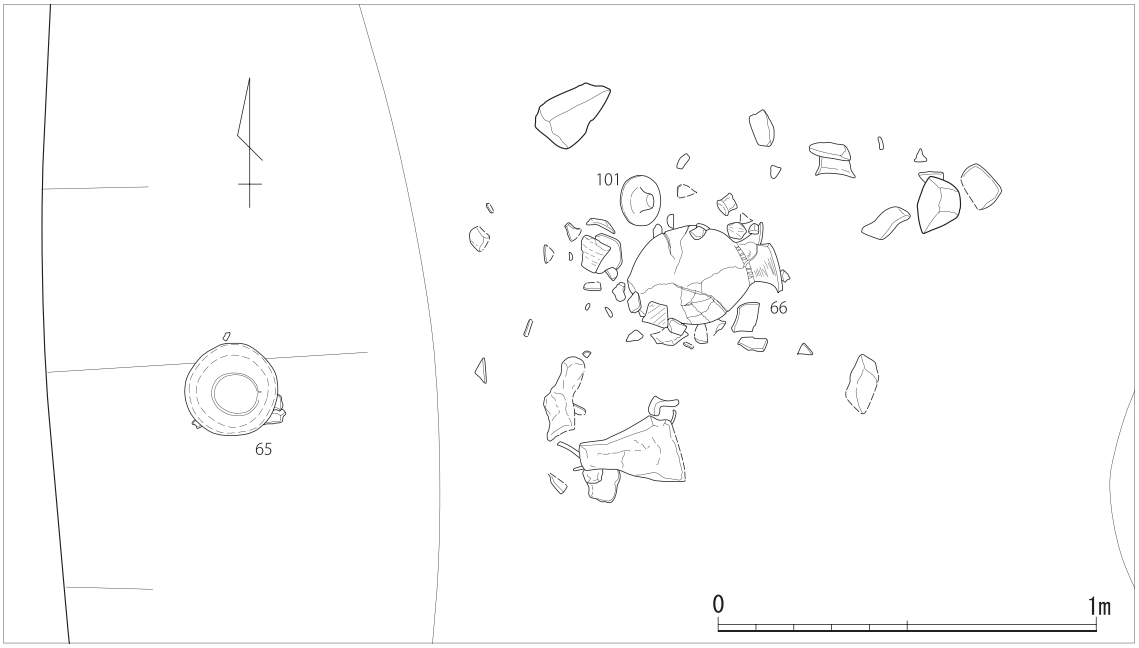
弥生時代に属する遺構として方形周溝墓10基を検出した。その他、弥生時代の遺構として確実視されるものとして、土坑・溝などがある。方形周溝墓は隣接の地区にもおよんでおり、ふたつの地区にまたがるものは、本項で報告する。以下、各遺構について概観する。



第４図　１地区検出遺構配置図（弥生時代、1/400）



第５図　15－１地区方形周溝墓実測図（１）（平面：1/200、断面：1/50）

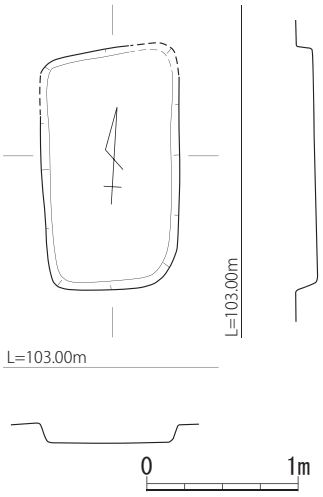


第６図　ＳＤ534遺物出土状況図(1/20)

15－１号墓　連続する３基の溝、ＳＤ198(幅1.9m･深さ0.6m)を北辺に、ＳＤ534(北半部：幅3.6m・深さ0.5m)を東辺に、ＳＤ540(幅1.3m・深さ0.5m)を南辺にもつ周溝墓として復原した。西辺には区画溝は確認されなかった。後述する15－２号墓とはＳＤ534を、15－３号墓とはＳＤ540をそれぞれ共有している。

周溝墓の規模は東西７m以上、南北７mを測る。

遺物はＳＤ198では溝のほぼ中心軸で、溝底部に接する形で、壺(170)・甕(190)・台付壺(178)・円窓付土器(206)などが検出された(第８図)。遺物の出土状況からは墳丘からの転落であるか、周溝外からの投棄であるかなどの状況を伺うことはできない。また、周溝北端では甕(197)が検出された。



第７図　15－１号墓埋葬施設
ＳＫ449実測図(1/50)

ＳＤ534では溝中央部での遺物出土状況を図示した(第６図)。壺(66)・高杯(101)などがある。いずれも周溝の掘形に接して検出された。そのうち広口壺(65)は15－１号墓側からの転落の可能性が高いものと判断される。

ＳＤ540における遺物は、東半部に集中して埋没していた。

周溝墓に伴う埋葬施設としてＳＫ449(第７図)を想定しておきたい。規模、形状や上層の遺構との切り合い関係、埋土中から弥生土器片のみが出土していることから15－１号墓に伴う埋葬施設である可能性が高い。ＳＫ449は平面長方形プランを呈し、南北方向に主軸をとる南北1.6m、東西0.5m、深さ0.15mの規模をもつ素掘りの土壙である。土壙底面は北側が高い。棺の痕跡等を確認することはできなかった。

15－２号墓　15－１号墓の東に位置する。ＳＤ534を西辺に、15－4号墓の北辺を区画するＳ

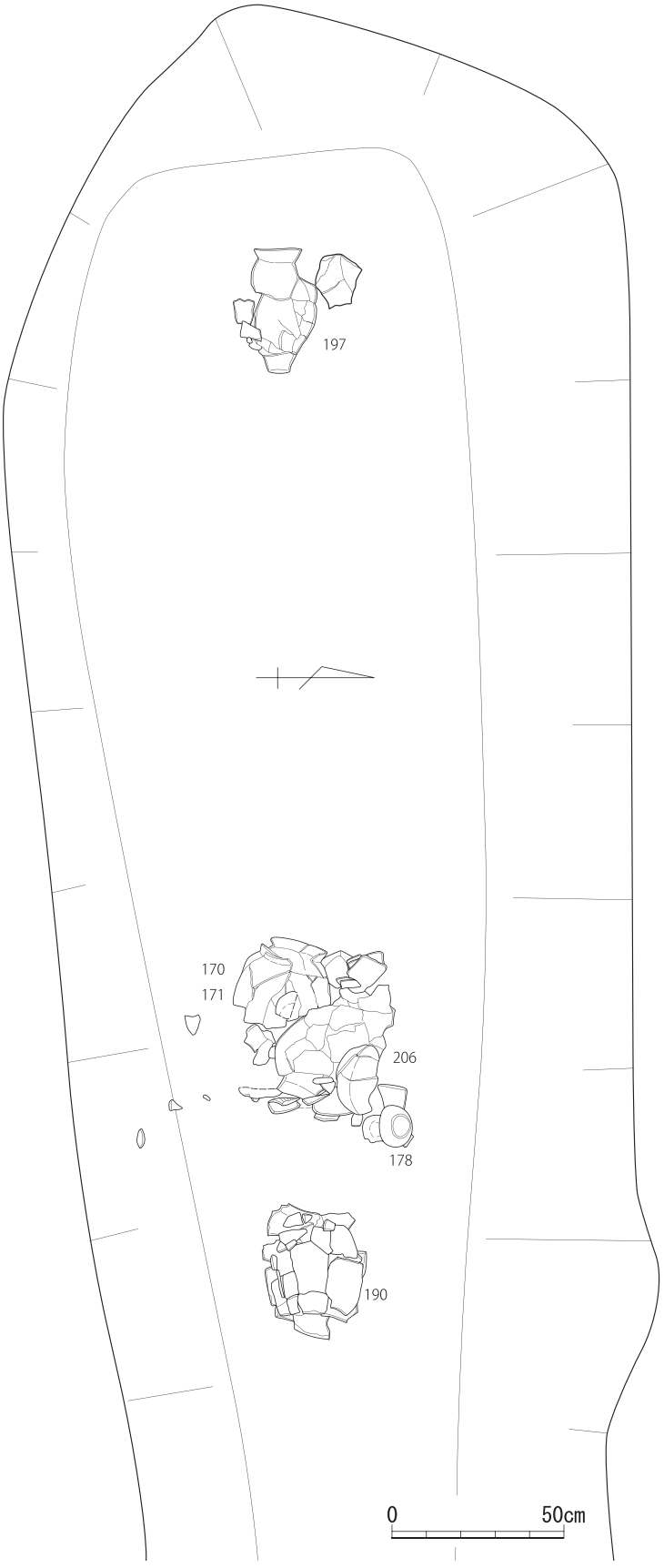
D571（幅１ｍ・深さ0.3m）を南辺に、ＳＤ549の北側への突出部分（幅１ｍ・深さ0.15m）を東辺にもつ方形周溝墓として復原した。北側には区画溝は検出されていない。隣接する周溝墓との前後関係は不明である。

周溝墓の規模は東西10.6mを測る。南北方向の規模については判断するための遺構などがなく不明である。

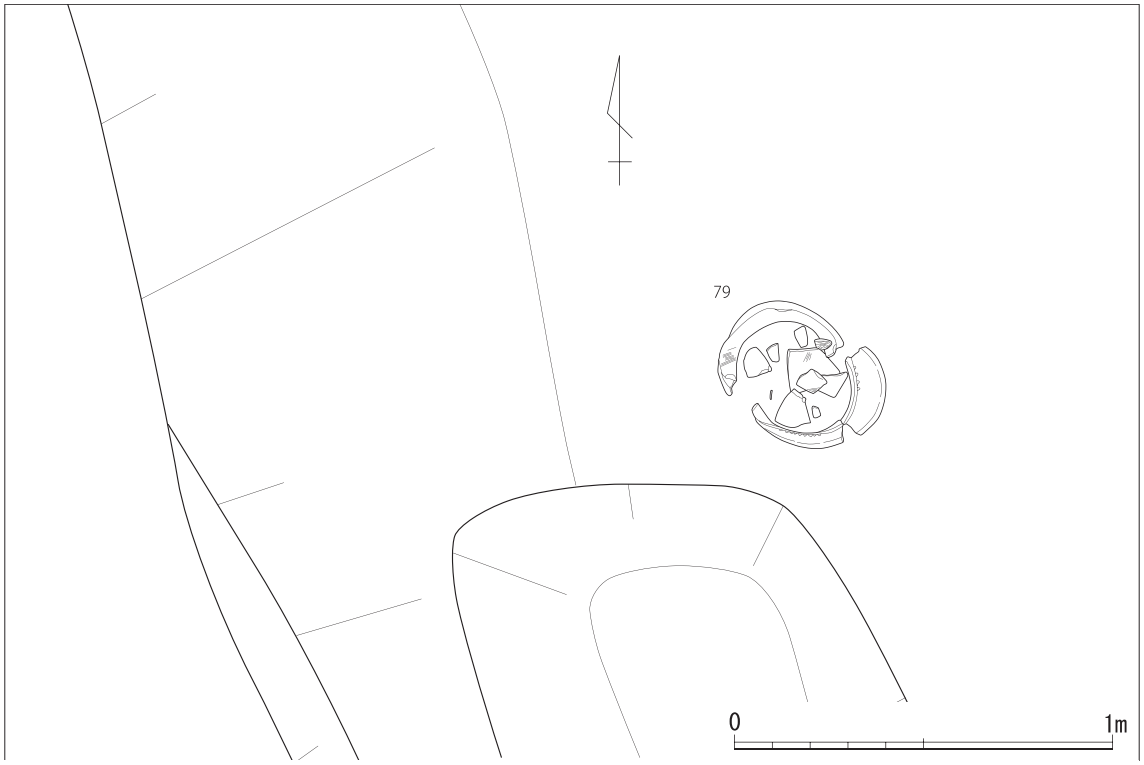
遺物の出土状況は図示することはできず、15－４号墓と共有する区画溝から出土している遺物についても、どちらの周溝墓に伴うものであるのか判断することができない。

15－３号墓　15－１号墓の南に位置する。ＳＤ540を北辺に15－１号墓と共有し、東はＳＤ534、南はＳＤ517で区画される。ＳＤ534は長さ4.8m、幅1.1mにわたって、周溝の一部を周辺より15～17cmあまり土坑状に掘り下げているが、この部分の機能や性格については明確ではない。溝内埋葬の可能性も否定できないが、やや大型であるため、周溝墓の盛土確保のための再掘削によるものの可能性が高いと考える。西側の区画溝などは調査区内では検出されなかった。周溝墓の規模は東西９m以上、南北12mを測る。

周溝内における遺物の出土状



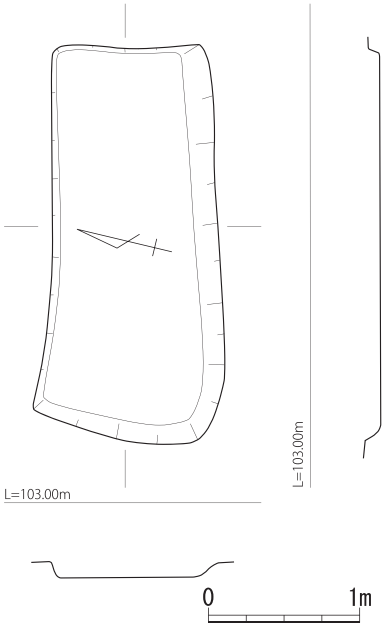
第８図　ＳＤ198遺物出土状況図（1/20）



第９図　ＳＤ534遺物出土状況図(1/20)

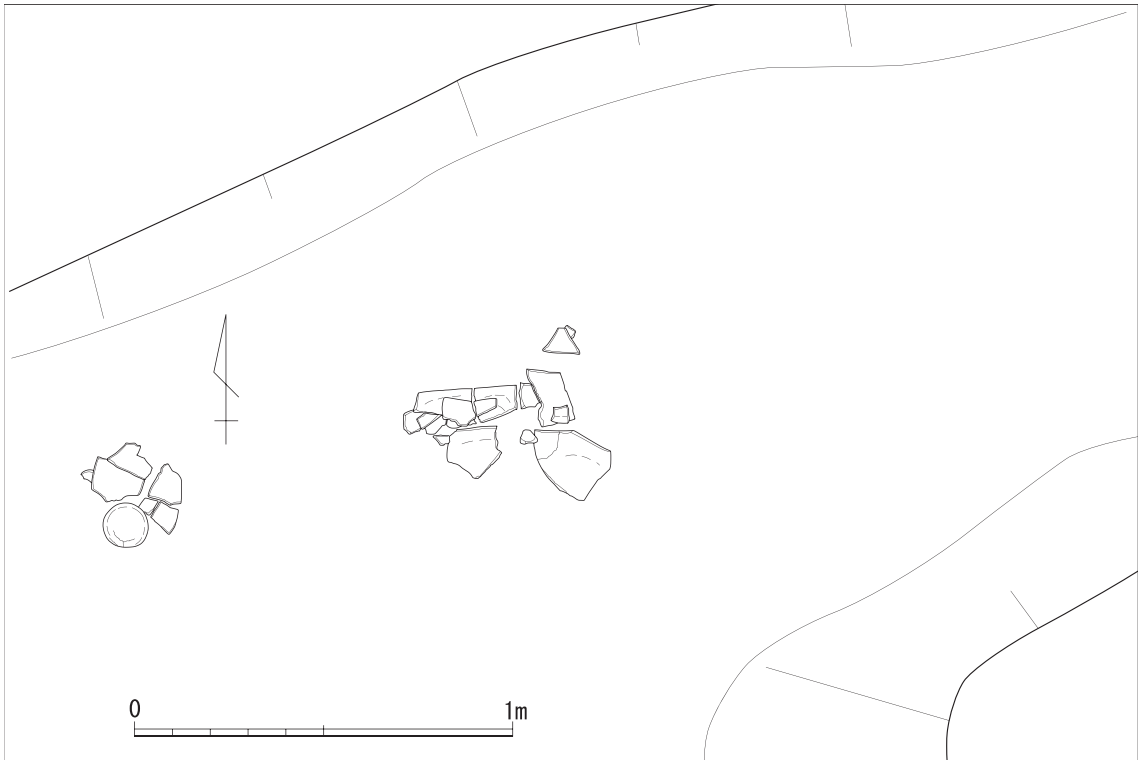
況はＳＤ534の南側で大型の壺(79)が出土している(第９図)。出土位置からみてこの周溝墓に伴うものである可能性が高い。また後述する15－７号墓の北側区画ＳＤ517北西部における遺物(第15図上段)も、図示されたものは周溝底から浮いており、周溝墓が一定埋没してからの転落、もしくは遺棄とみられる。平面的な出土状況から、これらの遺物はこの周溝墓に伴うものである可能性が高い。

この周溝墓に伴う埋葬施設としてＳＫ551(第10図)を想定しておく。東西方向に主軸をもつ、平面長方形プランを呈する素掘りの土壙である。棺の痕跡などは確認されなかった。規模は長軸2.5m、短軸１m、深さ0.15mを測る。弥生土器の小片のみが出土している。

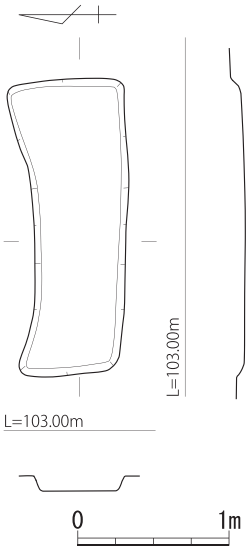


第10図　15－３号墓埋葬施設
ＳＫ551実測図(1/50)

15－４号墓　15－３号墓の東に隣接する。北は15－２号墓の南辺のＳＤ571、東は15－５号墓の西側区画ＳＤ549、西は15－３号墓とＳＤ534を共有し、南は15－８号墓の北側区画溝であるＳＤ523により区画される。周溝の南西コーナー部分は周溝が途切れており、完周していない。なお、ＳＤ549埋土の状況から、15－４号墓は15－５号墓に先行して造墓された方形周溝墓であると考えるが、完全に溝が埋没した後に15－５号墓が造墓されたものか否かは明らかではない。また、後述するようにこれは、15－５号墓拡張後の状況を示しているとみられ、15－５号墓の築造段階での様相を示しているもの



第11図　ＳＤ523遺物出土状況図(1/20)



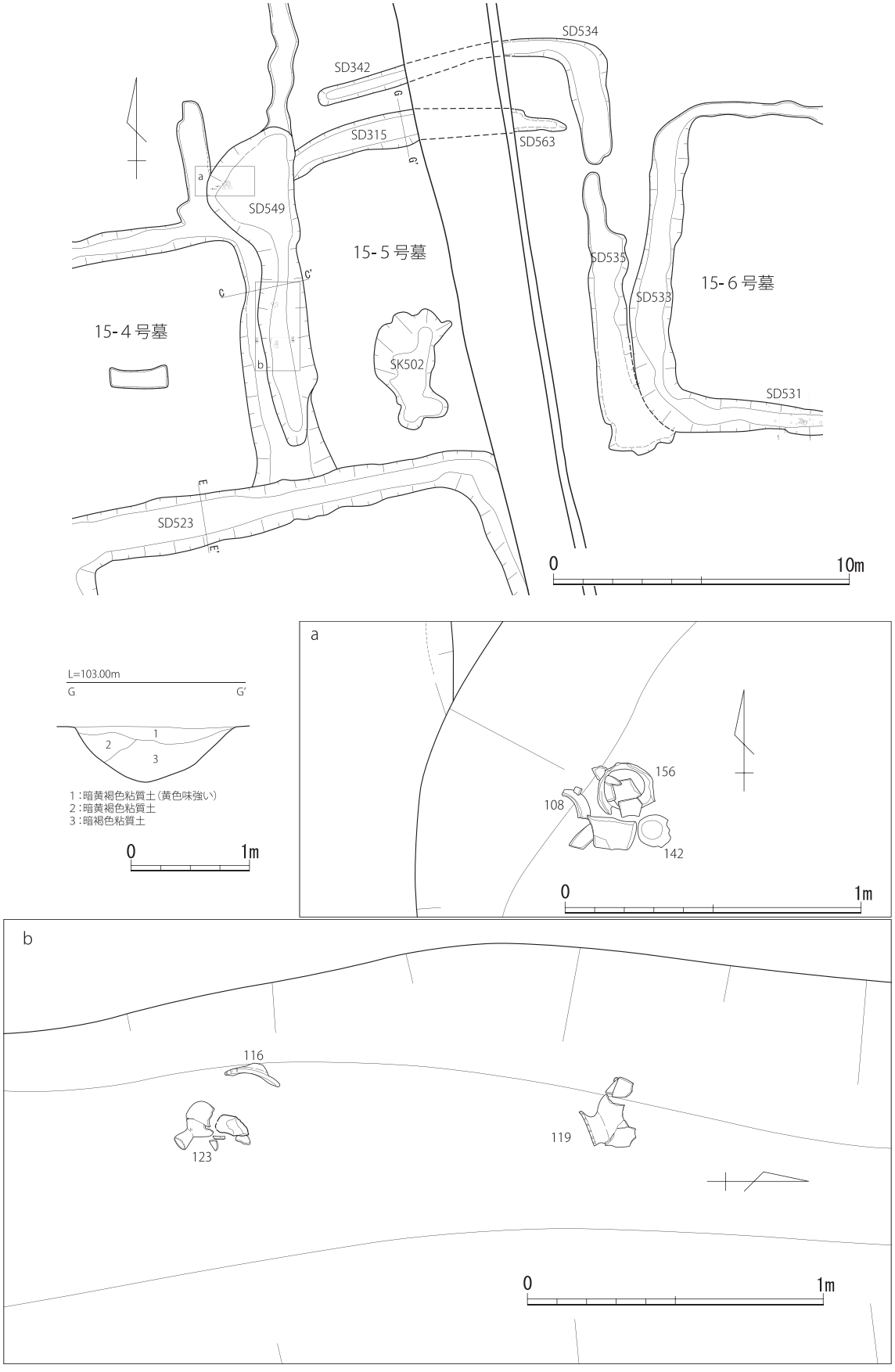
第12図　15－４号墓埋葬施設ＳＫ558実測図(1/50)

ではないようである。周溝墓の規模は東西10.6m、南北8.8mを測る。

15－８号墓と共有する南側区画溝内から弥生土器が出土した(第11図)が、平面的な出土状況からは、どちらの周溝墓に伴うものか判断することはできない。また、出土状況図と遺物を照合することもできなかった。

この周溝墓の埋葬施設としてＳＫ558(第12図)を想定する。周溝墓のほぼ中央に位置していることや、出土遺物に須恵器などが存在しないことから､埋葬施設の可能性が高い｡土坑は平面はややいびつな長方形プラン、断面形は素掘りの形状を呈する。規模は長軸２ｍ、短軸0.6ｍを測り、深さは0.15ｍが遺存する。主軸はほぼ真東西方向にもつ。土壙底面は東側が高い。木棺の痕跡などは確認できず木棺墓か土壙墓か不明である。

15－５号墓　15－４号墓の東に隣接する。ＳＤ315、２地区で検出されたＳＤ563を北辺の区画溝とし、西辺は15－４号墓の東ＳＤ549と重複する。先述したように、この溝の断面から15－４号墓が先行して造墓されたものとみられる。南辺は15－８号墓の北側の区画溝ＳＤ523により画される。東側は２地区ＳＤ535により画される。北東および南東コーナー部分は周溝が途切れている。なお、北側にはさらに１地区で検出されたＳＤ342、２地区で検出されたＳＤ534がＳＤ535と主軸をあわせて巡っており、この周溝墓の拡張が行われた可能性がある。また、ＳＤ549北端はＳＤ342と軸をそろえるようにＳＤ315より北側に突出していることから、この周溝墓拡張時に再掘削された溝である可能性を考えたい。



第13図　15－5号墓実測図(平面：1/200、断面:1/50、遺物出土状況:1/20)

なお、15－６号墓との切り合いや前後関係については明確ではない。

周溝墓の規模は南北方向に拡張があったという前提で、拡張前が、南北11.6m、東西10mを、拡張後の規模は南北13.3mをそれぞれ測る。

遺物はＳＤ549北端で周溝墓外から転落した状態で壺（108・142）、台形土器（156）が、ＳＤ549の中央から南側では広口壺（116）、細頸壺（123）、広口壺（119）が出土している（第13図）。前者は、再掘削後に周溝墓外から遺棄あるいは供献されたものとみられる。後者は再掘削時の溝内から出土しているが、この周溝墓に伴うものか、再掘削以降に15－４号墓側から転落したものの両者の可能性が考えられる。

この周溝墓では埋葬施設を確認することはできなかった。また、墳丘上では不整形なＳＫ502が検出されたが、遺構の性格については明確ではない。

15－７号墓　15－３号墓の南に隣接する。完周するとみられるＳＤ517で区画されるが、西側は撹乱が著しく詳細は不明である。周溝は東に隣接する15－８号墓、北に接する15－３号墓と共有している。東側区画溝内では15－８号墓側で部分的に再掘削されたような状況がみられるが、断面観察からは前後関係を示すことはできなかった。周溝の規模は北側で幅1.7m、深さ0.3m、東側で幅2.7m、深さ0.6m、南側で幅1.5m、深さ0.3m、西側で幅1.8m、深さ0.23mを測る。また、南側周溝は中央部でさらに南側に延びていく部分がみられる。この南に延びていく溝の東西に周溝墓を想定することが可能であり、ここでは15－12・13号墓としておく。周溝墓の規模は東西11.4m、南北13mを測る。

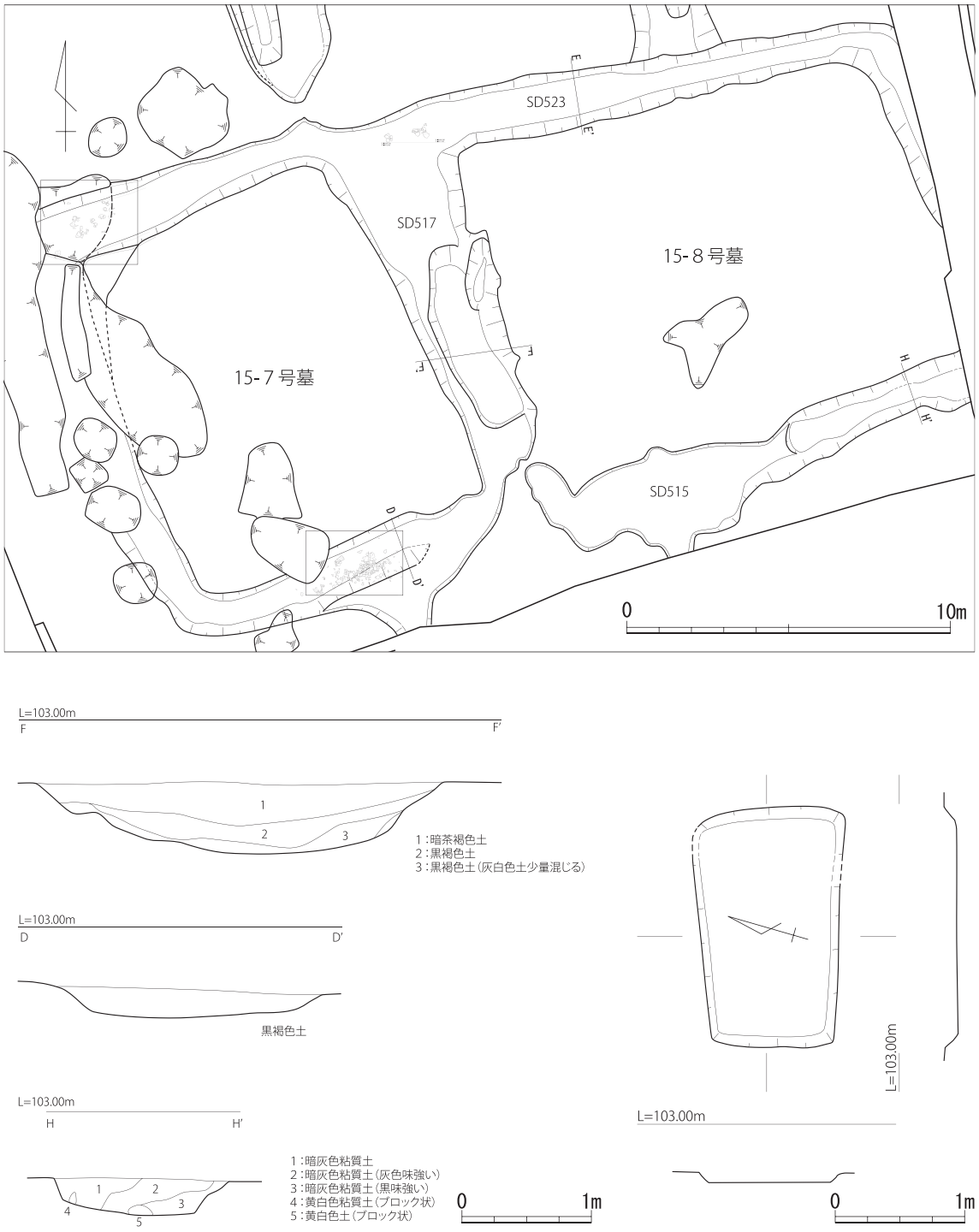
北側区画ＳＤ517の西端からは高杯（34）、甕（21・22）、壺（18）などが出土している（第15図上段）。平面的な出土状況からはこの周溝墓に伴うものではなく、北側の15－３号墓側から転落したものの可能性が高いと考える。広口壺（20）については、どちらの周溝墓に属するものか不明である。

南側周溝内では水差し形土器（14・15）が、細片化して出土している（第15図下段）が、出土状況からみて、周溝外の南側からの転落もしくは遺棄とみられる。

15－８号墓　15－７号墓の東に隣接する方形周溝墓である。北側および東側は、15－４・５号墓と共有し、南東へ屈曲するＳＤ523（北：幅2.1m・深さ0.5m、東：幅１m以上・深さ0.5m以上）で、南側はＳＤ515（幅1.7～2.7m・深さ0.1～0.25m）で、西側は15－７号墓と共有するＳＤ517で区画される。周溝墓の規模は東西18m、南北12mを測る。なおＳＤ515は西端で北に屈曲し、ＳＤ517との間に掘り残しがみられる。したがって、東側については畦畔のため詳細は不明であるが、少なくとも完周する周溝をもつ周溝墓ではない。またＳＤ515は南側にさらに延びる部分が認められるため、先述したＳＤ517の南に延びる部分との間に１基の周溝墓を想定しておきたい（15－13号墓）。また、南東部にも方形周溝墓を想定する（15－14号墓）が、これについては４地区の項で述べることとする。

遺物は周溝内北西部で弥生土器が出土しているが、この周溝墓に伴うものか明らかではない。

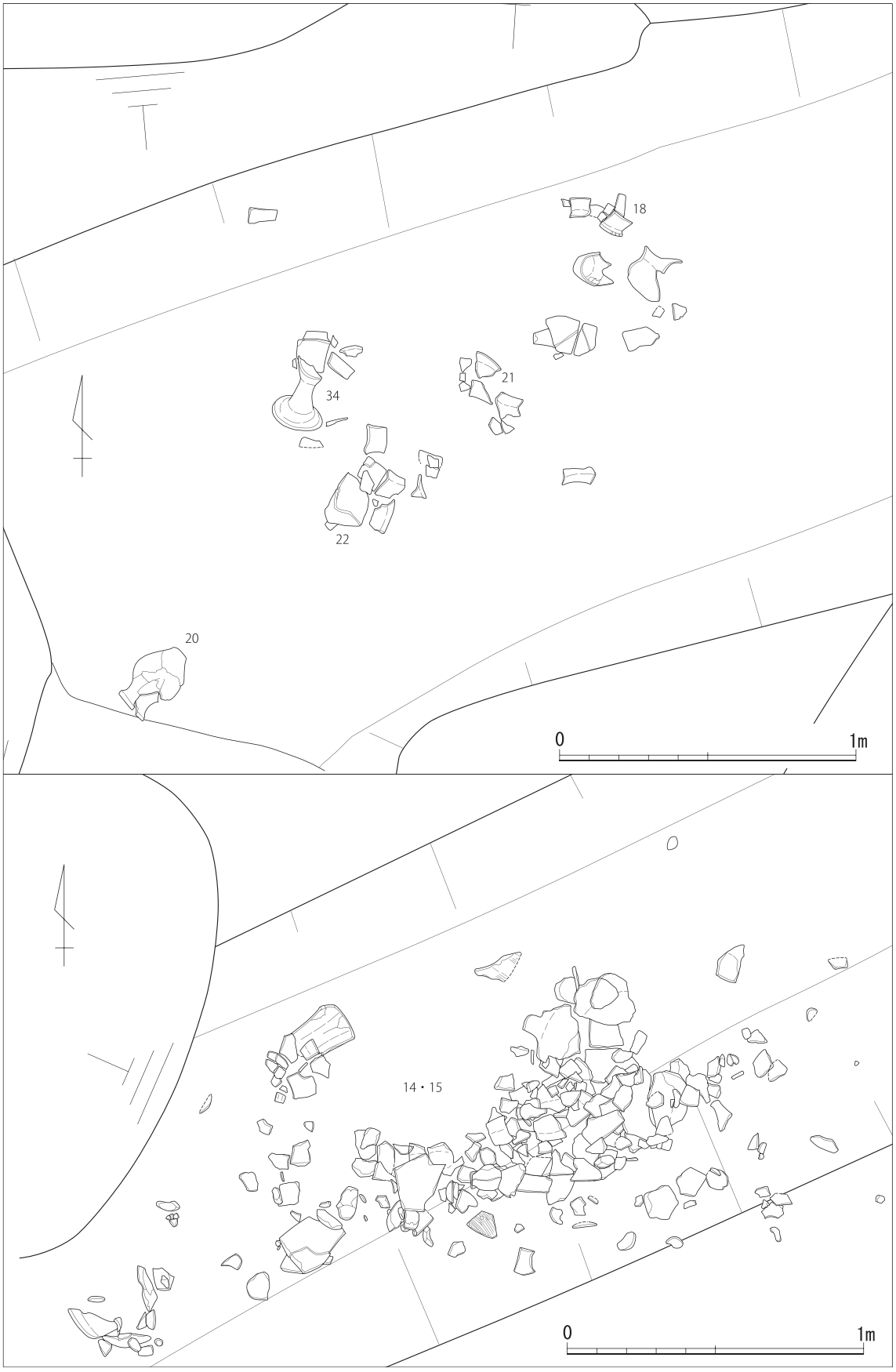
以上の方形周溝墓のほかに、弥生時代の遺構として、土坑、溝、柱穴などがある。柱穴については出土遺物のみを記載した。



第14図　15－７・８号墓実測図（平面：1/200、断面1/50）、ＳＫ209実測図（1/50）

ＳＫ209（第14図）　15－７号墓の北側で検出された土坑である。上層の柱穴との切り合い関係や出土遺物が弥生土器のみであること、平面形状などから弥生時代の木棺墓、もしくは土壙墓と考える。平面は方形を呈し、主軸は東西方向にとる。規模は長軸1.9m、短軸1.1m、深さ0.1mを測る。棺の痕跡などは確認されていない。周辺に弥生時代の溝などを確認することができず、区画をもたない埋葬施設の可能性が高い。

ＳＤ96　トレンチ中央部で検出された不整形な溝である。北端が南西側へ屈曲する。全体に



第15図　ＳＤ517遺物出土状況図(1/20)

土坑などが切り合いながら構成されたような形状をとる。性格については不明であるが、一部は方形周溝墓の残欠の可能性がある。

ＳＤ289　ＳＤ96の南に位置する南北方向の素掘り溝である。

ＳＫ13　1地区北東部で検出した不整形な土坑である。

ＳＫ246　15－1号墓の北側ＳＤ198の西で検出した不整形な土坑である。

ＳＫ257　ＳＫ246の北に位置するややいびつではあるが、平面方形に近いプランを呈する土坑である。

ＳＫ277　トレンチ北西部で検出した不整形な土坑である。奈良時代の遺構に大部分を削平されている。

ＳＤ213　トレンチ北部中央で検出した「く」字状に屈曲する溝である。ＳＤ96北西部やＳＫ166と併せて方形周溝墓を構成していた溝の残欠の可能性がある。

ＳＫ166　ＳＤ213の北東に位置する土坑である。

ＳＤ320　ＳＤ549から北へのび、先端部が東側に屈曲する溝である。方形周溝墓の可能性があるが、対をなす周溝などがなく周溝墓として確定できない。また、先端部は長さ1.3m、幅0.8m、深さ0.2mを測る平面長方形を呈する素掘りの土坑となっている。ＳＤ549との切り合い関係などは不明である。

ＳＫ420　調査地北西部で検出した楕円形の土坑である。

上記の遺構のほか、弥生土器が出土した柱穴・土坑などがあるが、確実に住居の中央土坑あるいは廃棄土坑として認識できる遺構はない。柱穴･土坑の遺物については可能な限り抽出を行い、報告を行うこととするが、後世の混入遺物の可能性も否定しきれないため、弥生の遺構としては確実視せず、時期不明の遺構として、第47図に位置のみを記載している。

（伊野近富・石崎善久）

B．出土遺物（第16図～第47図）

15－１地区出土遺物のうち、方形周溝墓の溝を中心に多量の弥生土器が出土した。また、石器についても相当量が出土しているが、図化作業が十分に実施できなかったため、詳細については期を改めて報告を行うこととし、各地区の弥生土器について遺構単位で観察を行うこととする。

ＳＤ523（第16図1～第17図11）　破片を中心に多く出土している。１の無頸壺は細かいハケメ調整のあとに櫛描直線文で飾る。２はどういった形式であるか不明である。中央に大きな円窓をもつ可能性があり、先端は絞られ閉じられていたものと考えられる。３～５・９は壺体部である。いずれも体部の半ばで張り、縦に長い形状を呈す。甕は折り曲げ口縁のものがある（６）。「く」字口縁の鉢は、口縁端部に刻目をもつ８ともたない７がある。７の体部下半にはミガキ調整がみられる。10の水平口縁高杯は、口縁内にわずかな段差をもつ。

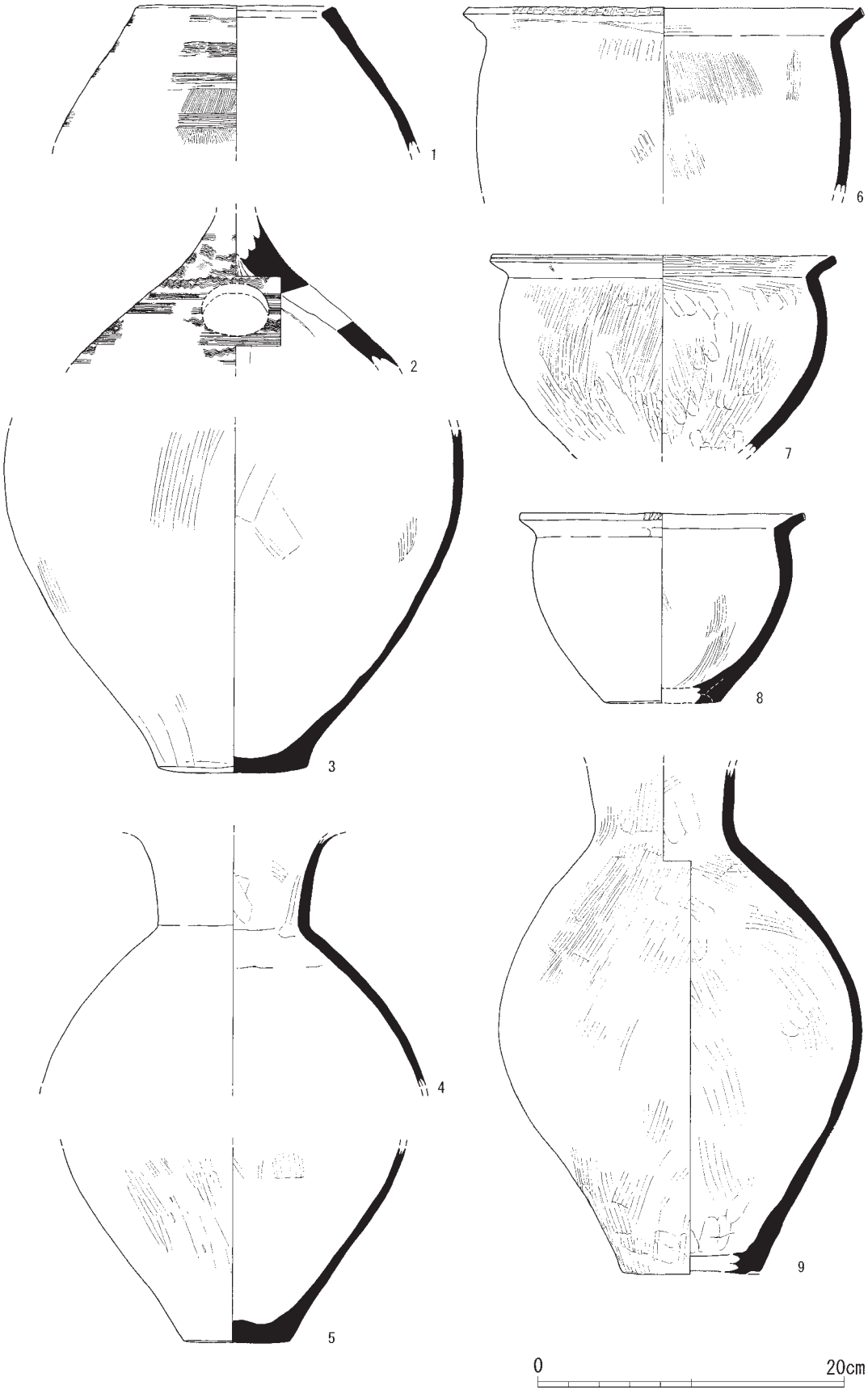
ＳＤ517（第17図12～第20図61）　南溝から水差し形土器２個体と、受口状口縁壺が１個体潰れた状態で出土した(13～15)。水差はいずれも口縁端部に刻目を入れるが､14は櫛描直線文で飾る。ゆるやかに片口をもつ形状である。15は底面に籾の圧痕を残す。切り込んだような明瞭な片口である。13の受口状口縁壺は、水差の上層から出土したものである。全体をハケメ調整するが、口縁部に強いヨコナデが見られる。口縁上端と下端の刻目は上下の単位が揃っていることから、同一の工具で一度に施したものであることが分かる。

北溝からは、完形の土器数点と破片が多く出土した。20を始め、無文の壺が目立つ。体部は半ばでやや張る形状を呈する(20)。甕は折り曲げ口縁と「く」字状口縁のものが見られる(23～25)。内外共にハケメ調整のものが主体だが、25は外面をミガキ調整する。大型甕の口縁端部には若干の拡張が見られる(27・29)。34の水平口縁高杯は杯部外面をハケメ調整し、脚部内面をナデ調整する。33は器種不明である。円板充填法を用いない。26は蓋であると思われる。

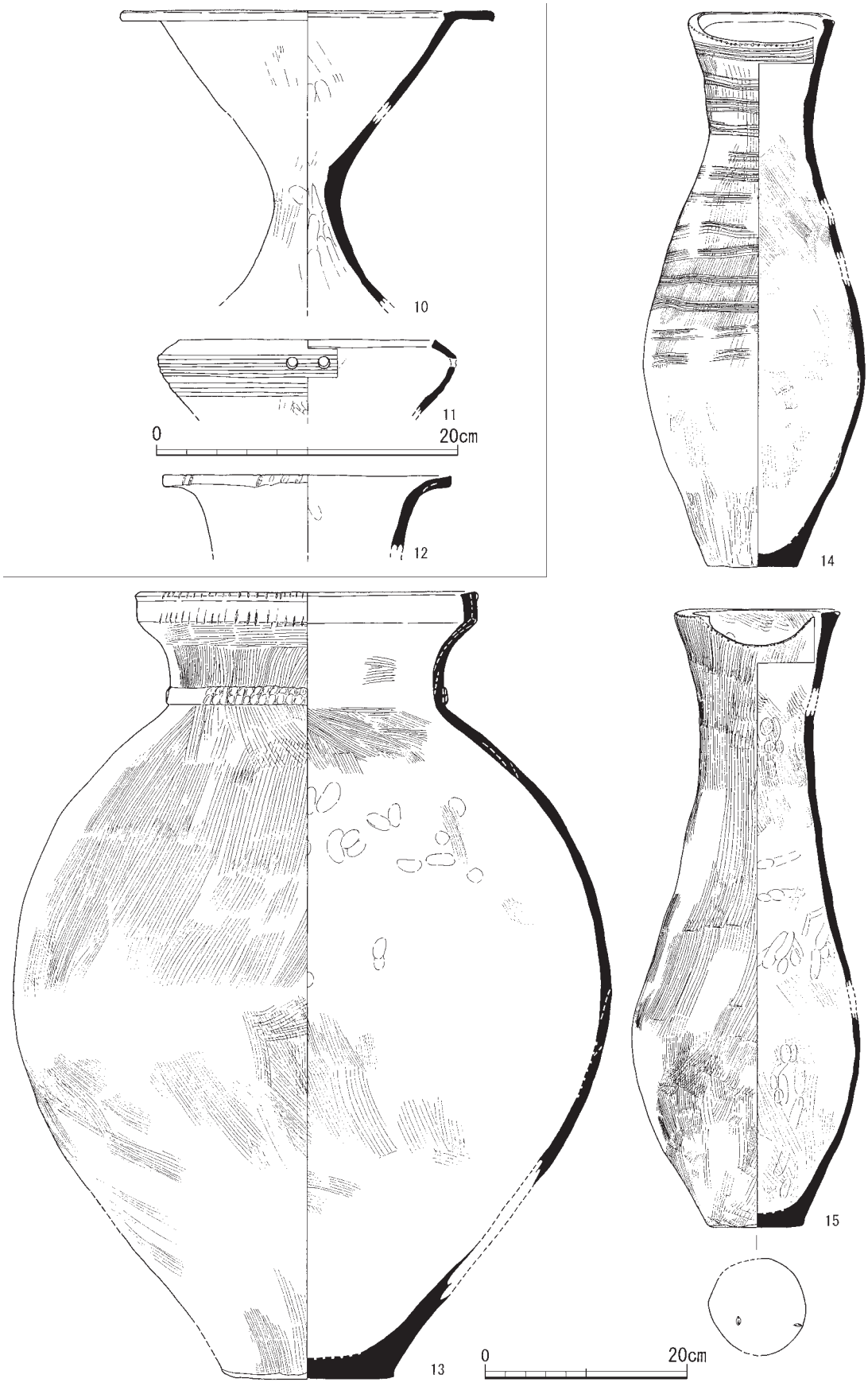
東溝からは土器が破片の状態で大量に出土し、数点が完形に近い形まで復原できた。35の広口壺は口縁端部には刻目を、体部には櫛描直線文と波状文が交互に施される。40の広口壺体部は、内外共に粗めのハケメ調整を行う。38の口縁内面には瘤状の突起が付けられている。39は頸部に２条の突帯が付けられる。42の水差は、体部を櫛描直線文と列点で飾られる。把手の断面は楕円形である。43は細頸壺の体部で、頸部以上を欠く。甕は大小共に口縁端部に刻目を施すものが多く見られる(44～46・48・50・51)。46の体部には、ナデ調整の後にハケメ調整を施す。48は、目の細かいハケメ調整が施される。高杯の脚部が２個体出土している。54は柱状で、櫛描文で飾られる。56は無文で粗いハケメ調整をする。円板充填法である。小型の鉢(55)もある。

58～61は、ＳＤ517に囲まれる周溝墓の上面から出土したものである。口縁内に３条の突帯をもつ広口壺(58)や、口縁部が大きく垂下する形状のもの(59)がある。60の甕底部は内面をケズリ調整する。

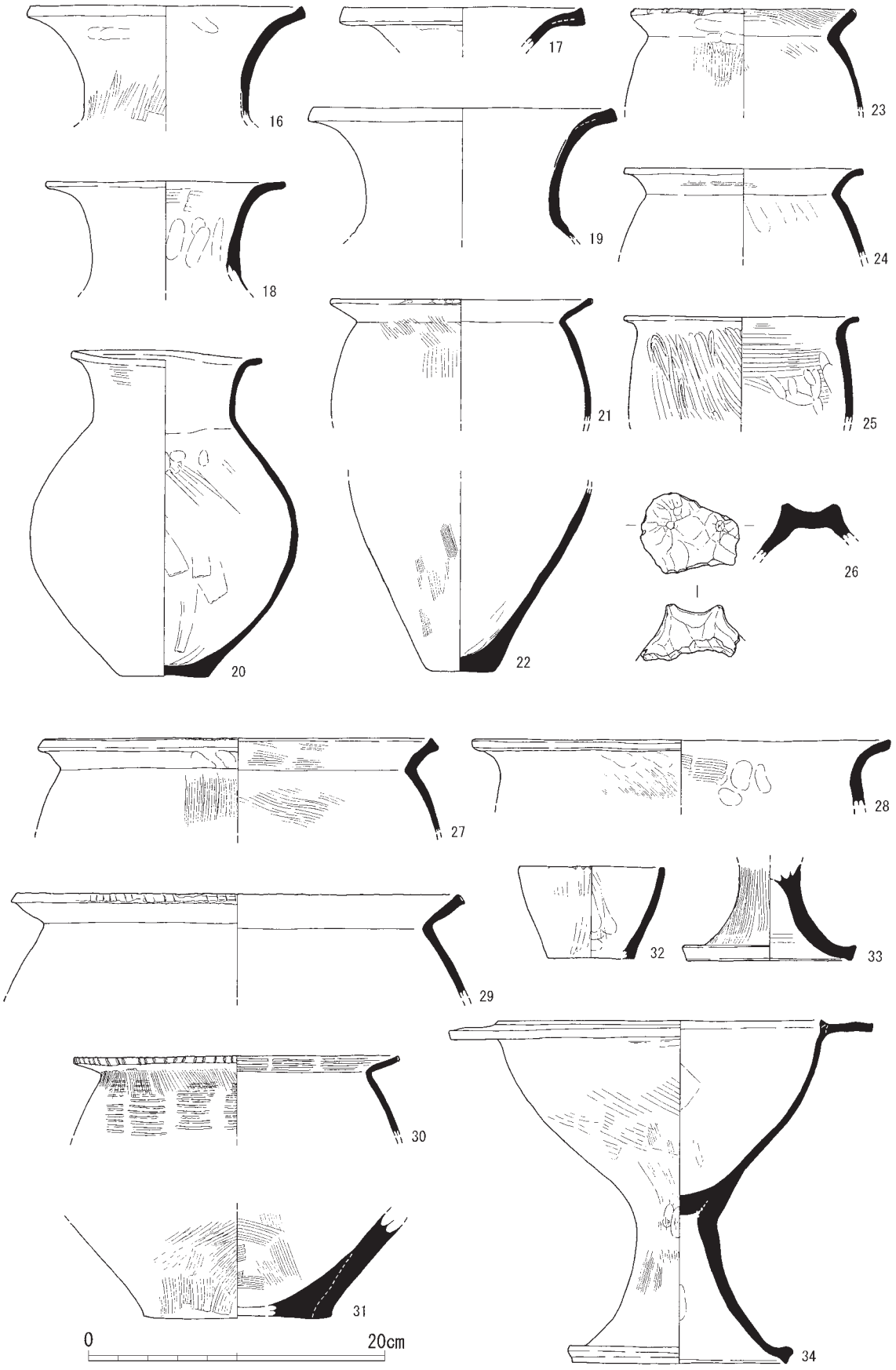
ＳＤ534（第21図62～第24図105）　大量の土器片が出土した。広口壺は､口縁内を櫛描扇形文で、口縁端面を櫛描波状文で飾るものがほとんどである(62～66)。ＳＤ534北半から出土した完形品66には、底部穿孔が見られ供献土器であると考えられる。頸部には指圧痕文突帯を施す。67は口



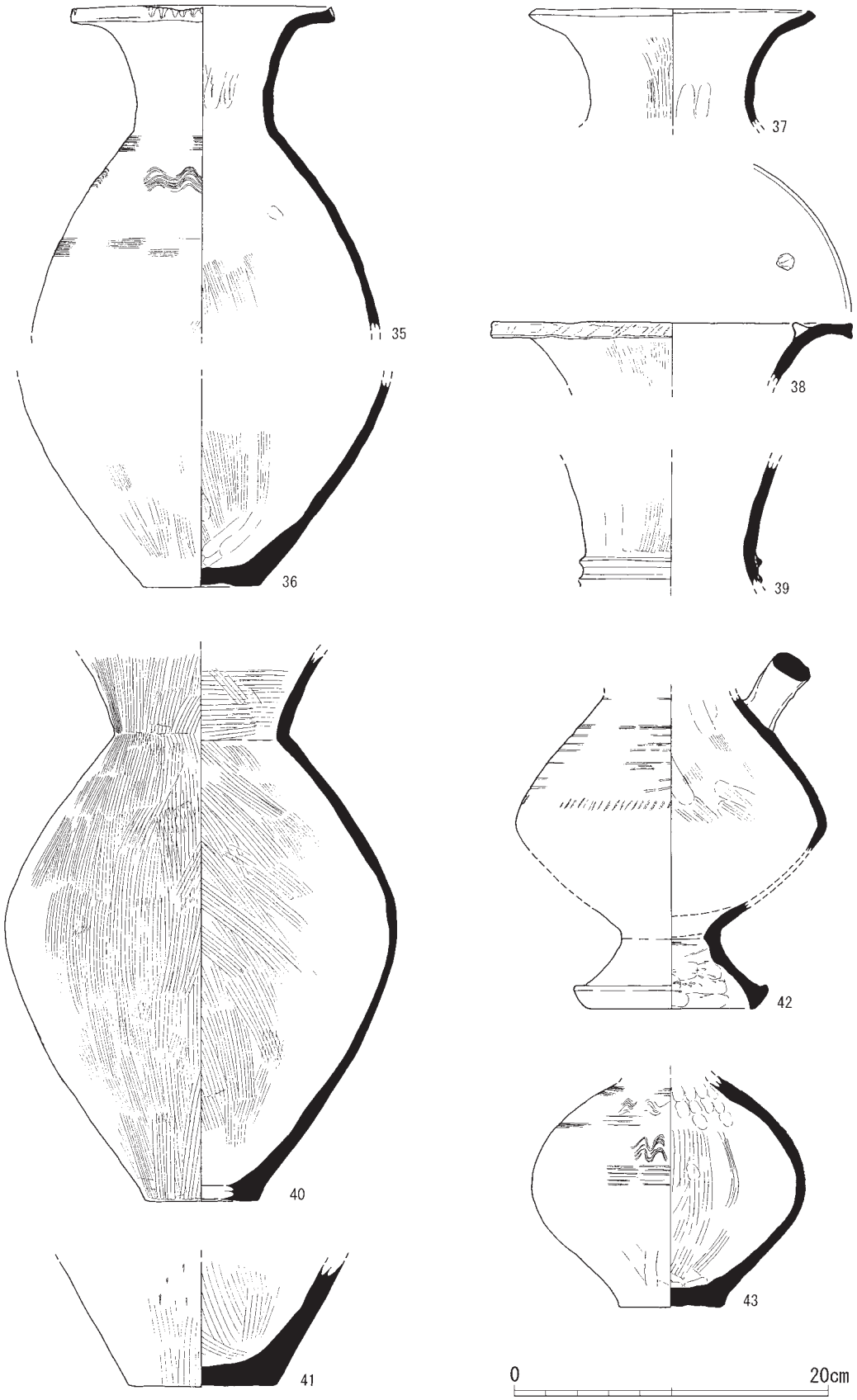
第16図　1 地区出土遺物実測図（1）



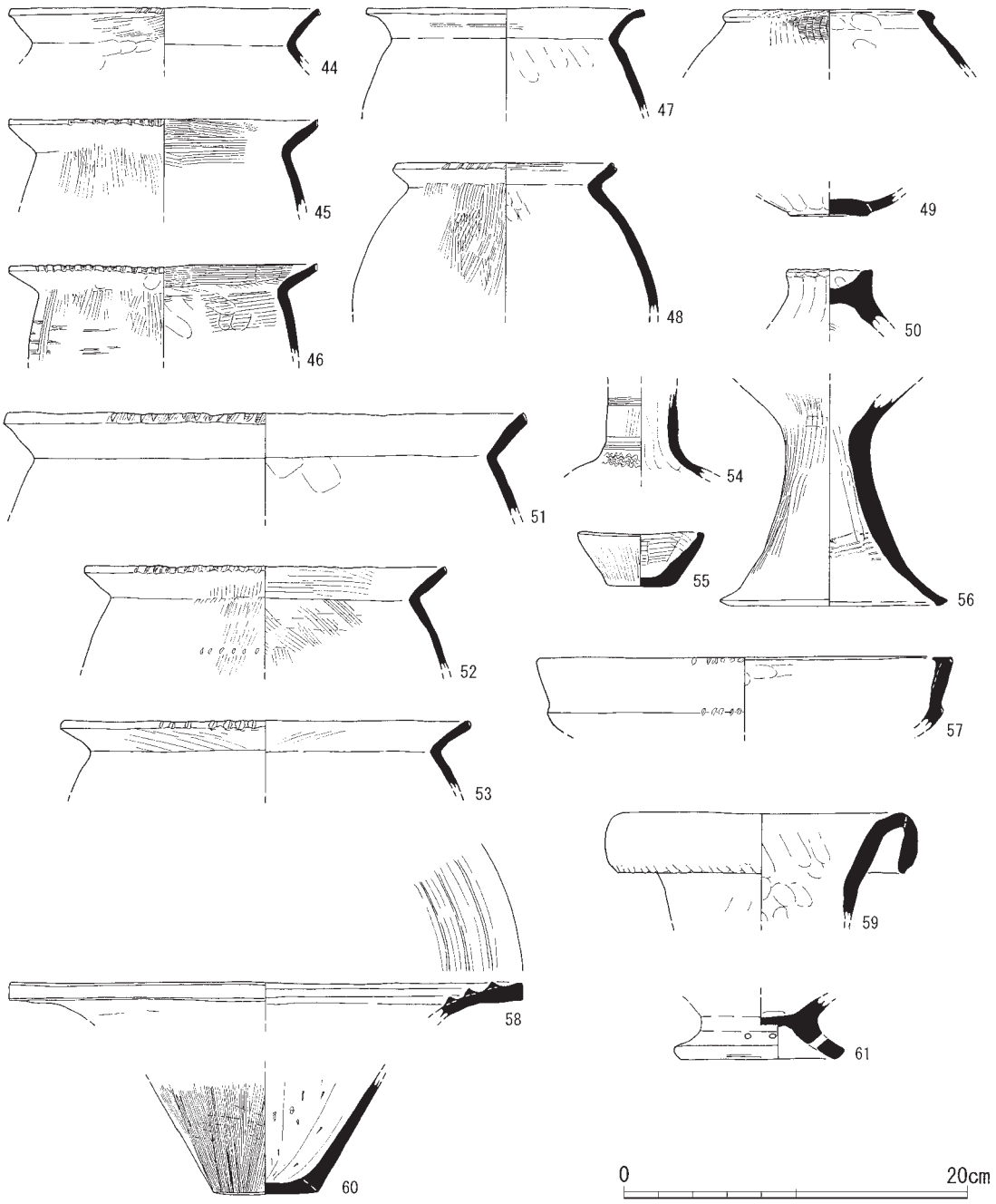
第17図　１地区出土遺物実測図（２）



第18図　1 地区出土遺物実測図（3）



第19図　1地区出土遺物実測図（4）



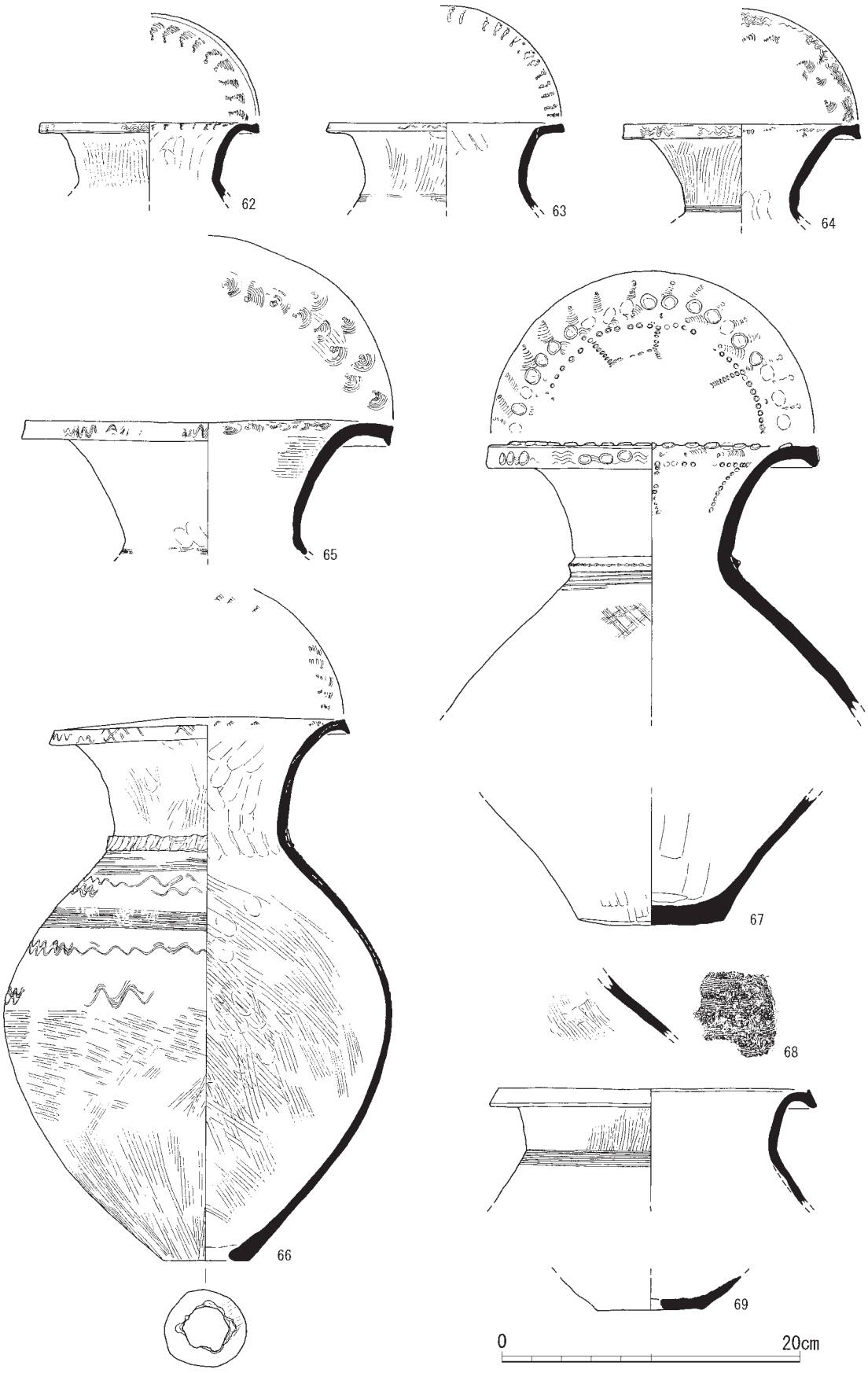
第20図　１地区出土遺物実測図（５）

縁内面に櫛描扇形文・円形浮文・円形竹管文を、端面にも波状文・円形浮文を、頸部には刻目をもつ突帯を、体部には櫛描斜格子文を施すという高い加飾性がみられる。無文で短頸の広口壺も出土している(69～73)。69のみは頸部に櫛描直線文を施している。受口状口縁壺も多く出土している(75～79)。ＳＤ534南半から出土した79は口縁部が直立する形状と強いヨコナデが見られないことから、他の個体より古い形状であるといえる。76の口縁端には凹線文が施される。いずれも頸部には指圧痕文突帯が付けられる。大型の細頸壺(80・81)や直口壺(83)も出土している。83は３条の刻目突帯に棒状浮文を貼り付けており、播磨方面の装飾と共通している。甕は小型のも

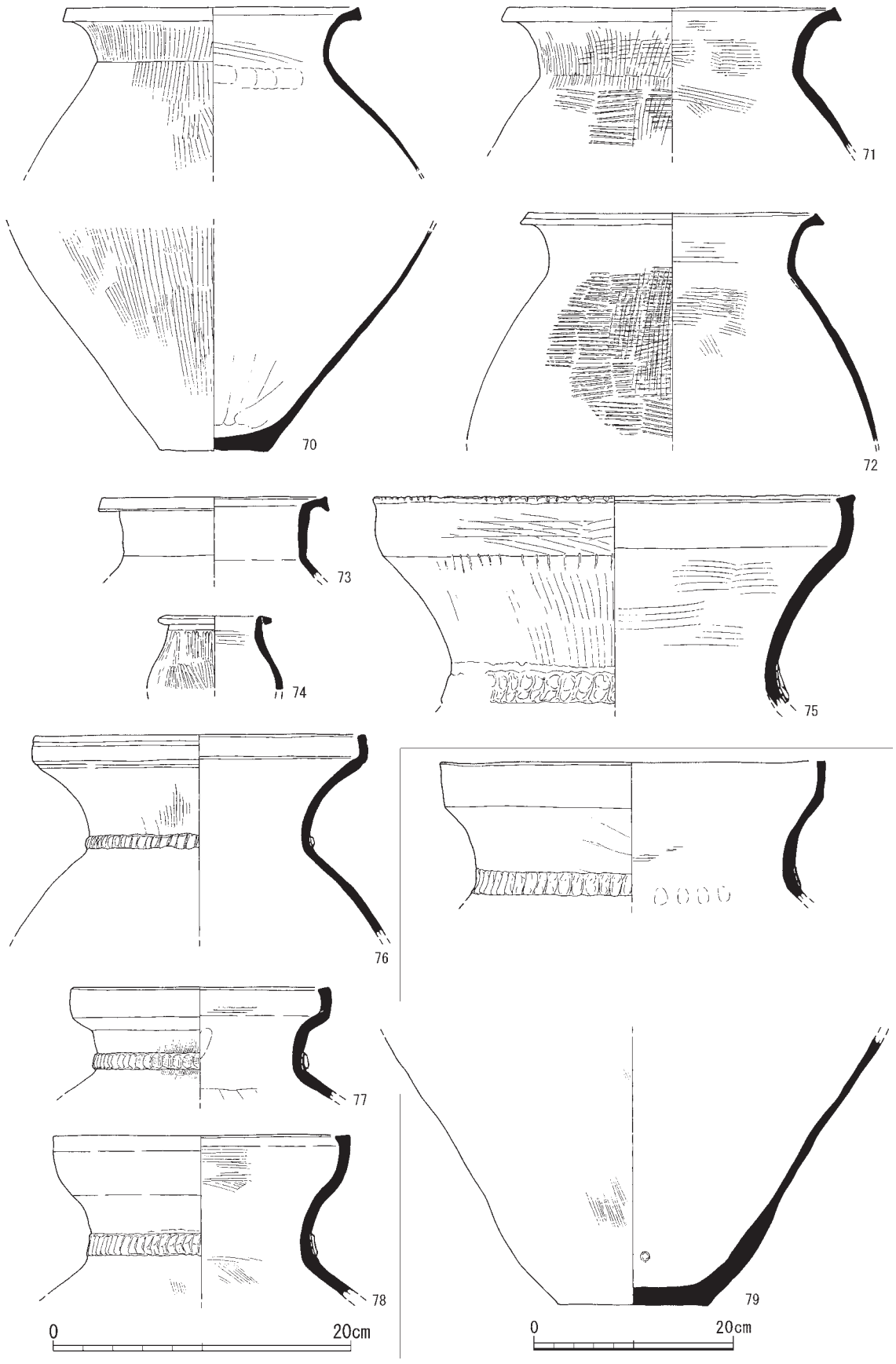
のが目立つ(86～91)。口縁端部に面をもち、刻目をもつものと無文のもの、無文で上方に拡張するものがある。タタキ調整のものも多くみられる。87はいわゆる近江系の受口状口縁甕である。口縁部は直立し、内面に横方向のハケメ調整をする。褐色の胎土である。93は凹線文の口縁端部をもつ「く」字状口縁の鉢であり、櫛描直線文と波状文で飾る。ほかに、凹線文をもつ台付きと考えられる鉢(95)や無文の「く」字状口縁の鉢(97)、把手付きの鉢(96)が出土している。高杯は、単純な水平口縁をもつもの(103)、水平口縁先端が大きく垂下し、そこに凹線文を施すもの(104)と３個一組の円形浮文をもつもの(105)があり、後の２点は脚部内面をケズリ調整する。98は器台の体部であると思われる。

ＳＤ549(第24図106～第28図156)　この遺構からも多くの土器片が出土した。広口壺の多くは、口縁内面を扇形文で、端面を波状文で飾るものが多い(106～109)。端部を上下に広げるものと、途中で折れ曲がり先端が垂下するものがある。108は口縁部に２列の円形竹管文を施す。109は口縁端面上下に刻目を施す。110は口縁内に瘤状の突起と円孔をそれぞれ二つもつ。頸部に断面三角形の突帯を１条もつものが多いが、大型の広口壺では指圧痕文突帯を付けている。調整は外面をハケメ調整するものが主体である。112は播磨などで見られる口縁内に突帯をもつ垂下口縁の広口壺である。胎土は在地のものと変わりない。垂下部に凹線文を施し、その上に棒状浮文を貼り付けている。頸部には断面三角形突帯を６本貼り付けている。一方で、口縁端部に刻目をもつのみのものもある(116～119)。117・119のようにタタキ調整のみられるものもある。広口短頸壺は頸部が直立する113と、頸部がゆるやかに外反する114・115がある。受口状口縁壺は、頸部の締まりが強く、口縁部が直立(121)もしくは強く内湾(120・122)する。122は口縁部外面が櫛描斜格子文で飾られる。123の細頸壺はＳＤ549半ばで出土した供献土器である。頸部と体部の境界に円孔が穿たれ、底部が打ち欠かれている。125の大型細頸壺は、諸種の櫛描文で飾られる。126の短頸壺は口縁部に凹線文状のヨコナデが施される。体部にはヘラによる「コ」字状の刻みがみられる。甕は口縁端部に刻目をもち、体部上半が張る形状のものが主流で、タタキ調整を施すものが多い(129～134、136～141)。133は口縁端部を上方に拡張する。大型の甕は口縁端部に面をもつ(136～138)。135は甕蓋である。145の椀状の鉢は口縁直下を突帯と円形竹管、ヘラ描斜格子文で飾る。146の脚部は突帯と円形竹管文で飾り、三角形の透しをもつ。文様構成の類似から145・146は同じ型式の土器であると考えられる。胎土は類似するが、同一個体かどうかは不明である。高杯脚部はヘラ描きによる施文をもつもの(143)、無文のもの(144・150～152)、裾部先端に刻目をもつもの(149)とがある。143のヘラ描き文様は丹波では見られない施文法である。台形土器が３点出土している(154～156)。調整や形状が個体によって異なる。154はＳＤ534から出土した端部片と接合した。

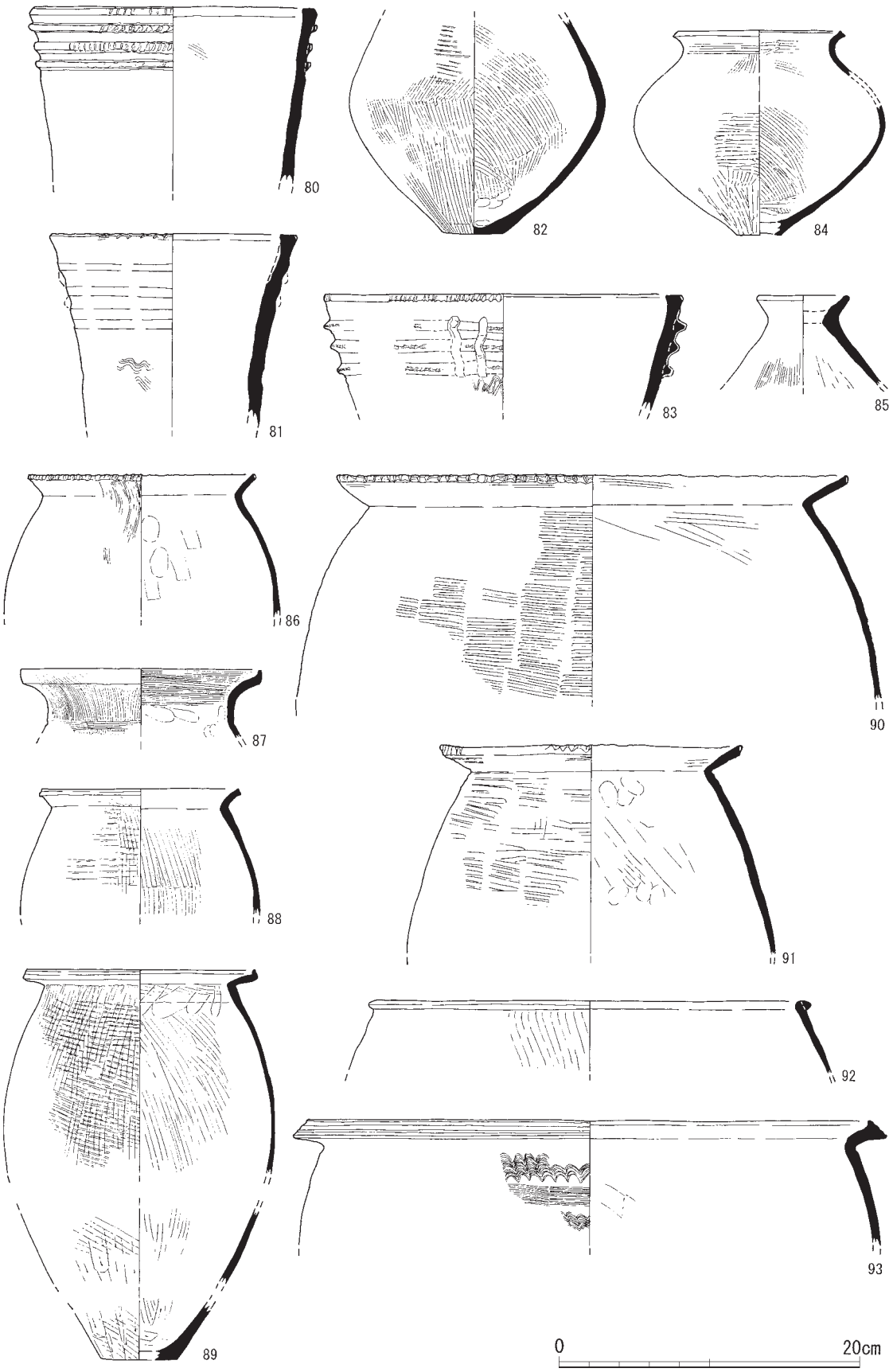
ＳＤ198(第29図157～第36図233)　ＳＤ198からは、完形や残存率の高い個体が多量に出土した。広口壺は、１点が完形近くまで復原できた(159)。広口壺は、全体的に口縁部を大きく垂下させる形状のものが多く(157～163)、タタキの後にハケメ調整を行うものが多い。158や162など、口縁端面に凹線文をもつものが見られるが、157や159のように波状文と扇形文の組み合わせも見



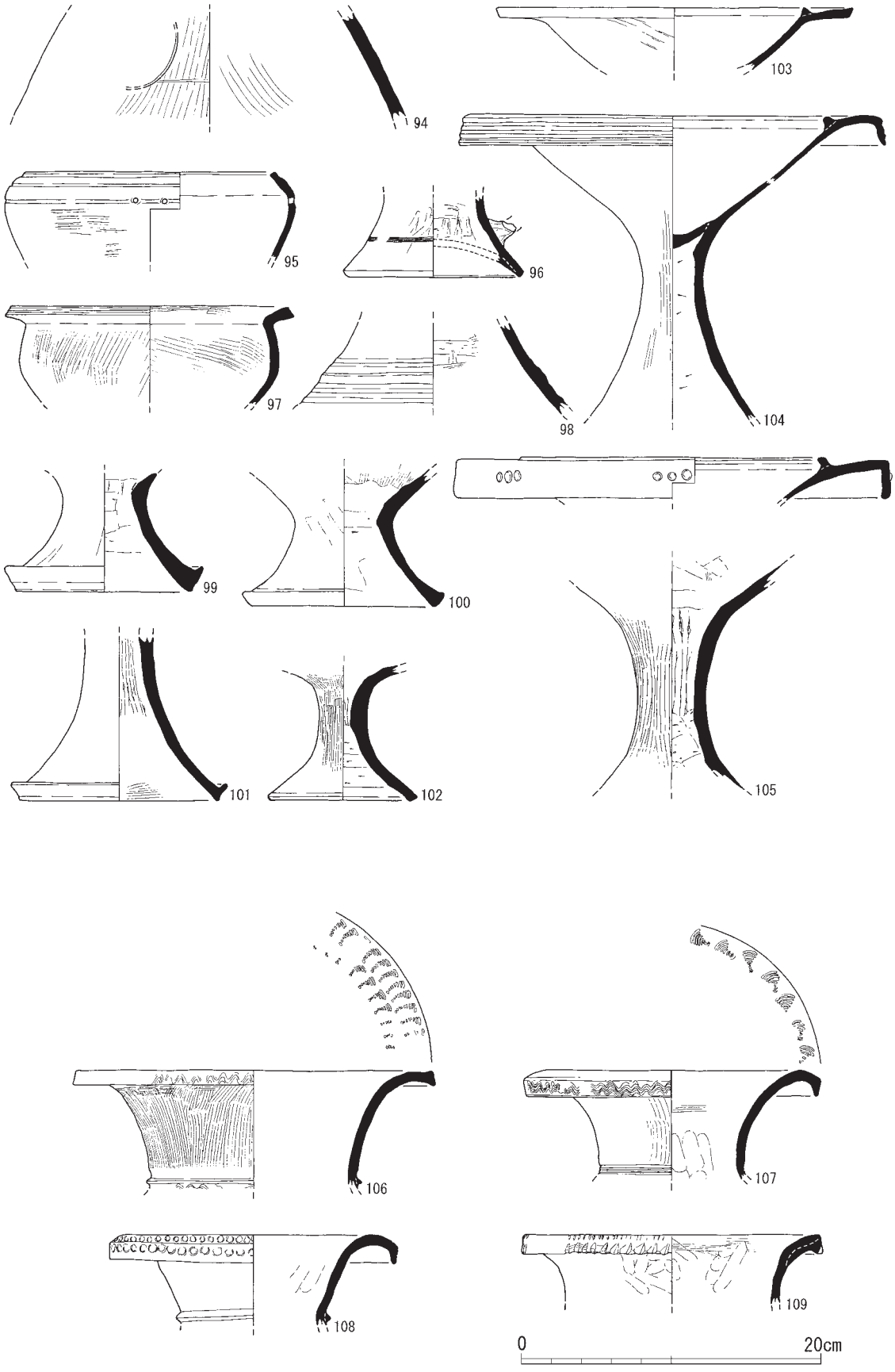
第21図　1 地区出土遺物実測図（6）



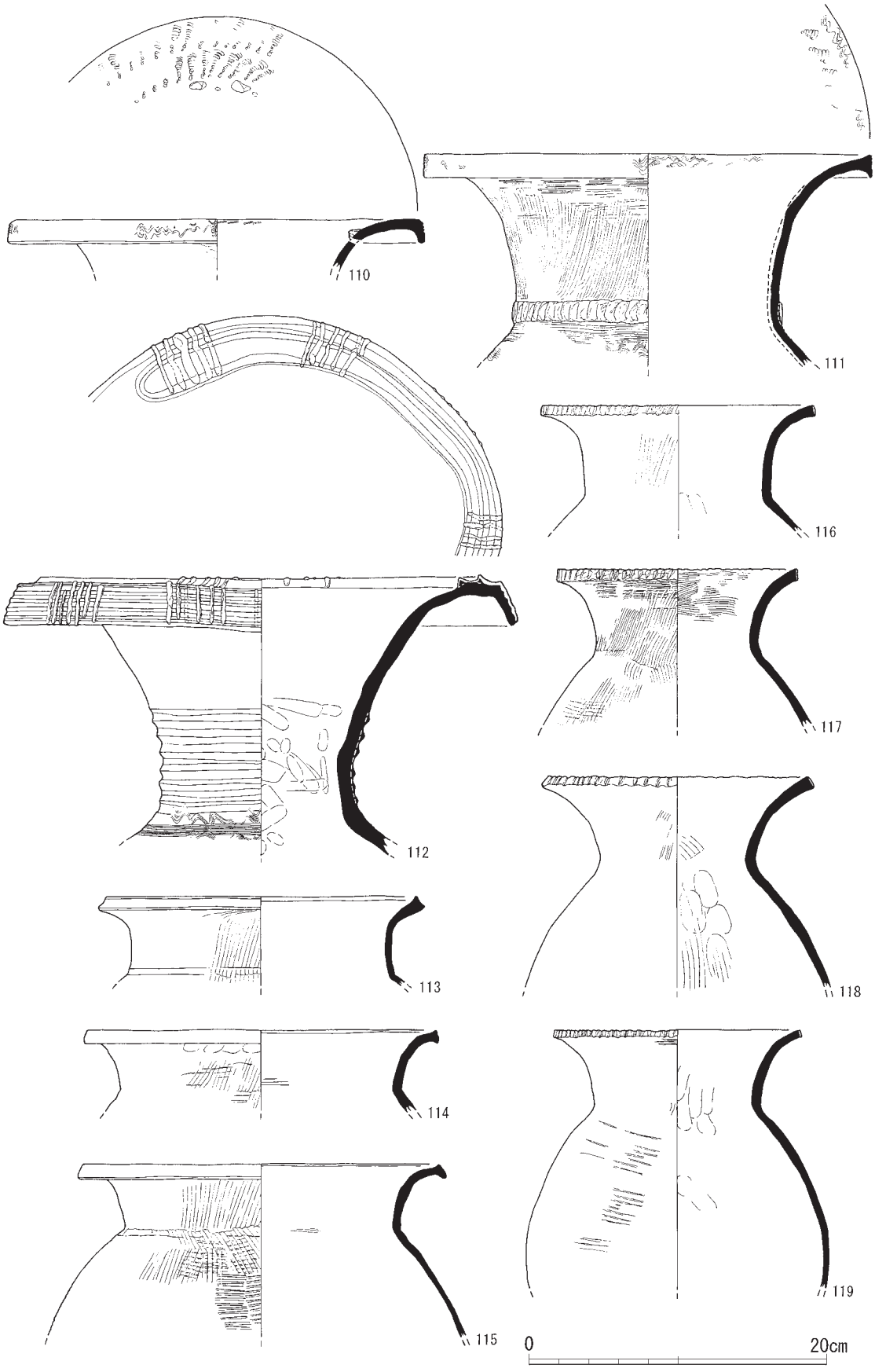
第22図　1地区出土遺物実測図（7）



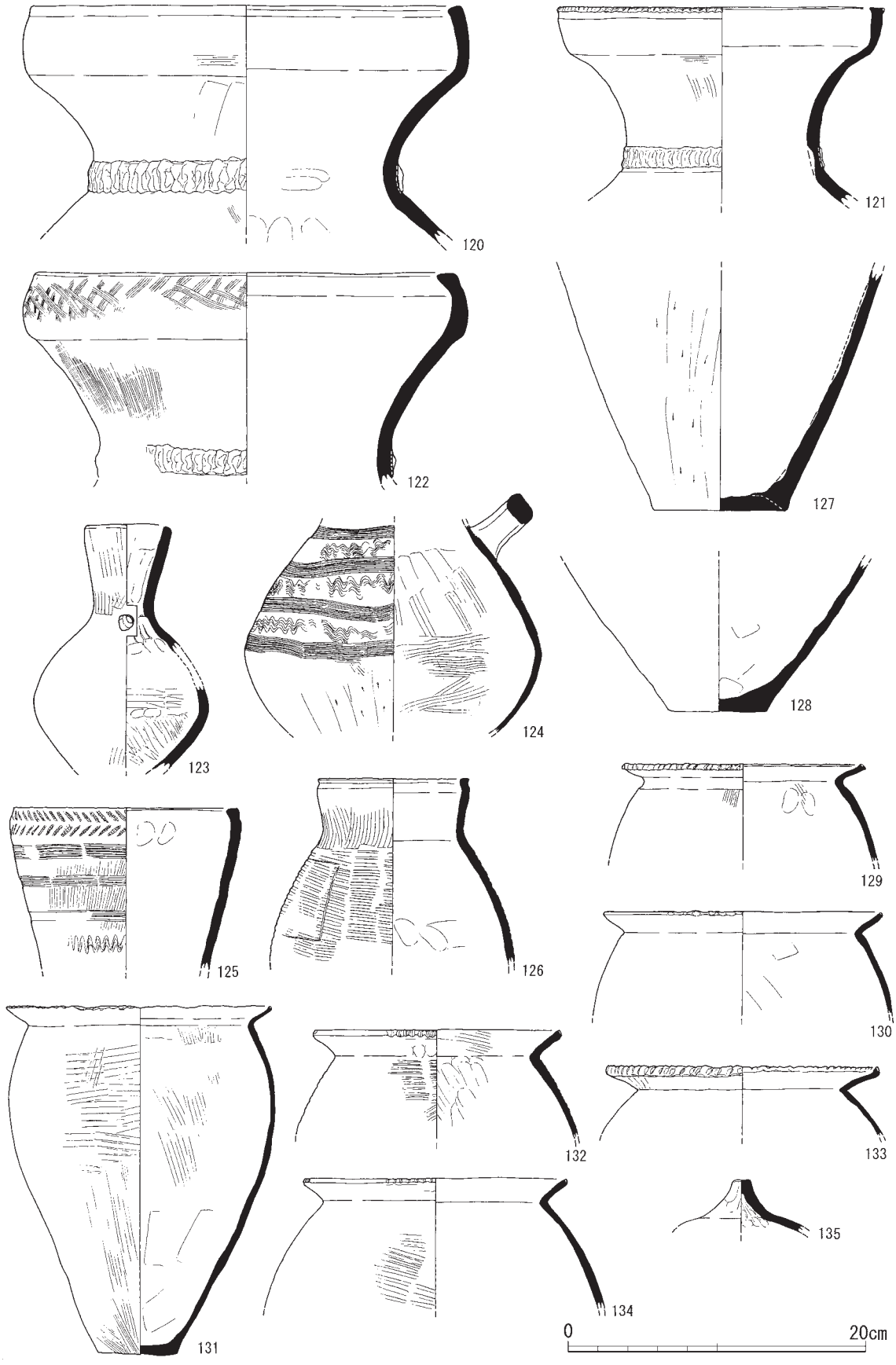
第23図　1 地区出土遺物実測図（8）



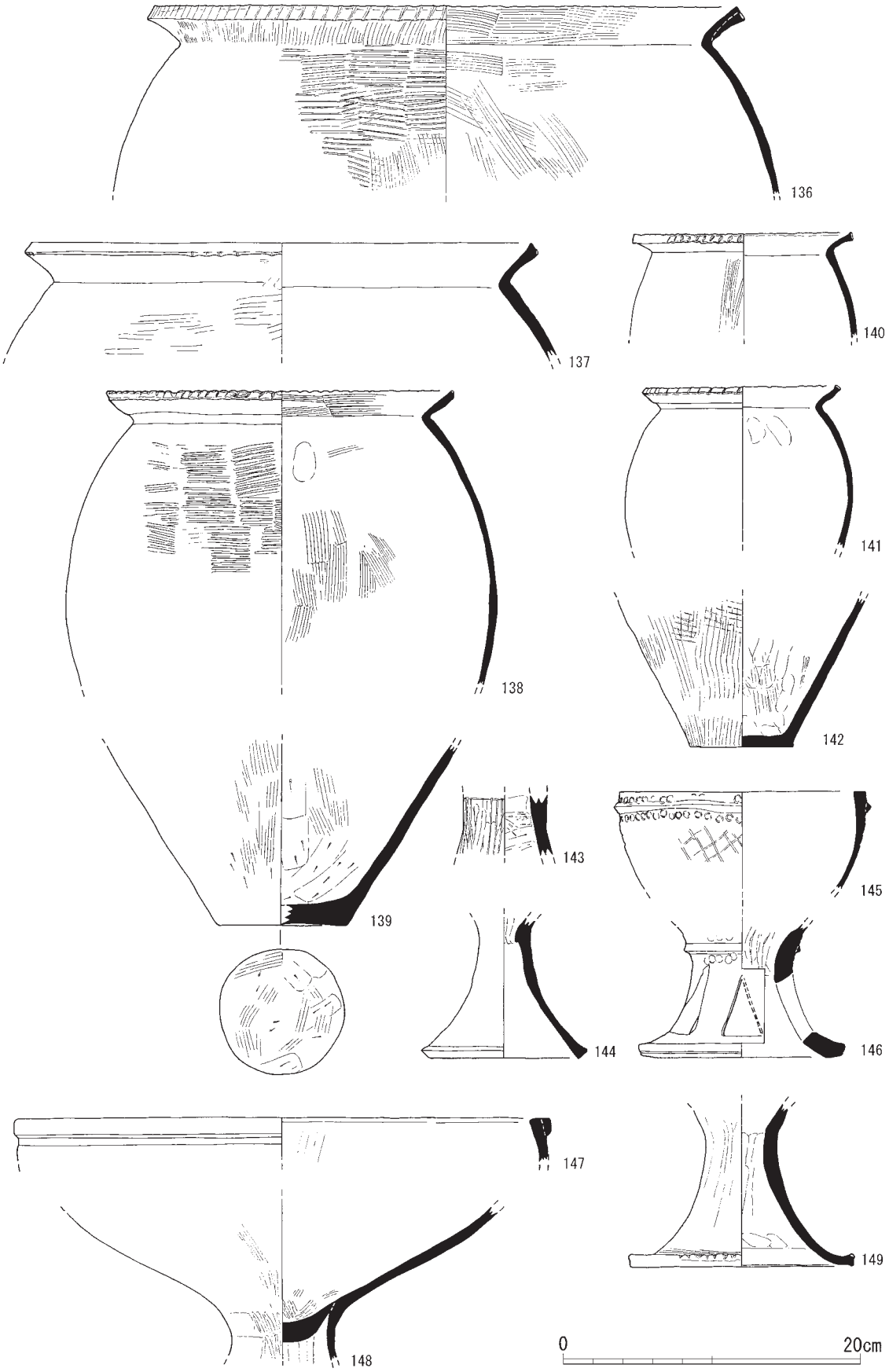
第24図　1地区出土遺物実測図（9）



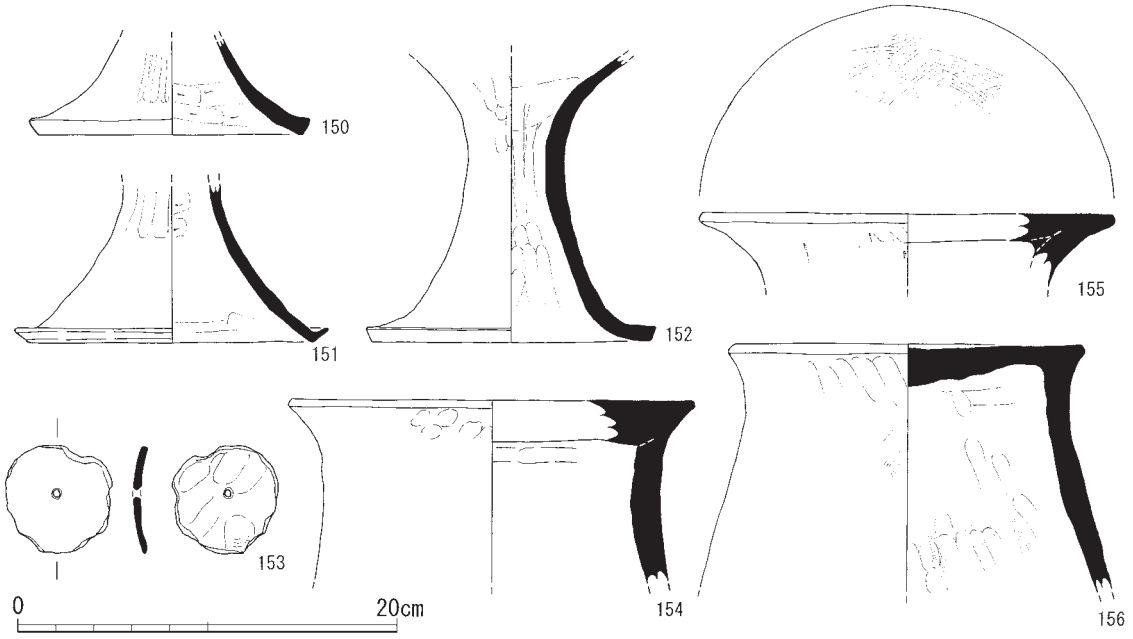
第25図　1地区出土遺物実測図(10)



第26図　1地区出土遺物実測図(11)

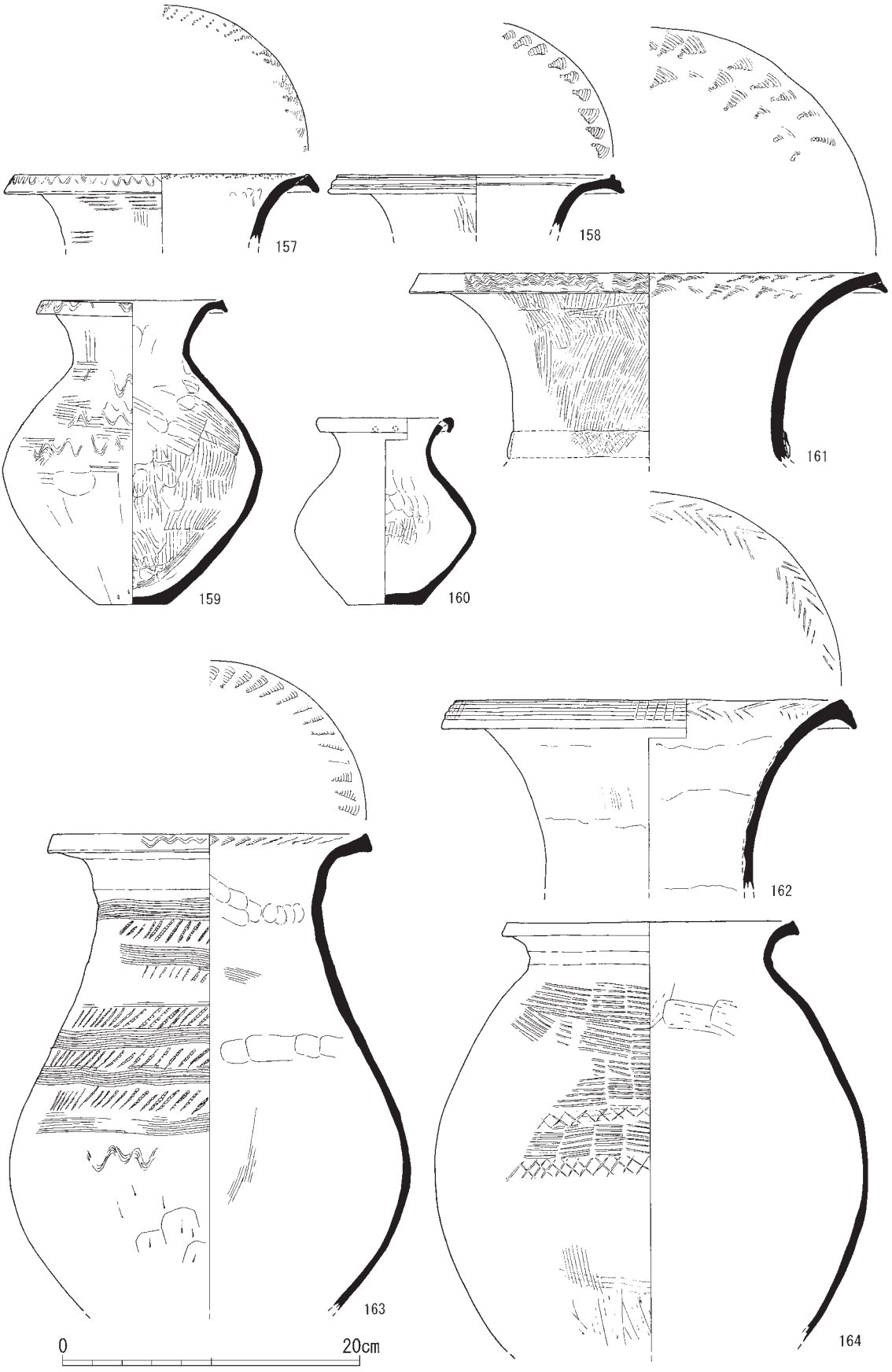


第27図　1地区出土遺物実測図(12)

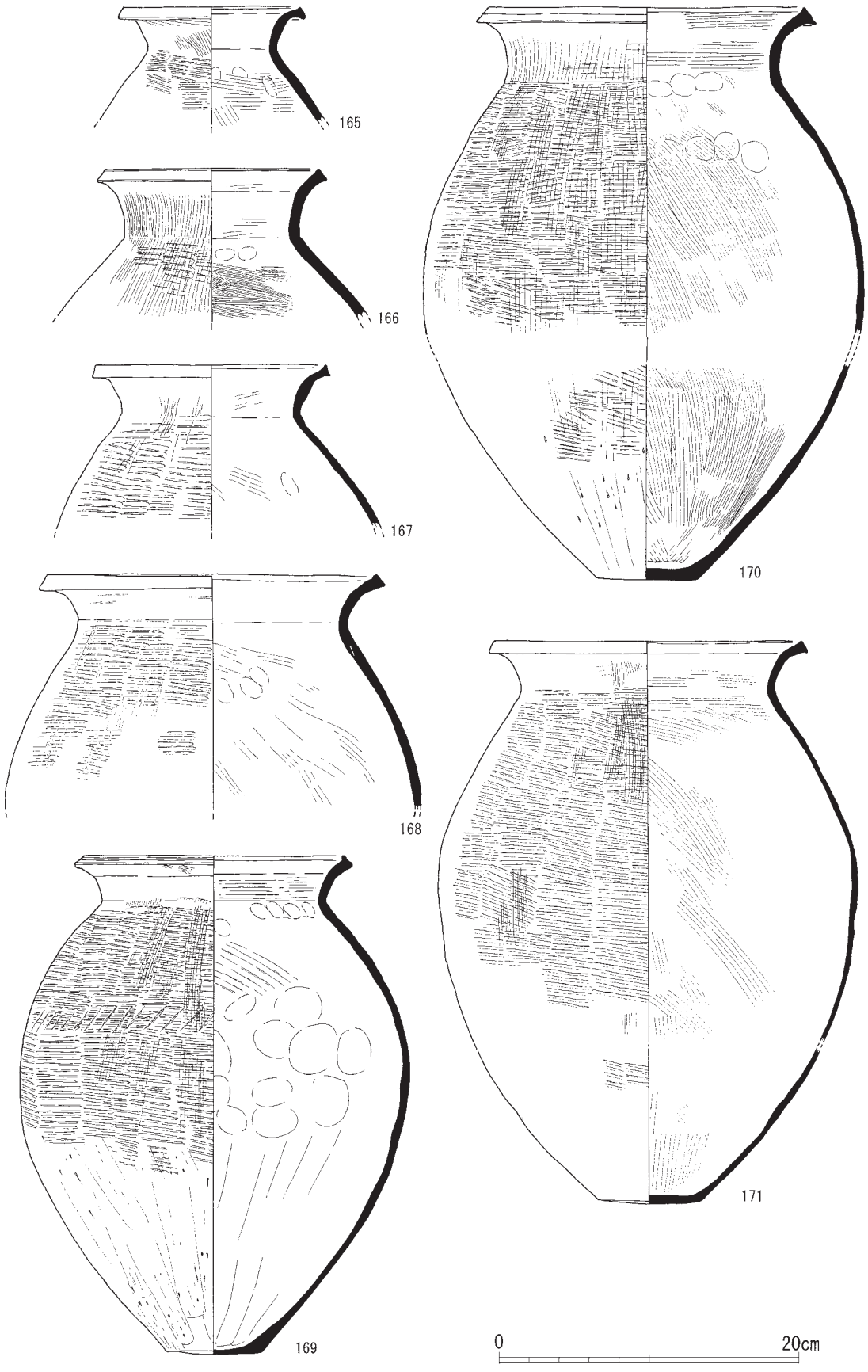


第28図　１地区出土遺物実測図(13)

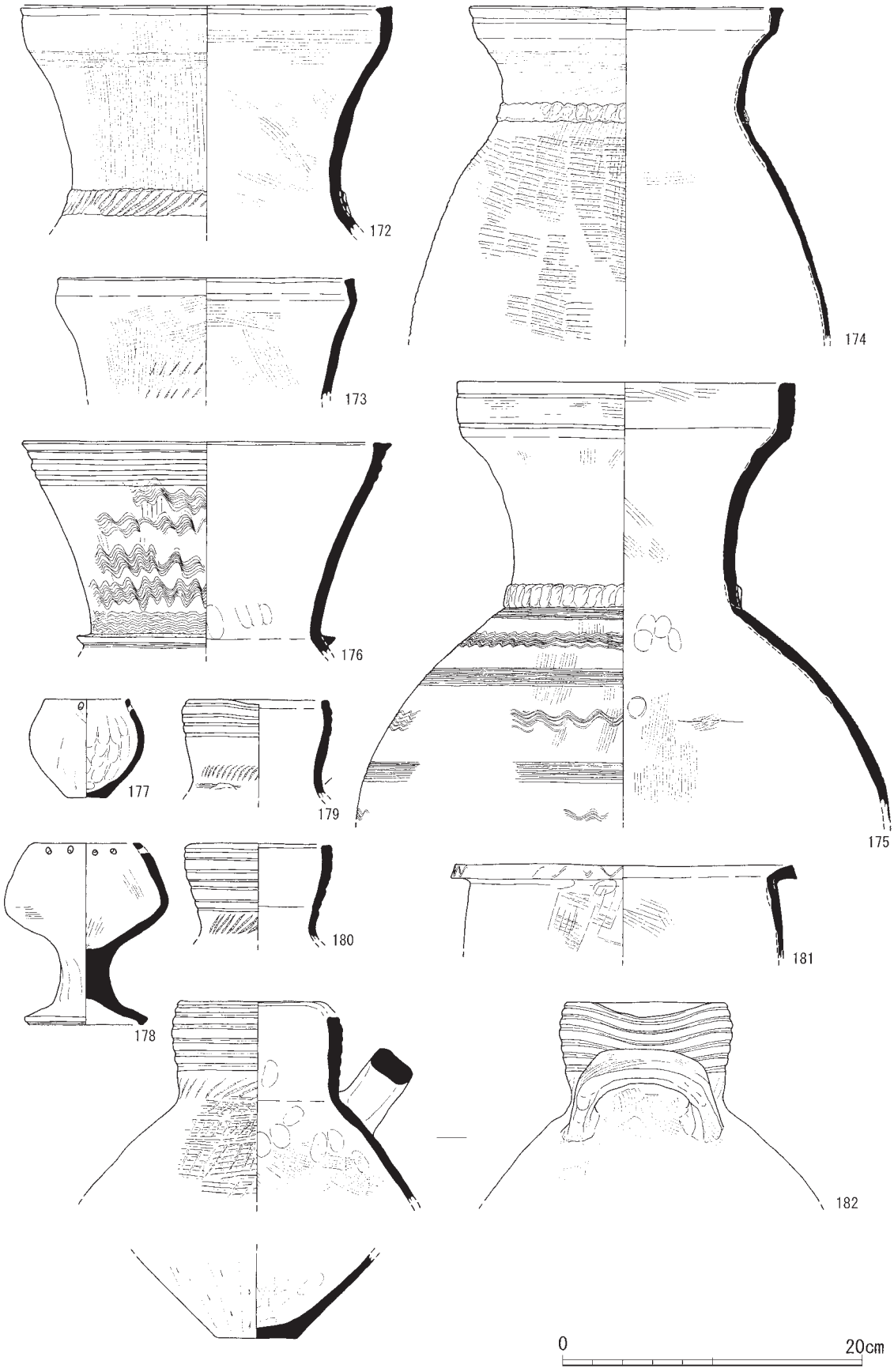
られる。161の頸部突帯には、ハケメ工具原体による刻みが施されている。162の口縁端面は凹線文の後に５本一組の刻みがいれられ、棒状浮文の名残りかと思われる。163の太頸の広口壺は体部下半に下方から上方にかけてのケズリ調整を施す。胎土は在地胎土と変わりはないが、あまり見られない形態である。一方、口縁部の文様構成こそ丹波で一般的に見られるものの、体部の櫛描直線文・列点文と最下段の波状文という文様構成もまたまれである。広口短頸壺も多く出土している(164～171)。その形状は、口縁端部が上下もしくは上方に拡張し、頸部がゆるく外反する。頸部の締まりは弱く、体部は倒卵形を呈する。調整は外面がタタキ後ハケメおよびケズリ調整で内面がハケメおよびナデ調整である。この種の壺は無文が基本であるが、体部半ばに施文を施すものもある。164はヘラによる格子状の刻みで、169は櫛状工具による列点文で飾られる。受口状口縁壺は、口縁部の屈曲がゆるいものが目立つ(172～175)。頸部外面をハケメ調整し、内面をハケメおよびナデ調整する。172の頸部には櫛状工具による刻目突帯が体部と同一化するほどに貼り付けられる。173は頸部に櫛状工具による刻目をもつ。174は指圧痕文突帯をもつが、172同様強く押し付けられている。体部は恐らく倒卵形であることが推測される。受口状口縁壺は、体部が無文のものが主体であるが、175は櫛描直線文と波状文が交互に施されるというめずらしい例である。口縁部上下端には凹線文を、頸部は立体的な指圧痕文突帯をもつ。176は大型の直口壺で、口縁部から凹線文、波状文、断面三角形の貼付突帯で飾る。摂津や播磨の中期末に類例が存在するが、それらには櫛描文をほとんど採用しない。177の小型の無頸壺は、紐孔が二つついていたものとみられる。178の台付無頸壺は、ＳＤ198の中央付近で出土している。中実の脚部をもつ。２個一組の紐孔をもつ。裾部が一部打ち欠かれており、供献土器であると考えられる。179・180は水差の頸部である。体部の大きさは不明である。共に凹線文と櫛描列点文で飾られる。文様構成は大型の水差においても共通する(182)。182の把手の断面は、角の丸い長方形の中央が潰れた



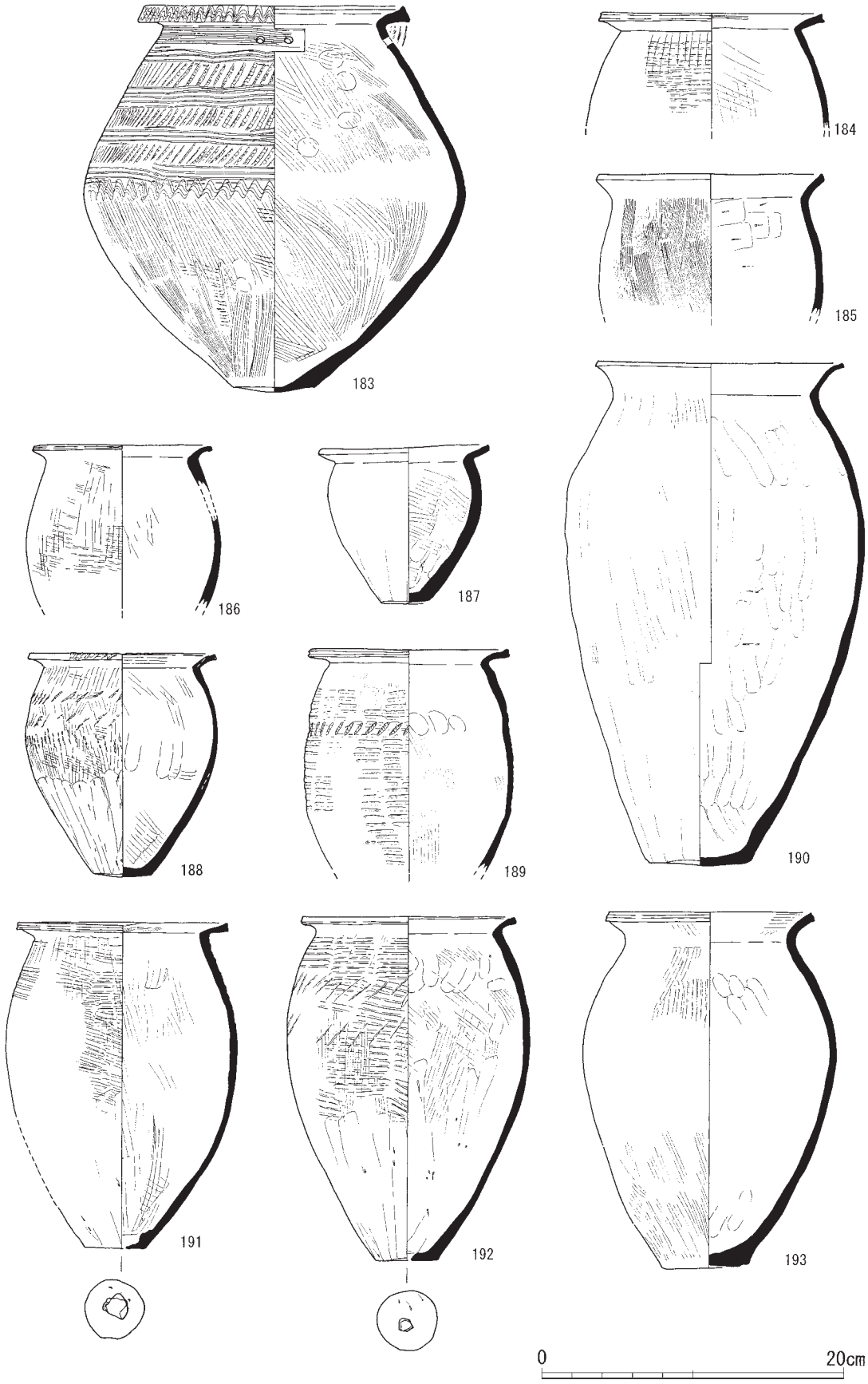
第29図　1 地区出土遺物実測図(14)



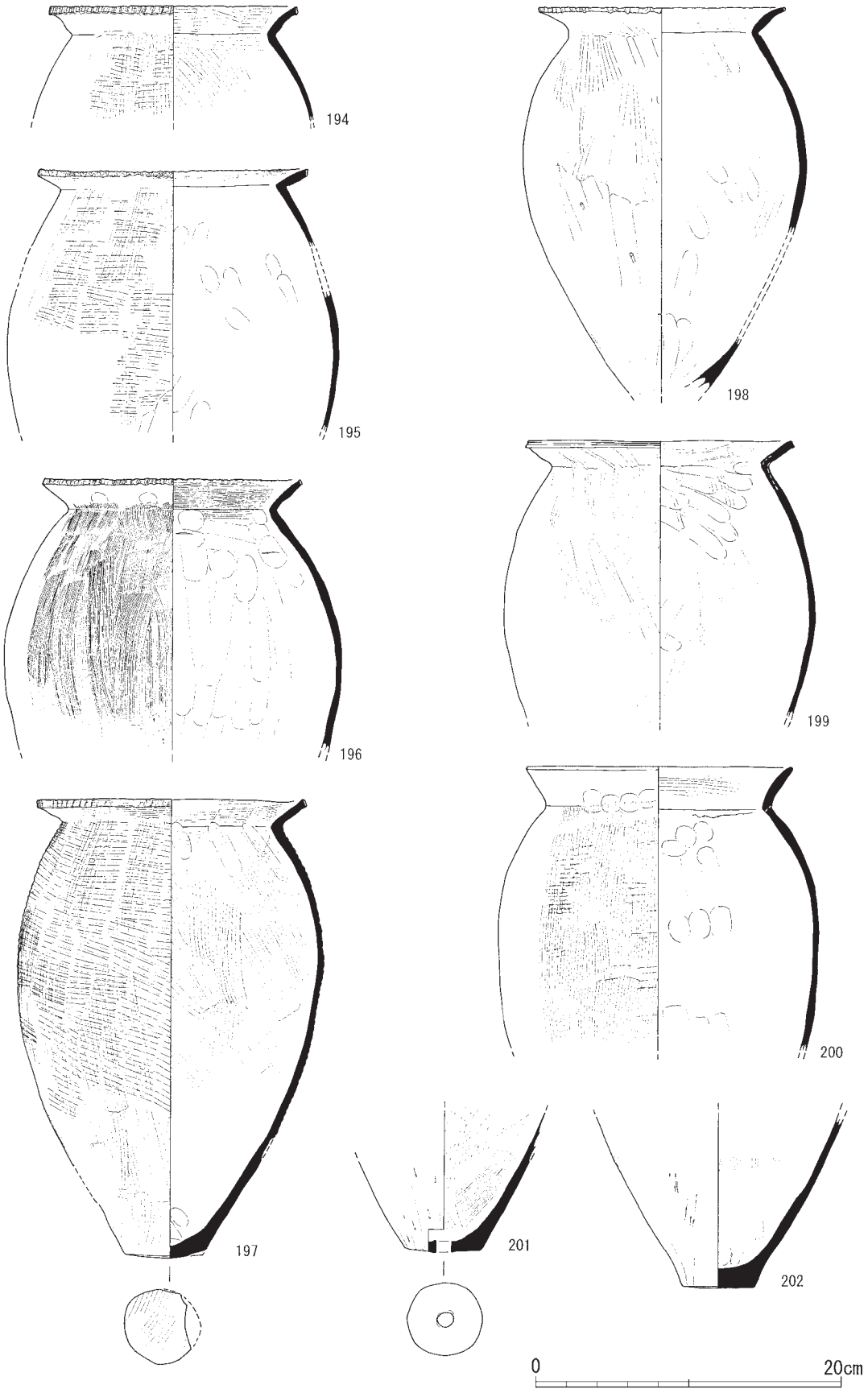
第30図　1地区出土遺物実測図(15)



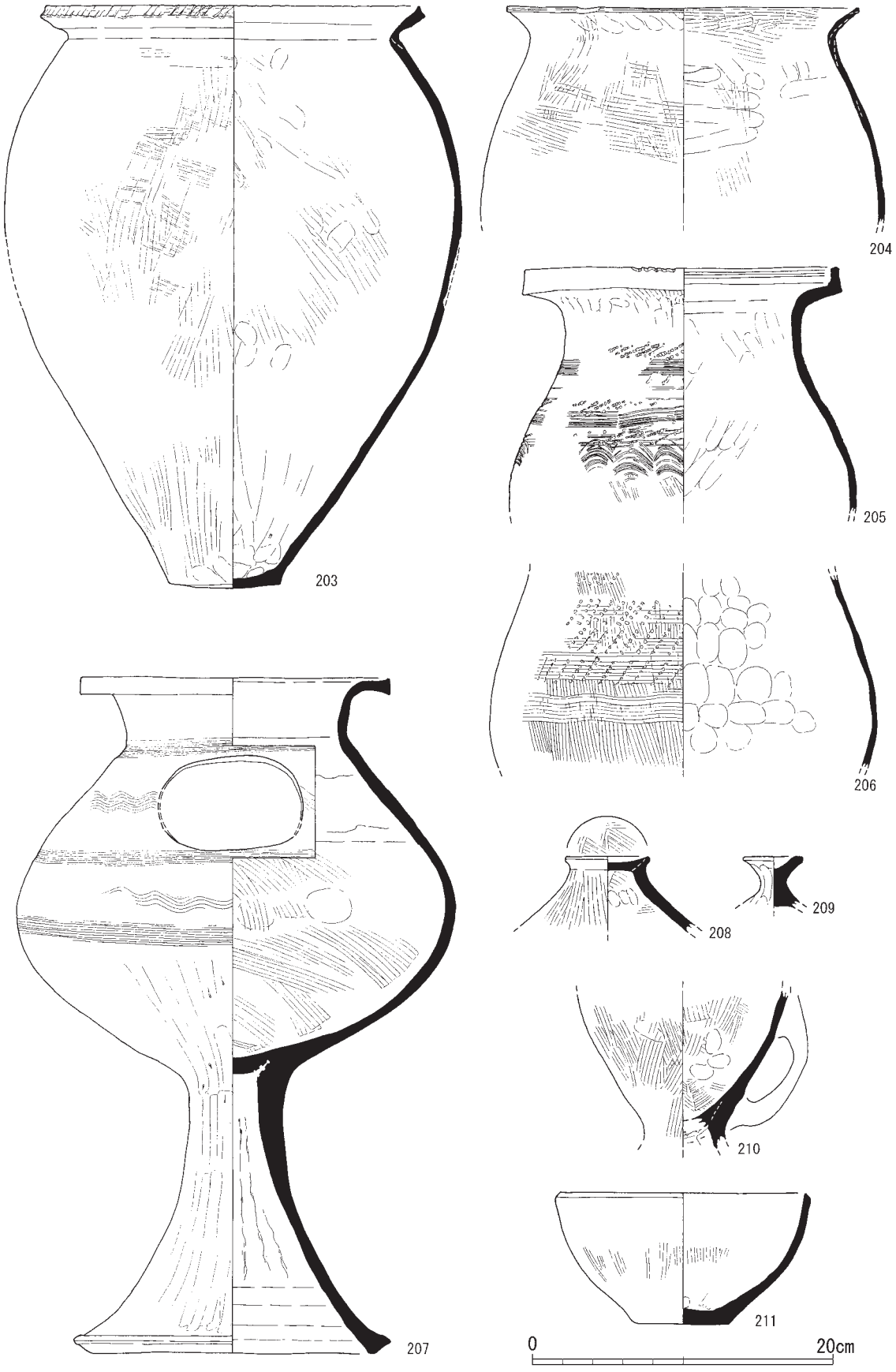
第31図　1地区出土遺物実測図(16)



第32図　1地区出土遺物実測図(17)

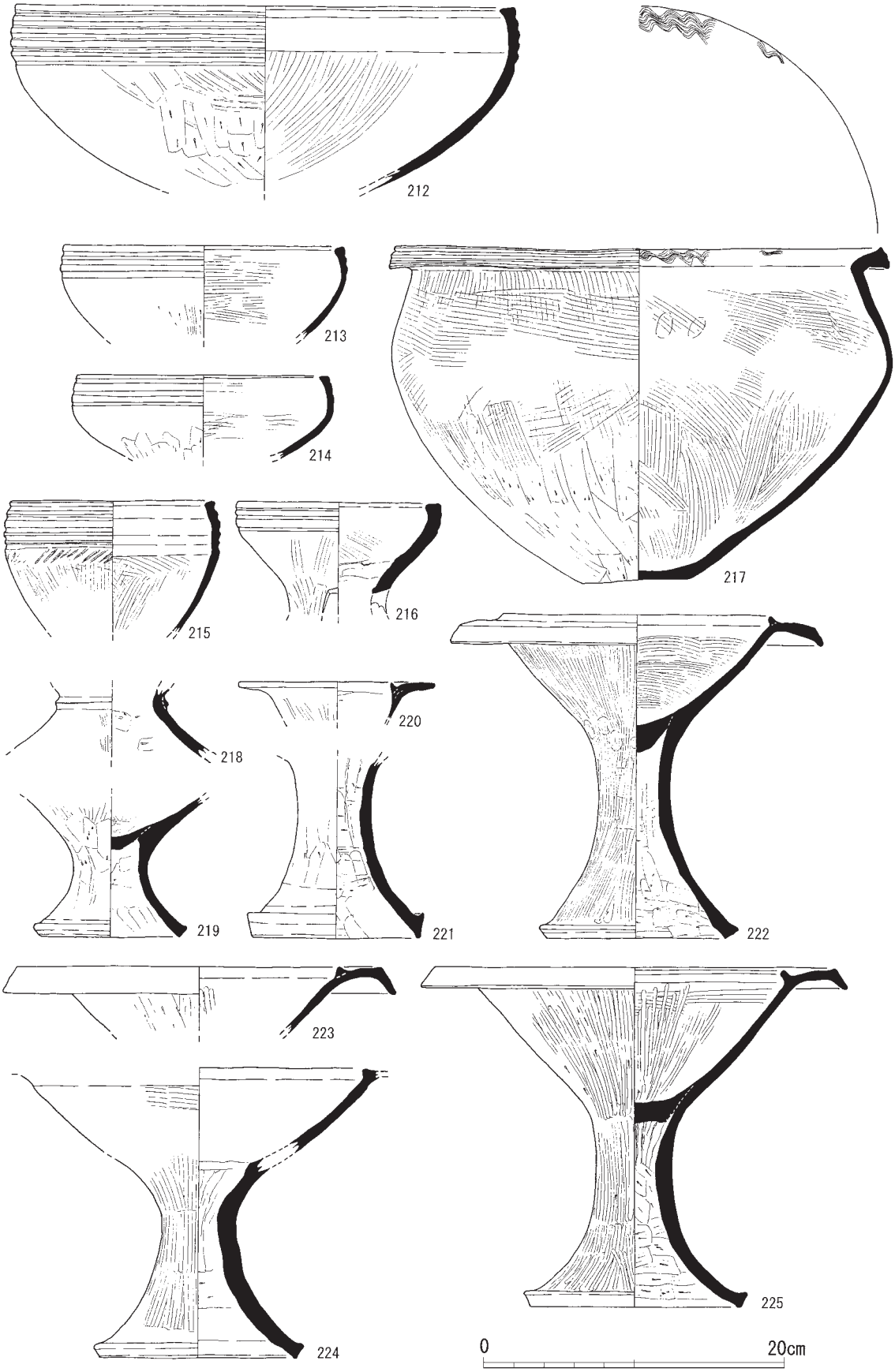


第33図　1 地区出土遺物実測図(18)

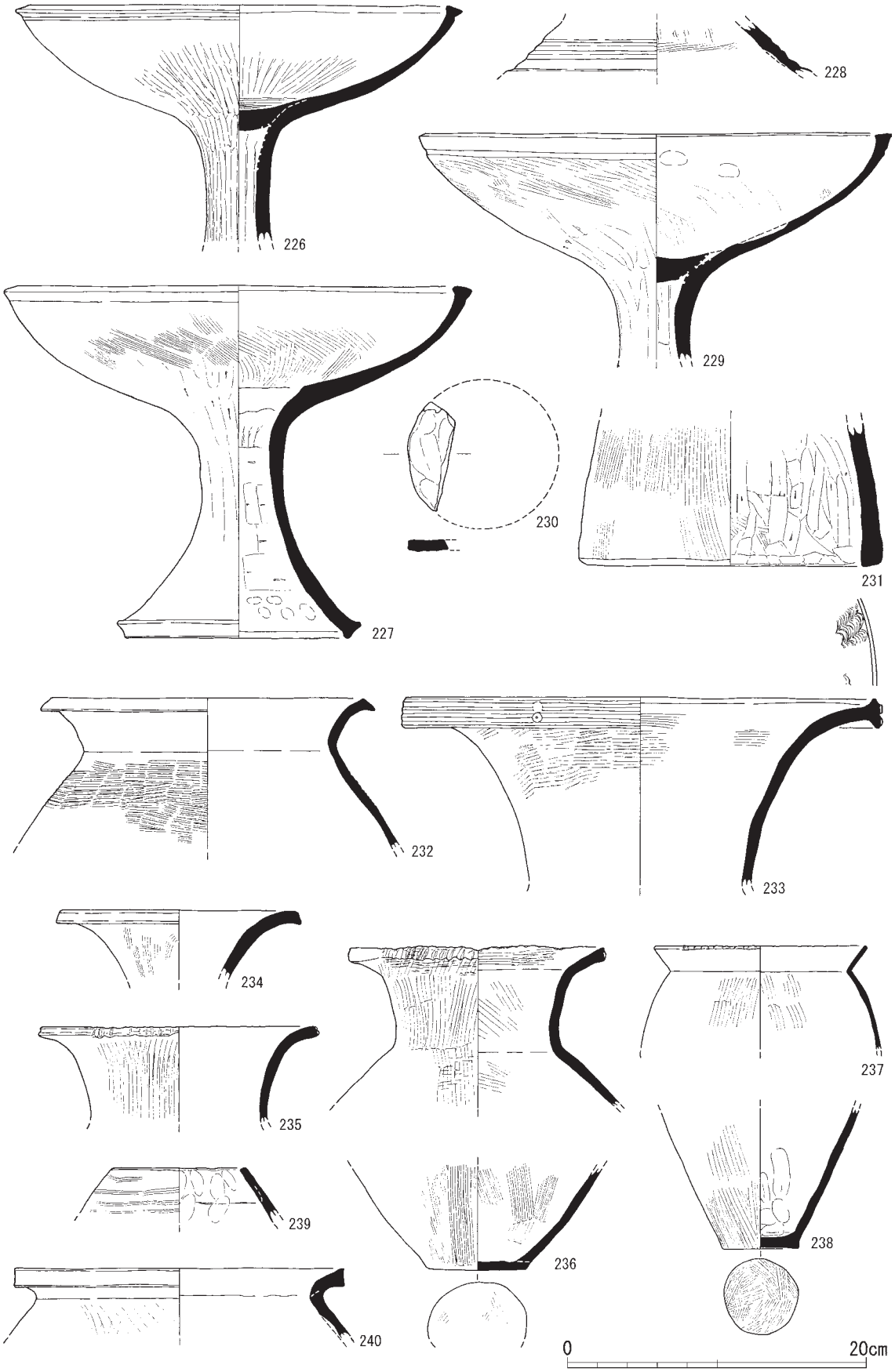


第34図　1 地区出土遺物実測図(19)

形状である。外面は上半がタタキ調整のみで、下半がケズリ調整を施す。内面はハケメ調整である。183は「く」字状口縁をもつ広口の壺である。２個一組の紐孔をもつ。体部の文様構成は163の太頸の広口壺と同様で、櫛描直線文、列点文と最下段に波状文というものである。内外共に最終調整はハケメであるが、外面下半には、タテミガキを意識したような原体幅の狭い折り返しのあるタテハケがみられる。甕はばらつきが存在するが、概ね大中小に分かれるようである。口縁部を強く「く」字状に曲げるものと、緩く折り曲げるものがある。体部上半か、半ばで最大径を迎えるものが主体である。小さなものを中心に体部に櫛描列点文を施す個体が存在する（188・189・192）。184はミニチュアの甕で、明らかな二次被熱が認められる。188はほぼ完形の極小の甕で、口縁端部に部分的に刻目を施す。小型の甕（184～186・187・191～193）は、口縁端面に凹線状の凹みをもつか、単純に面をもつのみのもので占める。185は外面を細かなハケメで、内面をケズリ調整する。191・192は底部に穿孔がみられる。中型の甕は、口縁端部に刻目をもつものとそうでないものが半々である。いずれにしても口縁端部の拡張はそれほど認められない。体部をタタキ調整した後ハケメやケズリ調整するもののほかに、タタキ目の目立たないものがある。189は完形の中型の甕で、口縁端部には狭い面をもつ。内外共にナデ調整で、粗雑な作りをしている。189・193は他の個体に比べ、広い底部をもつ。196は非常に目の細かいハケメ調整を施す。197は完形で出土している。体部半ばで張り、やや突出する小さな底をもつ。194・195はこれと同様の個体である。200は、口縁端部に面をもたない。外面はタタキ後ハケメ調整で、内面はナデ調整である。201の甕底部は、焼成前の底部穿孔がみられる。202の甕底部は他の個体と比べ、やや厚めの底をもつ。203・204は大型の甕である。203の口縁端部はやや上方に拡張し、そこに刻目を施す。外面はタタキの後にハケメ調整を施し､内面下半にはケズリ調整がみられる。一方、204は非常に狭い口縁端部をもち、一部指による圧痕がみられる。体部は外面がヨコハケの後にタテハケを施し、内面はナデとハケメ調整である。205はいわゆる近江系の受口状口縁甕である。胎土は在地のものより黒めで長石を多く含む。強い稜をもち、やや内傾気味に直立する口縁部には一部刻目を施す。文様構成は櫛描列点文、直線文で、最下段に近江に特徴的な波状文を施文する。しかしながら粗いハケはみられず、内面はナデ調整である。206の甕体部は205と同様の胎土をもつ。207は胎土が在地のものなので、東海地方を中心に分布する円窓付土器を模倣したものと考えられる。長い脚部に短頸の壺をのせた形状である。玉葱状の形状である上半部は薄い櫛描直線文と波状文で飾られる。脚部の内面はナデ調整のみで、外面にケズリ調整が施される。209は蓋のつまみであると思われる。210は把手付きの鉢で、作りが粗雑である。211は直口の鉢である。台付鉢の多くが凹線文をもつ。212は大型の鉢で、恐らく脚部が付くものと考えられる。外面にはケズリ調整が、内面にはハケメ調整が施される。213・214は212の小型の型式である。215は深めのもので､凹線文の下に櫛描列点文が施される｡216は脚部に方形の透しをもつようである。217は「く」字状口縁をもつ大型の鉢で、口縁端部に凹線文を、口縁内部に櫛描波状文を飾る。外面上半はタテハケの後にヨコハケを行い、下半部は上方から下方に向かうケズリ調整をする。219は台付鉢の短い脚部で、外面をケズリ調整する。221・222・224・225の水平口縁高杯はいず



第35図　1 地区出土遺物実測図(20)



第36図　1 地区出土遺物実測図(21)

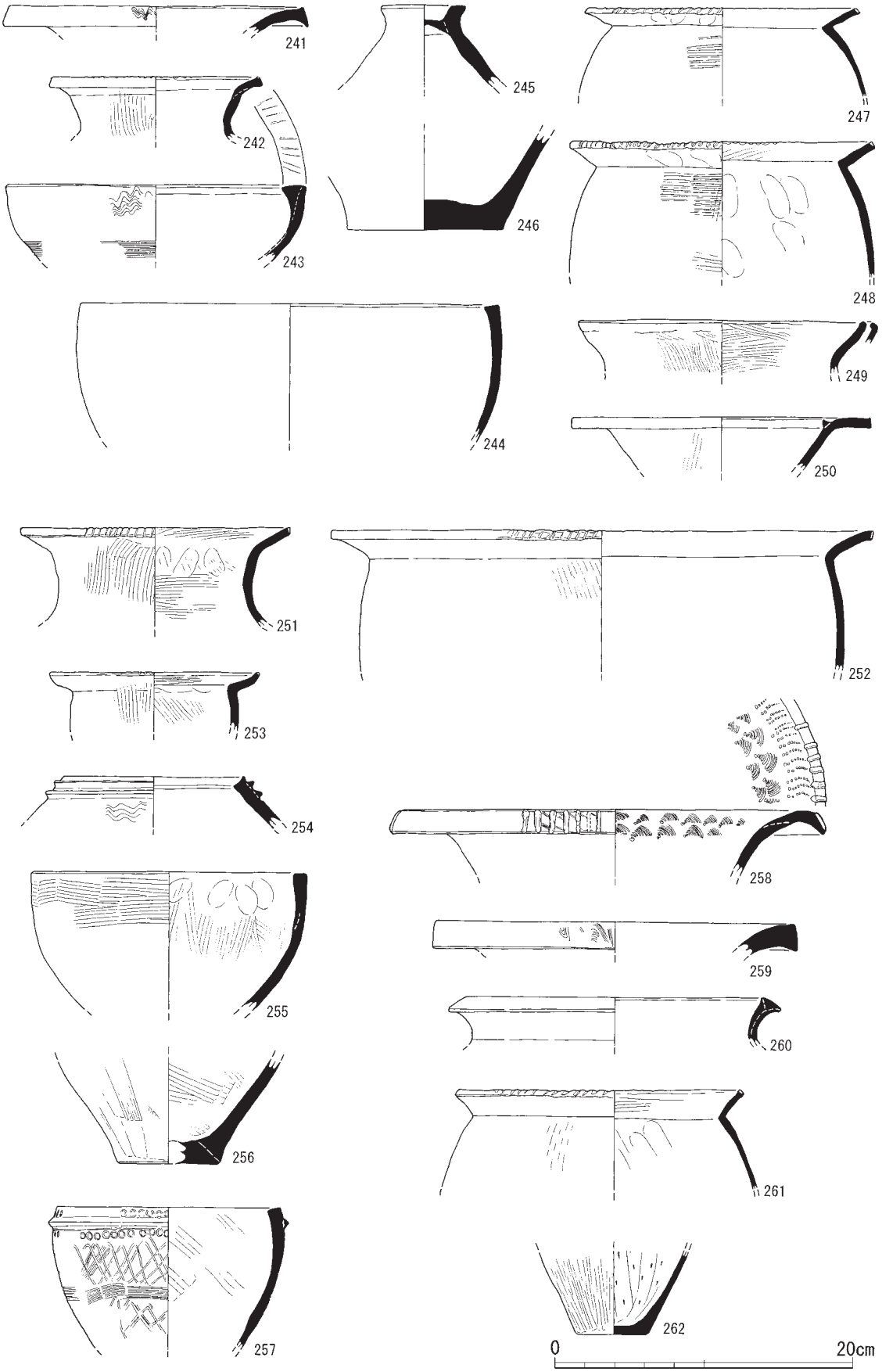
れも脚が長めで、裾端部に拡張気味の面をもつ。224以外は水平部先端が斜め下方に向かって飛び出す形状をしている。220のようなミニチュアの水平口縁高杯も存在する。脚部内面にケズリ調整を行うことが共通するが、杯部や脚部外面の調整についてはバラエティに富む。222･224(杯内面は器壁の摩耗のため不明)は全体がハケメ調整である。221、223は外面ケズリ調整である。225は内外共にミガキ調整である。浅い皿状の高杯(226・227・229)は、杯部内外に拡張気味の口縁端部をもち、その直下に凹線文を施すか、強いヨコナデによって杯部と区別を明確にしている。こちらも調整が個体によって異なる。226は内外共にミガキ調整を施し、227・229は杯内面をハケメおよびナデ、杯外面をハケメ調整し脚部外面をケズリ調整する。227は脚部内面は高いところまでケズリ調整を行う。他の２個体も失われた部分にケズリ調整がみられたであろうことが考えられる。台付鉢も高杯もいずれも円板充填法を用いている。228は器台の体部であると思われる。内面にケズリとハケメ調整がみられる。凹線文は浅めである。230は不明の土製品である。231は台形土器の脚部であると思われる。外面をハケメ調整し、内面に上方から下方に向けてのケズリ調整がみられる。

232の広口短頸壺と233の大型広口壺の口縁部は、ＳＤ198とＳＤ534の境界から出土している。層位は前者の下層と後者の中層にあたるため、ＳＤ198に伴うものとして扱う。土器の形状からみても齟齬はない。232は短く外反する形状で、口縁端部が斜め下方に広がる。233は上下に拡張する口縁端面に凹線文を施し、その上に２個一組の刺突のある円形浮文を貼り付ける。外面の口縁直下にタタキ調整が施されている。

ＳＤ111(第36図234～238)　装飾の無い広口壺(234)と、口縁端部に刻目のみをもつ広口壺(235、236)がある。236の口縁直下と体部にはタタキ目が認められる。237の甕は、体部上半で最大径をもつと考えられる「く」字状口縁甕である。狭い面をもつ口縁端部には刻目をもつ。238は甕底部であるが、236底部と同様に底面にハケメ調整を行っている。

ＳＤ289(第36図239・240、第40図325～328)　239の無頸壺は体部を櫛描直線文で飾る。直線文１本に対する櫛の条数が少ない。内面は接合痕が顕著である。240は口縁をゆるく折り曲げた形状を呈す。口縁端部が上下に広がるが、器壁が厚く、「く」字状口縁甕の初期のものであると思われる。327の広口壺は、口縁端部が斜め下方に大きく垂下する。端面には２条の凹線文が施される。甕は３点掲載した。326は体部にタタキ目をもつが、体部があまり張らない形状である。

ＳＤ540(第37図241～250)　241の広口壺は、口縁端部が上下に大きく拡張し、そこに櫛描波状文を施す。242の広口短頸壺は、外湾気味に立ち上がり折れ曲がって先端の開く形状を呈す。口縁上端を刻目で飾る。246は大きめの壺の底部であると思われる。245は底部にしては充填部が不安定であることから、蓋であると考えられる。247の甕は口縁部の「く」字状の折り曲げが強く、上半で強く張る形状のようである。一方、248は「く」字の折り曲げは強めだが、体部があまり張らない形状である。調整は共通する。249は、ゆるい受口状を呈する甕口縁で、内外に顕著なハケメ調整を施す。作りは粗雑である。鉢は有文のもの(243)と無文のもの(244)があるが、いずれも直口である。水平口縁高杯(250)は、口縁部先端がわずかに上方に飛び出す。



第37図　1 地区出土遺物実測図(22)

ＳＤ571（第37図251～254）　251の広口壺は、筒状の頸部に外反する口縁部をもつ。調整はハケメ、ナデのみである。253の小型甕は、体部最大径が口径を下回る。器壁が厚めである。252の大型甕の体部も張りが見られないようである。いずれも刻目をもつ。254の無頸壺は口縁直下を２条の突帯で飾る。

ＳＤ548（第37図255・256）　直口で無文の鉢（255）は、内外をハケメ調整している。256の底部は、その粘土板の周囲に粘土紐を積み上げる成形法が断面から観察できる。外面は放射状のタテハケを施す。

ＳＤ342（第37図257）　257の鉢は、円形竹管文や断面三角形の突帯、櫛描斜格子文と直線文で飾る。類似の文様構成のものがＳＤ549でも出土している。

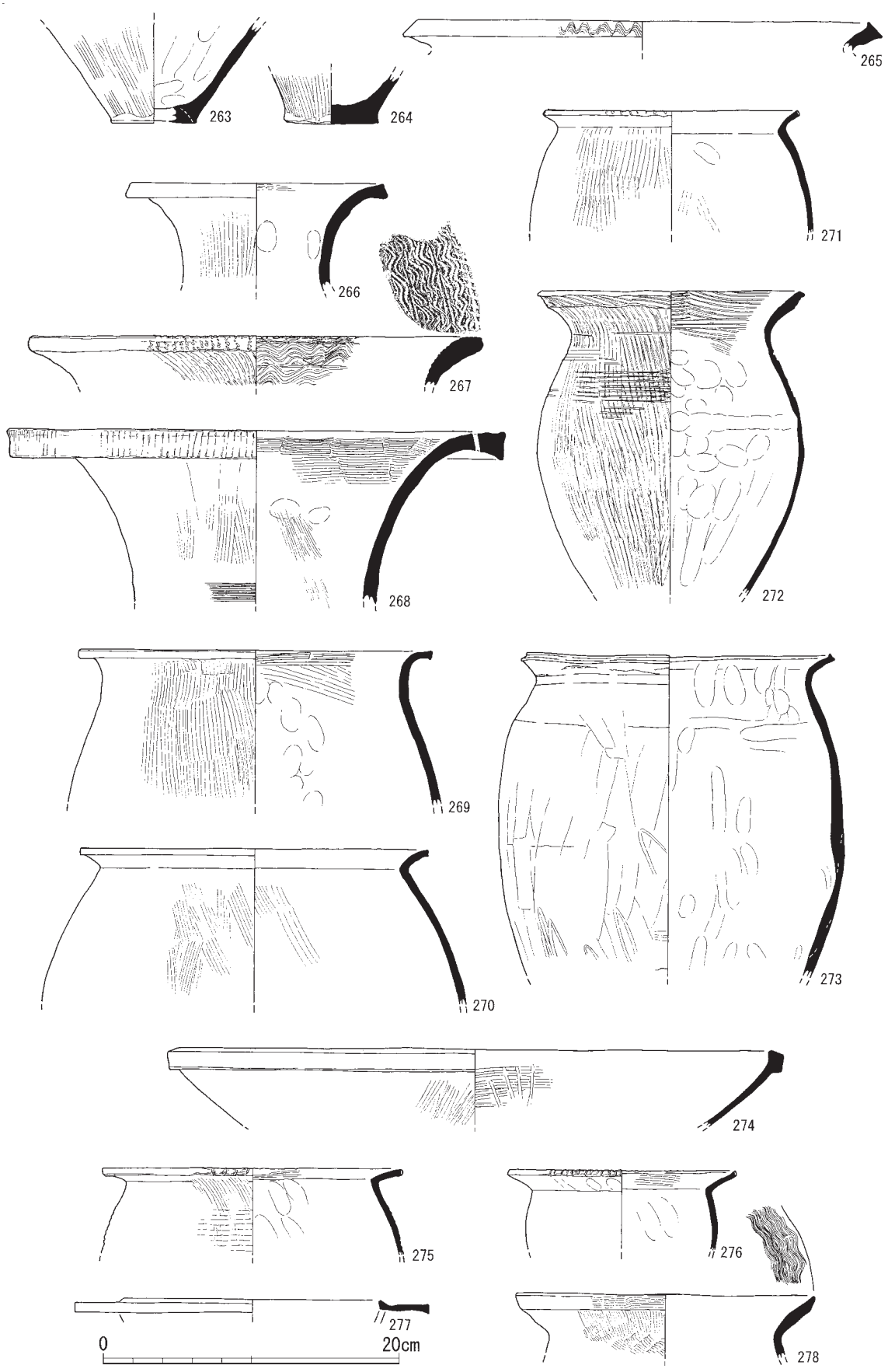
ＳＤ320（第37図258～262）　258の広口壺は、口縁部が大きく垂下し、そこに櫛描波状文と棒状浮文を施す。口縁内面は扇形文と列点文で飾られ、高い加飾性が窺われる。259の広口壺口縁は、断面が三角形を呈する。端面には櫛描波状文が施される。260は広口短頸壺の口縁であると思われる。261の甕は、口縁部先端が狭まる形状である。外面はハケメ調整のみである。262は甕底部で、外面をハケメ、内面をケズリ調整する。

ＳＤ13（第38図263～265）　263・264の底部はいずれも底が厚い。265は、上下に拡張する口縁端面に櫛描波状文を施す。恐らく「く」字状口縁の鉢の口縁部であろう。

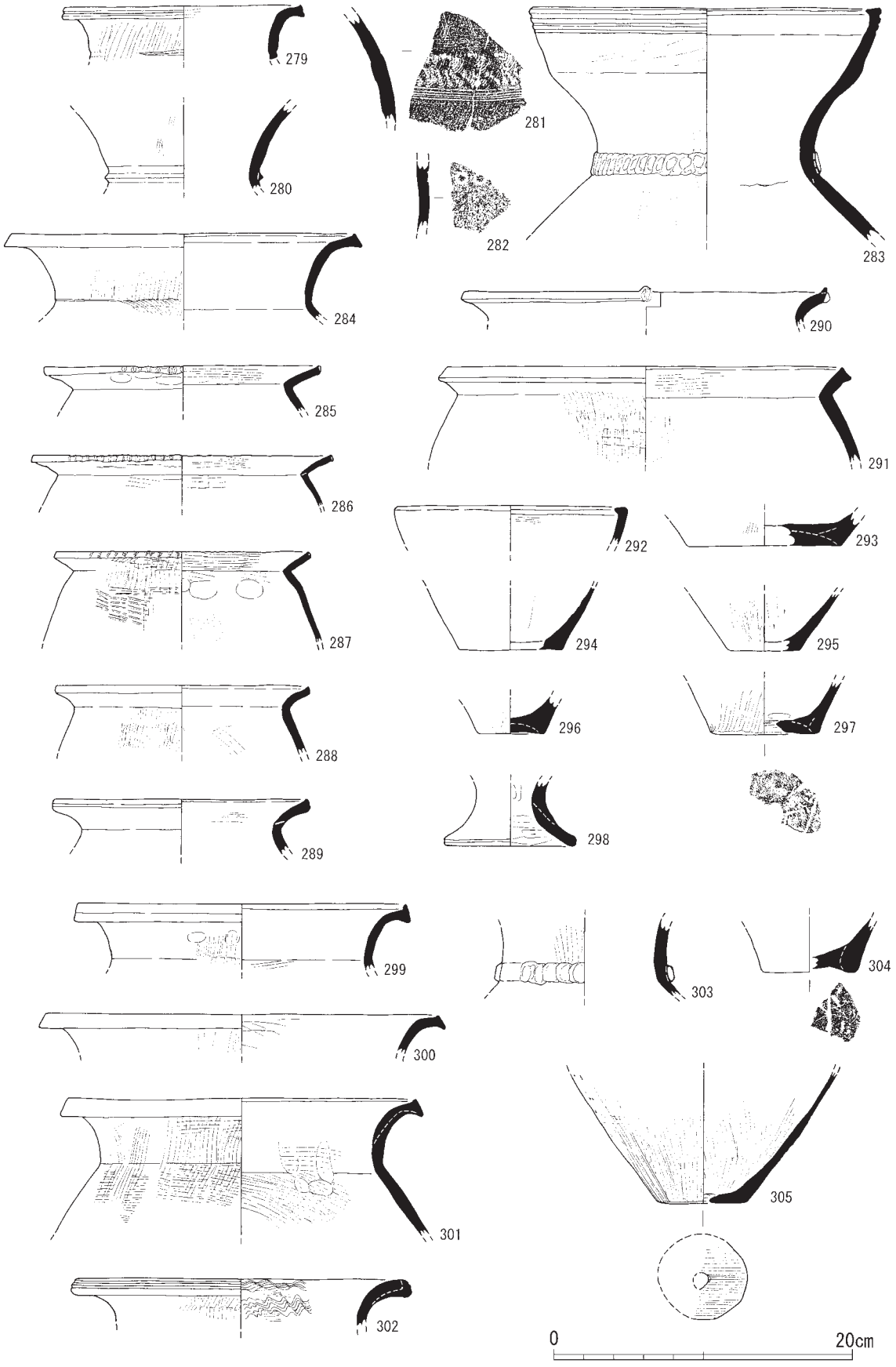
ＳＤ96（第38図266～274）　多数の破片が出土し、なかには完形に近い個体もみられた。無文の広口壺（266）と有文の広口壺（268）がある。いずれもハケメ調整である。268は大型の広口壺で、口縁端部に刻目を、頸部に櫛描直線文をもつ。また、２個一組の紐孔が穿たれている。甕は大きなものが多く、折り曲げ口縁のもの（269・273）、「く」字状口縁のもの（270・271）、近江系の受口状口縁のもの（272）がある。271のみ口縁端部に刻目が入る。269と270はハケメ調整を施す。272は口縁端部が上方につまみ上げられた形状であるが、器壁の厚さに部分的な差があり、接合痕も目立つという粗雑な作りである。外面は板、内面は指による全面ナデ調整であるが、外面には一部ミガキ調整がみられる。273は粗いハケメ調整をもつ。頸部直下にばらつきのある直線文をもつ。胎土からみても、褐色系で長石や雲母を含み、在地とは明らかに異なる胎土をもつ。同様の胎土をもつ267は、厚い口縁部をもち、外面には粗いハケメを施す。口縁内面には強い櫛描波状文をもつ。口縁先端のみの残存なので、断定はできないがこちらも近江系の甕であると思われる。274は、貼り付け口縁の大型鉢である。

ＳＤ157（第38図275～278）　甕３点と高杯１点を掲載した。甕は体部の張る275、体部最大径が口径を下回る276、近江系の278がある。275・276はともに口縁端部に刻目をもつ。278は粗いハケメと口縁内に粗い櫛描波状文をもつ。胎土は褐色で石英や長石が目立つ。

ＳＫ538（第39図279～298）　広口壺頸部280は断面三角形の突帯をもつ。広口短頸壺は標準的な口径のもの（284）と小型（279）のものがあり、279は頸部と体部の境界に櫛描直線文を施す。受口状口縁壺283は、口縁部の屈曲がゆるく、口縁部上端には凹線文が入る。甕は「く」字口縁の強い屈曲のもの（285～287・291）、ゆるい屈曲のもの（288・289）、折り曲げ口縁のものがある（290）。



第38図　1 地区出土遺物実測図(23)



第39図　1地区出土遺物実測図(24)

口縁端部は面を広くもつものが主体である。288･289は口縁端部を上方に軽くつまみ上げている。290は甕口縁の破片であるが、一部何らかの工具を押しあてている。292は椀形の鉢であるが、口縁端部を内面に突出させる。底部が多数出土しており(294～297)、断面から様々な成形法が観察可能である。297は底面に木葉痕がみられる。298の脚部は内面をケズリ調整する。

ＳＫ572(第39図299～第40図311)　広口壺頸部303には、指圧痕文突帯が貼り付けられる。広口短頸壺はゆるく立ち上がり、端部を上下に拡張している(299～301)。302の広口壺口縁は、内面に櫛描波状文を、口縁端面に凹線文をもつ。304の底部には、木葉痕が上げ底部に及ぶ。305の底面には穿孔がみられる。306の「く」字状口縁甕は、タタキの後にハケメ調整を施す。口縁端部には刻目をもつ。底部(308・310・311)はいずれも作りが薄く、底面にも調整を行っている。307の「く」字状口縁鉢は、口縁端部に7個一組の刻目を施す。体部は櫛描列点文で飾る。309の高杯は、体部中位で屈曲し立ち上がる形状である。屈曲部に1条の凹線文を施す。杯部外面はケズリ調整である。脚部は柱状のようで、絞り痕がみられるものの、器壁が薄い。

ＳＫ591(第40図312・313)　313は小型の広口短頸壺で、口縁部が強い屈曲をもって外方にのびる形状である。312は近江系の受口状口縁の甕で、明瞭な屈曲をもち、立ち上がる。口縁内面に櫛描列点文を施す。褐色胎土である。

ＳＫ569(第40図314・315)　甕はいずれも「く」字状口縁で、口縁端部に刻目をもつ。

ＳＫ563(第40図316)　大型甕の口縁部である。口縁部の裏側までタタキ目が及ぶ。

ＳＫ502(第40図317～323)　折り曲げ口縁の甕(318･321)と「く」字状口縁の甕(322)があるが、いずれも体部の張りが弱い。323は大型の直口壺である。口縁端面にヘラ描斜格子文が施される。底部は、円板充填で薄く作った319と厚底の320がある。320は底面に木葉痕がみられる。

ＳＫ584(第40図324)　薄い壺底部である。

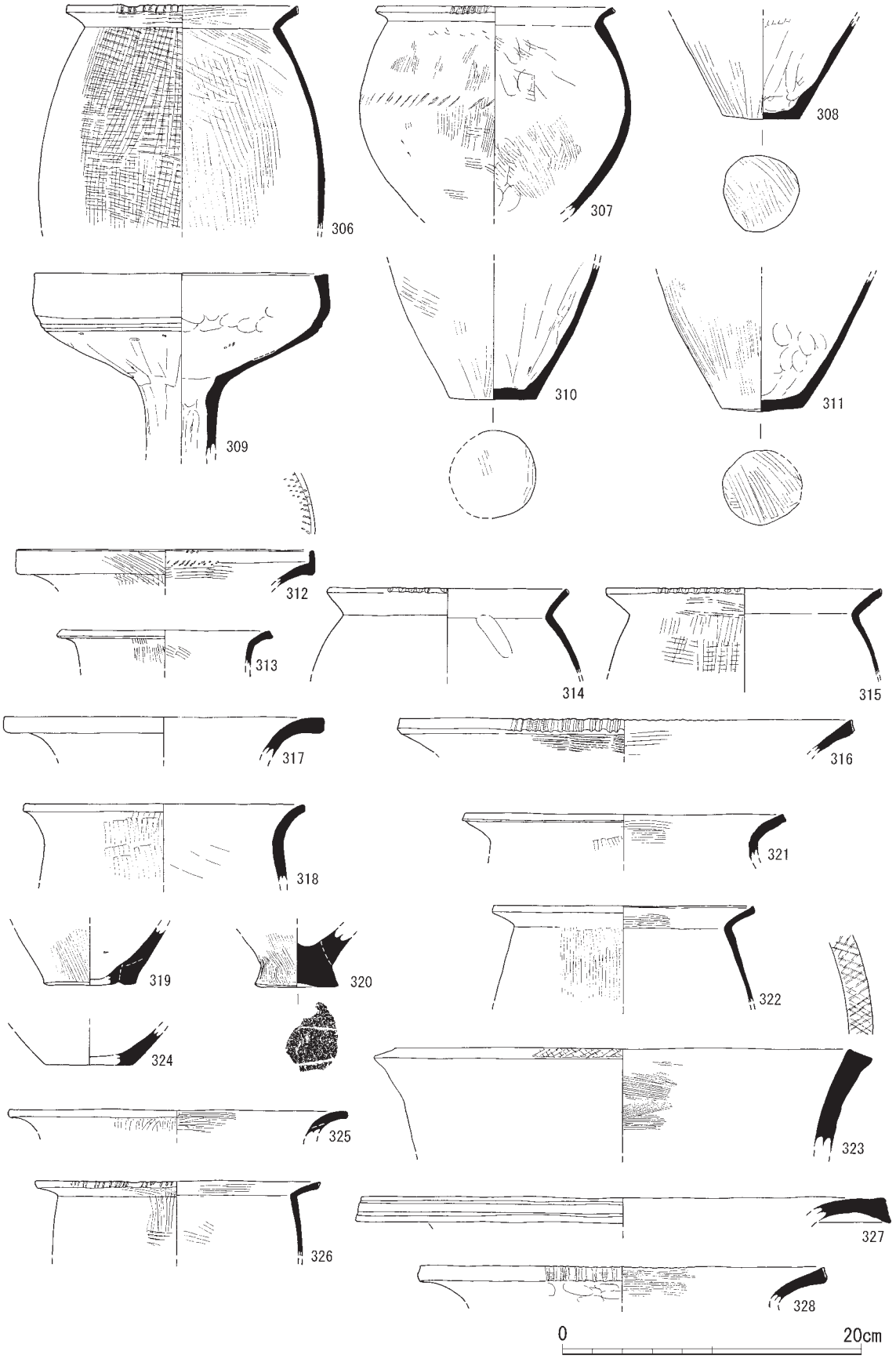
ＳＫ257(第41図329～332)　329の広口壺頸部は、櫛描直線文が数条にわたって施文される。330は甕底部である。厚めの上げ底で、木葉痕が顕著である。

ＳＫ620(第41図333)　厚い口縁端部をもつ広口壺である。

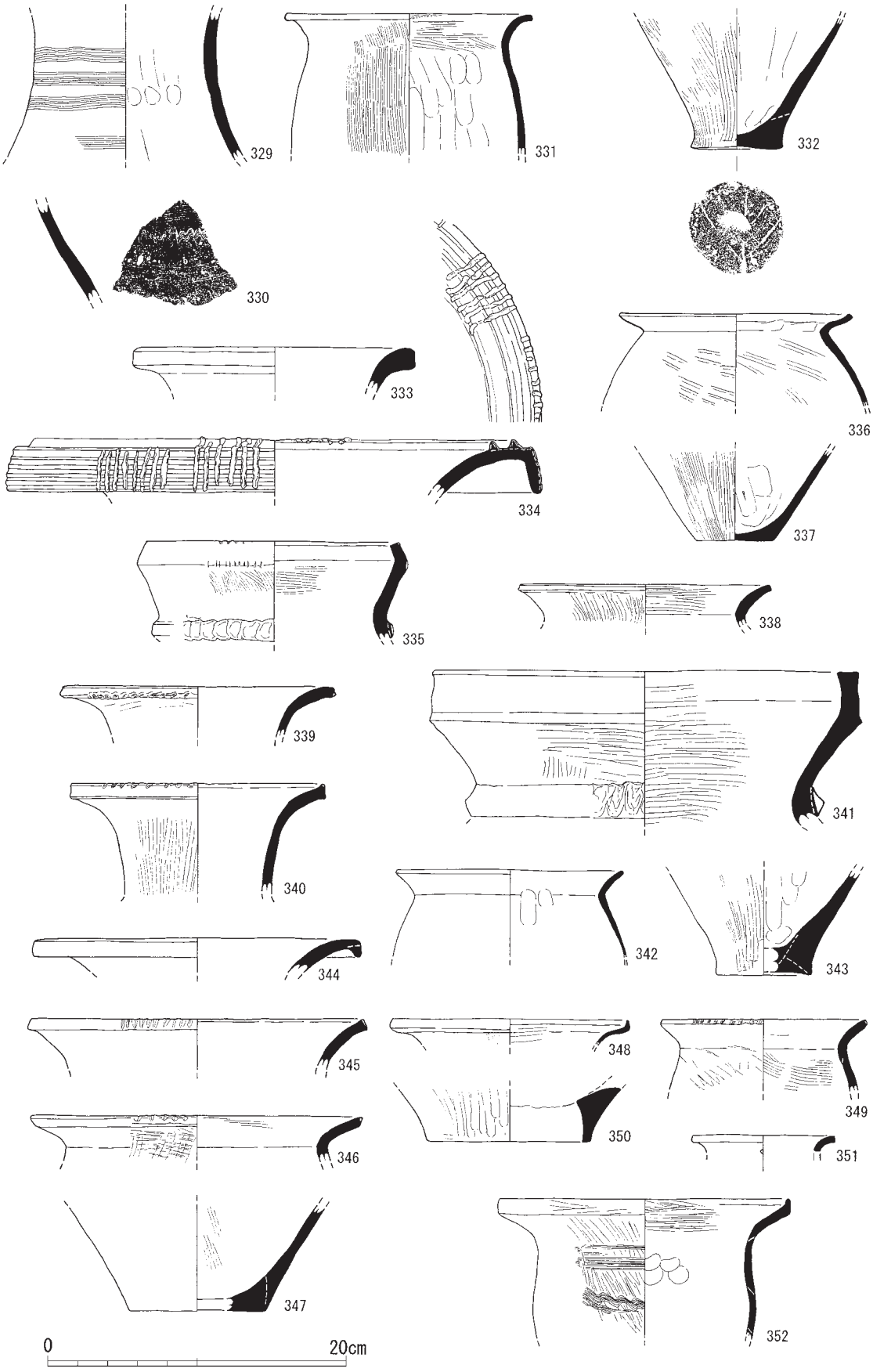
ＳＫ428(第41図334～337)　334は口縁内突帯をもつ垂下口縁の広口壺である。垂下部に凹線文と棒状浮文を施す。類似の個体がＳＤ549で出土している。335の受口状口縁壺は、口縁部が内傾気味に立ち上がる。頸部には立体的な指圧痕文突帯が貼付けられる。336の「く」字状口縁甕は、口縁部が外湾する。体部が半ばで張る形状であると考えられる。337の底部は内面ケズリ調整である。

ＳＫ419(第41図338)　ゆるい「く」字状口縁壺の口縁部である。内外共に強いハケメ調整を施す。

ＳＫ61(第41図339～343)　339・340の広口壺口縁は刻目をもつ。341の受口状口縁壺は、口縁部の立ち上がりが明瞭な個体である。頸部の指圧痕文突帯は強く貼り付けられるが、立体的である。342の「く」字状口縁甕は、口縁部が外反する形状である。343の底部は厚く、作りが複雑である。



第40図　1地区出土遺物実測図(25)



第41図　1 地区出土遺物実測図(26)

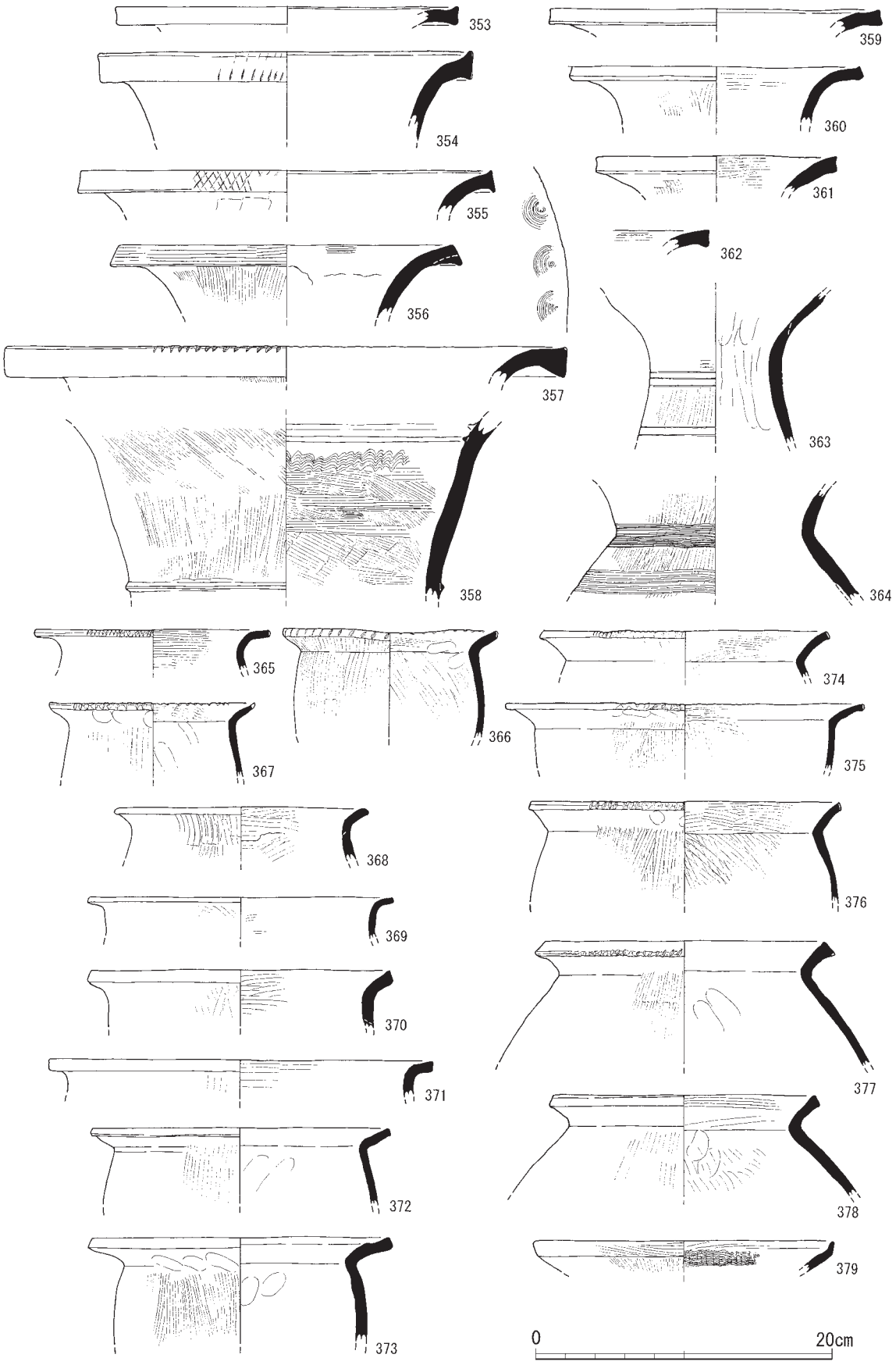
ＳＫ64（第41図344～348）　344は垂下口縁をもつ無文の広口壺である。345は刻目をもつ単純な形状の広口壺であると思われる。346は、口縁の折り曲げがややゆるい「く」字状口縁甕である。口縁外面に及ぶタタキ目がみられる。347は壺底部である。348は受口状口縁甕の口縁部であると考えられる。胎土は在地の胎土に近いものである。

ＳＫ69（第41図349）　349の折り曲げ口縁甕は、口縁端面に刻目を施す。体部は内外ともにハケメ調整である。

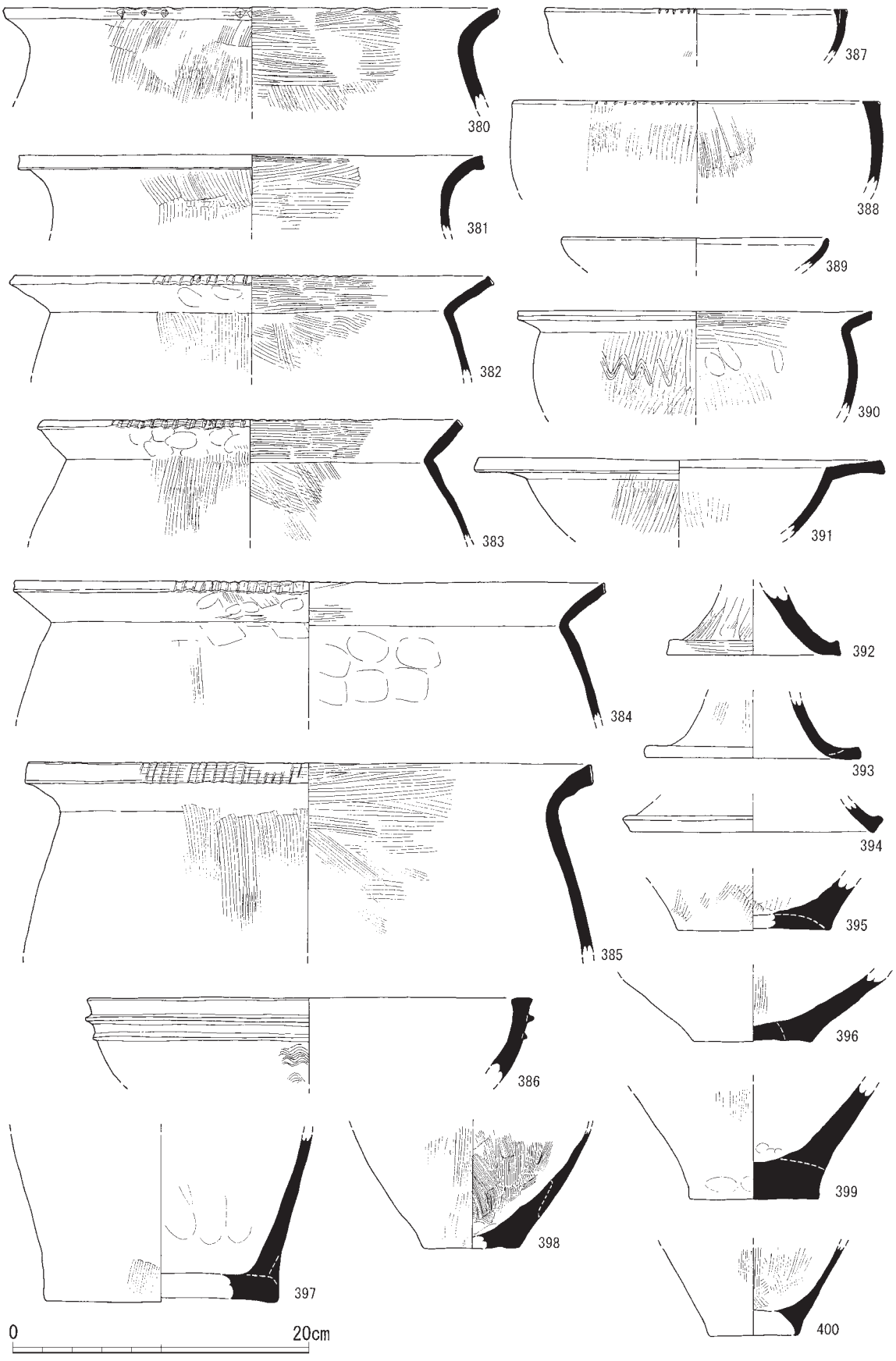
ＳＫ1080（第41図350･351）　大型壺底部が出土している（350）。外面はタテミガキ調整である。成形時の接合部で剥離している。351の小型の壺は、口縁直下に穿孔があり、２個一組の紐孔が穿たれていたものと思われる。

ＳＫ1147（第41図352）　近江系の受口状口縁甕である。ややゆるめに直立する口縁部をもつ。細かい櫛描直線文と波状文で飾る。褐色胎土で石英と長石を多く含む。

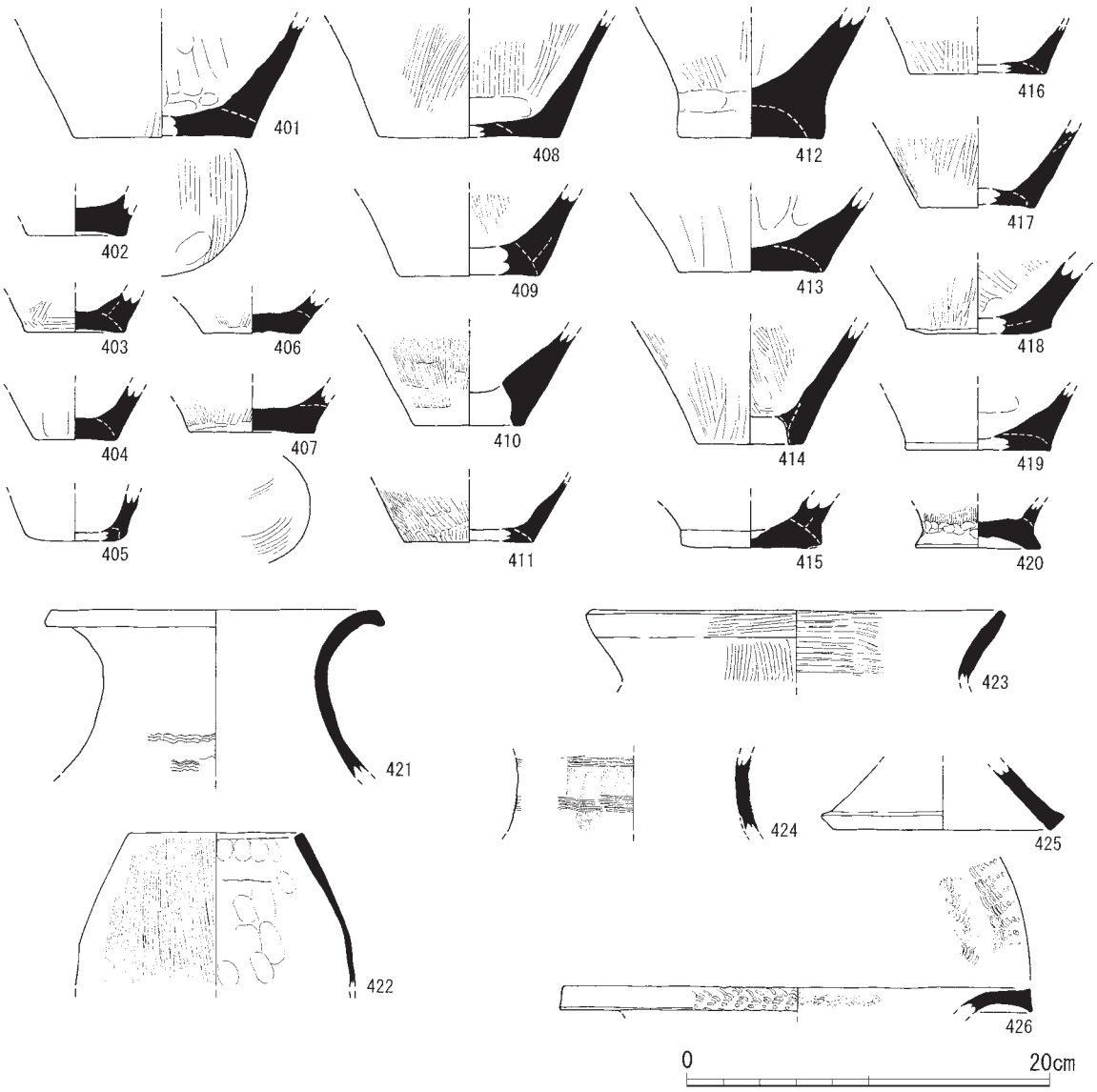
ＳＫ420（第42図353～第46図420）　破片を中心に土器が大量に出土した。この遺構に関しては、口縁と底部を全て図化し掲載した。装飾の比較的希薄な広口壺（353～356、359～361）と、装飾豊かな大型広口壺（357・358）がみられる。口縁端部の形態は、上方もしくは上下に拡張するものや広い面をもつものなど多様である。調整はハケメが主体である。353・354をはじめ、口縁端部に刻目をもつものがある。大型の357は口縁内に半円に近い櫛描扇形文が描き出される。358は粗い作りであるが、口縁内に櫛描波状文をもつなど装飾的である。363・364は広口壺頸部から体部にあたる。櫛描文は直線文のみがみられる。甕（365～385）は折り曲げ口縁のものと、張りのない「く」字状口縁のものが主体であるが、まれに張りの強い「く」字状口縁をもつものが存在する（377・378）。いずれの形態も内外をハケメおよびナデ調整をする。口縁端部に刻目をもつものともたないものがほぼ同数である。367はほかより深い刻目をもつ。385は櫛状工具を用いて刻目を施している。また、形状の特徴として、端部に面をもつ個体も多い。379は近江系の受口状口縁甕で、粗いハケメと口縁内面に細かい波状文をもつ。褐色の胎土である。鉢は、直口椀形のもの（386～388）と「く」字状口縁をもつもの（390）がある。前者は口縁端部をやや内外に拡張する。後者は面をもつ形状である。いずれも、内外共にハケメ調整を施すものが多い。386は２条の突帯をもつ。387・388は刻目をもつ。390は、体部最大径付近に暗文のような波状文が施される。391の水平口縁高杯は、口縁内に強い稜をもち、端部の垂下しない水平口縁がのびている。内外共にハケメ調整である。脚部は個体差が大きい。392は裾端部に大きな面をもち、そこにハケメ調整をする。形状や器壁の厚さから、円板充填法を用いない形状のものであると推測される。393は、裾端部がゆるく曲がって、広い面積が接地する形状である。394は、裾端面がやや上方に拡張を見せる。底部が多数出土している。成形法の分かるものが多くあり、いずれも底面となる粘土円板の周りに粘土紐を巻いて作るものであり、底部円板充填はみられない。400・410は、接合部で剥離している。396～399は、その形状から、確実に壺底部であるといえる。397は張りのない特異な形状を呈する。多くは平らな底面から斜め上方向に直線的に器壁がのびる形状である。420のみ明確な上げ底である。多くは甕底部であると考えられるが、いずれも同様のハケメ及びナデ調整であ



第42図　1地区出土遺物実測図(27)



第43図　1地区出土遺物実測図(28)



第44図　1地区出土遺物実測図(29)

るので、壺底部との区別がつきにくい。

ＳＫ166（第44図421・422）　広口壺口頸部と無頸壺を掲載した。421の広口壺は口縁端部がわずかに斜め下方にのびる。頸部には櫛描波状文が飾られる。422の無文の無頸壺は、外面ハケメ調整で内面はナデ調整である。接合痕が観察できるやや粗雑なものである。

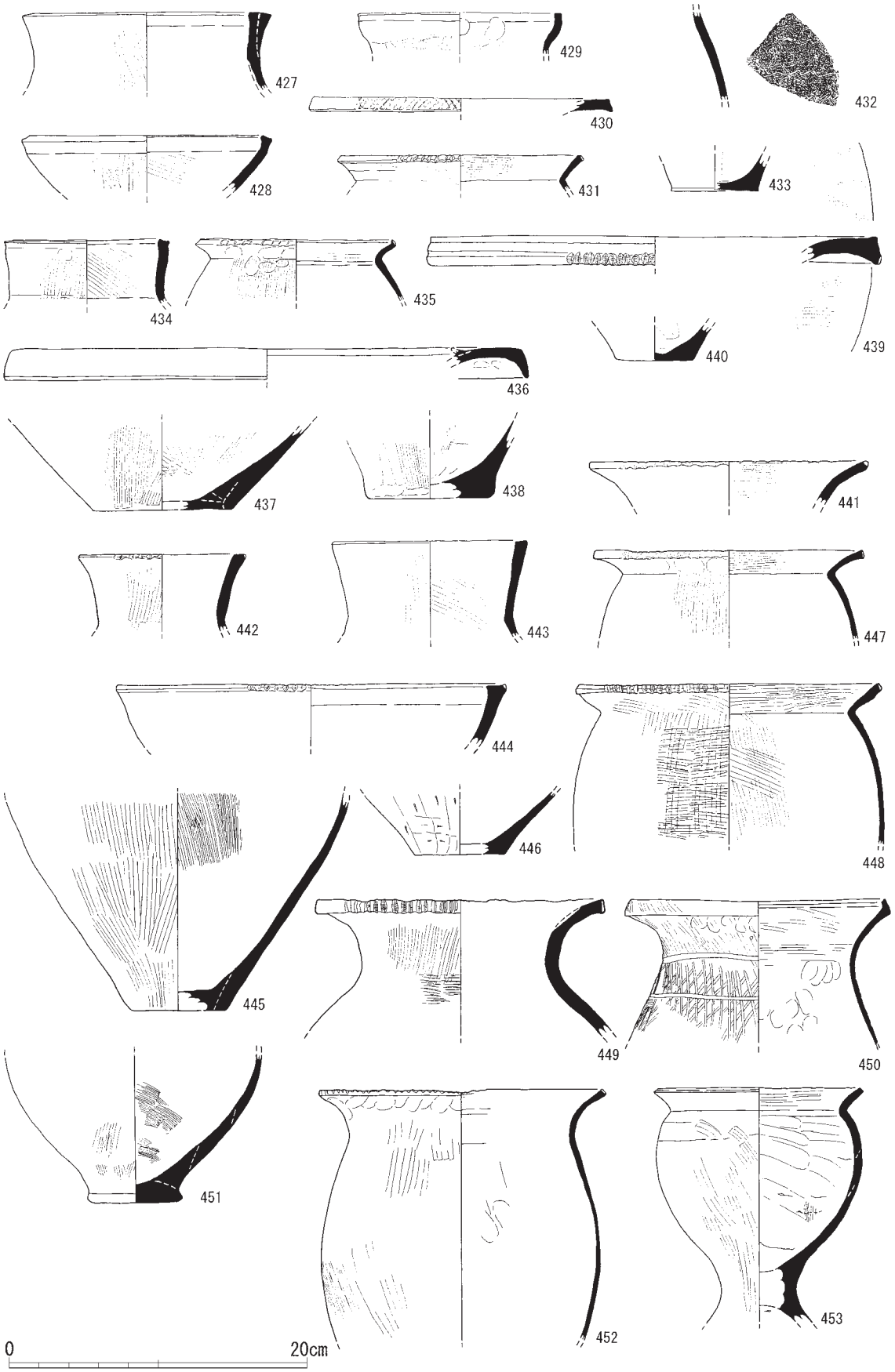
ＳＸ246（第44図423～425）　やや受口状の甕口縁と壺頸部、脚裾部を掲載した。423の甕は、粗いハケメをもち、近江系のものである。424の壺頸部は櫛描直線文で飾る。ハケメ調整である。425の脚裾部は、裾端部がやや上方に拡張する。

ＳＫ213（第44図426）　口縁端面と口縁内面を全て扇形文で飾った広口壺である。口縁端部がやや上下に拡張する形態である。

ＳＰ27（第45図427）　大型の直口壺口頸部である。器壁が厚い。

ＳＰ53（第45図428）　直口の鉢である。口縁端部が内外に広がる。

ＳＰ41（第45図429）　屈曲のゆるい受口状口縁壺の口縁部である。



第45図　1地区出土遺物実測図(30)

ＳＰ50（第45図430）　広口壺口縁部である。端面にヘラ描きの斜格子刻目が入る。

ＳＰ37（第45図431）「く」字状口縁の甕口縁で、丸みのある端面が刻目で飾られる。

ＳＰ120（第45図432）　壺体部片である。条数の少ない粗雑な波状文が施されている。

ＳＰ127（第45図433）　広めの底面をもつ甕底部である。

ＳＰ180（第45図434～438･440）　底部を中心に６点掲載した。434は、短頸壺の口頸部である。口縁端部が強いヨコナデによって、外方につまみ出される形状である。体部は欠損しているが、恐らくタタキ調整がなされているであろうことが想定される。435の甕は「く」字状口縁で、刻目をもつ口縁端部が上方に拡張している。436は水平口縁高杯である。水平部先端が垂下する。437・438はそのプロポーションから壺底部であると考えられる。いずれも内外ともにハケメ調整を施す。440の甕底部は内面にケズリ調整を施し、底面が薄く作られている。

ＳＰ104（第45図439）　大型の広口壺の口縁部である。口縁下端に深い刻目をもつ。また、断面の形状から、当遺跡内でも古相を示すものであると考えられる。

ＳＰ187（第45図441～448）　多数の弥生土器が出土している。441は全体が無文で口縁端部に刻目をもつ広口壺である。442・443は直口壺口頸部である。体部から外傾気味にのびる口頸部をもつ。442のみ口縁端部に刻目をもつ。甕は「く」字状口縁甕であり（447・448）、いずれも刻目をもつ。447は内湾気味にのびる口縁部をもち、448はまっすぐにのびる口縁部をもつ。443は刻目をもつ直口の鉢である。446は壺底部で、445は甕底部であると思われる。446は外面にケズリ調整を施す。

ＳＰ209（第45図451）　突出する底部をもつ壺下半部である。内外共にハケメ調整をするが、内面のハケメが非常に細かい。

ＳＰ202（第45図452）　ゆるく外反する口縁部をもつ甕である。

ＳＰ188（第45図449・450・453）　449の広口壺にはタタキ目がみられる。450は受口状口縁の甕である。外面ハケメ調整、内面にナデ調整を施す。文様は斜格子文と直線文を太めの工具で１本ずつ施したものである。調整・形態共に近江のものと共通するが、在地胎土である。453は台付甕である。寸詰まりの形状を呈す。

ＳＰ189（第46図454）　広口壺の口縁部である。口縁外面に波状文を施す。

ＳＰ329（第46図455）　丸みのある面をもつ甕口縁である。

ＳＰ234（第46図456）　外湾する口縁部をもつ受口状口縁壺である。ハケメ工具による刻目をもつ頸部突帯である。

ＳＰ330（第46図457～459）　457は、口縁部が強く折れ曲がる広口短頸壺である。459の受口状口縁壺は、直立する口縁をもつ。458は鉢体部かと思われる。

ＳＰ350（第46図460）　垂下する口縁をもつ広口壺口縁部である。

ＳＰ419（第46図461）　無文の広口壺口縁部である。

ＳＰ334（第46図462）　刻目をもつ「く」字状口縁甕である。

ＳＰ386（第46図463）　大型の折り曲げ口縁の甕である。



第46図　1地区出土遺物実測図(31)

ＳＰ442（第46図464）　甕底部である。内外に細かいハケメがみられる。

ＳＰ363（第46図465）　折り曲げ口縁の甕である。折り曲げがやや強い。

ＳＰ441（第46図466）　丸みのある口縁端部をもつ折り曲げ口縁の甕である。

ＳＰ449（第46図467）　ゆるく外湾する口縁部をもつ受口状口縁甕である。凹線文で飾られる。

ＳＰ448（第46図468～470）「く」字状口縁甕（468）と折り曲げ口縁の甕（469）がある。470は底面に木葉痕が残る。

ＳＰ468（第46図471）　内湾しながらのびる口縁をもつ「く」字状口縁甕である。

ＳＰ489（第46図473・478）　広口壺は、垂下口縁をもち、口縁内を２列の櫛描扇形文で、口縁端面を櫛描波状文で飾る（473）。「く」字状口縁甕は直線的で外傾する口縁部をもつ。

ＳＰ475（第46図472）　口縁端部に広い面をもつ、大型の「く」字状口縁甕口縁部である。

ＳＰ590（第46図474・475）　折り曲げ口縁の甕と底部である。

ＳＰ1015（第46図476）　外傾する口縁部をもつ、広口短頸壺である。

ＳＰ601（第46図477）　甕底部であると思われる。

ＳＰ1025（第46図479）　折り曲げ口縁の甕である。

ＳＰ1076（第46図480）　木葉痕を残す底部である。

ＳＰ1084（第46図481）　垂下口縁をもつ広口壺の破片である。櫛描扇形文を口縁端面と内面にもつ。口縁端面のものは、半円に近い形状である。

ＳＰ1098（第46図482）　ケズリ調整を施した台形土器である。15次調査では、多数の台形土器を確認しているが、形状も調整も個体差が激しい。

ＳＰ1092（第46図483）　壺体部片である。櫛描斜格子文と直線文で飾られている。

ＳＰ1136（第46図484）　折り曲げ口縁の甕である。外面のハケメが粗い。

ＳＰ1167（第46図485）　広口短頸壺の口縁であると考えられる。

ＳＰ1145（第46図486）「く」字状口縁甕である。内外共にハケメ調整で仕上げる。底部がすぼまる形状を呈す。顕著な接合痕が観察される。

ＳＰ1146（第46図487）　甕底部かと思われる。底面に丸みを帯び、中央がやや上げ底になっている。

（谷上真由美）

2）奈良・平安時代の遺構・遺物

A．検出遺構

1地区で検出した奈良・平安時代の遺構として掘立柱建物跡、柵、土坑などがある。遺構は1地区北半で分布密度が高く、南半では希薄である。また、掘立柱建物跡を構成しない柱穴、ピットなども多数検出された。以下、主要な遺構について概観する。

なお、掘立柱建物跡の復原については、現地調査段階で、一定程度の復原作業がなされている

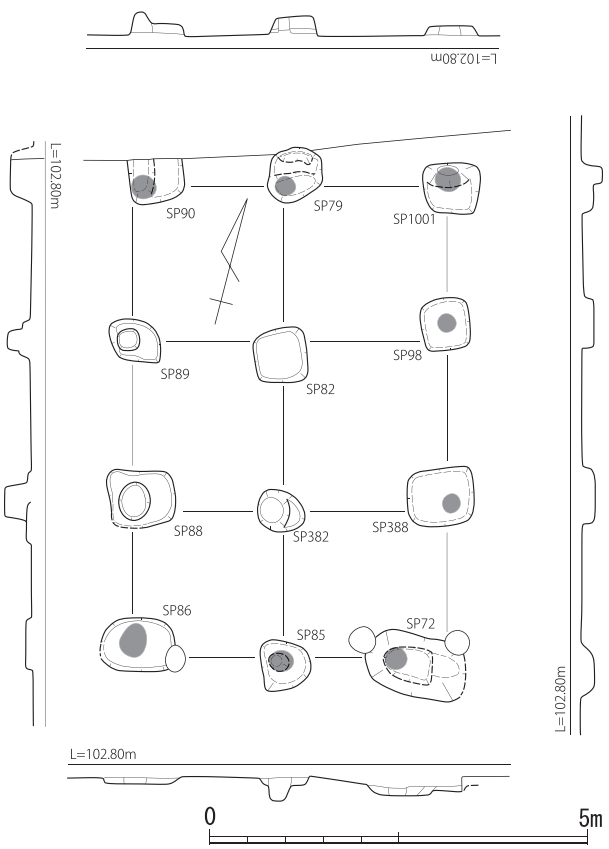


第47図　1地区検出遺構配置図（奈良・平安時代、1/400）

が、遺構密度が極めて高く、整理作業段階で改めて検討を行っているため、現地説明会段階や、『京都府埋蔵文化財情報』第103号執筆段階とは異なっている点をお断りしておく。

掘立柱建物跡ＳＢ１－01（第48図）　調査区北東部で検出された南北３間、東西２間の総柱掘立柱建物跡である。規模は芯々間で南北6.3m、東西4.1ｍを測る。主軸方位は座標北から西に振る。

柱穴は一辺0.6～１ｍの不整な方形を呈するものと不整な円形のものがみられる。断面形は、柱痕部分のみを一段掘り下げる形態のものと、素掘りのものが混在している。また、柱痕跡の確認できるものから、直径30cmの柱が使用されていたものと考えられる。



第48図　掘立柱建物跡SB１－01実測図(1/100)

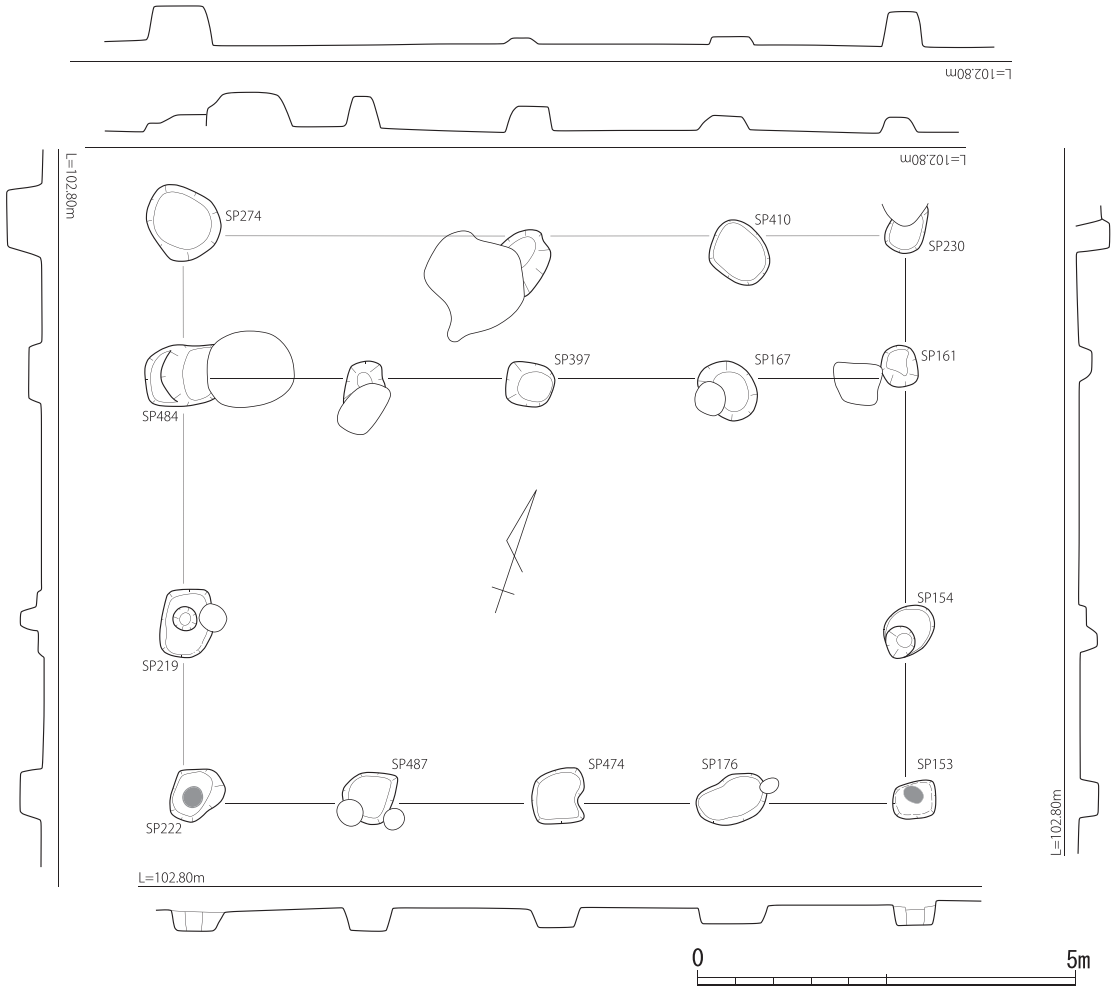
遺物はＳＰ90から製塩土器(205)、SP1001から須恵器杯身(136)、ＳＰ82から製塩土器(195)、ＳＰ98から製塩土器(207)、ＳＰ88から須恵器椀(200)と製塩土器(201)、ＳＰ85から須恵器杯(193)と製塩土器(194)、ＳＰ72から須恵器杯身(140)がそれぞれ出土している。

掘立柱建物跡ＳＢ１－02（第49図）　調査区中央北部で検出された北側に庇をもつ東西軸の掘立柱建物跡である。主軸は座標北から西に振っている。

南北２間、東西４間の身舎に一間分の庇が北側にとりつく。身舎の規模は芯々間で東西9.6m、南北5.6ｍを測り、庇との間は1.9ｍを測る。また、身舎の梁行き側の柱間は、北側が１間3.2ｍを測るのに対し、南側の柱間は１間2.4ｍと短いのが特徴的である。

柱穴は一辺0.7～１ｍの不整な方形を呈するものと、径0.4～0.7ｍの不整な円形を呈するものが認められる。また、柱穴の断面形では、梁行きの中心柱が柱を据え付けるため、一段深く掘り込まれているのに対し、他の柱穴は素掘りの断面形を示している。また、庇の北東および北西の柱穴は構造上の必要性からか、他の柱穴よりも深く掘られている点が特徴的である。庇を構成する他の柱穴は比較的浅く、そのためか、北西から１間西側の柱穴については検出することができなかった。遺物はＳＰ397から須恵器杯蓋(150)と製塩土器(151)、ＳＰ167から土師器鍋(210)と須恵器椀(212)、ＳＰ219から須恵器杯身(179)と製塩土器(180)、ＳＰ154から製塩土器(202)、ＳＰ474から須恵器蓋杯(111～114)がそれぞれ出土している。

掘立柱建物跡SB１－03（第50図）　調査地西北部で検出された南北３間、東西２間の掘立柱建



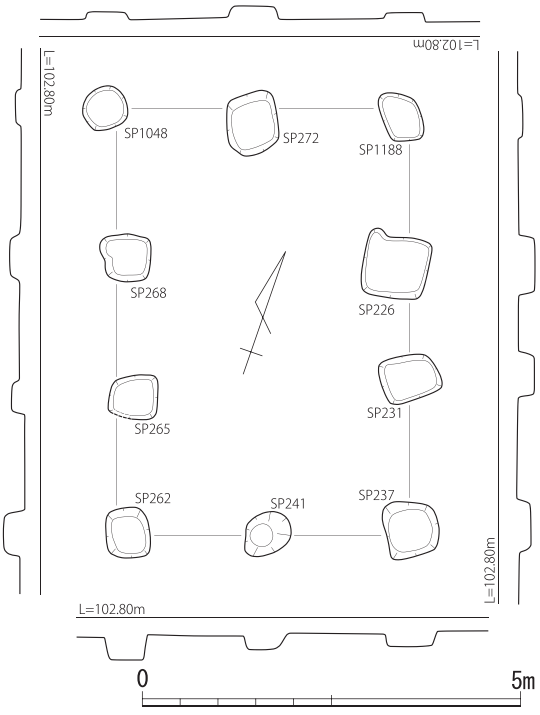
第49図　掘立柱建物跡SB１－02実測図(1/100)

物跡である。規模は芯々間で南北6.8m、東西3.9mを測る。主軸は座標北から西に振っている。

柱穴は一辺0.6～0.8mの不整な方形を呈するものと、径0.6～0.7mの不整な円形を呈するものが認められる。

出土遺物はＳＰ231から土師器杯(165)と製塩土器(166)、ＳＰ237から須恵器(156～159)、製塩土器(155)、ＳＰ241から土師器椀(209)がそれぞれ出土した。

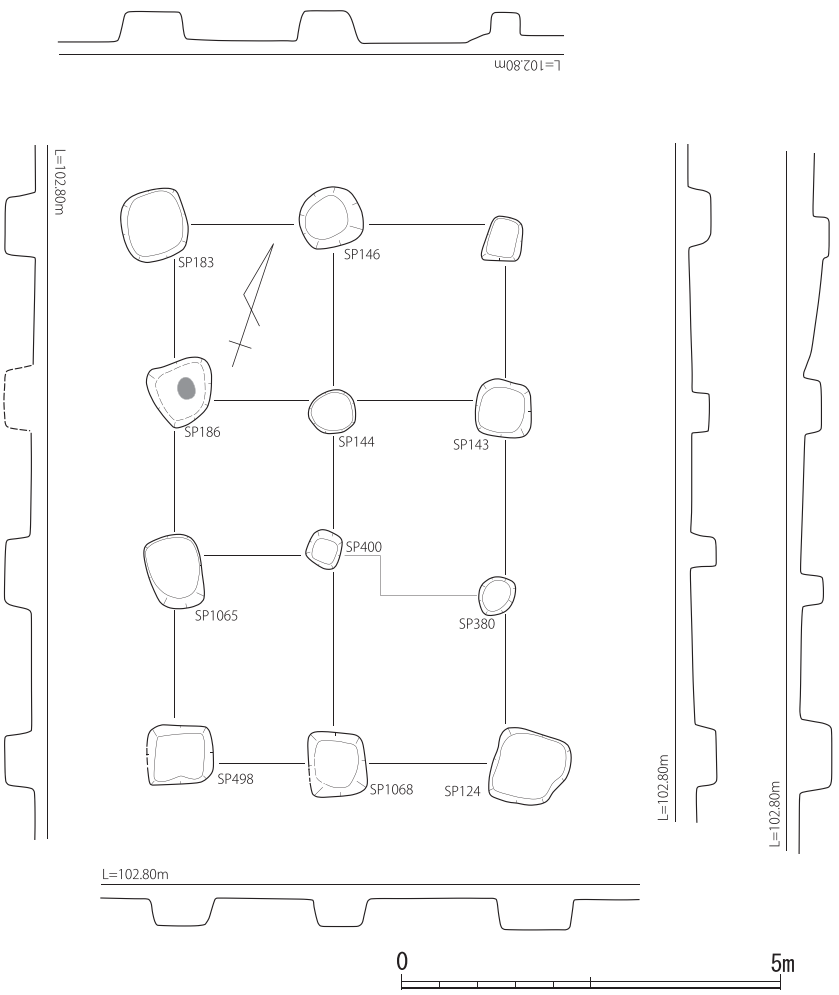
掘立柱建物跡ＳＢ１－04(第51図)　調査地中央部で検出された南北３間、東西２間の掘立柱建物跡である。規模は芯々間で南北7.1m、東西4.4mを測る。主軸は座標北から西に振っ



第50図　掘立柱建物跡SB１－03実測図(1/100)

ている。後述する掘立柱建物跡ＳＢ06とは、ほぼ南北の軸を揃えて建てられている。

柱穴は一辺0.5～１ｍの不整な方形を呈するものと、径0.4～0.5ｍの不整な円形を呈するものが認められる。なお、南から２列目の柱は筋が完全には通っていない。遺物はＳＰ146から須恵器杯と土師器甕(168～170)、ＳＰ186から須恵器杯(85)、ＳＰ1065から須恵器杯(163)、製塩土器(164)、ＳＰ400から製塩土器(187・188)、ＳＰ1068から土師器杯(84)、ＳＰ143から須恵器蓋(100)、ＳＰ380から須恵器蓋杯類(173～176)、ＳＰ124から須恵器杯(196・197)がそれぞれ出土した。



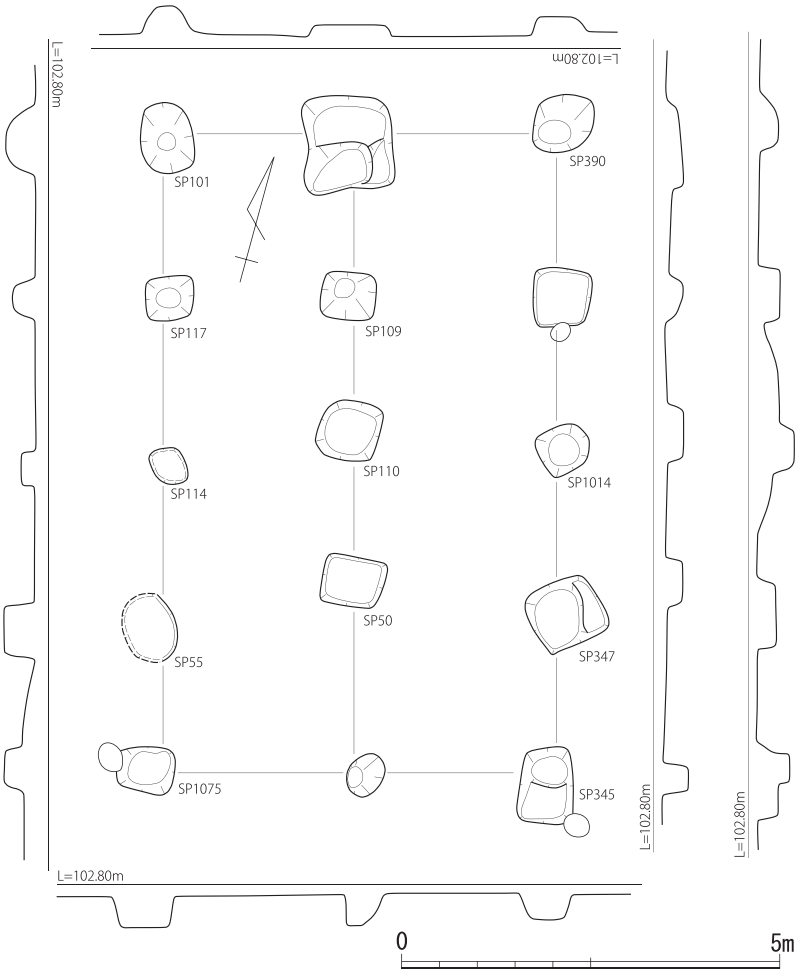
第51図　掘立柱建物跡ＳＢ１－04実測図(1/100)

掘立柱建物跡ＳＢ１－05(第52図)　調査地東北部で検出された南北４間、東西２間の総柱の掘立柱建物跡である。規模は芯々間で南北8.4ｍ、東西5.2ｍを測る。主軸は座標北から西に振っている。東西の柱間は西側が2.4ｍ、東側が2.7ｍである。

柱穴は一辺0.5～１ｍの不整な方形を呈するものと、径0.4～0.5ｍの不整な円形を呈するものが認められる。遺物はＳＰ101から製塩土器(185･186)、ＳＰ110から須恵器杯(85)、土師器杯(86)、ＳＰ390から須恵器杯(152・153)、ＳＰ345から須恵器杯(191・192)が出土した。

掘立柱建物跡ＳＢ１－06(第53図)　調査地の中央部で検出された南北３間、東西２間の掘立柱建物跡である。規模は芯々間で南北６ｍ､東西3.9ｍを測る。主軸は座標北から西に振っている。柱穴は一辺0.7～0.8ｍの不整な方形を呈するものと、径0.5～0.6ｍの不整な円形を呈するものが認められる。遺物はＳＰ479から須恵器杯蓋(97)、ＳＰ614から製塩土器(181)が出土した。

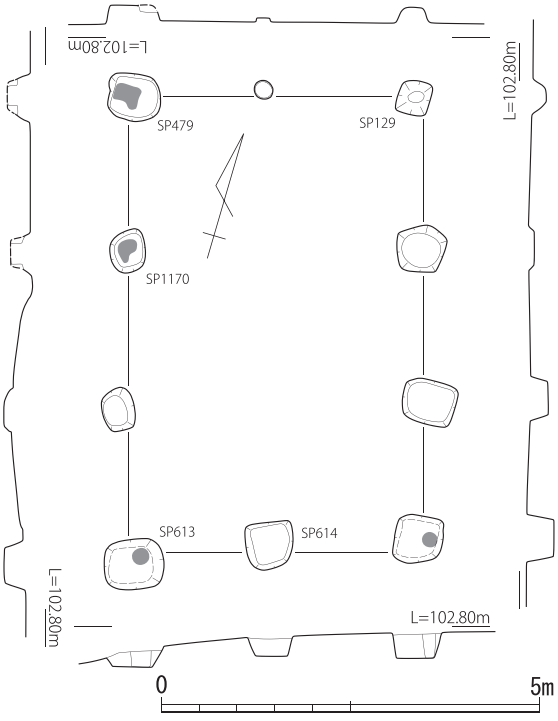
掘立柱建物跡ＳＢ１－07(第54図)　調査地の中央部東寄りで検出された南北２間、東西２間の総柱の掘立柱建物跡である。規模は芯々間で南北3.4ｍ、東西3.4ｍを測る。主軸は座標北から西に振っている。東西の柱間は西側が1.7ｍ、東側が1.7ｍである。柱穴は一辺0.5～0.7ｍの不整な



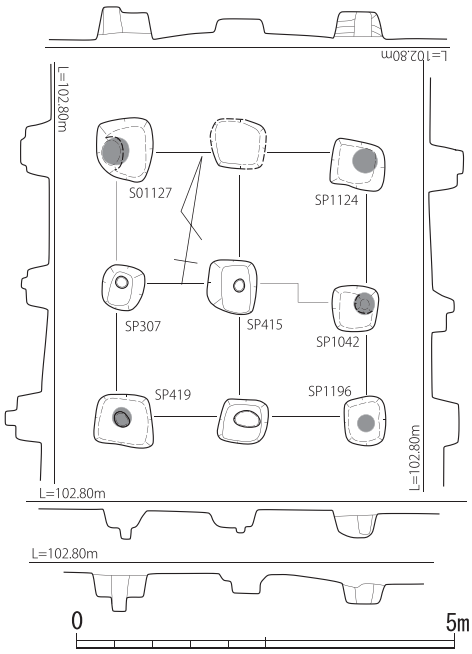
第52図　掘立柱建物跡ＳＢ１－05実測図(1/100)

方形を呈するものが認められる。建物構造から倉としての機能が考えられる。遺物はＳＰ1127より製塩土器(160・161)、ＳＰ419から須恵器杯(148)、製塩土器(149)が出土している。

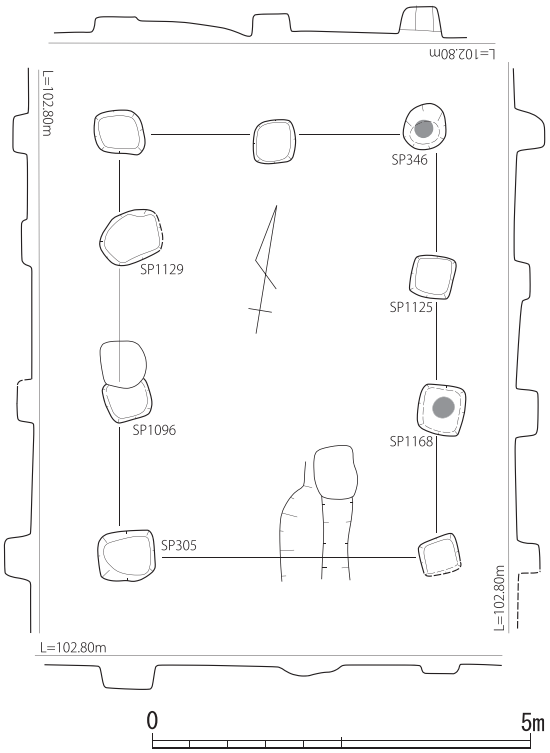
掘立柱建物跡ＳＢ１－08(第55図)　調査地の中央部東寄りで検出された南北３間、東西２間の掘立柱建物跡である。規模は芯々間で南北5.6m、東西4.2mを測る。掘立柱建物跡ＳＢ１－07と重複して建てられている。前後関係は不明である。掘立柱建物跡ＳＢ１－05とは南北に連なっており、一連の施設であったことを示している。主軸は座



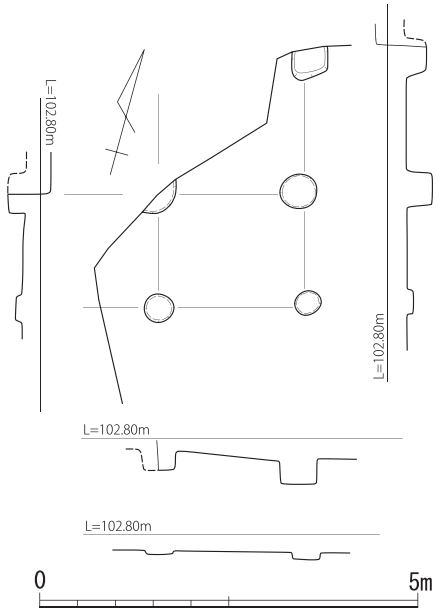
第53図　掘立柱建物跡ＳＢ１－06実測図(1/100)



第54図　掘立柱建物跡ＳＢ１－07実測図(1/100)



第55図　掘立柱建物跡ＳＢ１－08実測図(1/100)



第56図　掘立柱建物跡ＳＢ１－09実測図(1/100)

標北から西に振っている。東西の柱間は西側が2.1m、東側が2.1mである。南北の柱間は北から1.3・1.9・2.4mと不揃いである。柱穴は一辺0.5～0.8mの不整な方形を呈するものが認められる。遺物はＳＰ346から須恵器杯(88)が出土した。

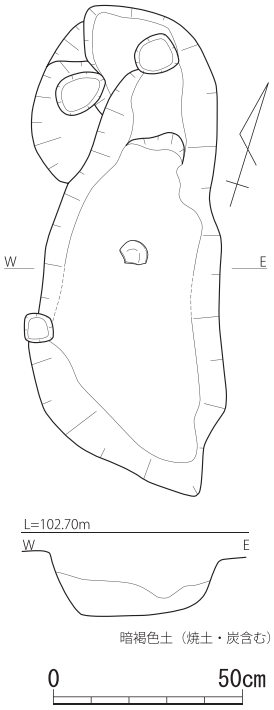
掘立柱建物跡ＳＢ１－09(第56図)　調査地西北部で検出された南北２間以上、東西１間以上の掘立柱建物跡である。規模は芯々間で南北3.2m以上、東西1.9mを測る。主軸は座標北から西に振っている。柱穴は一辺0.4～0.5mの不整な方形を呈するものと、径0.3～0.4mの不整な円形を呈するものが認められる。総柱建物の可能性がある。図示しうる遺物はない。

ＳＫ220(第57図)　調査地西北部で検出された南北1.2m、東西0.46mの不定形な土坑である。埋め土には大量の遺物があった。奈良時代の製塩土器や須恵器杯などが出土した。

２)出土遺物(第58～62図)

１地区では、土坑・溝・柱穴などから多量の土器が出土した。

１～40はＳＫ220から出土した。この土坑からは多量の製塩土器が出土している点が注目される。１～７は須恵器蓋である。１の天井部には「神」の墨書が描かれている。天井が低く、口縁はやや面をもったのち、端部を下方へ折り曲げている。８～12は須恵器杯Ａ(注1)である。８の底部には杯蓋１と同様、「神」の墨書が記されている。体部外側面はやや直線気味に立ち上がる個体が多い。13・14は須恵器杯Ｂである。13は口径が小さく器高が高い。15は須恵器椀である。丸みを帯びる体部から外反する口縁をもつ。16は須恵器壷の口縁である。外反気味に広がる頸部をもち、口縁は上方に拡張する。17は須恵器壷体部である。体部は丸みを帯びた肩をもち、平坦な底部外縁に高台を付す。16と17は同一個体の可能性がある。18は土師器大型鍋である。正確な口径を出



第57図　ＳＫ220実測図（1/20）

すことは困難であるが、口径40cm前後に復原される。体部外面に煤が付着しており、煮沸具として使用されたとみられる。19～21は土師器甕である。21は口縁端部を上方につまみ上げる。22は把手の破片である。23は土師器杯である。浅い椀状を呈する。24は土錘である。25～40は製塩土器である。砲弾型になると思われるものと、椀状のものの２者に大別される。これらの遺物は一括性が高く、また、墨書土器や製塩土器の存在から祭祀に関連する遺構･遺物であると考えられる。

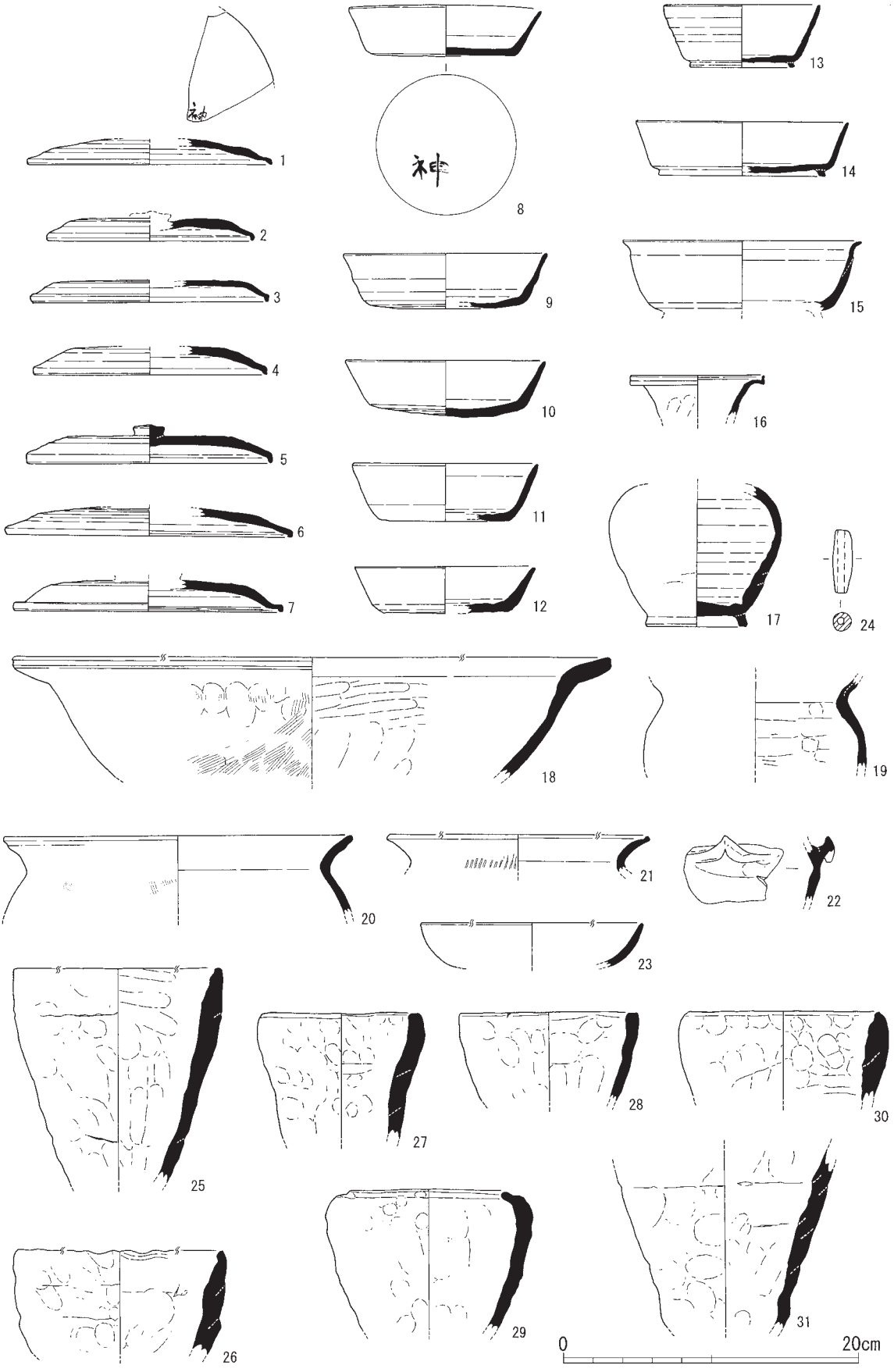
41～52はＳＫ221から出土した。須恵器杯蓋・壺蓋のほか、ＳＫ220同様、製塩土器が多く含まれる。

53～57はＳＫ274出土の須恵器杯と製塩土器である。58・59はＳＫ107出土の須恵器杯Ｇ蓋と杯身の破片である。58は混入の可能性がある。60はＳＫ563出土の須恵器杯Ｂである。61はＳＫ429出土の内面にミガキを施す土師器椀である。62はＳＫ537出土の須恵器杯である。63はＳＫ419出土の須恵器杯片である。64はＳＫ303出土の須恵器杯Ａである。65・66はＳＫ107出土の製塩土器である。67はＳＫ566出土の土師器杯であり、内面に暗文がみられる。68・69はＳＤ503出土の須恵器蓋と壺と思われる個体である。70はＳＤ542出土の糸切り底をもつ須恵器椀の底部である。71はＳＤ63出土の須恵器杯Ｇ蓋である。72はＳＤ１出土の須恵器杯Ａである。73はＳＤ133出土の平底の須恵器壷と思われる個体である。74はやや口径の大きいかえりをもつ須恵器杯蓋である。75・76はＳＤ515出土遺物である。75は須恵器の椀、76は緑釉陶器の椀である。

77～212は各柱穴から出土した。なお、遺物の出土遺構名と器種については対照表を付した。77～91はおおむね飛鳥時代中葉から奈良時代初頭の土器である。92～212は奈良時代後半から平安時代初頭を中心とする時期の遺物である。多くの柱穴出土遺物に製塩土器がみられる点が注目される。

ＳＢ１－01には、140・193～195・200・201・205・207が、ＳＢ１－02には111～114・150・151・179・180・202・210・211が、ＳＢ１－03には155～159・165・166・209が、ＳＢ１－04には84・85・100・163・164・168～170・173～176・187・188・196・197が、ＳＢ１－05には86・87・152・153・185・186・191・192が、ＳＢ１－06には97・181が、ＳＢ１－07には148・149・160・161が、ＳＢ１－08には88がそれぞれ伴う。大部分の建物から製塩土器が出土している。ＳＢ01－08出土の杯は混入品の可能性がある。

（石崎善久）



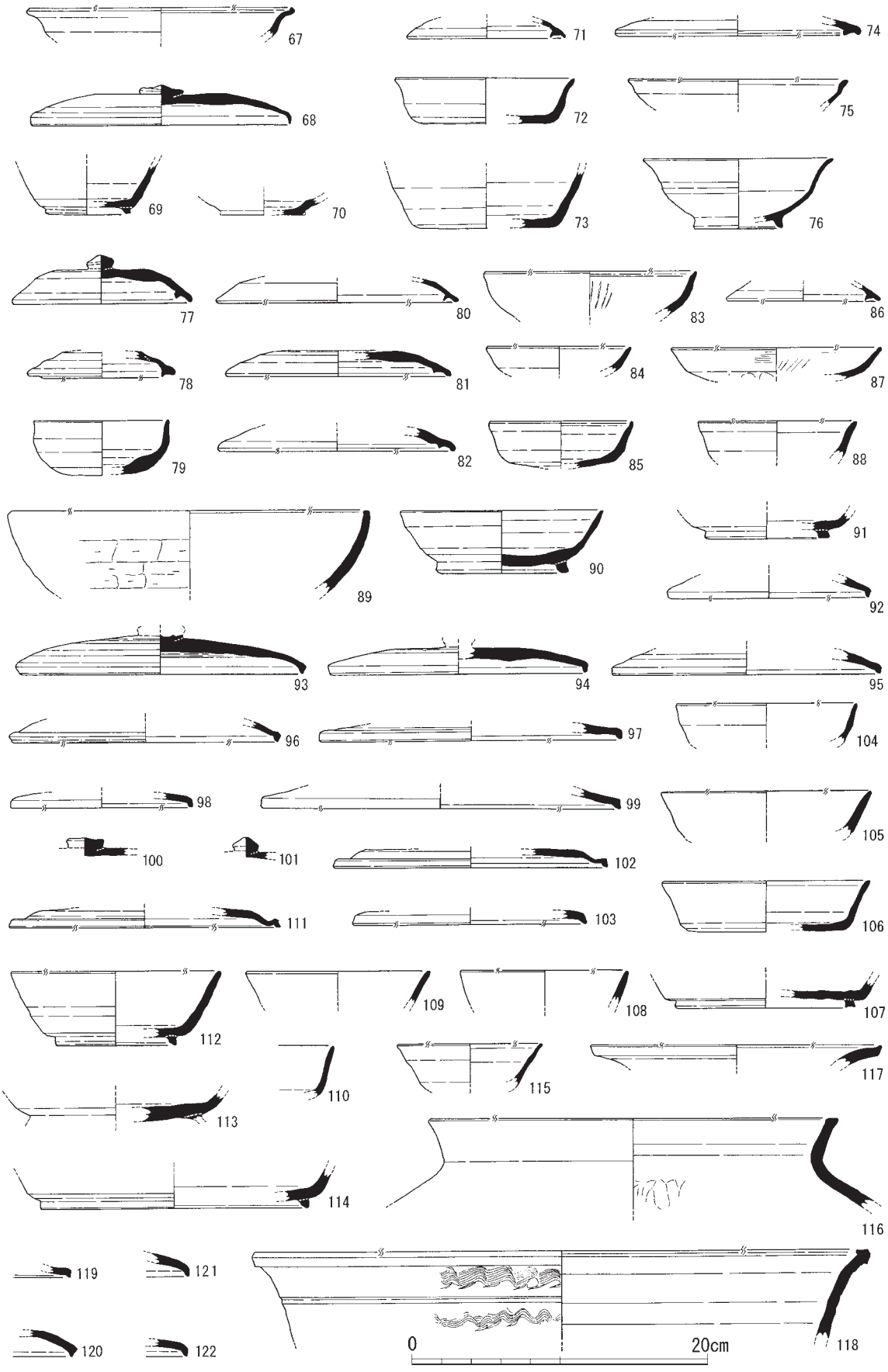
第58図　1 地区出土遺物実測図(32)



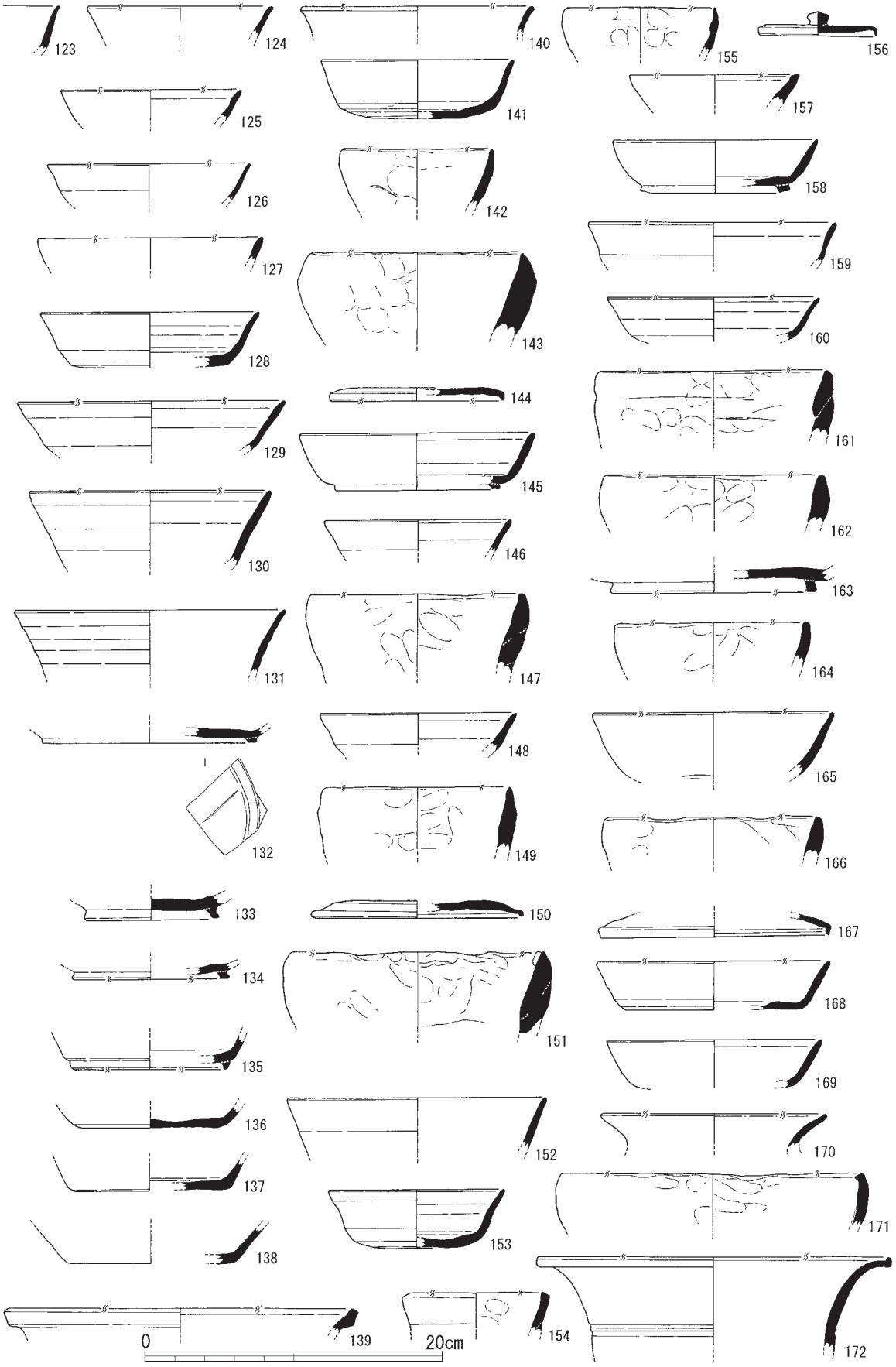
第59図　15－1地区出土遺物実測図(33)

付表1　15－1地区出土遺物対照表

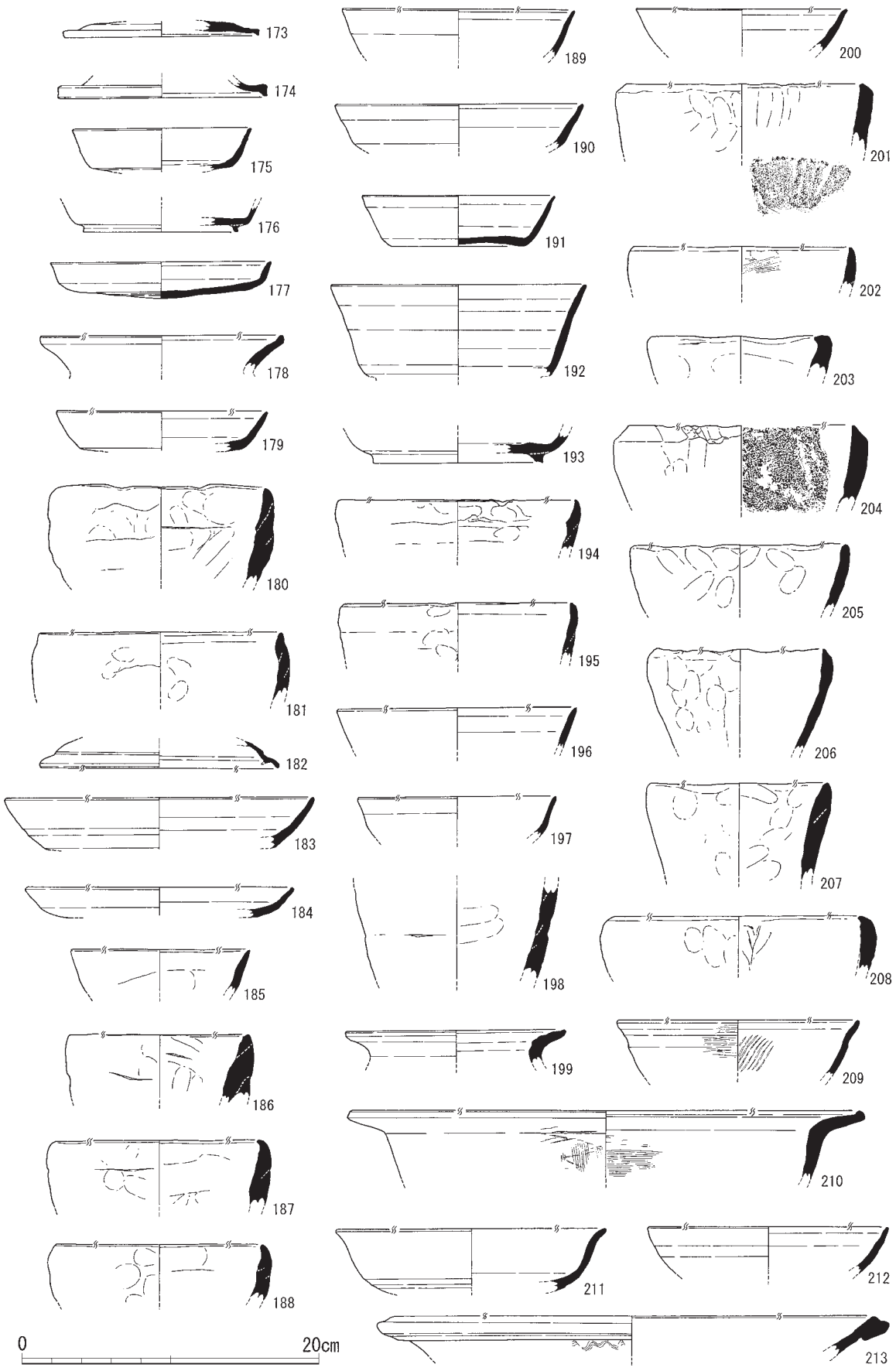
図番号	出土遺構	器種
77	SP318	須恵器杯G蓋
78	SP443	須恵器杯G蓋
79	SP317	須恵器杯G身
80	SP60	須恵器杯G蓋
81	SP1142	須恵器杯G蓋
82	SP383	須恵器杯G蓋
83	SP188	土師器杯
84	SP1068	土師器杯
85	SP186	須恵器杯G身
86	SP110	須恵器杯G蓋
87	SP110	土師器杯
88	SP346	須恵器杯G身
89	SP191	土師器椀
90	SP191	須恵器杯B身
91	SP416	須恵器杯B身
92	SP431	須恵器杯蓋
93	SP202	須恵器杯蓋
94	SP1143	須恵器杯蓋
95	SP1173	須恵器杯蓋
96	SP360	須恵器杯蓋
97	SP479	須恵器杯蓋
98	SP1174	須恵器杯蓋
99	SP74	須恵器杯蓋
100	SP143	須恵器蓋つまみ
101	SP101	須恵器蓋つまみ
102	SP470	須恵器杯蓋
103	SP587	須恵器杯蓋
104	SP1094	須恵器杯身
105	SP1053	須恵器杯身
106	SP424	須恵器杯A身
107	SP208	須恵器杯B身
108	SP266	須恵器杯身
109	SP417	須恵器杯身
110	SP372	須恵器杯身
111	SP474	須恵器杯蓋
112	SP474	須恵器杯B身
113	SP474	須恵器杯B身
114	SP474	須恵器杯B身
115	SP603	須恵器杯身
116	SP603	須恵器甕
117	SP478	須恵器甕
118	SP288	須恵器甕
119	SP225	須恵器杯蓋
120	SP225	須恵器杯蓋
121	SP182	須恵器杯蓋
122	SP139	須恵器杯蓋
123	SP1029	須恵器杯身
124	SP304	須恵器杯身
125	SP1045	須恵器杯身
126	SP503	須恵器杯身
127	SP567	須恵器杯身
128	SP580	須恵器杯A身
129	SP1156	須恵器杯身
130	SP249	須恵器杯身
131	SP244	須恵器杯身
132	SP1026	須恵器杯B身
133	SP133	須恵器杯B身
134	SP134	須恵器杯B身
135	SP205	須恵器杯B身
136	SP1001	須恵器杯A身
137	SP255	須恵器杯A身
138	SP373	須恵器杯A身
139	SP276	須恵器甕
140	SP72	須恵器杯身
141	SP436	須恵器杯A身
142	SP436	製塩土器
143	SP436	製塩土器
144	SP477	須恵器杯蓋
145	SP477	須恵器杯B身
146	SP477	須恵器杯身
147	SP477	製塩土器
148	SP419	須恵器杯身
149	SP419	製塩土器
150	SP397	須恵器杯蓋
151	SP397	製塩土器
152	SP390	須恵器杯身
153	SP390	須恵器杯B身
154	SP471	製塩土器
155	SP237	製塩土器
156	SP237	須恵器壷蓋
157	SP237	須恵器杯身
158	SP237	須恵器杯B身
159	SP237	須恵器杯身
160	SP1127	須恵器杯身
161	SP1127	製塩土器
162	SP595	製塩土器
163	SP1065	須恵器杯B身
164	SP1065	製塩土器
165	SP231	土師器杯
166	SP231	製塩土器
167	SP1180	須恵器杯蓋
168	SP146	須恵器杯A身
169	SP146	須恵器杯身
170	SP146	土師器甕
171	SP1180	製塩土器
172	SP1180	須恵器甕
173	SP380	須恵器杯蓋
174	SP380	須恵器杯蓋
175	SP380	須恵器杯A身
176	SP380	須恵器杯B身
177	SP483	須恵器皿
178	SP483	土師器甕
179	SP219	須恵器杯身
180	SP219	製塩土器
181	SP614	製塩土器
182	SP193	須恵器杯G蓋
183	SP193	須恵器杯身
184	SP193	土師器皿
185	SP101	製塩土器
186	SP101	製塩土器
187	SP400	製塩土器
188	SP400	製塩土器
189	SK221	須恵器杯身
190	SP221	須恵器杯身
191	SP345	須恵器杯A身
192	SP345	須恵器杯身
193	SP85	須恵器杯B身
194	SP85	製塩土器
195	SP82	製塩土器
196	SP124	須恵器杯身
197	SP124	須恵器杯身
198	SP427	製塩土器
199	SP266	土師器甕
200	SP88	須恵器椀
201	SP88	製塩土器
202	SP154	製塩土器
203	SP217	製塩土器
204	SP68	製塩土器
205	SP90	製塩土器
206	SP97	製塩土器
207	SP98	製塩土器
208	SP168	製塩土器
209	SP241	土師器椀
210	SP167	土師器鍋
211	SP167	須恵器椀
212	SP121	須恵器椀
213	SP121	須恵器甕



第60図　1地区出土遺物実測図(34)



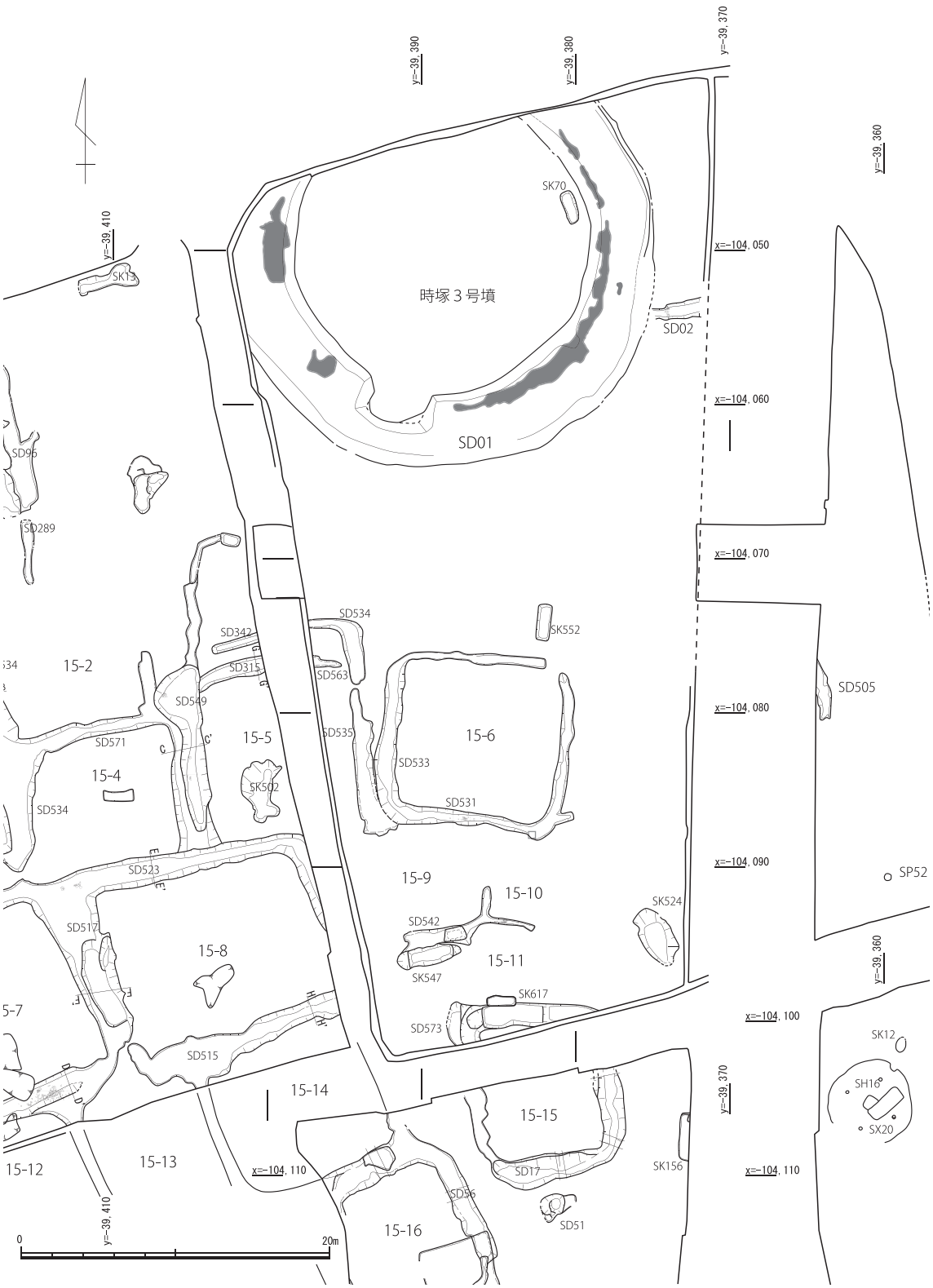
第61図　1地区出土遺物実測図(35)



第62図　1地区出土遺物実測図(36)

2．15－2地区

15－2地区は今回の調査対象地の中でも北西に設定した調査区である15－1地区の東に設定し



第63図　2地区検出遺構配置図(弥生・古墳時代、1/400)

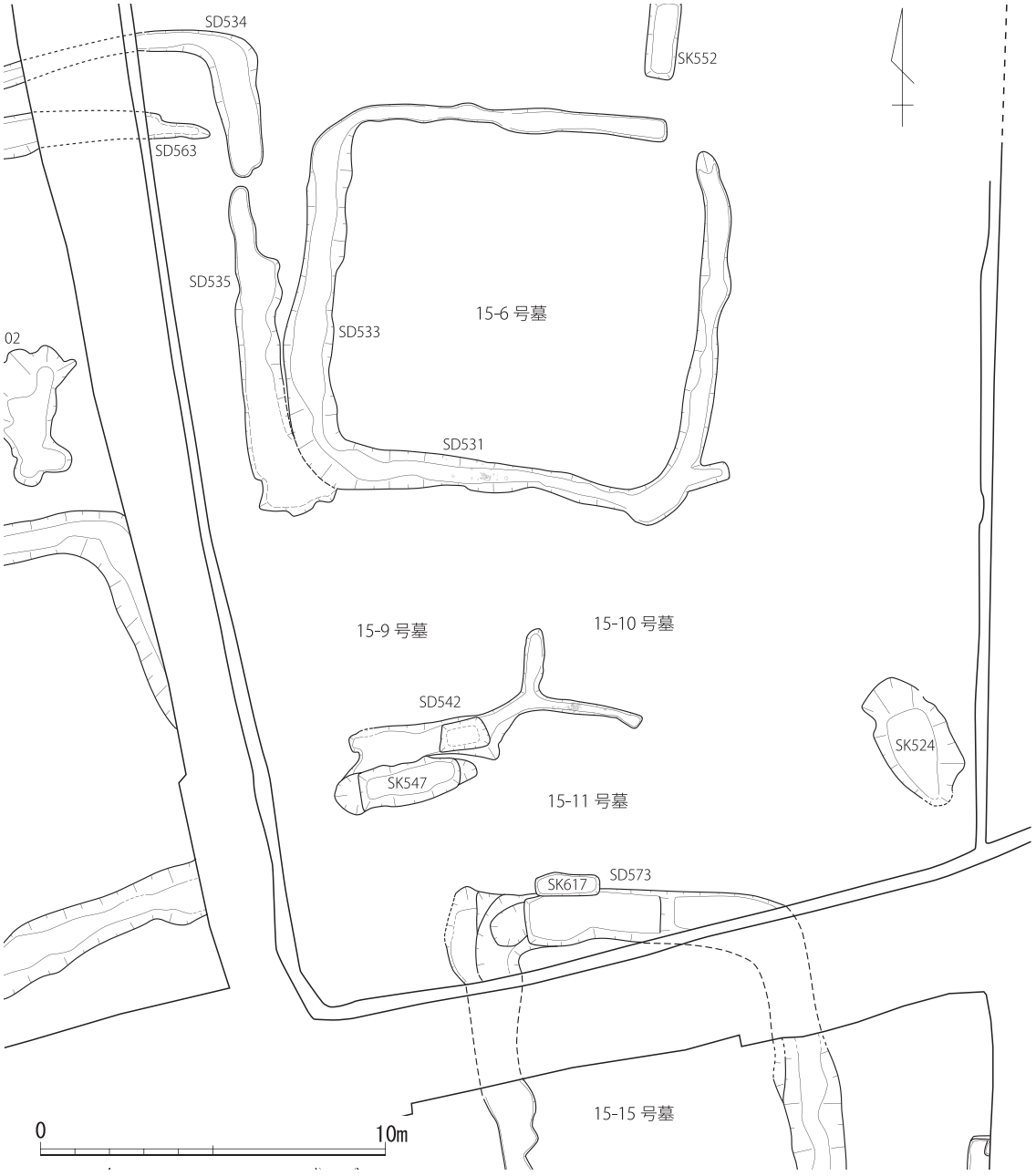
た調査区である。調査区では上層遺構として掘立柱建物跡群や土坑、性格不明のピット、溝を、下層遺構として古墳時代の造り出し付き円墳である時塚３号墳（ＳＤ01）と弥生時代の方形周溝墓、土坑などを検出した。

Ａ．弥生時代・古墳時代の遺構・遺物

１）遺構

弥生時代に属する遺構として方形周溝墓５基を検出した。その他、弥生時代の遺構として確実視されるものとして、溝・土坑がある。方形周溝墓15－13号墓は南の４地区にもおよんでおり、４地区の項で報告を実施する。以下、各遺構について概観する。

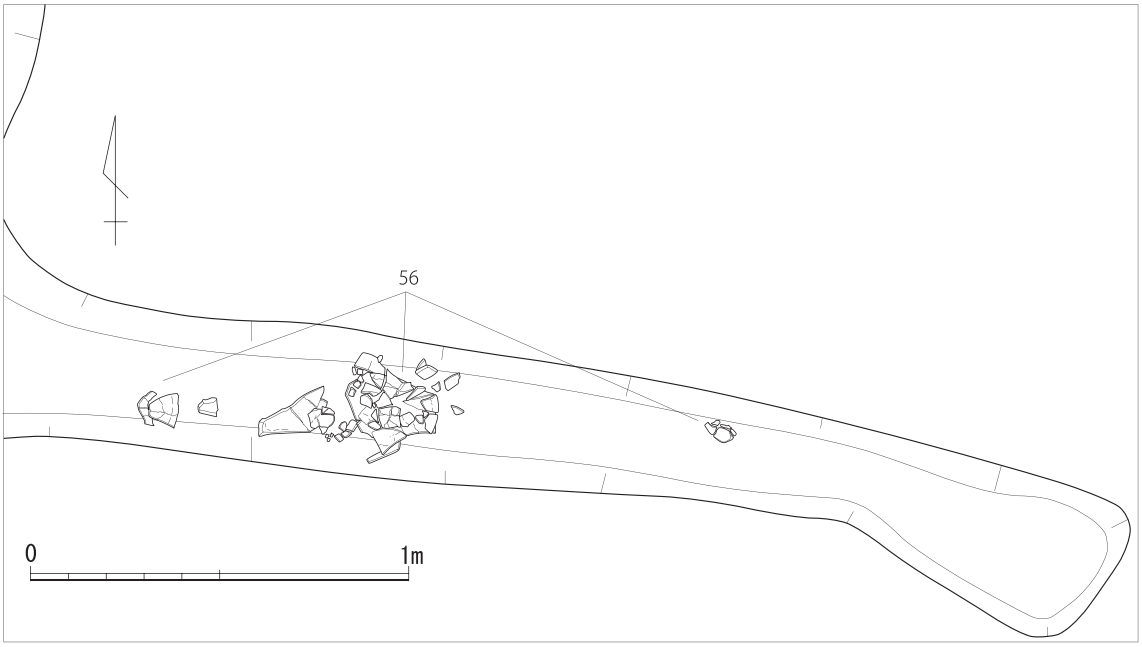
15－６号墓　ＳＤ533（北：幅0.8m、深さ0.1m、西：幅1.5m、深さ0.2m）を北辺および西辺に、



第64図　２地区方形周溝墓平面図（1/200）



第65図　ＳＤ531遺物出土状況図(1/20)



第66図　ＳＤ542遺物出土状況図(1/20)

ＳＤ531(南：幅１ｍ、深さ0.2m、東：幅0.8m、深さ0.1m)を南辺および東辺にもつ方形周溝墓である。各周溝が浅く、削平を受けている可能性がある。検出状況で周溝は完周せず、北東隅が削り残されている。また、ＳＤ531の南東部は東に突出している。周溝墓の規模は東西10.5m、南北10.4mを測る。なお、西は15－5号墓と、南は15－9、10号墓と接するが、周溝の切り合いや、前後関係については明確ではない。

南辺の区画溝ＳＤ531中央部での遺物出土状況を図示した(第65図)。壺(６)が細片化して出土している。出土状況からこの周溝墓側からの転落と考えられる。

１５－９号墓　１５－６号墓の南西に位置する。ＳＤ531を北辺に、東で２条に分かれるＳＤ542を南辺（幅1.1m、深さ0.1m）および東辺（幅0.6m、深さ0.15m）にもつ方形周溝墓である。西側の様相については不明であるが、15－8号墓の東溝ＳＤ523を共有している可能性が高い。また、ＳＤ542はＳＫ547に接しているが、切り合い関係は不明である。周溝墓の規模は南北８m、東西８m前後を測る。

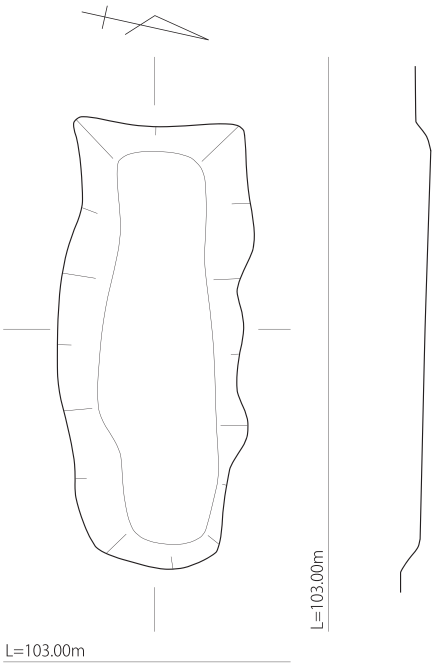
埋葬施設は検出されていない。また、SD542底面には方形の土坑状の掘形（長軸1.3m、短軸0.8m、深さ0.1m）がみられるが、これが溝内埋葬であるかどうか判断し得ない。

15－10号墓　15－９号墓の東に位置する。溝SD531を北辺に15－６号墓と共有し、西および南は溝SD542で区画される周溝墓として復原した。なお、15－６号墓の周溝南東部が不自然に広がっているが、この周溝墓の盛土確保のため再掘削された可能性を考えておきたい。

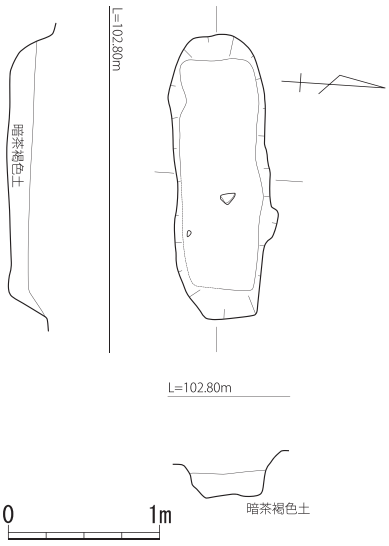
遺物はＳＤ542における遺物出土状況を図示した（第66図）。広口壺（56）が破片となって出土した。この壺は完形個体に復原された。なお、出土状況からはこの壺が15－10号墓に伴うものか、15－11号墓に伴うものか判断することはできない。

15－11号墓　15－10号墓の南に位置する方形周溝墓である。北辺および西辺はＳＤ542で、南側は15－15号墓の北辺のＳＤ573（幅1.2m、深さ0.15m）で区画される周溝墓と考える。ＳＤ573は底面が階段状を呈しており、複数回の掘り直しのあった可能性がある。これを前提とすれば、ＳＤ573を再掘削し、15－11号墓の盛土を確保した可能性がある。

以上の方形周溝墓のほかに、弥生時代の遺構として、土坑、溝などがある。柱穴については弥生時代と確実視されるものはない。



第68図　ＳＫ547実測図（1/50）



第69図　ＳＫ617実測図（1/50）

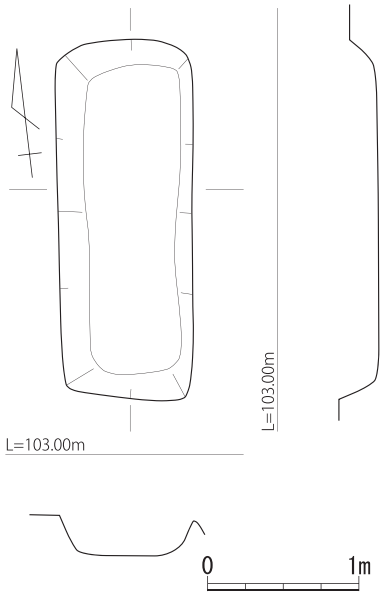
ＳＫ547（第68図）　ＳＤ542の南で検出された土坑である。東西方向に主軸をとり、不整形な長方形プランを呈する。規模は長軸３m、短軸1.25m、深さ0.3mを測る。弥生時代の埋葬施設としては大きいため、周溝墓の周溝残欠である可能性がある。埋土中から弥生土器が出土した。

ＳＫ617（第69図）　ＳＤ573の北で検出された素掘りの土坑である。長軸1.9m、短軸0.6m、深さ0.3mを測る。やや不整形な長方形プランを呈する。埋土中から弥生土器片が出土している。

平面的にはＳＤ573を切っているようである。埋土は単層であり、木棺等の痕跡は確認されなかった。

ＳＫ552(第70図)　15－６号墓の北東で検出された南北方向に主軸をもつ素掘りの土坑である。平面は長方形プランを呈し、規模は長軸2.4m、短軸0.9m、深さ0.3mを測る。墓壙床面は北側がやや高くなっている。木棺の痕跡などは確認されていないが、規模や、形状からみて、弥生時代の埋葬施設であると判断した。

ＳＫ524　調査区の南東部で検出した不整形な土坑である。性格については不明である。



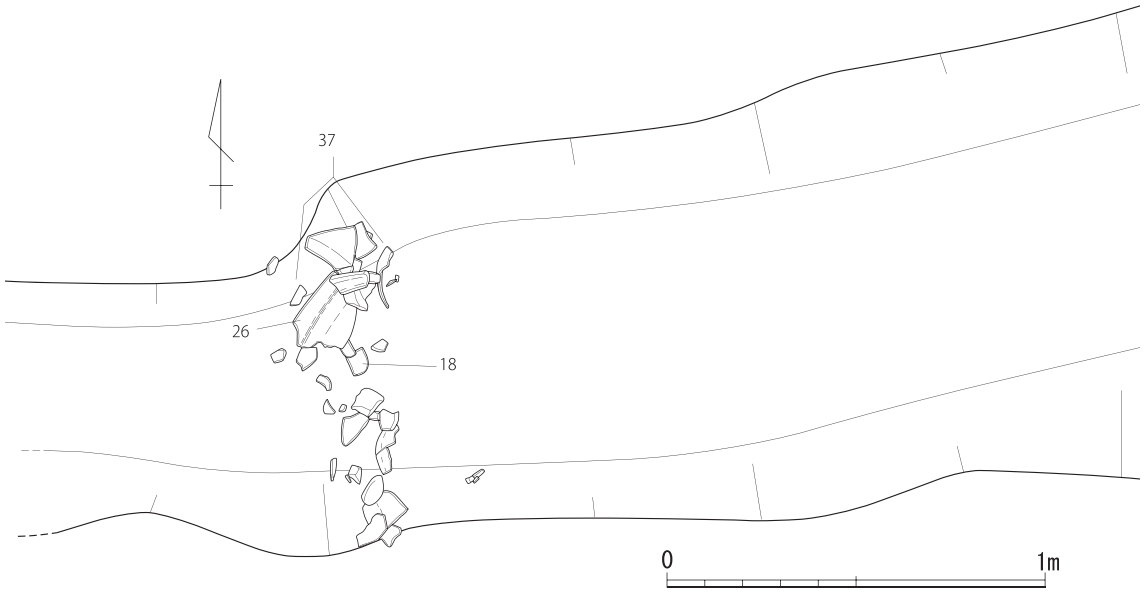
第70図　ＳＫ552実測図(1/50)

ＳＤ02(第71図)　調査地北東部で検出された幅１ｍ、深さ0.3mを測る東西方向の溝である。時塚３号墳の周溝ＳＤ01および上層のＳＤ02に切られる。なお、遺構番号が上層遺構と重複しており、遺物の混乱がある。遺物は壺(18・26)、鉢(37)が71図のように出土しているため弥生時代の遺構であることは間違いない。遺構の性格については、居住域に伴うものか、墓域に伴うものか不明である。

ＳＫ70(第72図)　調査区北東部、時塚３号墳の周溝西肩部で検出された主軸を南北方向にとる木棺直葬墓である。

墓壙の平面形は、両端がやや丸みを帯びた長方形プランを呈し、規模は全長2.2m、幅0.8m、深さ0.3mを測る。また、北側の方がわずかに幅が広い。

墓壙埋土上層から弥生土器が細片化した状態で検出され

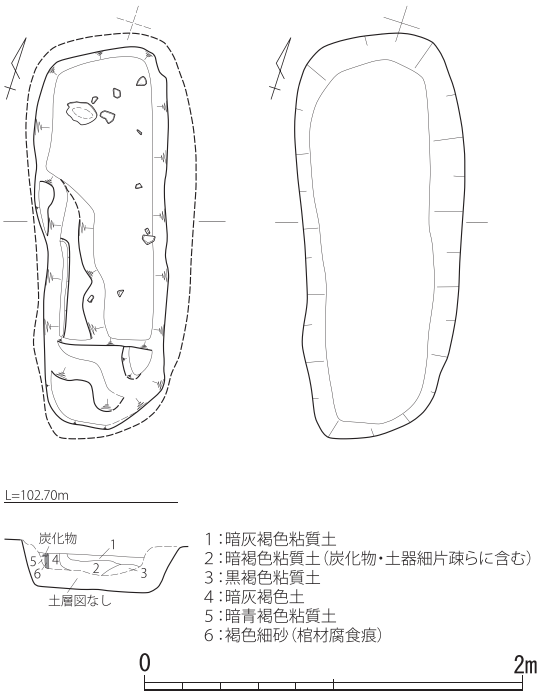


第71図　ＳＤ02実測図(1/20)

ている。おそらくは、棺の腐朽に伴って棺内に落ち込んだ土器群と考えられる。部分的に木棺の腐食痕跡が確認されたが、平面的に捉えることはできず、また、断面としても木棺の痕跡を把握することができなかった。そのため、棺の陥没痕検出状況と、完掘状況図を掲載した。

２地区では上記の弥生時代の遺構のほかに、古墳時代の遺構として造り出し付きの円墳である時塚３号墳（ＳＤ01を）検出した。

時塚３号墳（第73図）　調査地北端で検出した造り出し付きの円墳である。古墳の墳丘は大きく削平され、盛土や埋葬施設は全く遺存していない。また、墳丘中央部が大きく撹乱を受けている。周溝のみが遺存していた。



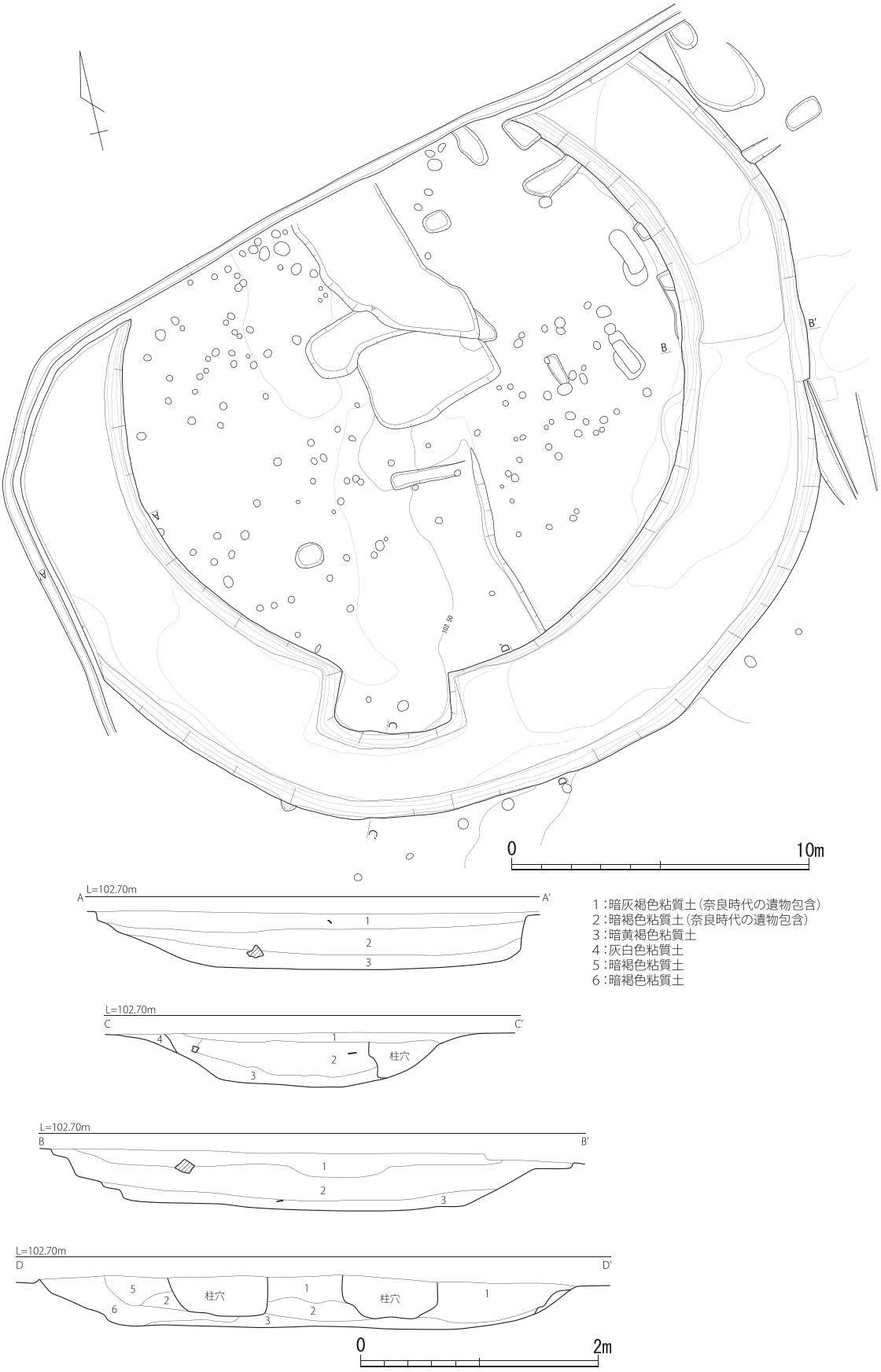
第72図　ＳＫ70実測図（1/40）
左：遺物出土状況、右：完掘状況

墳丘の基底は周溝を掘削し、地山を削り出している。造り出しは南側に地山を削り残すことにより構築されている。周溝は幅約５ｍ・深さ0.5～0.6ｍを測り、円形に巡る。そのため、この造り出し先端部のみ周溝は幅を減じ、周溝の深さも約0.36ｍと浅くなっている。墳丘の規模は直径約20ｍを測り、造り出しを含めた全長は推定22.4ｍである。また、周溝を含めた古墳の直径は約28ｍを測る。造り出しは主丘部側で幅4.7ｍ、先端部で幅5.2ｍ、全長2.4ｍを測る。

周溝埋土中（第73図１・２層）からは10～30cm大の角礫、亜角礫が多数検出された。また、ほぼ同一面で奈良時代の須恵器が検出されている（第63図網目部分）。この礫群については葺石として用いられていたものの可能性があるが、墳丘基底には葺石の存在を示す遺構は検出されておらず、この古墳に葺石が存在したことを明らかにはできない。また、奈良時代の須恵器などが出土していることから、周溝は奈良時代には完全には埋没していなかったことを示している。また、平面的には検出されていないものの、土層図には周溝埋没後に掘削された柱穴が記載されており、周溝の埋没後に掘立柱建物が築造されたとみられ、土地利用のあり方を伺いうる資料である。

遺物は奈良時代の須恵器のほかに、築造時期を示すと思われる須恵器瑞（第78図57）や土師器壺（第78図58）が周溝内から出土している。

（伊野近富・石崎善久）



第73図　時塚３号墳実測図（平面空撮図化：1/200、断面：1/50）

B．出土遺物（第73～78図）

２地区出土遺物として、弥生土器とともに時塚３号墳（ＳＤ01）出土遺物について概観する。

ＳＤ531（１～６）　１の広口壺の頸部は、櫛描直線文をもつ。長めの頸部をもち、ゆるく口が開く形状であるとみられる。２の「く」字状口縁の甕は、体部が上半で張る形状で、口縁端部が上方に拡張する。甕とみられる底部（４・５）は、いずれも外面ハケメ調整で内面ナデ調整である。４は器壁が薄く、５は上げ底である。６の水差し形土器は、磨滅の進行のため、調整などは不明である。底部が小さく、わずかであるが把手側の口縁部に切り込みが見られる。断面楕円形の把手は、大部に差し込んで貼り付けている。３は底部がドーナツ状を呈すミニチュアの甕である。

ＳＤ600（７）　無文の広口壺である。口縁端部がわずかに上方に広がる。

ＳＤ525（８）　底面に木葉痕をもつ底部である。

ＳＤ526（９）　受口状口縁の甕である。口縁部に綾杉状の刻目が施される。

ＳＤ71（10・13）　体部最大径が口径に近い大型甕（10）と、底部（13）が出土した。

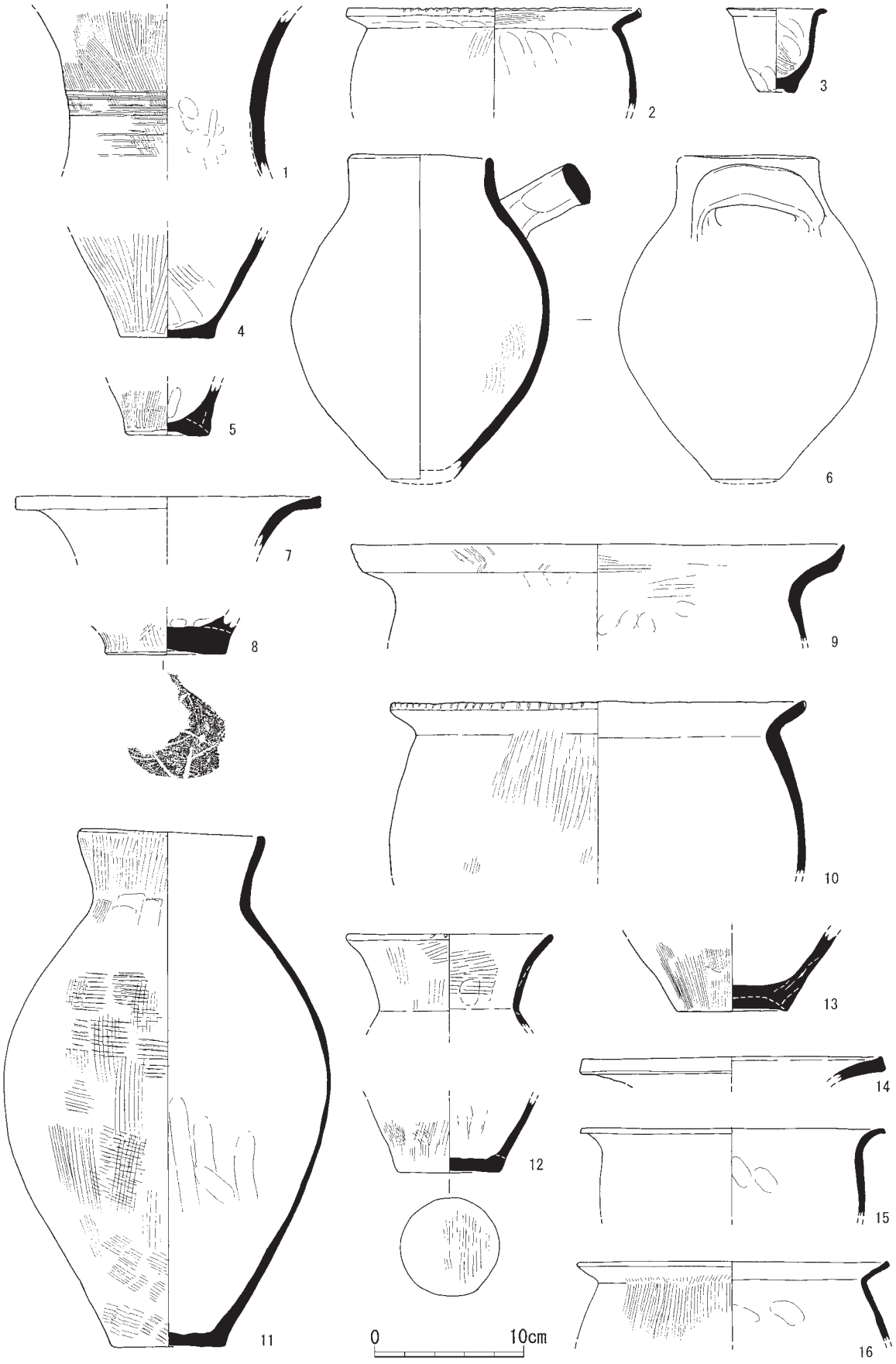
ＳＤ11（14～16）　広口壺口縁部（14）と折り曲げ口縁甕（15）、「く」字状口縁甕（16）を挙げた。いずれも口縁端部には刻目を施さない。

ＳＤ２（第74図17～第75図42）　広口壺は無文で短頸のものが中心である（17～22）。調整はナデやハケメ調整が主体で、19の体部にはタタキ調整がみられる。小型のものは頸部の締まりが強い形態をしている（21・22）。21は口縁端部に刻目をもつものである。24～26には、受口状口縁壺を挙げた。口縁部の屈曲は比較的明瞭である（25・26）。いずれも頸部には指圧痕文突帯が貼りつけられている。23は細片であるのでよく分からないが、やはり受口状口縁壺であると思われる。「く」字状に折り曲げられた口縁をもつ無頸壺もみられる（27）。体部は櫛描波状文で飾られる。体部下半にはケズリ調整が施される。28の直口の細頸壺は、口縁部から凹線文、櫛描直線文、頸部と体部の境界に突帯をそれぞれ施している。一方、無文の短頸壺（29・30）には、深いタタキ目が刻まれている。特に、29のタタキ目は激しい凹凸を呈する。甕は「く」字状口縁の甕が中心である（32～34・36）。いずれも体部にはタタキ調整とハケメ調整が施される。口縁内面に横方向のハケメを施す点は、折り曲げ口縁甕（31）でも共通する。34には内面にケズリ調整がみられる。35・38・39は甕底部であると考えられる。38の「く」字状口縁の鉢にも内面にケズリ調整がみられる。高杯の脚部（40・41）は、内面ナデ調整である。裾端部は上下に拡張し、広い面を持っている。42の脚部は、ヘラ描直線を主体とした文様と、未貫通の三角形透しをもつ。明らかに文様構成は西播磨以西でみられるものである。

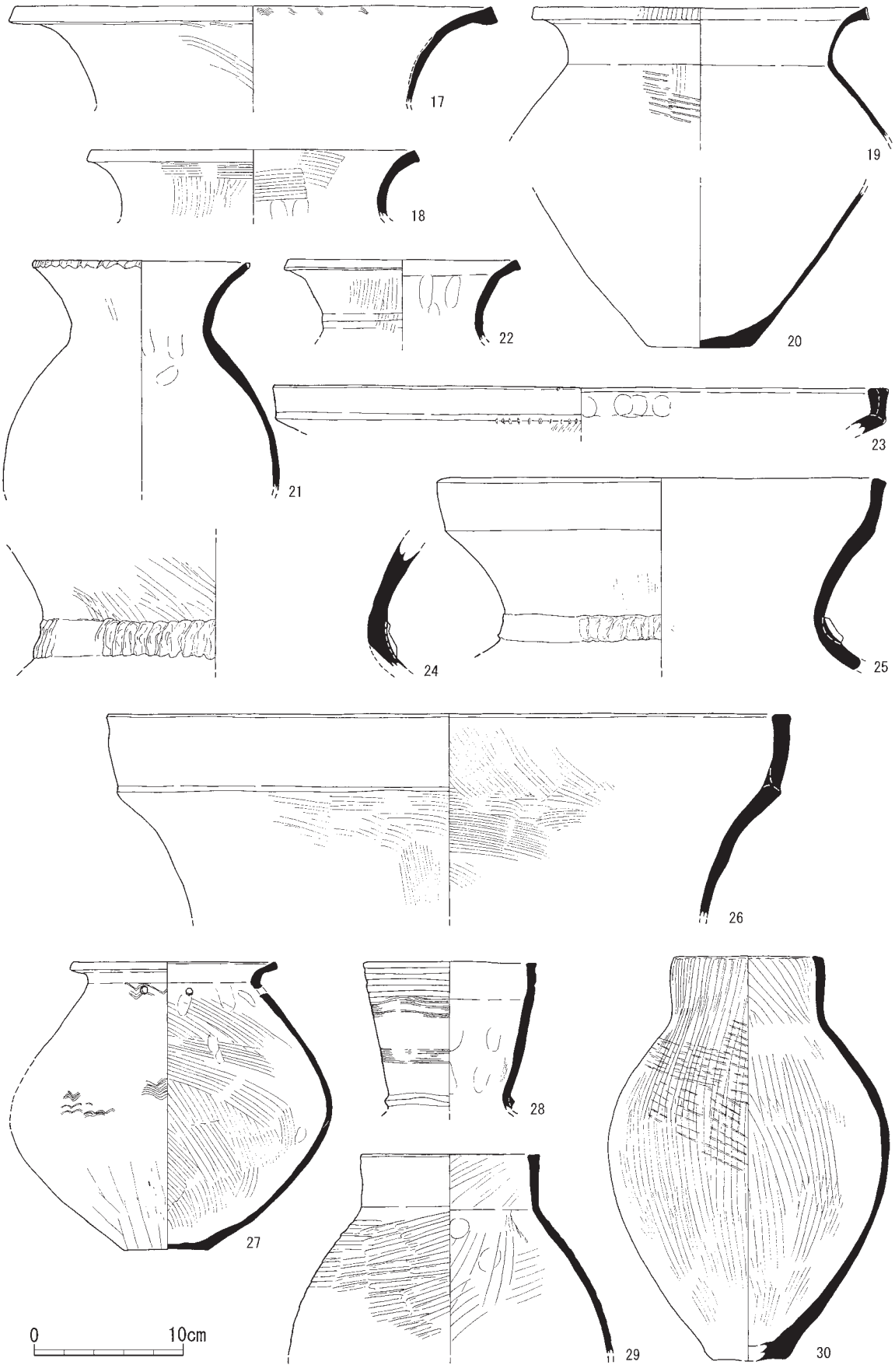
ＳＤ05（43・44）　甕底部（43）は薄手である。高杯脚部（44）は、裾端部が下方に広がる形状を呈す。なお、このSD05については、整理段階で、時塚３号周溝埋土の一部であることが明らかとなったため、遺構としては認識していない。

ＳＤ552（49・50・52）　49は広口壺口縁の破片である。綾杉状のヘラ描文の上に、円形浮文が貼り付けられる。無文で単純な形状の広口壺もみられる（50）。52は甕底部である。

ＳＫ547（45・46）　45は、面をもつのみの口縁端部に櫛描波状文を、頸部から体部に櫛描直線



第73図　２地区出土遺物実測図（１）



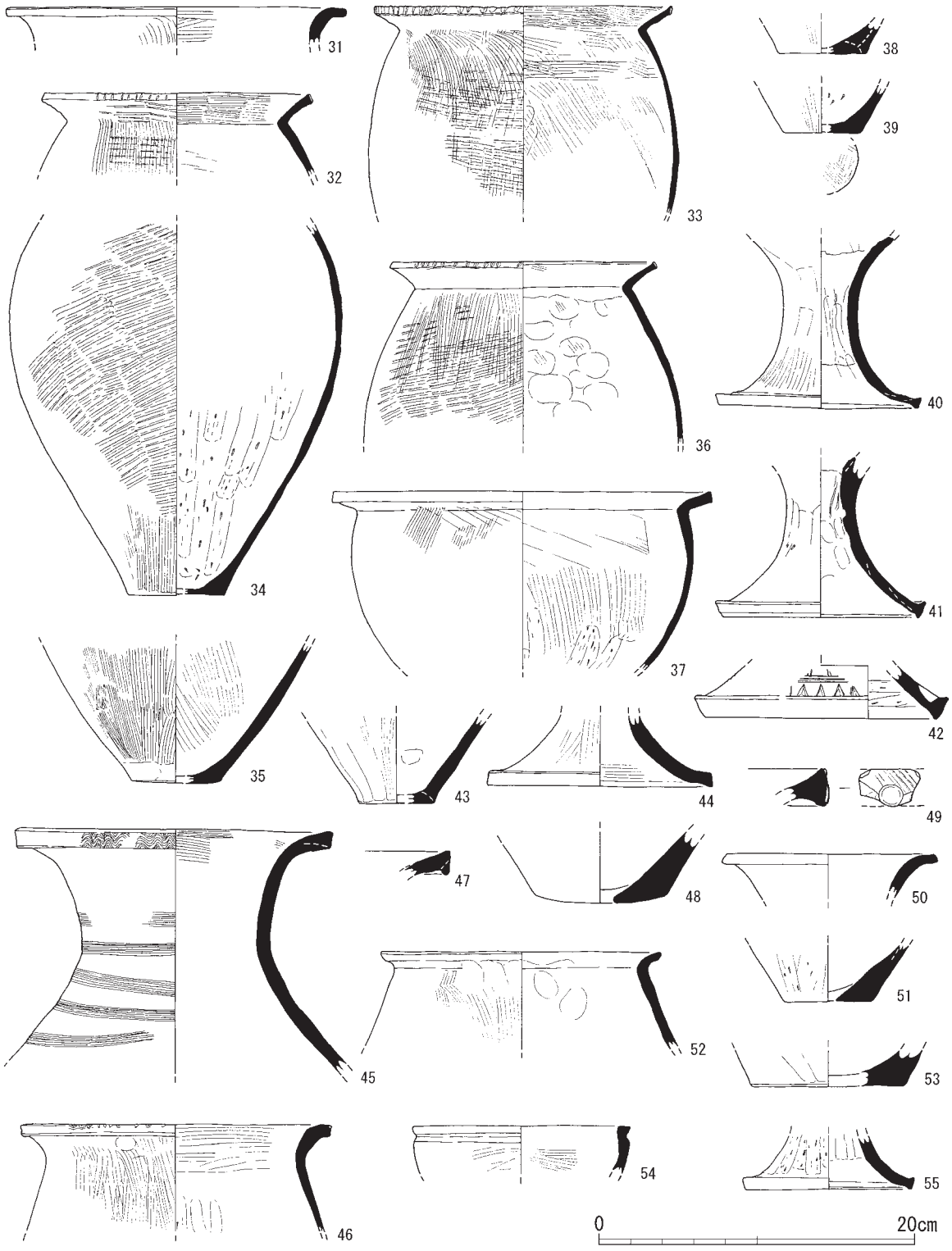
第74図　２地区出土遺物実測図（２）

文を施す広口壺である。46の折り曲げ口縁甕は、口縁上端に刻目をもつ。

ＳＫ524(47・48)　やや垂下する口縁をもつ広口壺口縁部片と、甕底部を挙げた。

ＳＰ549(52・53)　口縁部の短い特徴のある「く」字状口縁甕と、底部片が出土している。

ＳＫ70(54・55)　54は、外面ケズリ調整を施す脚部である。55の小型の高杯は、口縁部に凹



第75図　２地区出土遺物実測図(３)

線文をもつ。

ＳＤ542(56)　完形に近い広口壺である。体部は上半が張り、口縁端部が上方に肥厚する形状である。外面はタテおよびナナメのハケメを施し、体部下半にタテミガキを施す。内面はナデ調整を施すが、一部ハケメ調整がみられる。また、内面の頸部以下は残存黒斑のため全体が青みを帯びた濃灰色を呈している。

（谷上真由美）



第76図　２地区出土遺物実測図（４）

時塚３号墳（第77・78図）　時塚３号墳出土遺物として、周溝ＳＤ01内出土の須恵器・土師器を図示した。古墳に直接伴う遺物のほか、埋没時期を示す資料が多数出土している。

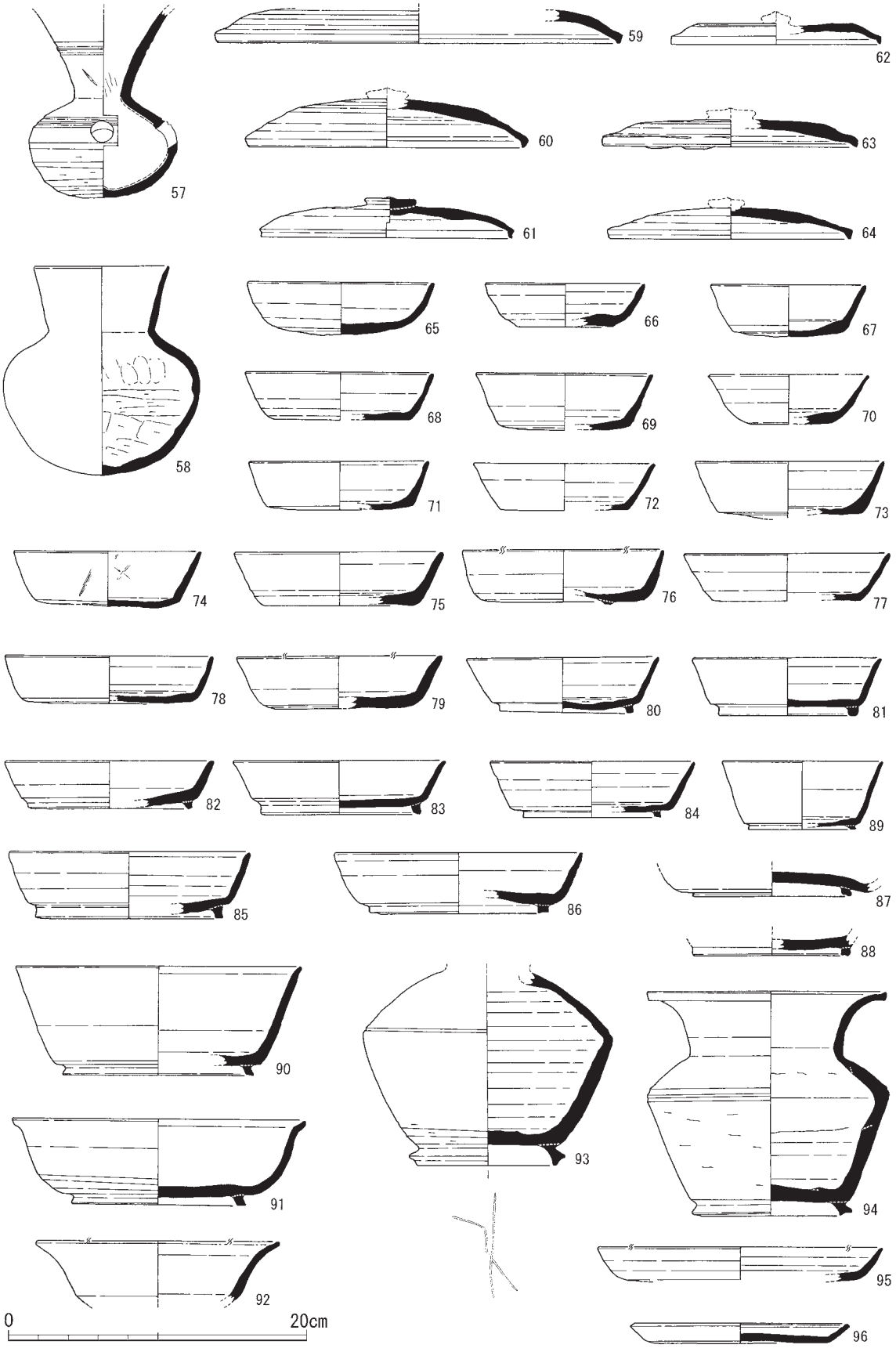
57・58が古墳に直接伴うと判断される資料である。57は須恵器𤭯である。口縁部を欠損している。扁球状の体部をもち、頸部と体部の接点は細くしまる。体部最大径は体部のほぼ中位にもつ。円孔は最大径の上に施されている。頸部はラッパ状に大きく広がる。体部は円孔の上部に２条の沈線を施し、頸部は中段に２条の沈線を施して加飾する。やや厚手のつくりである。58は土師器直口壺である。体部は最大径を体部上半にもち、口縁は直立気味に立ち上がる。内面は体部下半がヘラケズリにより調整され、上半はユビによるナデによって調整されている。外面は摩耗が著しく調整不明瞭であるが、粗製の壺と考えられる。須恵器𤭯の形態はラッパ状に開く口縁や、体部の形態はやや新しい様相を呈しているといえる。陶邑編年[注2]ＴＫ10型式に併行する段階のものと考えておきたい。

59～64は須恵器杯蓋である。60のように天井部の高い笠形を呈するものや、64のように天井部の低い笠形を呈するもの。63のように口縁部が「Ｚ」字状に近く屈曲し、低い天井部をもつものなどがある。

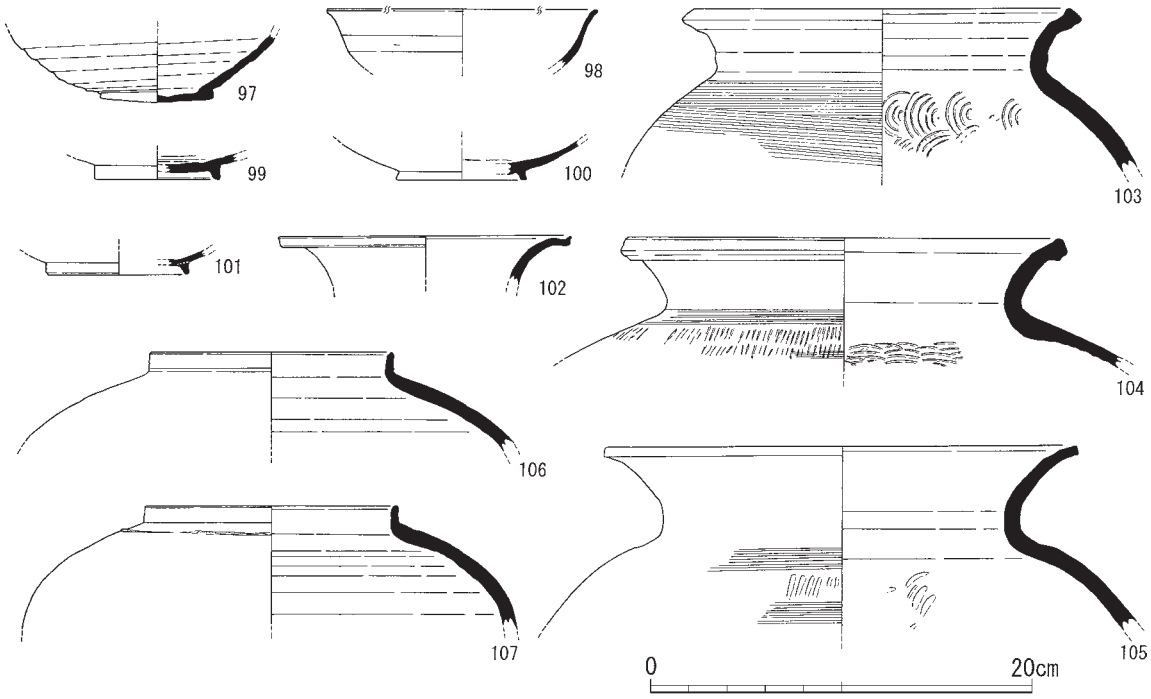
65～78は須恵器杯Ａである。64・65は体部側面の立ち上がりが丸みを帯びている。その他のものは直線的に立ち上がるものや、口縁端部を外反させるものなどがある。法量も様々であり、一定の時期幅があるものと考えられる。

79～90は須恵器杯Ｂである。高台は底部外縁部よりわずかに内側につくものが大部分であるが、小法量の杯89や底部のみの個体88は外縁部に高台がとりつく。また90のように大型の杯Ｂも含まれている。

91・92は須恵器椀である体部側面は丸みを帯びて立ち上がり、口縁端面はやや内湾気味に外方へのびる。



第77図　時塚３号墳出土遺物実測図（１）



第78図　時塚３号墳出土遺物実測図（２）

93は須恵器長頸壺体部である。肩のはった体部をもち、肩部に１条の沈線を施している。底部外面にはヘラ記号が認められる。

94は高台をもつ須恵器広口壺である。肩部に２条の沈線を施している。

95・96は須恵器皿である。95は端部を丸く収めるが、96は端部に面を形成している。

97は須恵器椀である。ロクロ成型時のヨコナデが多段状に残る個体である。底部は糸切り底である。

98～100は緑釉の椀である。98・99の高台は削り出し高台と思われる。

101は灰釉の椀である。

102は小型の須恵器甕口縁である。薄手のつくりであり、口縁端部は上方に折り曲げて外側面に面を形成する。古墳時代に属する可能性も考えられる。

103～105は須恵器甕である。103・104は短い口縁部をもち、105は外方に外反気味に延びる口縁をもつ。

106・107は大型の短頸壺である。短く直立する口縁をもつ。

以上、時塚３号墳の周溝から出土した遺物は、古墳時代後期前半の古墳造墓に伴うものと、奈良時代後半から平安時代にかけての遺物に大別できる。飛鳥時代や、奈良時代前半の遺物が存在しないことは、この古墳が飛鳥時代から奈良時代には塚として認識され、奈良時代後半から平安時代にかけて土地利用に際し、墳丘の削平が行われ、土層断面に示された柱穴などが構成され、居住域として土地利用がなされていったことを示しているものと考える。

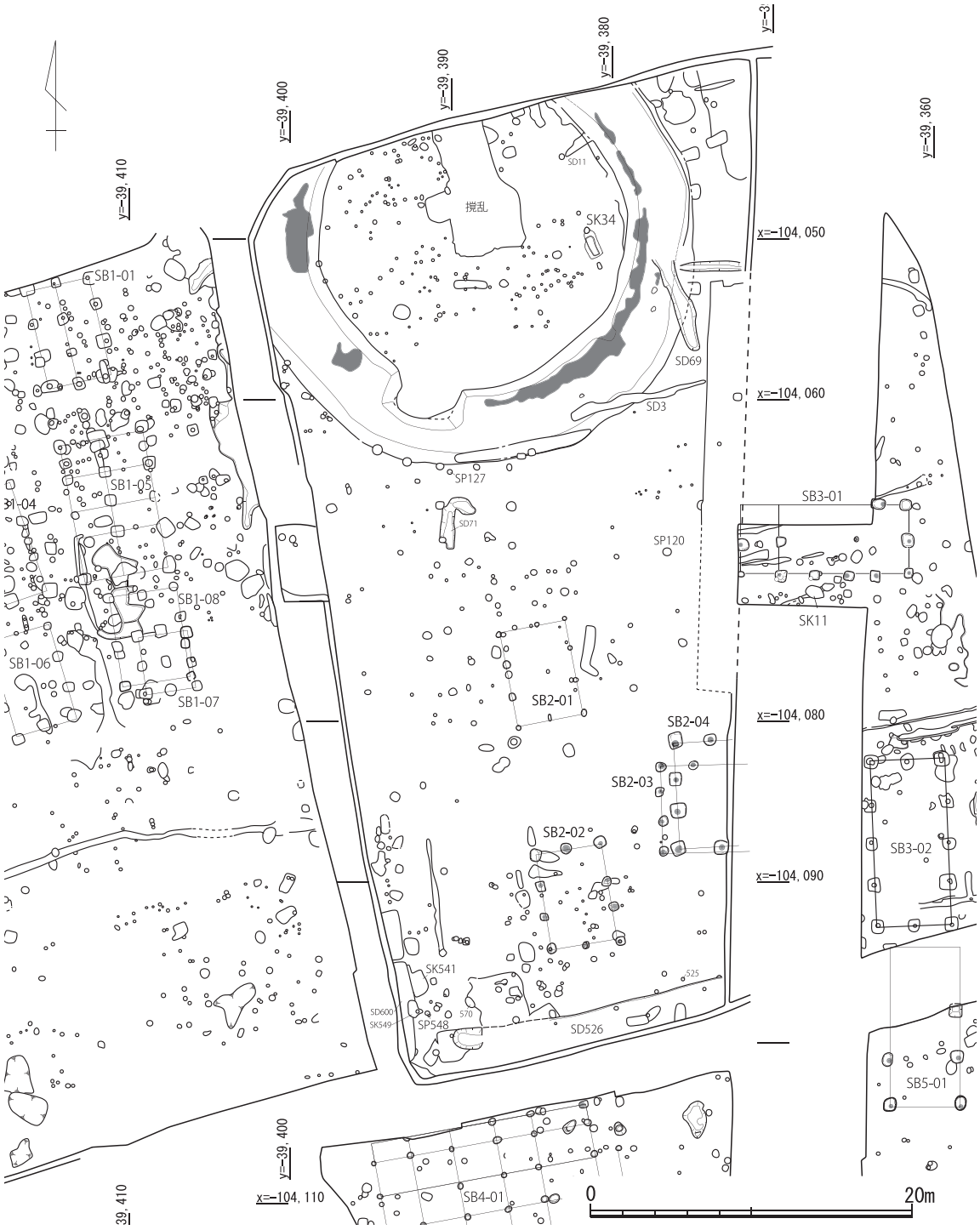
（石崎善久）

2）奈良時代以降の遺構・遺物

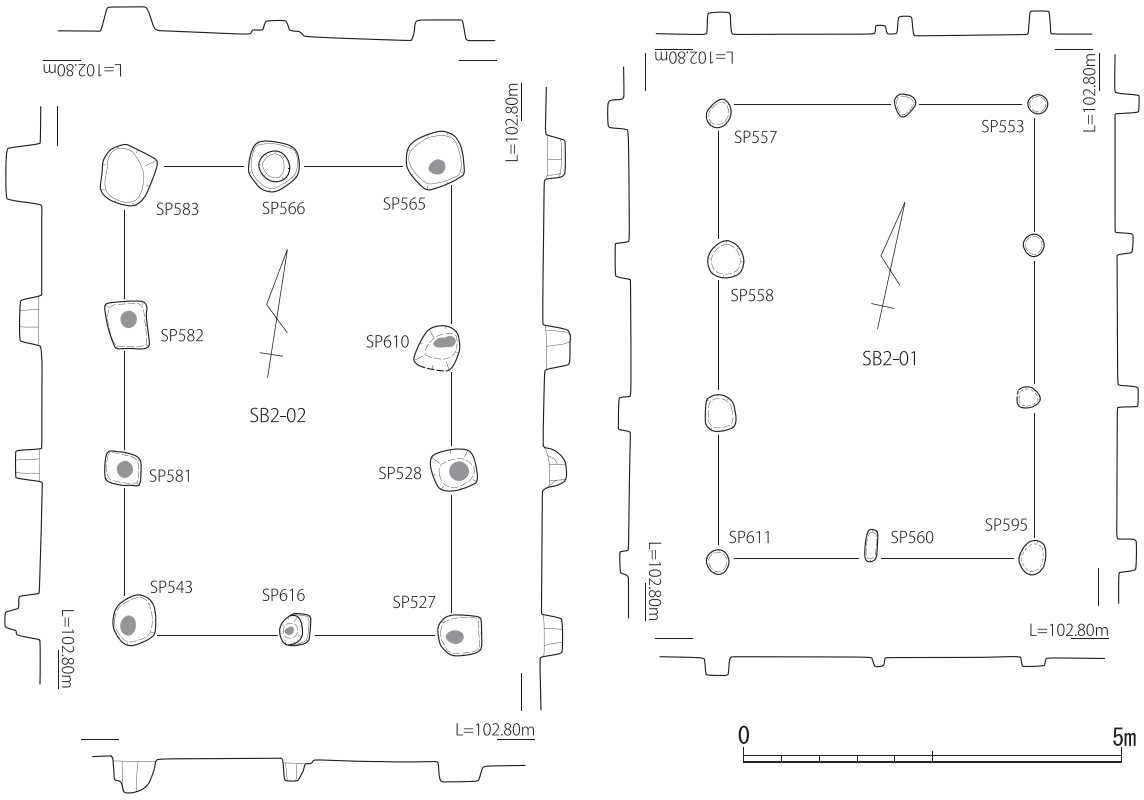
A．検出遺構

15－２地区では奈良時代以降の遺構として、掘立柱建物跡４棟、溝などを検出した。奈良時代以降の遺構密度は１地区に比して希薄といえる。なお、時期不明の遺構ＳＫ34についても、この項で報告を行う。以下主要な遺構について概観する。

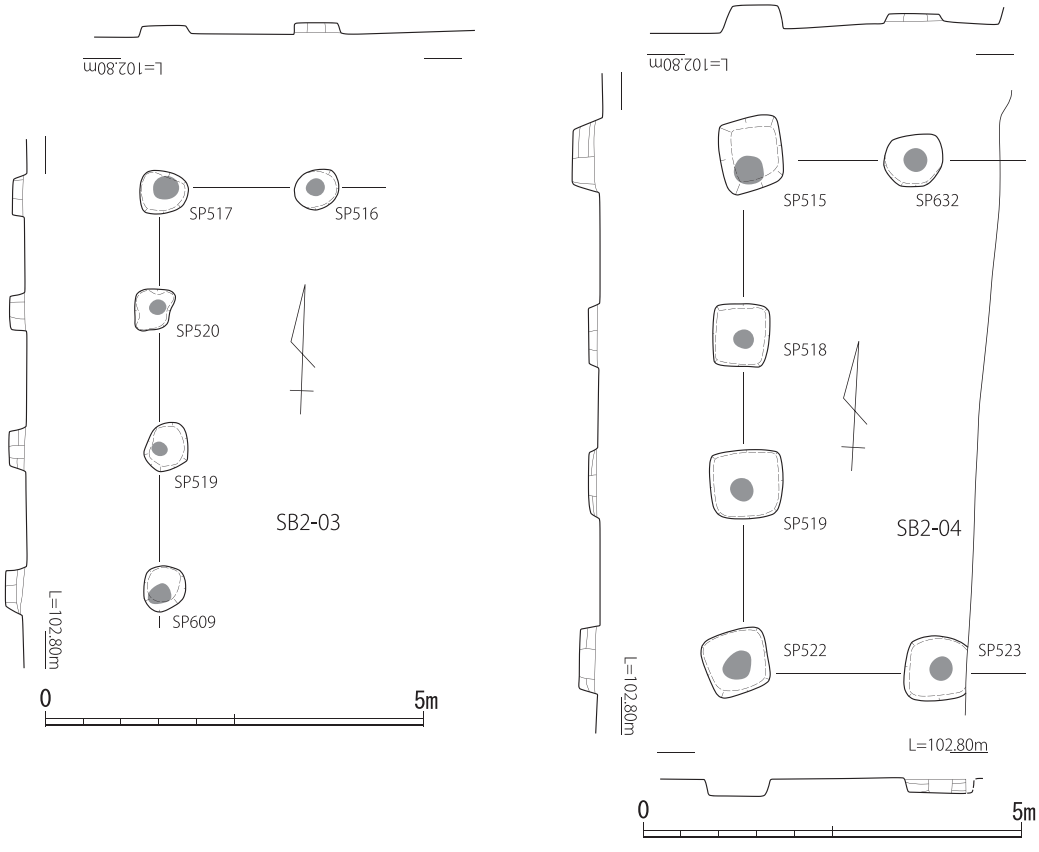
掘立柱建物跡ＳＢ２－01（第80図右）　調査地の中央部で検出された南北３間、東西２間の掘



第79図　２地区検出遺構配置図（奈良・平安時代、1/400）



第80図　掘立柱建物跡ＳＢ２－01・02実測図(1/100)



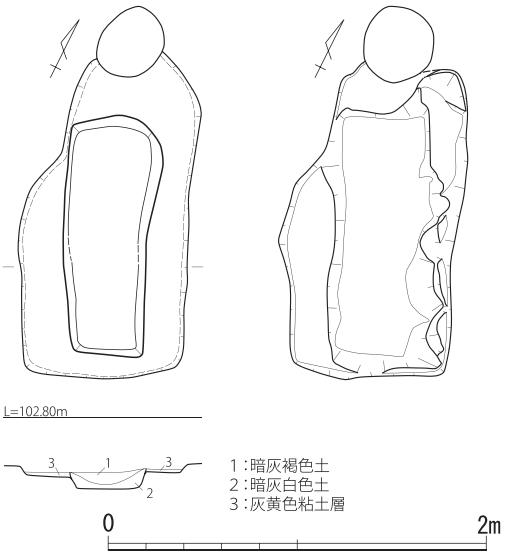
第81図　掘立柱建物跡ＳＢ２－03・04実測図(1/100)

立柱建物跡である。規模は芯々間で南北6.1m、東西4.3mを測る。主軸は座標北から西に振っている。

柱穴は一辺0.3～0.7mの不整な方形を呈する。

掘立柱建物跡ＳＢ２－02（第80図左）調査地の南部で検出された南北３間、東西２間の掘立柱建物跡である。規模は芯々間で南北6.0m、東西4.2mを測る。主軸は、座標北から西に振っている。掘立柱建物跡SB2－01とは南北に連なって建てられている。

掘立柱建物跡ＳＢ２－03（第81図左）調査地の南東部で検出された南北３間以上、東西１間以上の掘立柱建物跡である。規模は芯々間で南北5.4m、東西2.1mを測る。主軸はほぼ座標北である。



第82図　木棺墓ＳＫ34実測図(1/40)

柱穴は一辺0.5～0.6mの不整な方形を呈する。

掘立柱建物跡ＳＰ２－04（第81図右）調査地の南東部で検出された南北３間、東西１間以上の掘立柱建物跡である。規模は芯々間で南北6.8m、東西2.4mを測る。主軸はほぼ座標北である。

柱穴は一辺0.5～0.6mの不整な方形を呈する。

（伊野近富）

木棺墓ＳＫ34（第82図）　時塚３号墳の墳丘東肩部で検出された南北方向に主軸をとる木棺直葬墓である。

墓壙の平面形は不整な長方形を呈し、規模は長軸1.7m、短軸1.2mを測る。墓壙は二段墓壙であり、下段に長軸1.4m、短軸0.5m、深さ0.1mの土坑を掘削している。棺はこの下段に据えられており、木棺の痕跡から箱型木棺と考えられる。棺の規模は長軸12.4m、短軸0.5mを測る。棺の幅は北側がやや広くなっており、被葬者は北頭位であると考えられる。

出土遺物がなく、詳細な時期は不明であるが、墓壙が二段墓壙であることから、弥生時代の遺構ではないものと判断する。

（石崎善久）

Ｂ．出土遺物（第83図）

２地区出土遺物として、柱穴や土坑、溝、包含層などの出土遺物を図示した。なお、掘立柱建物を構成する柱穴出土遺物として図示しうるものはない。

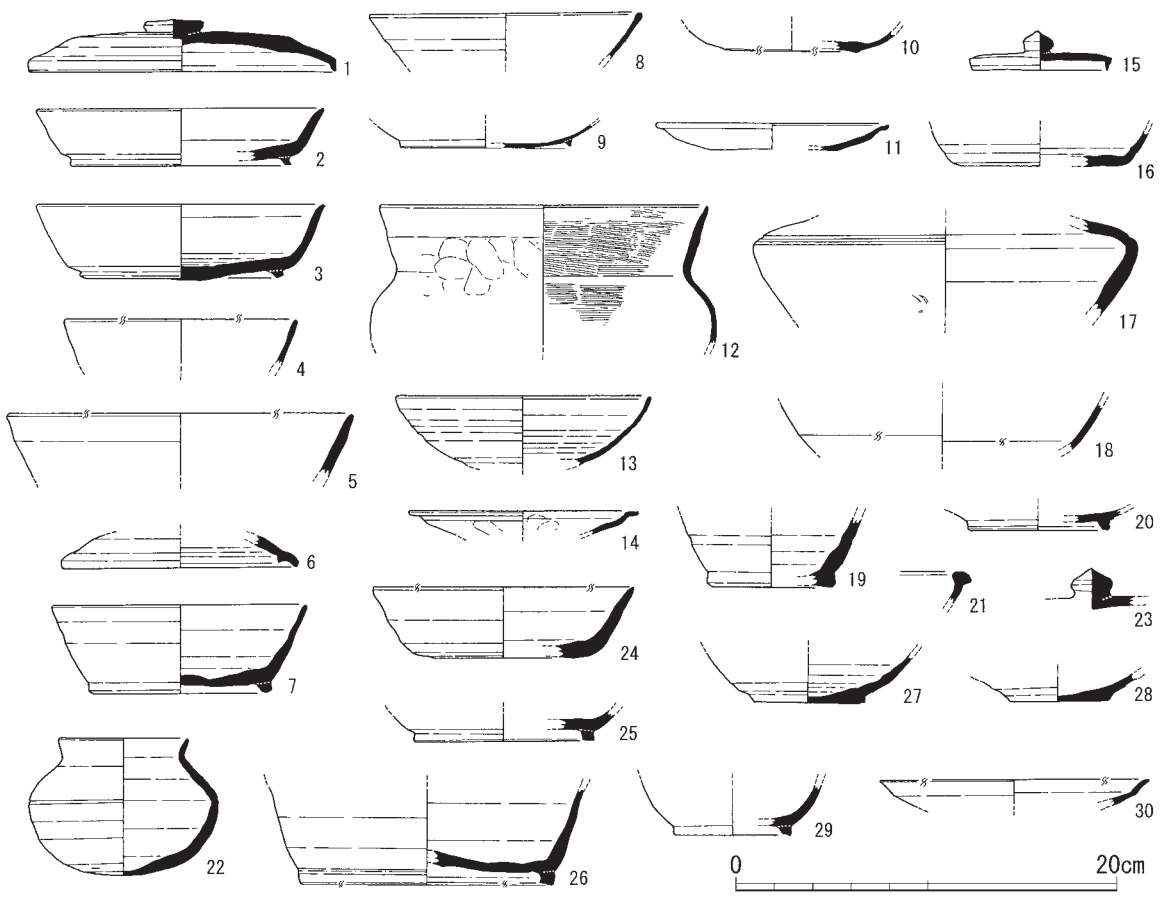
１～３は時塚３号墳周溝内で一括して出土した杯Ｂのセットである。

４・５はＳＫ541出土の須恵器杯口縁の破片である。

６はＳＰ127出土の杯Ｇ蓋である。この地区で唯一の飛鳥時代の資料である。

７はＳＰ120出土の杯Ｂである。高台が底部外縁にとりつく。

８～12はＳＰ548出土の須恵器椀と黒色土器椀・黒色土器甕・土師器皿である。一括性の高い遺物といえる。



第83図　２地区出土遺物実測図（５）

13・14はＳＰ570出土の平安時代の椀と皿である。

15はＳＰ553出土の須恵器壺の蓋である。

16はＳＰ549出土の須恵器杯Ａである。

17は古墳の周溝を削平するＳＤ３から出土している長頸壺の体部片である。

18はＳＤ526から出土した緑釉椀の破片である。この溝は南半が調査区外のため詳細は不明であるが、調査区南部を東西方向に横切っており、平安時代の区画溝の可能性がある。

19～21はＳＤ69から出土した須恵器壺底部、須恵器椀底部、須恵器鉢の口縁部である。時塚３号墳の周溝を削平している溝である。

22～30は包含層から出土した遺物を掲載した。22は須恵器短頸壺である。23は須恵器蓋の宝珠つまみである。24は須恵器杯Ａである。25は須恵器杯Ｂの底部である。26は大型の須恵器杯Ｂである。27は糸切り底をもつ須恵器椀である。28も同形態の須恵器椀である。29は緑釉の小型椀の破片と思われる。30は緑釉の皿小片である。

これらの遺物には飛鳥時代から平安時代の各時期のものが認められるが、奈良時代後半から平安時代にかけてのものが大部分であり、この地区の土地利用がこの時期を中心に行われたものと考えられる。

（石崎善久）

（4）15－3・6地区

15－3地区は15－2地区の東に設定した調査区である。また、調査の課程で、用水路部分を6地区として追加調査したが、3地区と連続しているため、まとめて報告する。調査区では上層遺構として掘立柱建物跡群や土坑、性格不明のピット・溝を、下層遺構として弥生時代の溝・土器棺墓などを検出した。古墳時代の遺構は検出されていない

1）弥生時代の遺構・遺物

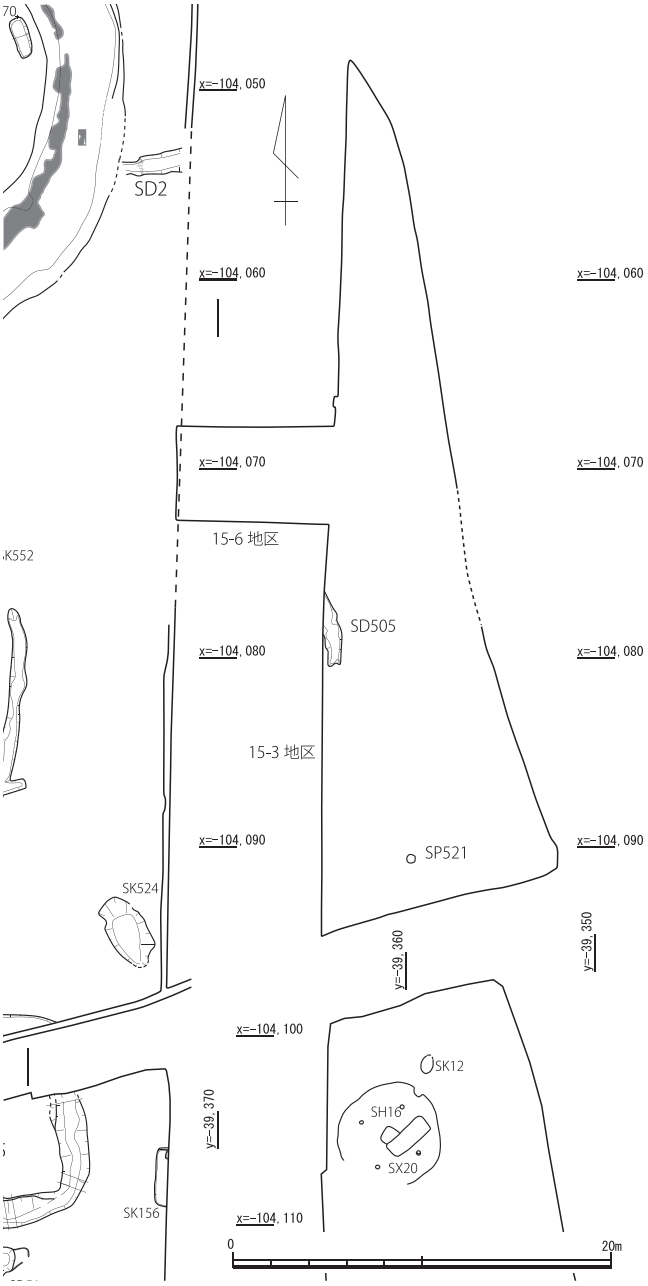
A．検出遺構

弥生時代に属する遺構として溝・土器棺墓がある。遺構密度は薄い。

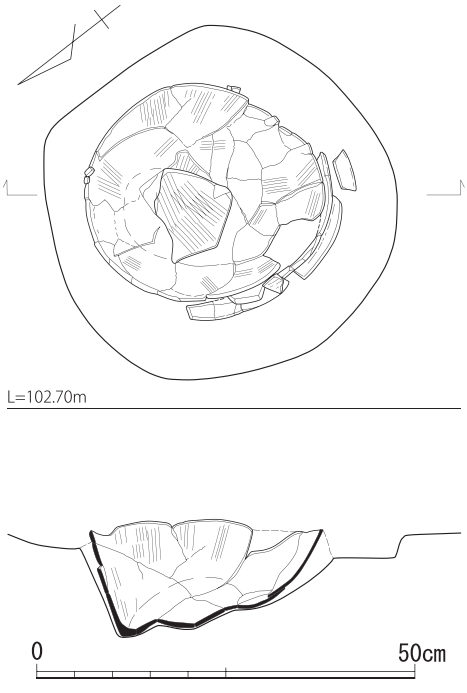
土器棺墓ＳＰ521（第85図）　3地区南部で検出した。径0.4m、深さ0.15mの土壙内に甕を正位で据え付けている土器埋納壙である。副葬品や人骨はないが、土器の検出状況から土器棺墓と判断した。

ＳＤ505　3地区中央西壁で検出した溝である。わずかに屈曲しており、調査区より西側に延びる。全長4ｍを検出した。埋土内からは弥生土器のみが出土しており、須恵器などの混入遺物もなく弥生時代の遺構と判断した。幅1ｍ、深さ0.14mを測る。

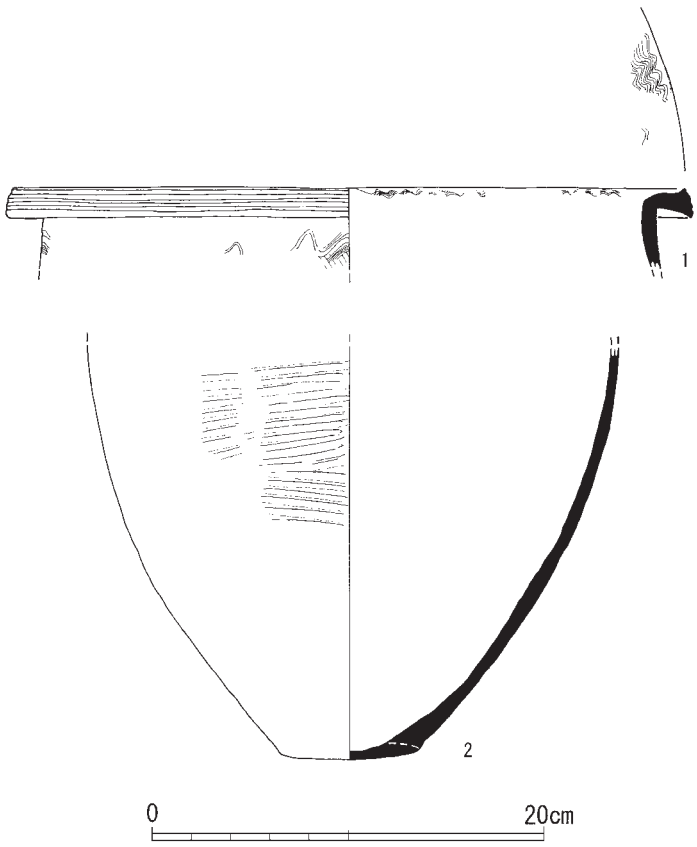
遺構の性格については明確ではないが、



第84図　3・6地区検出遺構配置図（弥生時代、1/400）



第85図　ＳＰ521実測図（1/10）



第86図　３地区出土遺物実測図（１）

屈曲する平面形から方形周溝墓を構成する溝の可能性がある。

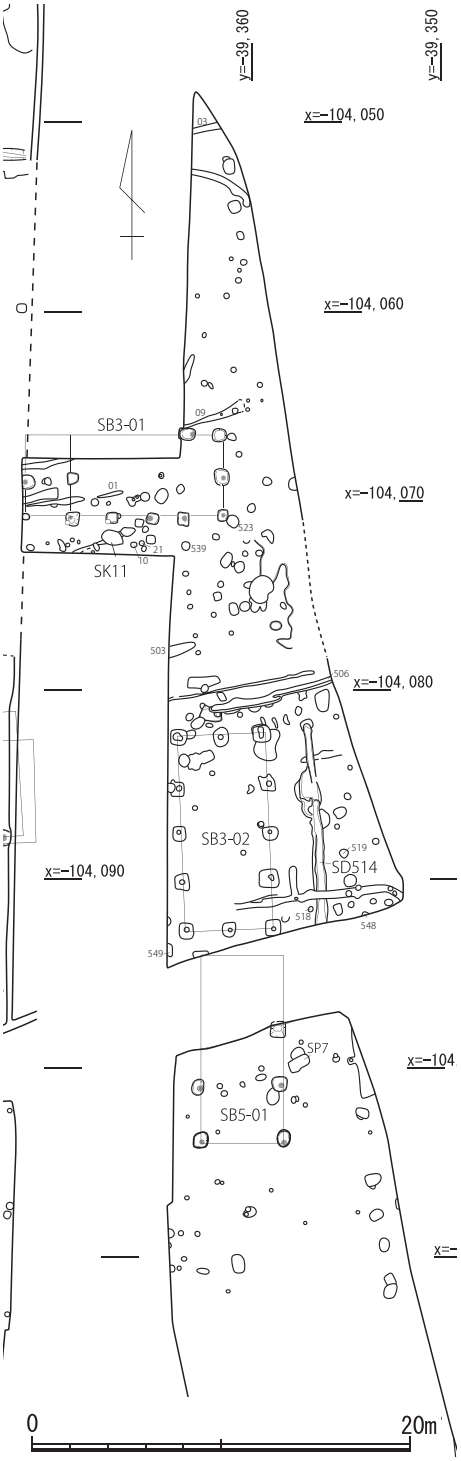
（伊野近富・石崎善久）

B．出土遺物（第86図）

３地区出土遺物として、ＳＰ521出土遺物を図示した。なお、出土状況図には図示した鉢口縁が記されておらず、どのように使用されていたのか明確ではない。

１は、加飾傾向の強い「く」字状口縁鉢である。口縁端面には凹線文が施される。２は、壺もしくは甕の体部である。タタキ調整がみられる。土器棺の可能性のあるものである。

（谷上真由美）

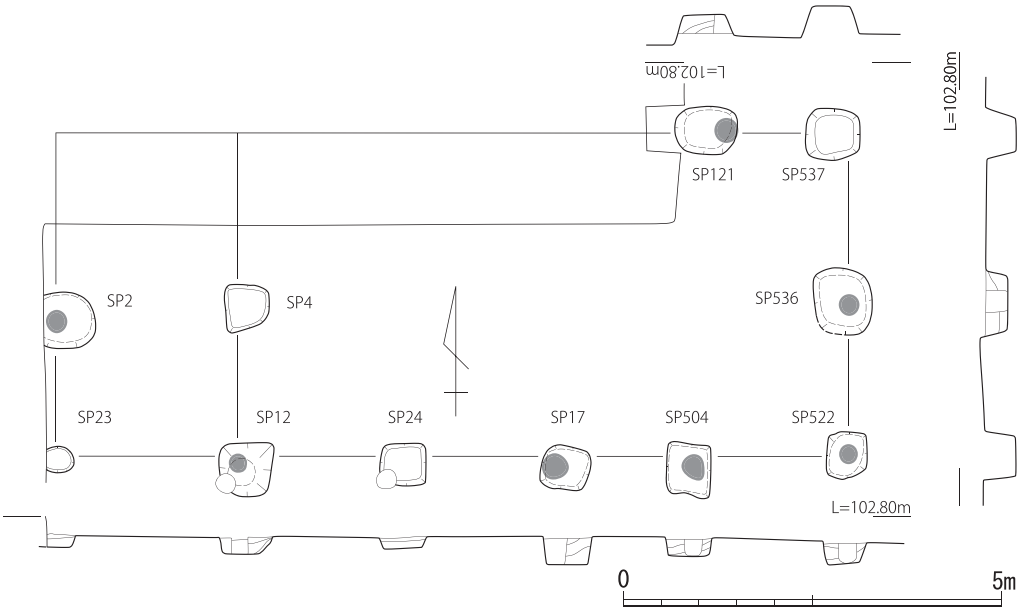


第87図　３・６地区検出遺構配置図
（奈良時代以降、1/400）

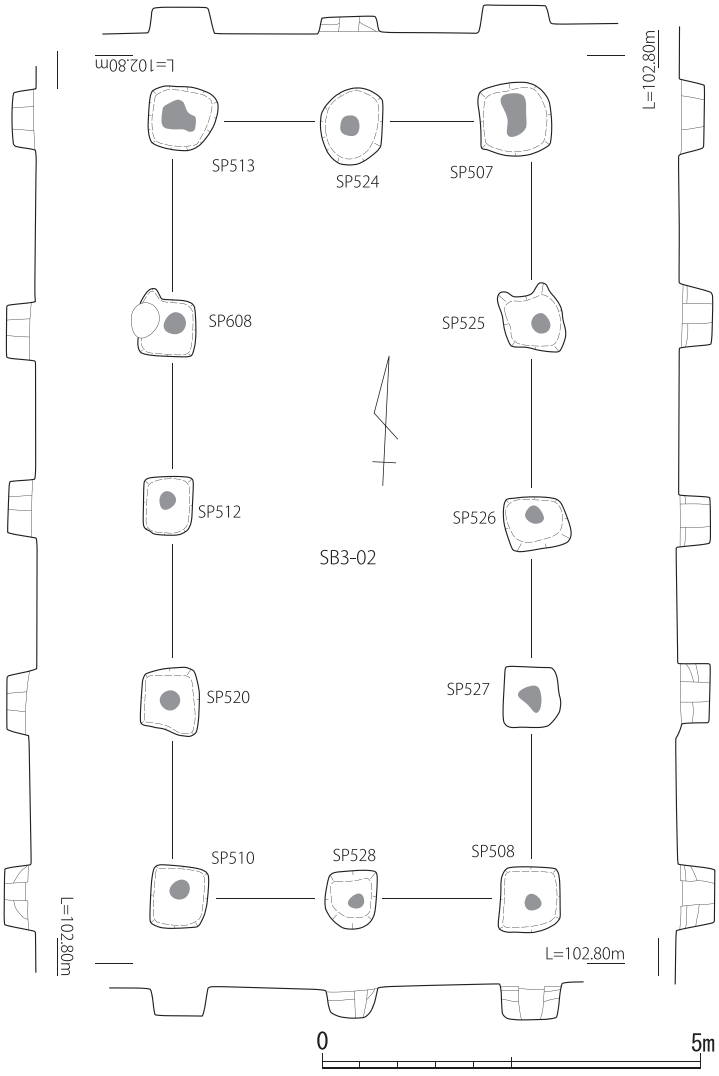
２）奈良時代以降の遺構・遺物

A．検出遺構

15－３・６地区では、上層の遺構として奈良時代の掘立柱建物跡２棟、溝、土坑などを検出した。



第88図　掘立柱建物跡ＳＢ３－01実測図(1/100)



第89図　掘立柱建物跡ＳＢ３－02実測図(1/100)

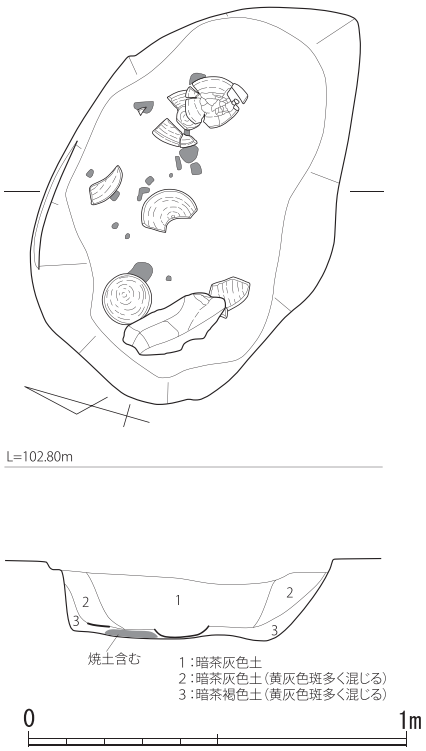
以下、主要な遺構について概観する。

掘立柱建物跡ＳＢ３－01（第88図）　調査区中央並びに６地区で検出された東西方向に主軸をもつ掘立柱建物跡である。主軸はほぼ真東西にとる。

建物は西側に庇をもつ構造に復原される。身舎は南北２間(4.2m)、東西４間（８m）の規模をもち、西側に１間分(2.4m)の庇がつく。なお、北側の柱のうち、身舎の２間分、庇の北西隅の柱穴は調査区外のため確認することはできなかった。

身舎を構成する柱穴は方形あるいは不整方形であり、規模は一辺0.6～0.8m、深さ0.2～0.5mを測る。断面形状は全て素掘りの構造をとっている。

柱痕跡の確認できるものから直



第90図　ＳＫ11実測図（1/20）

径20～30cm前後の柱が使用されていたものとみられる。なお、南側柱列は１間が均等ではなく、東から２基目と３基目の柱穴間の距離が短い。

庇を構成する柱穴は平面が円形であり、特に南西隅の柱穴は直径0.3m、深さ0.2mと小規模である。柱痕跡の確認できたものは直径30cmであり、その規模は身舎と変わるものではない。

建物を構成する柱穴ＳＰ２から須恵器椀（34）、ＳＰ536から須恵器皿（６）がそれぞれ出土している。

掘立柱建物跡ＳＢ３－02（第89図）　調査区の南で検出した南北方向に主軸をもつ掘立柱建物跡である。主軸はわずかに西に振る。

規模は東西２間（4.8m）、南北４間（10.3m）を測る。建物を構成する柱穴は方形あるいは不正方形であり、規模は一辺0.7～１m、深さは0.5m前後を測る。柱痕跡の確認されたものは直径20～30cmを測る。また、北東隅の柱穴には抜き取り痕と思われる土色の変化が確認された。

建物を構成する柱穴ＳＰ507から須恵器杯（16）、須恵器椀（17）が、ＳＰ512から須恵器椀（７）が、ＳＰ528から須恵器甕（20）がそれぞれ出土している。

ＳＤ514　掘立柱建物跡ＳＢ３－02の東で確認された南北方向の素掘り溝である。幅0.7m、深さ0.2mを測る。総延長10.6m分を検出した。位置や方位からみてＳＢ３－02に付随する施設の可能性が高い。

なお、３地区と５地区にまたがる掘立柱建物跡があるが、これについては５地区の項で述べる。

ＳＫ11（第90図）　拡張を実施した６地区で検出された土坑である。掘立柱建物跡ＳＢ３－01の南に位置している。土坑の平面は不整な長楕円形を呈し、規模は全長１m、幅0.8m、深さ0.2mを測る。角礫とともに須恵器椀（第91図25～28）、土師器杯（第91図29）が出土した。埋土の最下層には焼土が認められたが、この土坑内で火が使用された状況ではない。廃棄土坑や祭祀に伴う土坑の可能性が考えられる。

（岩松　保・石崎善久）

Ｂ．出土遺物（第91図）

３地区出土遺物として溝、柱穴、土坑、包含層などから出土した遺物を図示した。また、遺物の出土位置については付表２に記した。

掘立柱建物跡ＳＢ３－01（34・６）　建物を構成するＳＰ２から須恵器椀（34）、ＳＰ536から須恵器皿（６）がそれぞれ出土している。34の須恵器椀は浅い形態を示し、内外面にロクロナデの痕跡が多段状に残る。平安時代に属するものである。６の須恵器皿はやや丸みを帯びた形状を呈し、

付表２　15－３地区出土土器対照表

図番号	出土遺構	器種
1	SD514	須恵器杯B身
2	SK523	灰釉椀
3	SK523	緑釉椀
4	SP519	須恵器椀（削出し高台）
5	SP549	須恵器椀（底部糸切り）
6	SP536	須恵器皿
7	SP512	須恵器椀
8	SP539	黒色土器椀
9	SP539	土師器皿
10	SP539	黒色土器椀
11	SP539	土師質羽釜
12	SP548	土師器杯
13	SP548	黒色土器椀
14	SP518	土師器杯
15	SP504	土師器甕
16	SP507	須恵器杯B身
17	SP507	須恵器椀（底部糸切り）
18	SP502	黒色土器椀
19	SK９	瓦器椀
20	SP528	須恵器甕
21	SD506	須恵器椀
22	SD506	土師器皿
23	SD503	須恵器椀（底部糸切り）
24	SD３	土師器椀（底部糸切り）
25	SK11	須恵器椀（底部糸切り）
26	SK11	須恵器椀
27	SK11	須恵器椀
28	SK11	須恵器椀
29	SK11	土師器杯
30	SP21	瓦器椀？
31	SP21	須恵器椀
32	SP21	土師器皿
33	SP10	須恵器椀
34	SP２	須恵器椀
35	SD１	須恵器椀
36	SD１	須恵器椀
37	包含層	須恵器杯G蓋
38	包含層	須恵器杯A身
39	包含層	須恵器杯A身
40	包含層	須恵器椀
41	包含層	須恵器椀（底部糸切り）
42	包含層	黒色土器椀
43	包含層	黒色土器椀
44	包含層	瓦質羽釜
45	包含層	緑釉椀
46	包含層	緑釉椀
47	包含層	灰釉椀

口縁内面に段を形成する。

掘立柱建物跡ＳＢ03－２（16・17・７・20）　建物を構成する柱穴ＳＰ507から須恵器杯（16）、須恵器椀（17）が、ＳＰ512から須恵器椀（７）が、ＳＰ528より須恵器甕（20）がそれぞれ出土している。須恵器椀（17）は糸切り底部をもつものであり、平安時代に属する。

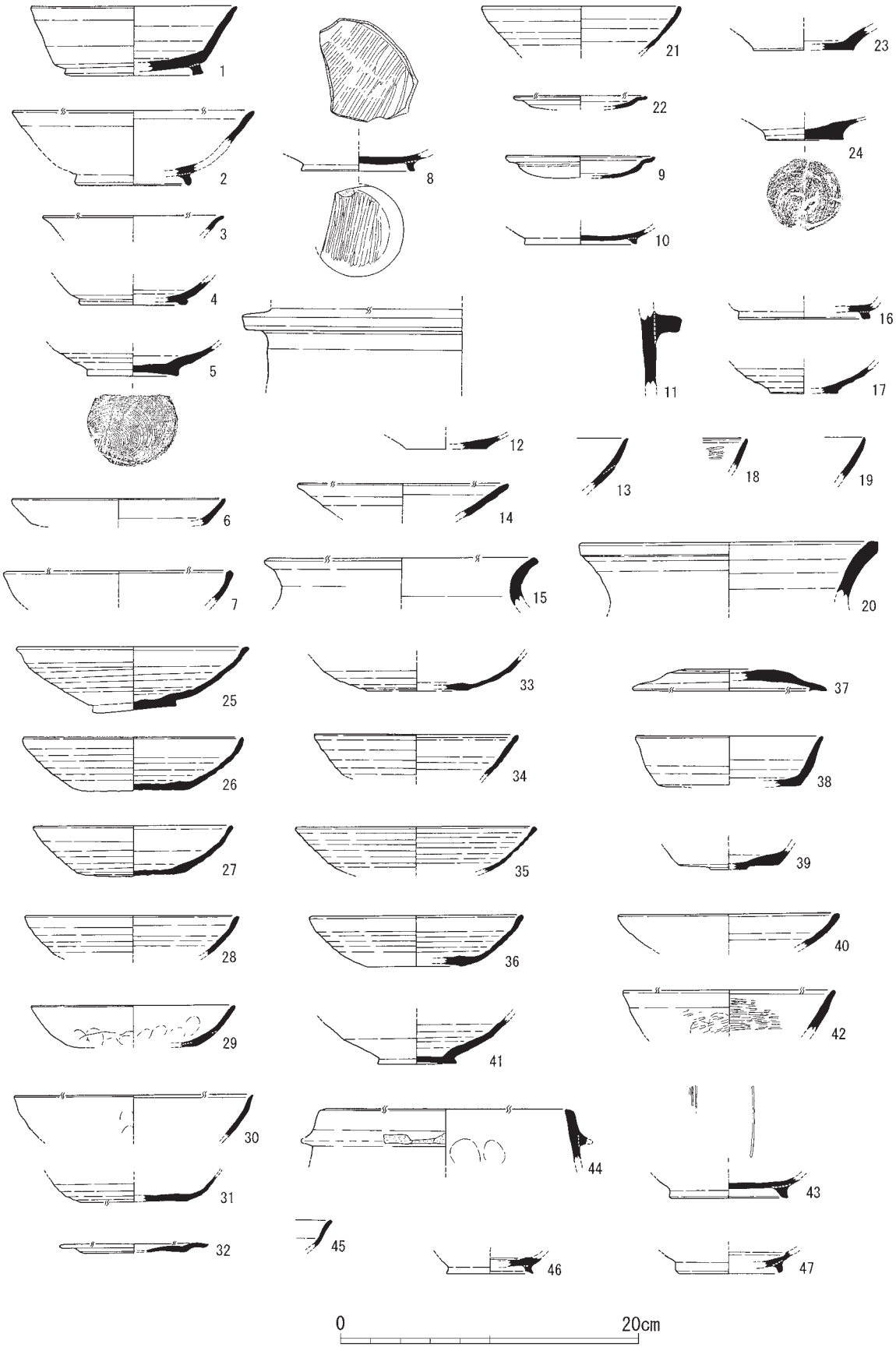
ＳＫ11（25～29）　土坑内より出土した資料であり、一括性の高い一群である。25は糸切りの平高台をもつ須恵器椀であり、内外面に多段状のロクロナデの痕跡が残る。浅い形態をとる。26・27は平底の須恵器椀であり、内外面に多段状のロクロナデの痕跡が残る。器高の低い形態をとる。28も同形態の椀であるが、底部の形状については不明。29は土師器の杯であり、ユビオサエによる整形がなされている。

ＳＫ11出土土器は掘立柱建物跡ＳＢ３－01・02と同形態のものであり、この３つの遺構は同時期に形成もしくは廃絶したものと考えられる。とくに建物との位置関係から、掘立柱建物跡ＳＢ３－01に伴う祭祀土坑である可能性が高い。

ＳＤ514（１）　１は須恵器杯Ｂである。体部は直線的に立ち上がる。高台は底部外縁よりやや内側に付く。奈良時代後半から末のものである。遺構の位置関係から掘立柱建物跡ＳＢ３－02に伴うものと考えたが、建物出土の遺物より古相のものである。あるいはこの時期に建物群が形成され、建物跡出土遺物は廃絶時のものである可能性も考慮しておきたい。

その他の遺物として、この地区では奈良時代後半から平安時代のものが多数存在する。中でも黒色土器が相当数出土しており、この時期に土地利用の中心があるものと考えられる。

（石崎善久）



第91図　３地区出土遺物実測図（２）

（5）15－4地区

15－4地区は15－2地区の南に設定した調査区である。調査区では上層遺構として掘立柱建物跡群や土坑、性格不明のピット、溝を、下層遺構として弥生時代の方形周溝墓・土坑など、古墳時代の遺構として竪穴式住居跡2基を検出した。

1）弥生・古墳時代の遺構・遺物

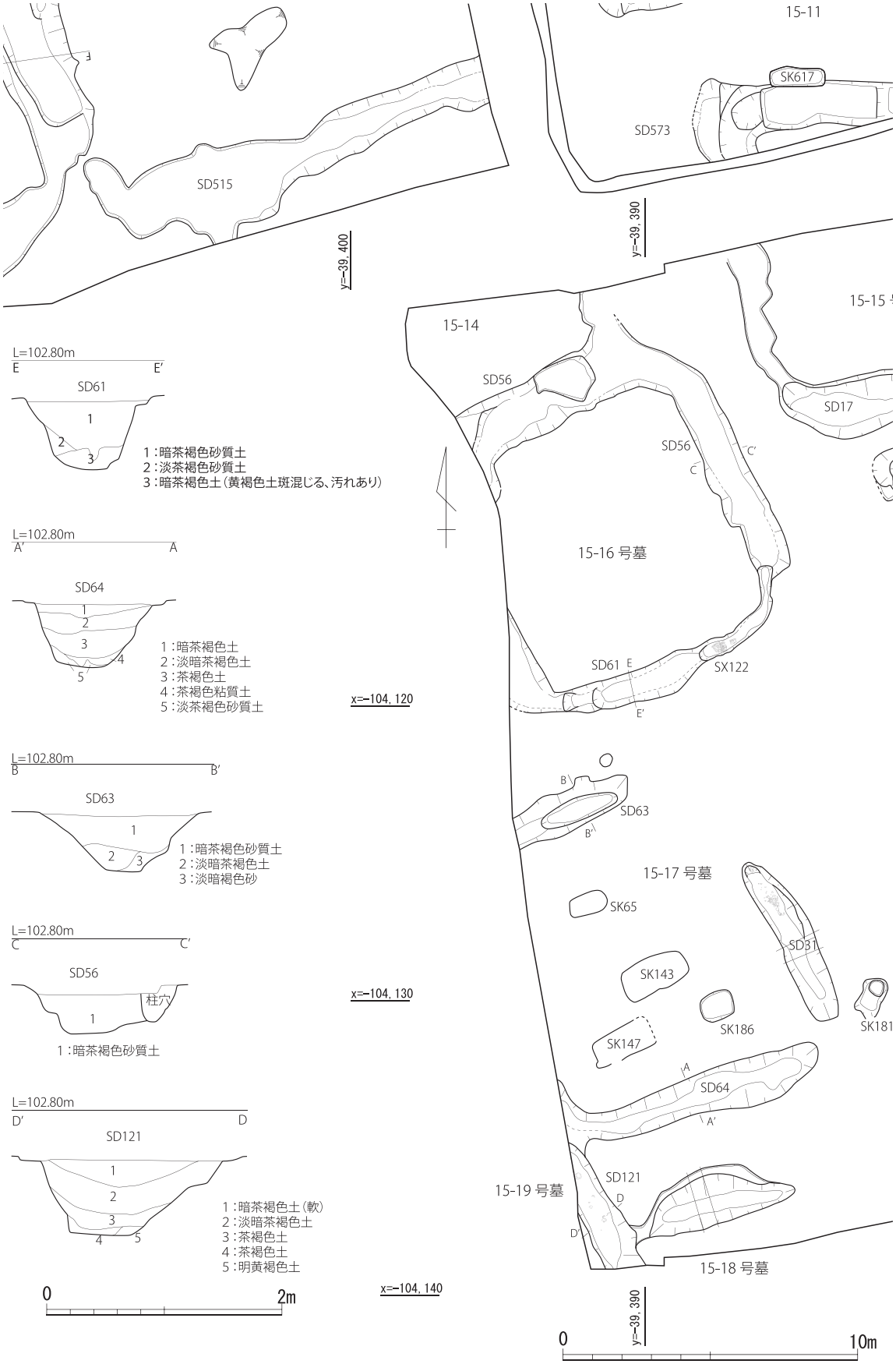
A．検出遺構

弥生時代に属する遺構として方形周溝墓5基を調査区内で検出した。。

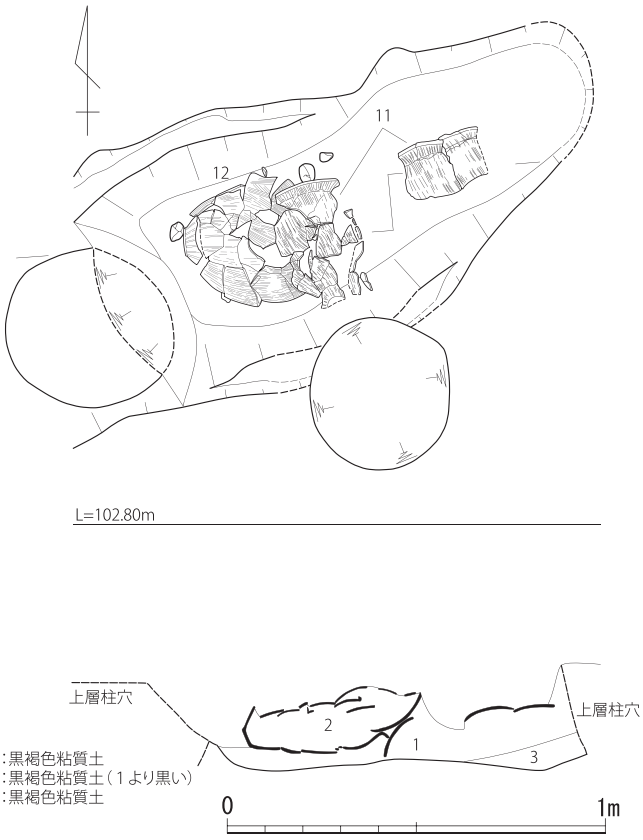
15－14号墓　調査区の北西部で確認した方形周溝墓である。15－8号墓の南SD515を北溝、SD515の南への屈曲部（幅0.9m・深さ0.14m）を西溝に、15－16号墓の北SD56（幅1.9m・深さ



第92図　4地区検出遺構配置図（弥生・古墳時代、1/400）



第93図　4地区方形周溝墓実測図（1）（平面：1/200、断面:1/50）



第94図　ＳＸ122実測図(1/20)

0.1m）を南溝に、ＳＤ56から北側に延びる溝（幅1.1m・深さ0.07m）を東側区画溝に相当するものとして復原した。周溝墓の規模は東西11m、南北11mを測る。隣接する各周溝墓との前後関係は不明である。この周溝墓に伴う遺物も抽出できなかった。

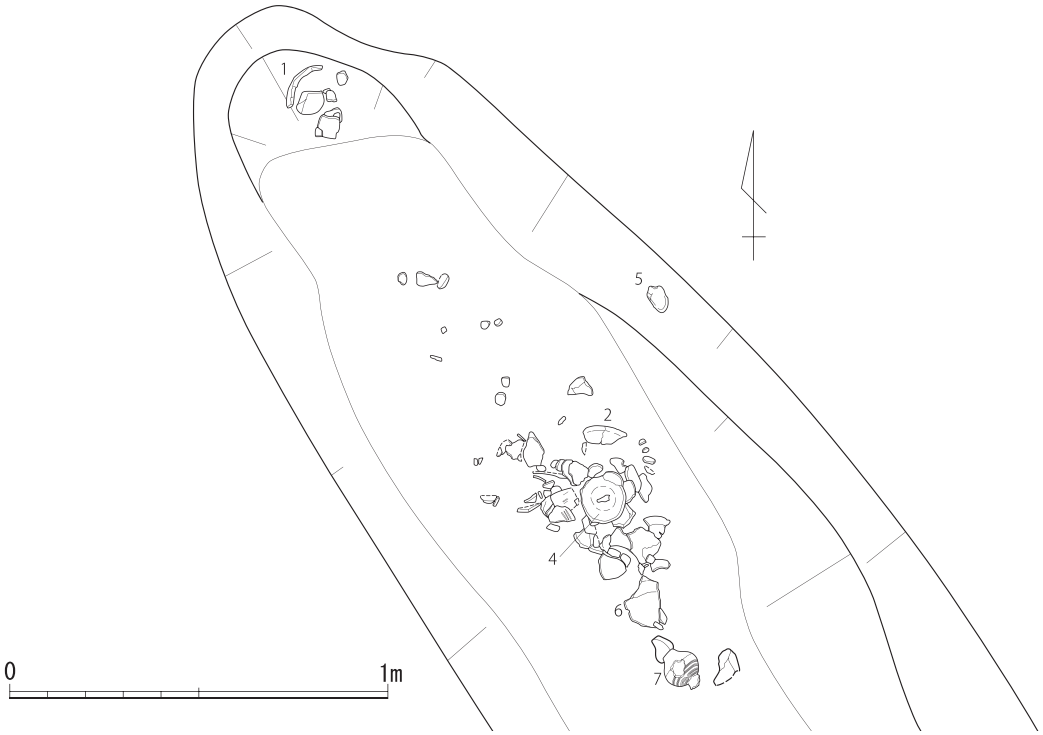
15－16号墓　ＳＤ56を北側および東側（幅１ｍ・深さ0.4m）の区画溝に、ＳＤ61を南側（幅１ｍ・深さ0.6m）および西側（幅１ｍ以上・深さ0.3m）の区画溝とする方形周溝墓である。西側は調査地区外となるが、完周する周溝である可能性が高い。周溝墓の規模は東西9.2m、南北10.3mを測る。墳丘内での埋葬施設は確認されなかった。

また、北側区画ＳＤ56は再掘削されたかのように、溝中央部が一段深く掘り込まれている。

南側区画ＳＤ61中央部はやや深く掘削されており、この部分から壺および甕が検出された（ＳＸ122、第94図）。両端を上層の柱穴により削平されているため、規模は明らかではないが、ＳＤ61が一定埋没した段階で再掘削された可能性が高い。壺(12)の口縁を東にむけ、横位で安置し、壺口縁下部は甕体部片を下から支えるように置いている。壺口縁は半裁した甕(11)を直交するように用いて蓋としている。同一個体の甕片がすぐ東側から検出されている。遺物の出土状況からは土器棺墓の可能性が考えられるが、掘形が大きいこと、壺が掘形床面より浮いている点や、甕とのあわせ方が例を見ないものであることから、ここでは人為的に据えられた土器埋納遺構として理解しておきたい。

15－17号墓　ＳＤ63（幅1.3m・深さ0.2m）を北側区画溝に、ＳＤ31（幅1.2m・深さ0.4m）を東側区画溝に、ＳＤ64を南（幅1.2m・深さ0.6m）および西側区画溝（幅0.6m以上・深さ0.3m以上）とする方形周溝墓である。北東隅および南東隅は周溝が途切れている。南西側は15－19号墓の東側区画溝であるＳＤ121と接しているが切り合い関係については明瞭ではない。また、北側区画ＳＤ63は、東側が土坑状に約25cm程度、深く掘削されている場所があり、再掘削の可能性がある。周溝墓の規模は東西約10m、南北10.7mを測る。

東側区画ＳＤ31では北半部を中心に弥生土器がまとまって出土した（第95図）。壺底部（５）のように周溝外からの転落遺物も存在し、周溝墓内外から転落、投棄された遺物が混在している可能

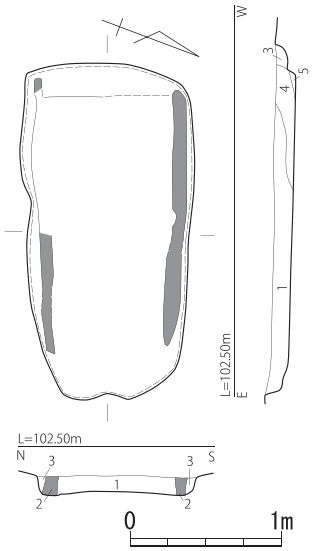


第95図　ＳＤ31遺物出土状況図(1/20)

性がある。

この周溝墓に伴う埋葬施設として、墳丘上で４基の土坑を想定する。いずれも東西方向に主軸をもち、ほぼ同一方位をとる。

木棺墓ＳＫ143(第96図)　周溝墓墳丘中央に位置する東西方向に主軸をとる木棺直葬形態をとる埋葬施設である。墓壙の平面形は東側幅がやや狭い不整形な長方形プランを呈する。断面形態は素掘りである。木棺の痕跡は部分的にしか確認できなかったが、南側長側板の西端部が小口より突出している状況が確認でき、この状況から長側板が小口板を挟み込む箱型木棺と考える。東側小口の様相は不明であり、底板の有無についても明瞭ではない。墓壙底面は東側がわずかに高い。墓壙の規模は長軸2.2m、短軸1.1m、深さ0.13mを測る。



1：黄白色斑多混暗茶褐色土
2：暗茶褐色土(棺材腐食痕)
3：1に同じ(黄白色土やや少ない)
4：1に同じ(黄白色土やや多い)
5：暗茶褐色土と黄白色土のミックス

第96図　ＳＫ143実測図
(S= 1/50)

ＳＫ147(第97図)　ＳＫ143の南西で検出された平面長方形プランを呈する素掘りの土坑である。残存状況は悪いが、ＳＫ143と主軸をほぼ同じくすることや、規模・形状から弥生時代の遺構と判断した。長軸２m、短軸１m、深さ0.06mを測る。棺の痕跡は確認できず、木棺直葬墓か土壙墓であるか不明である。

ＳＫ65(第97図)　ＳＫ143の北西で検出された素掘りの土坑である。主軸をＳＫ143と同じく東西方向にとること、上層遺構に切られること、出土遺物などから弥生時代の遺構と判断した。



第97図　ＳＫ147・65・185実測図(1/50)

墓壙の平面形はいびつな長方形プランを呈し、長軸1.3m、短軸0.8m、深さ0.2mを測る。木棺の痕跡等は確認できず、土壙墓と考えられる。

ＳＫ185(第97図)　ＳＫ143の南東で検出された素掘りの土坑である。主軸方位をＳＫ143同様、東西軸にとること、形態などから弥生時代の遺構と判断した。長軸1.1m、短軸１m、深さ0.2mを測るやや短軸に比して長軸の短い長方形プランを呈する。木棺の痕跡は確認できず、土壙墓であると判断する。

15－19号墓　15－17号墓の南西に位置する南北方向の溝、ＳＤ121(幅1.25m、深さ0.2m)を東側区画溝とする方形周溝墓と想定した。墳丘の大部分は調査区外であり、詳細は不明である。ＳＤ121は南側で幅を減じてさらに調査区外に延びる。

15－17号墓および、南東に想定される15－18号墓との前後関係は不明である。

遺物は周溝ＳＤ121内から甕(19)などが出土している(第98図)。出土状況からは、北側の遺物群は墳丘からの転落、南側の遺物群は周溝東側からの遺棄の可能性がある。

15－18号墓　15－19号墓の東側区画ＳＤ121から東へ突出する溝(幅２m、深さ0.7m)を北側区画溝に西側は15－19号墓の東側区画溝と共有する方形周溝墓として考える。大部分が調査区外のため、詳細は不明である。

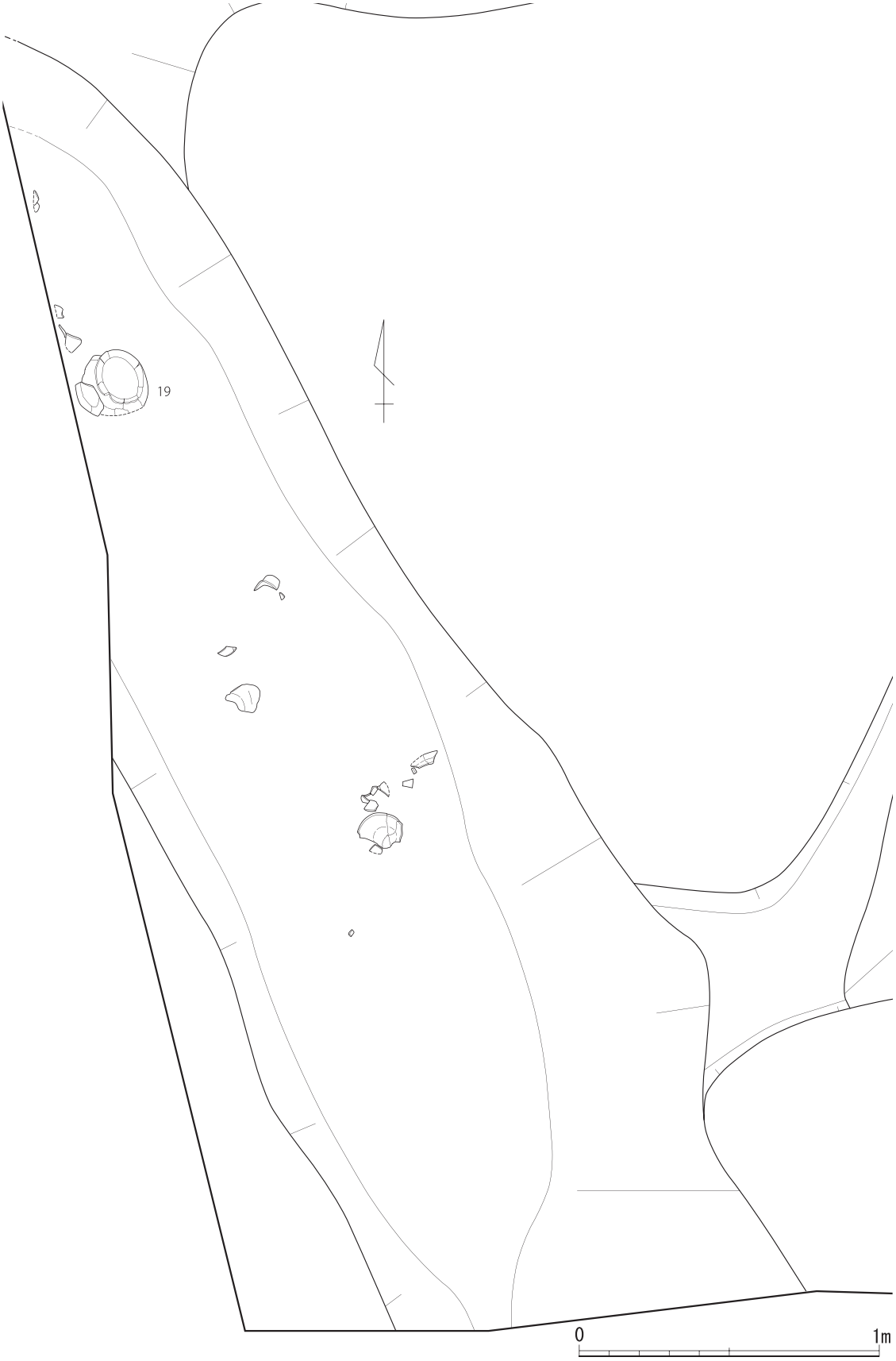
15－15号墓　４地区北側中央で検出した。２地区で検出したＳＤ573を北側区画溝とし、４地区のＳＤ17により区画される。周溝は一部未調査であるが、完周するものと推定される。ＳＤ17は東で幅1.5m・深さ0.3m、南側で幅1.6m・深さ0.2m、西側で幅0.9m・深さ0.1mを測る。周溝墓の規模は東西8.8m、南北10.7mを測る。

北側区画ＳＤ573は溝底面が再掘削された状況を呈しており、北側に接する方形周溝墓15－11号墓の盛土を確保するために溝内が掘削された可能性を考えておきたい。

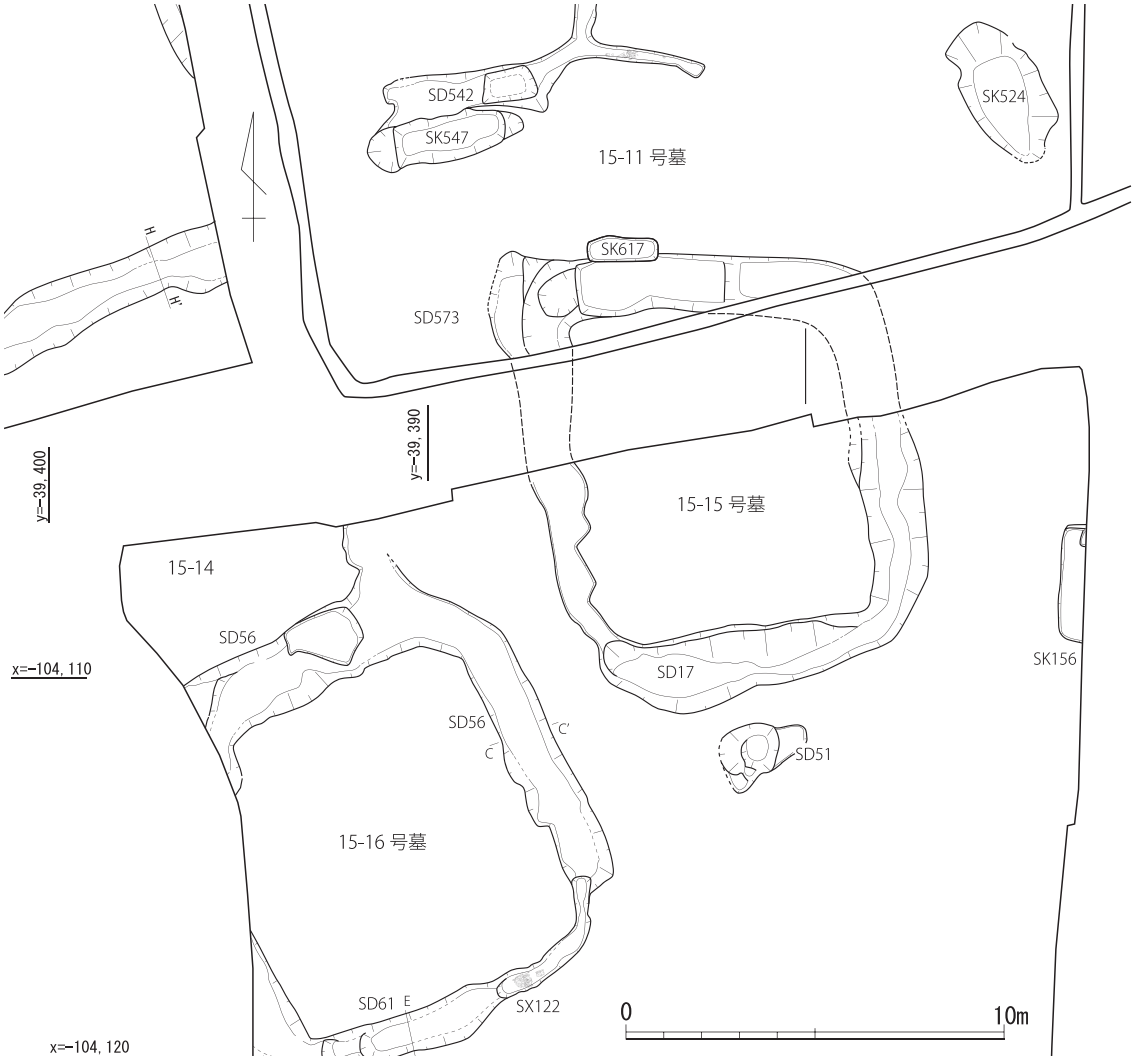
また、ＳＤ17は西側部分が他の部分より浅いのが特徴的である。

以上の方形周溝墓の他に、４地区では弥生時代の遺構として土坑が検出されている。

ＳＤ51　15－15号墓の南で検出した不整形な土坑である。埋土中からは弥生土器のみが出土



第98図　ＳＤ121遺物出土状況図(1/20)



第99図　４地区方形周溝墓実測図（２）（平面：1/200、断面:1/50）

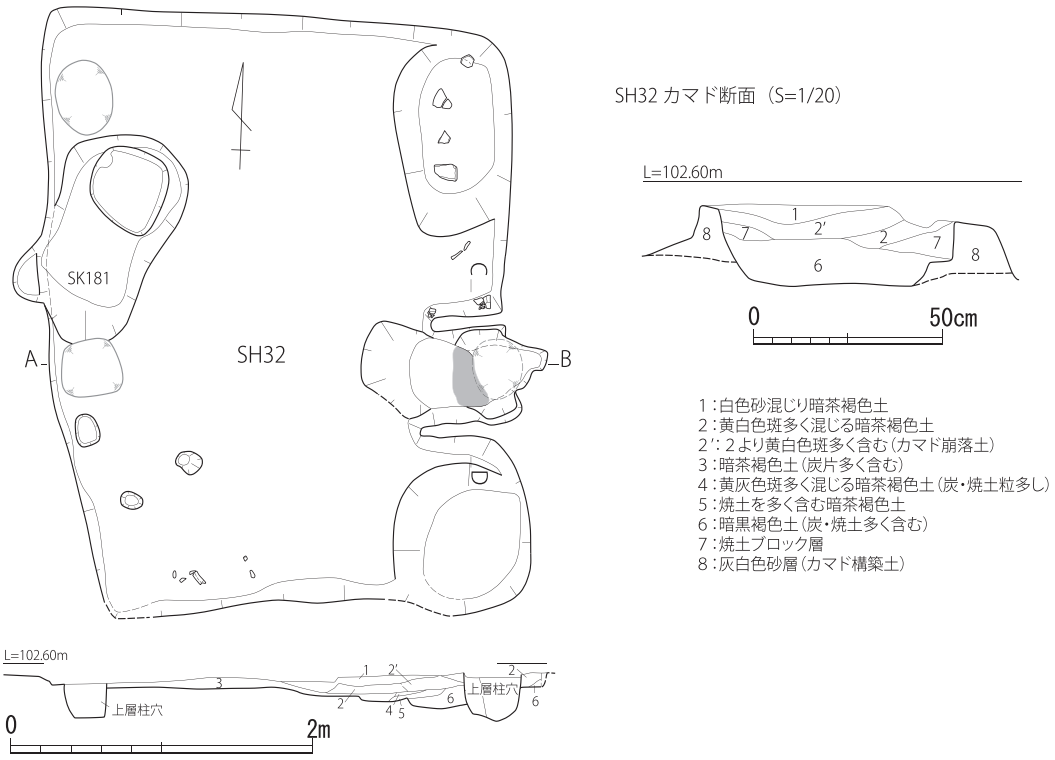
している。長軸2.4m、短軸1.4m、深さ0.27mを測る。

ＳＫ156　調査区北東で検出した土坑である。大部分が調査区外のため、遺構の性格などは不明である。南北３m、東西0.6m以上、深さ0.15mを測る。

ＳＫ181　竪穴式住居跡ＳＨ32床面で検出された土坑である。不整形な長方形プランを呈し、床面は一段深く掘削されている。長軸1.3m、短軸0.7m、深さ0.4mを測る。

４地区では弥生時代の遺構のほかに、古墳時代の遺構として２基の竪穴式住居跡を検出した。

竪穴式住居跡ＳＨ32（第100図）　４地区南部で検出した竪穴式住居である。平面は南北にやや長い長方形プランを呈する。規模は東西３m、南北3.8m、深さ0.15mを測る。住居内の施設として、北東および南東部で土坑を、東辺中央でカマドを検出した。周壁溝や主柱穴は確認できない。造り付けのカマドは第100図８層を盛り上げて壁体とし、燃焼部を床面より深く掘り下げている。支柱石等は検出されていないが、上層柱穴によりカマド内部が撹乱されているため、本来の有無は明らかではない。遺物はカマド周辺から土師器甕（第114図１）が出土している。飛鳥時代の竪穴式住居跡と考える。

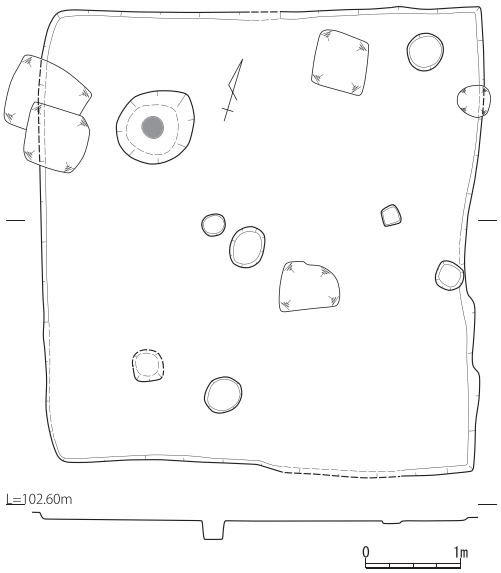


第100図　竪穴式住居跡ＳＨ32実測図（1/50）

竪穴式住居跡SH68（第101図）　４地区中央で検出した南北方向に主軸をもつ竪穴式住居跡である。平面は方形プランを呈し、規模は南北4.8m、東西4.5m、深さ0.1mを測る。住居内の施設は明確には確認されておらず主柱穴も特定することはできなかった。

埋土中から若干の土師器・弥生土器が出土している。周溝墓を切っていること、カマドがないこと、須恵器が出土していないことと17次調査の成果から古墳時代前期の竪穴式住居跡の可能性が高い。

（岩松　保・石崎善久）

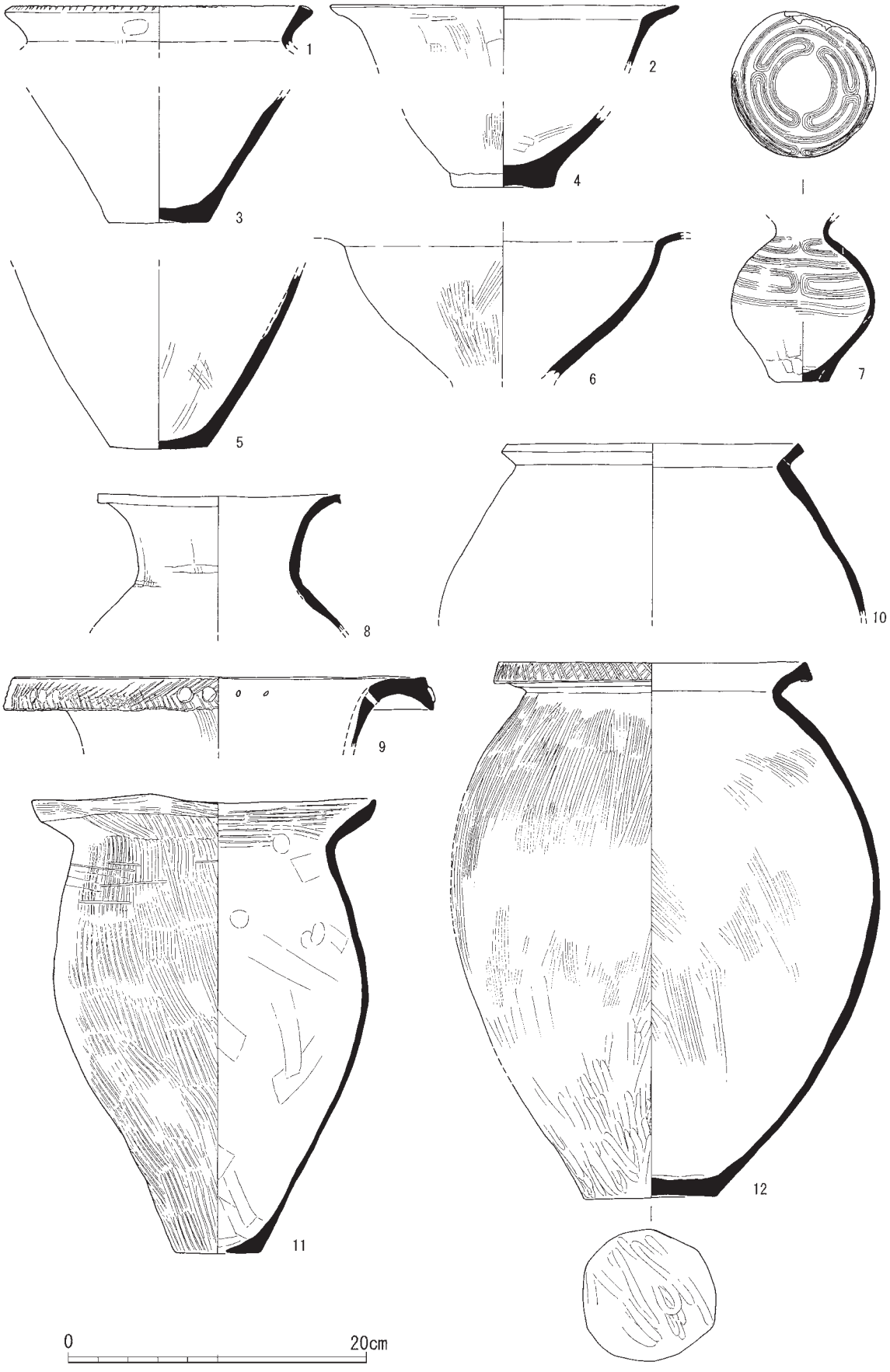


第101図　竪穴式住居跡ＳＨ68実測図（1/80）

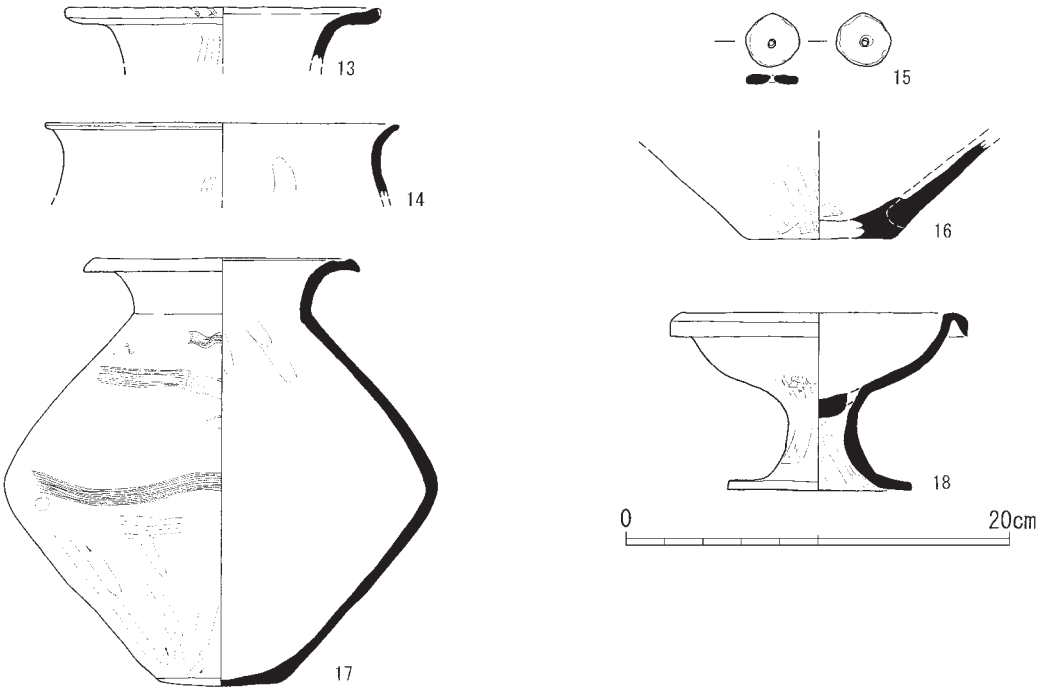
Ｂ．出土遺物（第102・103図）

４地区出土遺物として、弥生土器を図示した。なお、竪穴式住居跡ＳＨ32の出土土器は４地区の奈良時代以降の土器と共に報告する。

ＳＤ31（１～７）　土器片が多く出土した。７の細頸壺と思われる壺体部は頸部以上を欠き、全容が分からない。体部は、最終的に一周する櫛描流水文で飾られる。供献土器であると考えられるものである。甕は、「く」字状口縁（１）と、全く張りのない折り曲げ口縁甕（２）がある。１は、口縁端部の形状から、15－１地区ＳＫ420などにみられたようなものと類似しており、体部が大きく張る形状のものであると考えられる。６は、水平口縁高杯の杯部である。口縁内に突帯はな



第102図　4 地区出土遺物実測図（1）



第103図　４地区出土遺物実測図（２）

く、水平部も折り曲げて作られていることから、出現したばかりのものと考えられる。

ＳＤ121（８～10）　口縁端部に面をもつ無文の広口壺（８）と、口縁端部が大きく垂下し、そこを櫛状工具による綾杉文と円形浮文で飾る大型の広口壺（９）がある。９は２個一組の紐孔をもつ。10の甕は、短い口縁をもち、体部が大きく張る形状の「く」字状口縁甕である。

SX122（11・12）　11は、近江系の受口状口縁甕である。外面ハケメ調整が非常に粗く、胎土も褐色で大粒の石英や長石が目立つということから、明らかな搬入品であることがわかる。12は、短い口縁部をもつ広口壺である。外面をハケメ調整した後、下半をミガキ調整を施す。底面にもミガキ調整がみられる。口縁端面には１本描きで表現された斜格子文が飾られる。胎土は在地のものと変わりない。11の体部下半が12の口縁部を覆うようにして出土しており、同一時期に据え付けられたものである。

ＳＤ64（13～16）　13の広口壺は、頸部の途中で屈曲して折れ曲がり、広がる形状である。口縁端面に刻目をもつ。14は折り曲げ口縁甕である。16は大型の壺の底部であると考えられる。土製円盤もみられる（15）。

ＳＤ17（17・18）　広口壺と高杯を掲載した。17は、体部が中位で強く張る形状で、南丹波ではあまりみられない形状である。体部は恐らく、櫛描波状文と直線文が交互に施されていたものと思われる。最上段は波状文である。体部下半の調整は、ミガキともケズリともつかない。18は、形骸化したような小型の水平口縁高杯である。口縁端が全くのびず、すぐに垂下する。内外共にケズリ調整が施される。

（谷上真由美）

２）.奈良時代以降の遺構・遺物

Ａ．検出遺構

15－４地区では奈良時代以降の遺構として、掘立柱建物跡６棟、柵・溝・土坑などを検出した。奈良時代以降の遺構密度は１地区同様高いといえる。

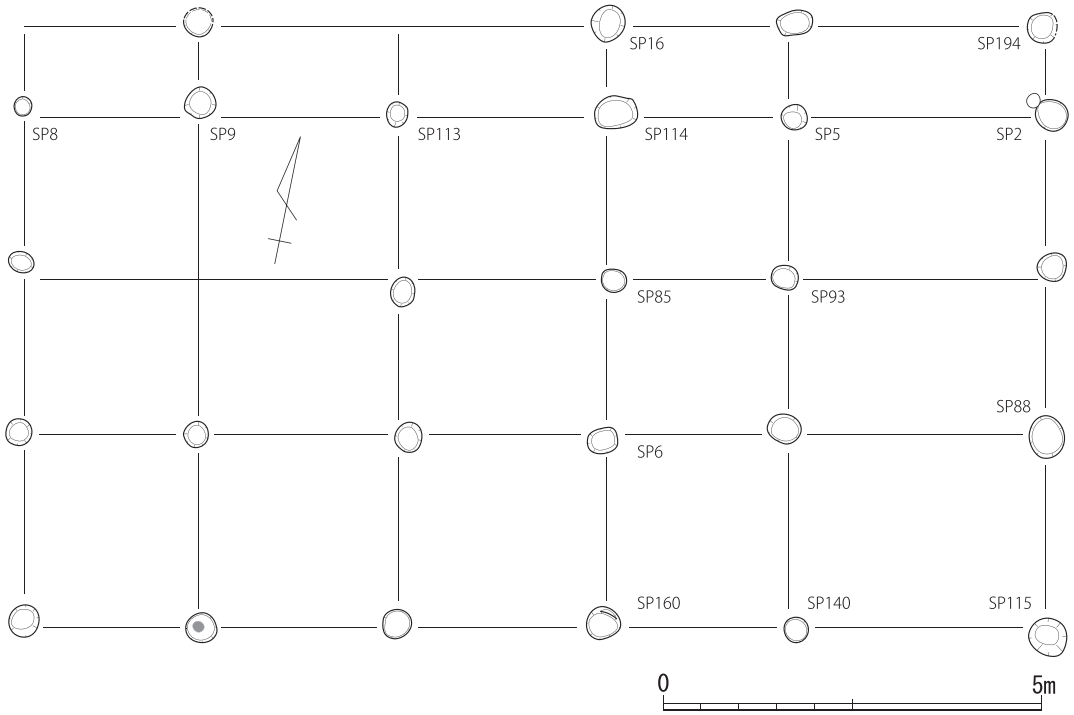
掘立柱建物跡ＳＢ４－01（第105図）　調査区北部で検出した東西棟の、総柱掘立柱建物跡である。規模は東西５間（13.5m）、南北４間（7.9m）を測る。主軸は座標軸より西に振っている。北側の１間分の柱穴間距離は、他の柱穴間距離に比して1.2mと短く、庇もしくは縁などの可能性がある。また、東側１間分は他の柱間に比して長く、3.4mを測る。建物を構成する柱穴の平面形は円形、もしくは不正円形を呈し、規模は直径0.2～0.5m、深さ0.1～0.3mを測る。断面形は全て素掘りの構造をとる。柱痕跡の確認されたものから径15cm程度の柱が使用されていたものと考えられる。ＳＰ８から緑釉椀（39・40）、灰釉椀（41）、ＳＰ114から須恵器椀（30）、ＳＰ５から須恵器杯（42）、ＳＰ140から緑釉椀（43）が出土している。

また、この掘立柱建物跡の東で検出された柵ＳＡ４－01は掘立柱建物跡４－ＳＢ01と方位、柱間を揃えており、この建物に付属する施設であると考える。ＳＡ４－01は南北軸に主軸をとり、４間（10m）の規模をもつ。

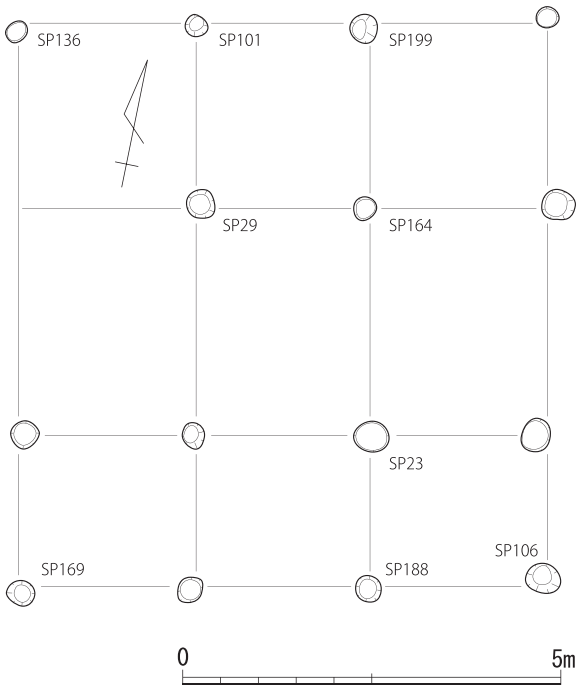
掘立柱建物跡ＳＢ４－02（第106図）　調査区の中央で検出された総柱の掘立柱建物跡である。主軸は掘立柱建物跡ＳＢ４－01と同一方位をとる。また、ＳＤ30を柱穴が切っており、ＳＤ30に後出する建物である。建物の規模は東西３間（７m）、南北３間（7.5m）を測り、南北にやや長い構造をとる。特に、南北中央の１間は３ｍを測り、他の柱間よりも長い。建物を構成する柱穴の平面形は円形、もしくは不正円形を呈し、規模は直径0.3～0.5m、深さ0.3m前後を測る。断面形は全て素掘りの構造をとる。ＳＰ136から瓦器椀（52）、ＳＰ101から瓦器椀（55）、ＳＰ23から土師皿（56・57）、瓦器椀（58）が出土している。



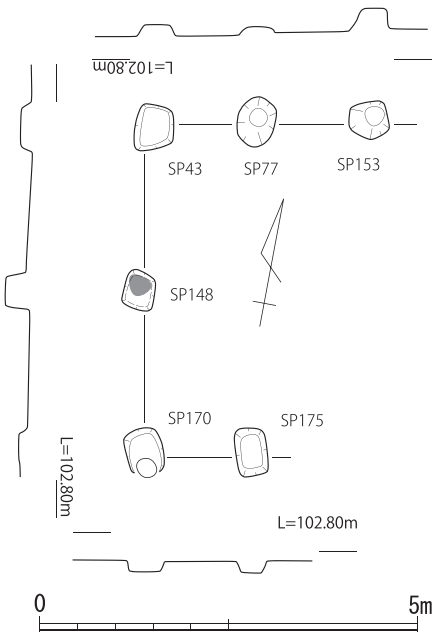
第104図　４地区検出遺構配置図（奈良・平安時代、1/400）



第105図　掘立柱建物跡SB４－01実測図(1/100)



第106図　掘立柱建物跡SB４－02実測図(1/100)



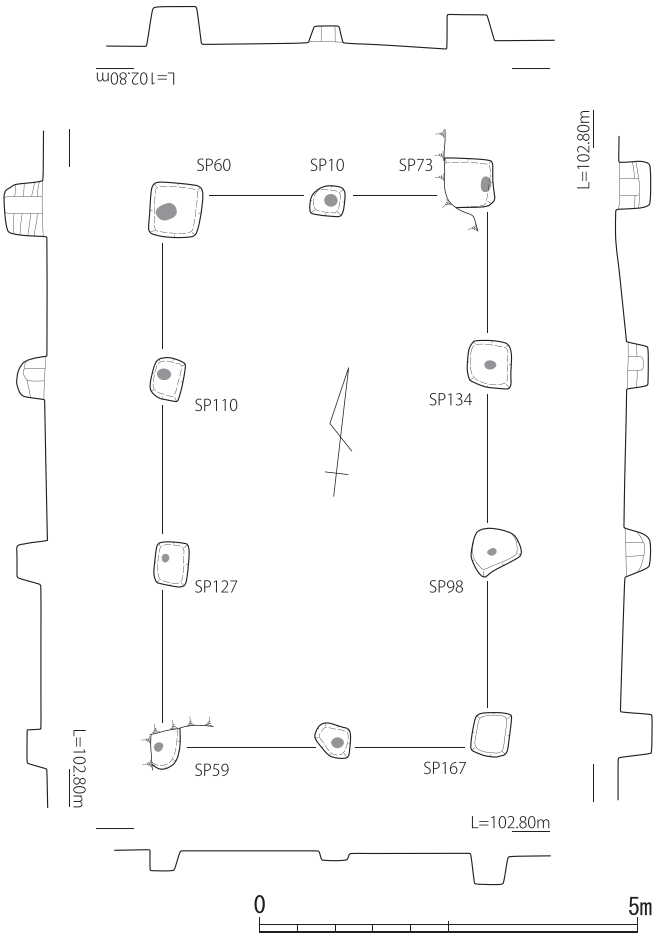
第107図　掘立柱建物跡SB４－03実測図(1/100)

掘立柱建物跡ＳＢ４－03（第107図）

調査区南東部で検出された掘立柱建物跡である。調査区外に延びるため、全容は不明である。南北２間（4.4m）、東西２間（３m）以上を測る。柱穴は方形もしくは不正方形であり、規模は一辺0.4～0.7m、深さ0.15～0.3mを測る。柱痕跡の確認されたものから、径約30cm程度の柱が使用されていたものと考えられる。図示し得る遺物はない。

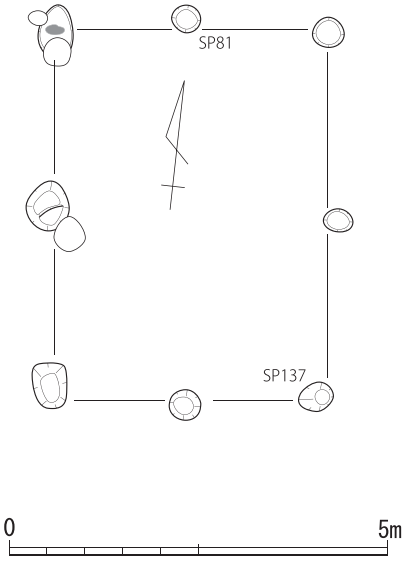
掘立柱建物跡ＳＢ４－04（第108図）

調査区中央より北東寄り、掘立柱建物跡ＳＢ４－01と重複する掘立柱建物跡である。直接的な切り合い関係がないため、遺構から前後関係を示すことはできない。建物の規模は東西２間（4.3m）、南北３間（7.3m）を測る。主軸はわずかに西に振る。建物を構成する柱穴は方形もしくは不正方形であり、規模は一辺0.4～0.7m、深さは0.15～0.5mを測る。断面形は素掘りのものが大部分である。また、南北両梁行中央の柱穴が小規模な点が特徴的である。ＳＰ167から須恵器杯（28）が出土している。



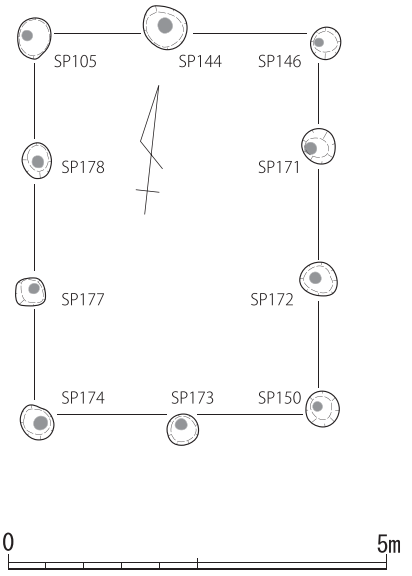
第108図　掘立柱建物跡ＳＢ４－04実測図（1/100）

掘立柱建物跡ＳＢ４－05（第109図）　調査区中央の東寄りから検出された南北方向に主軸をもつ掘立柱建物跡である。主軸方位は、掘立柱建物跡ＳＢ４－04とほぼ一致する。また、柵ＳＡ４－01と重複するが、直接的な切り合い関係はない。規模は東西２間（3.6m）、南北２間（4.9m）を測る。建物を構成する柱穴は、円形もしくは不正円形のものが大部分であるが、一部、不正方形のものもみられる。柱穴の規模は径0.3～0.6mと幅があり、特に、西側桁行の柱穴は他に比して大型である。柱痕跡の確認された北西隅柱穴では、やや不整ながら径20cmの柱が使用されていたものと考えられる。図示しうる遺物はない。

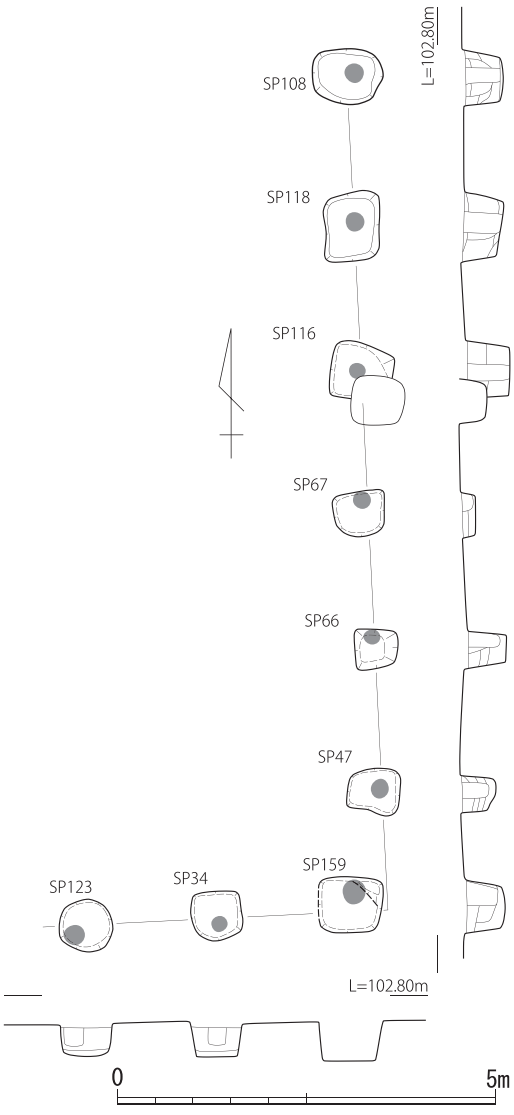


第109図　掘立柱建物跡ＳＢ４－05
実測図（1/100）

掘立柱建物跡ＳＢ４－06（第110図）　調査区南東部で検出した南北方向に主軸をもつ掘立柱建



第110図　掘立柱建物跡SB４－06実測図(1/100)



第111図　柱列ＳＢ４－０７実測図(1/100)

物跡である。主軸方位は掘立柱建物跡ＳＢ４－04・05と同一方位をとる。また、竪穴式住居跡ＳＨ32を切る。建物の規模は南北３間(５m)、東西２間(3.7m)を測る。建物を構成する柱穴は、平面形は円形もしくは不正円形であり、規模は径0.4～0.6mを測る。断面形は素掘りである。全ての柱穴で柱痕跡を確認した。柱痕跡の規模から、この建物に使用されていた柱は径20cm前後と考えられる。図示しうる遺物はない。

柱列ＳＢ４－07(第111図)　調査区北西部で検出した柱穴群である。柱穴の規模や形状から一連の施設と考えるが、北東の柱穴から西あるいは北にも、連続する遺構がないため、掘立柱建物跡ではない可能性がある。便宜上、ＳＢの遺構略号を付して報告する。

遺構は東西２間(3.7m)以上、南北６間(11.2m)を確認した。柱穴は平面方形もしくは不正方形が大部分であるが、円形のものも認められる。柱穴の規模は一辺0.6～0.9m、深さ0.2～0.6mを測る大型の柱穴から構成される。主軸方位はわずかに西に振っている。全ての柱穴から柱痕跡が検出されており、使用された柱は径25cm前後のものであったと考える。図示しうる遺物はない。

遺構の性格については、掘立柱建物跡の可能性もあるが、何らかの施設を囲繞する柵である可能性も考慮しておきたい。

ＳＤ30(第104・112図)　調査地南で検出された東西方向の溝である。幅0.8m、深さ0.2m、全長15mを測る。主軸方位はほぼ真東西に近い。この溝は建物群に伴う区画溝の可能性が高いと考える。また、隣接する５地区で検出したＳＤ13と有機的な関連があると考えられるが、この点については後述する。

溝の東端では土坑(第113図)を検出した。溝の底面から掘り込まれており、平面は両端の丸い長方

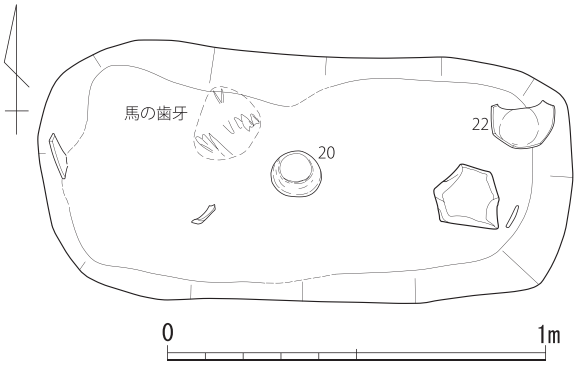
形プランを呈する。規模は長さ1.4m、幅0.64m、深さ0.3mを測る。

土坑内からは杯身(20・22)とともに馬の歯牙と思われる動物遺体を検出した。この遺構の性格については祭祀土坑と考える。

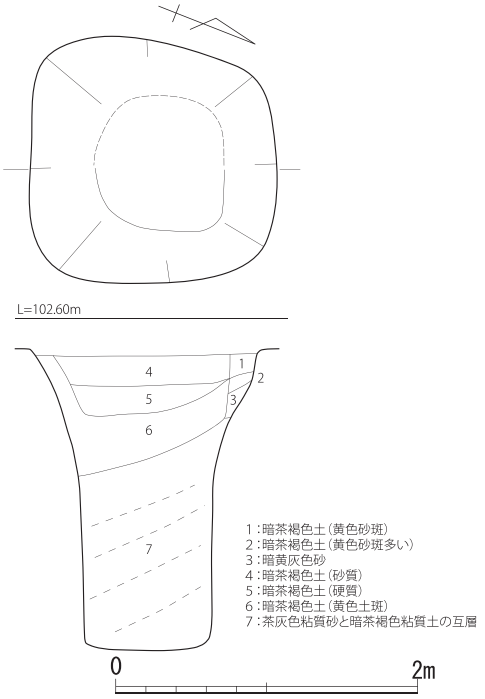
ＳＫ37(第113図)　調査区南端で検出した素掘りの土坑である。平面は方形プランを呈し、一辺1.6mを測る。深さは２mを測り、埋土の観察などから井戸と判断する。

遺物は須恵器を中心とした遺物(６～11)が出土している。

(岩松保・石崎善久)



第112図　ＳＤ30東端土坑遺物出土状況平面図(1/20)



第113図　ＳＫ37実測図(1/50)

Ｂ．出土遺物(第114・115図)

４地区出土遺物として、土坑、溝、柱穴などから出土した遺物を図示した。なお、竪穴式住居跡ＳＨ32の遺物もここで概要を述べる。

１はＳＨ32出土の土師器甕である。直立気味に立ち上がる口縁をもち、口縁端部は内面に屈曲させる。古墳時代後期から飛鳥時代に属するものと考える。

２～５はＳＫ69出土遺物である。２は杯Bの底部、３は内面に暗文をもつ土師器杯の小片、４は小型の土師器甕であり、あまり開かない口縁をもつ。５は大きく口縁の開く土師器甕である。

６～11はＳＫ37出土遺物である。６は浅い椀形の須恵器杯身である。７はやや大型の須恵器椀である。８は浅い椀形を呈し、高台をもたない須恵器杯である。９は灰釉陶器皿である。10は須恵器小型壺の口縁である。11は軟質の焼成で瓦質土器のような質感をもつ壺底部である。出土層位が明らかでなく混入品、あるいは最終埋没時の遺物の可能性がある。

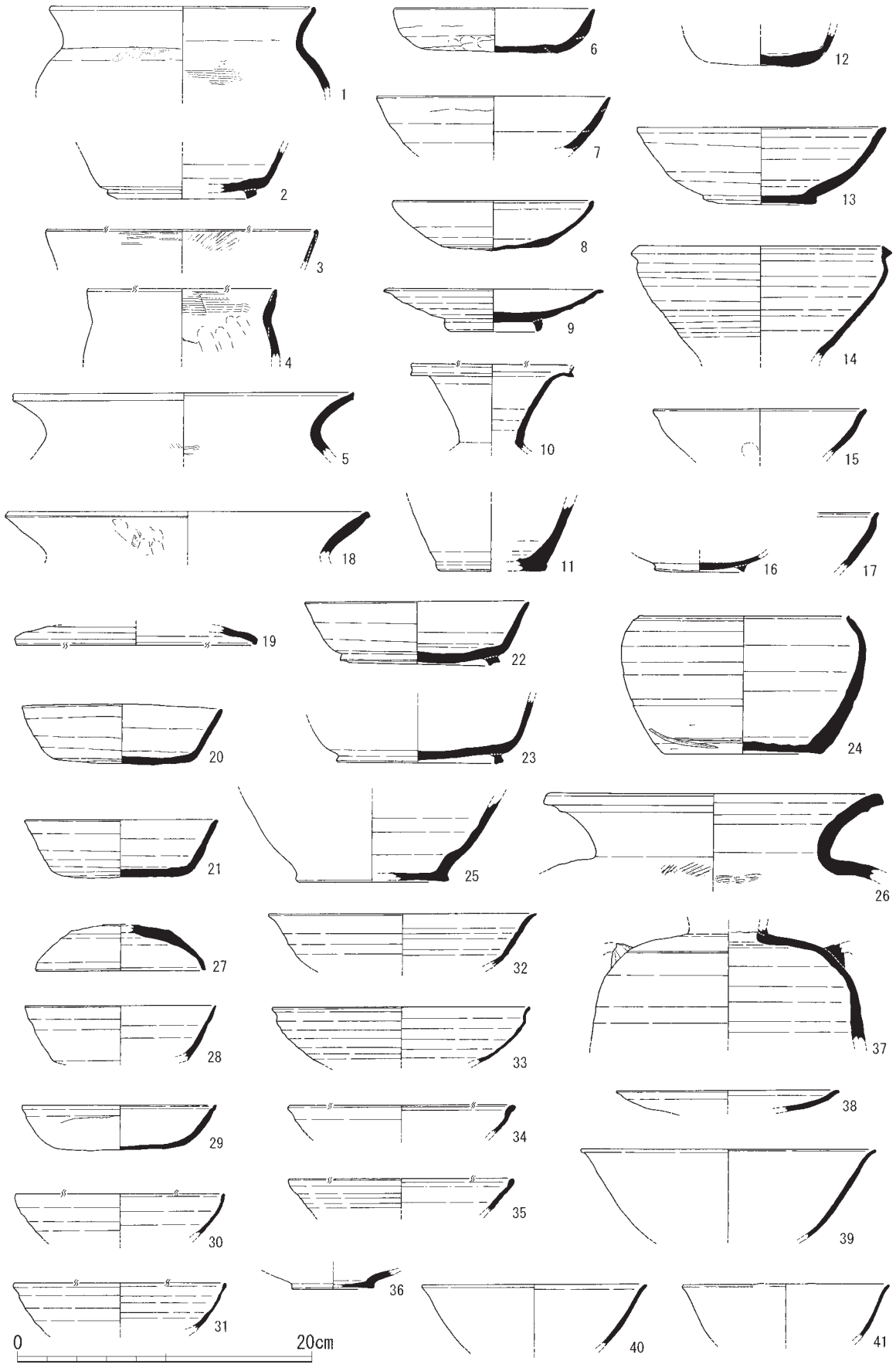
12はＳＫ36出土の須恵器杯Ａの底部と思われる個体である。この遺構自体は明瞭な掘形がなく、包含層として捉えるものであろう。

13・14はＳＫ124出土遺物である。13は糸切り底部をもつ須恵器椀である。14は須恵器鉢であり口縁部を拡張する。また、外面のロクロナデが多段状に残される。

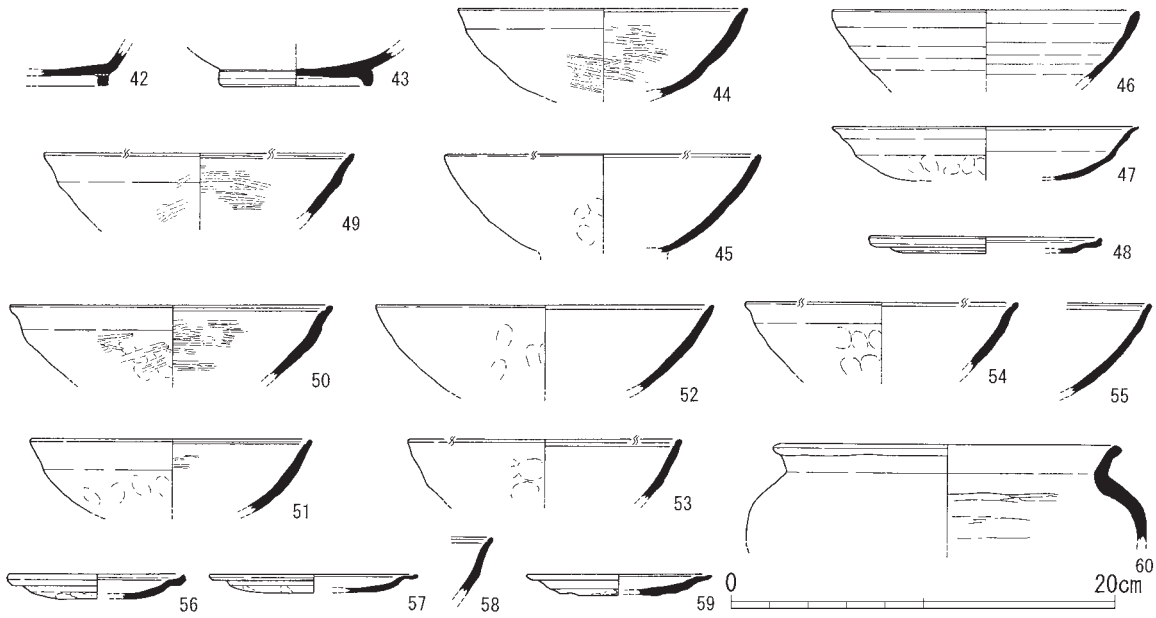
15～17はＳＸ82出土の瓦器椀である。16の高台は断面三角形を呈する。

18・27はＳＤ49から出土した須恵器杯Ｈ蓋と土師器甕である。

19～26は区画溝とみられるＳＤ30出土遺物である。20・22は馬の歯牙と供に土坑内から出土した須恵器である。この溝の出土遺物には奈良時代後半に属する遺物が多い。後述する５地区のＳ



第114図　４地区出土遺物実測図（３）



第115図　４地区出土遺物実測図（４）

D13との同時併存に矛盾はないものと判断する。25は糸切り底をもつ須恵器壺であり、溝の埋没時期を示す資料であろう。

28～60はピットからの出土遺物である。付表３に対照表を付した。このうち、建物に伴う遺物は以下のとおりである。

掘立柱建物跡ＳＢ４－01ではＳＰ８から緑釉陶器椀(39・40)、灰釉陶器椀(41)、ＳＰ114から須恵器椀(30)、ＳＰ５から須恵器杯(42)、ＳＰ140から緑釉陶器椀(43)が出土している。

掘立柱建物跡ＳＢ４－02ではＳＰ136から瓦器椀(52)、ＳＰ101から瓦器椀(55)、ＳＰ23から土師皿(56・57)、瓦器椀(58)が出土している。

掘立柱建物跡ＳＢ４－04ではＳＰ167から須恵器杯(28)が出土している。

以上のように、総柱建物であるＳＢ４－01・02は平安後期から末頃の造営とみられ、その他の建物については、ＳＢ４－04と主軸を同じくすることから、奈良時代後半を中心とする年代を考えておきたい。ＳＤ30も同時期のものである。

また、この地区では瓦器椀が目立つことも注目される。時塚遺跡における平安時代後期から中世にかけての集落域のあり方を検討する上で重要な資料といえよう。　（石崎善久）

付表３　15－４地区柱穴出土遺物対照表

図番号	出土遺構	器種
28	SP167	須恵器杯A身
29	SP100	土師器杯
30	SP114	須恵器椀
31	SP139	須恵器椀
32	SP95	須恵器椀（無釉陶器か）
33	SP86	須恵器椀
34	SP112	須恵器椀
35	SP18	須恵器椀
36	SP18	須恵器椀（糸切り底）
37	SP28	須恵器耳壺
38	SP58	緑釉皿
39	SP８	緑釉椀
40	SP８	緑釉椀
41	SP８	灰釉椀
42	SP５	須恵器杯B身
43	SP140	緑釉椀
44	SP152	黒色土器椀
45	SP152	瓦器椀
46	SP152	土師器椀
47	SP152	土師器杯
48	SP152	土師器皿
49	SP133	黒色土器椀
50	SP198	瓦器椀
51	SP198	瓦器椀
52	SP136	瓦器椀
53	SP84	瓦器椀
54	SP23	瓦器椀
55	SP101	瓦器椀
56	SP23	土師器皿
57	SP23	土師器皿
58	SP23	瓦器椀
59	SP70	土師器皿
60	SP23	土師器壺

（6）15－5地区

15－5地区は15－4地区の東に設定した調査区である。調査区では上層遺構として掘立柱建物跡群や土坑・性格不明のピット・溝を、下層遺構として弥生時代の竪穴式住居跡や木棺直葬墓を検出した。遺構密度は希薄である。

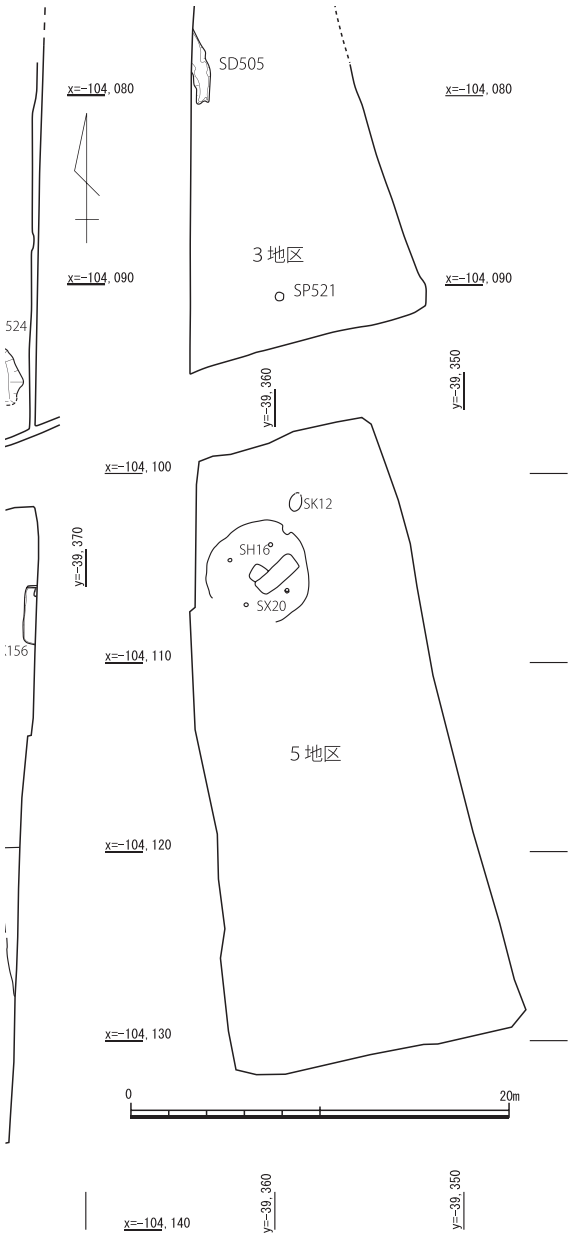
1）弥生時代の遺構・遺物

A．検出遺構

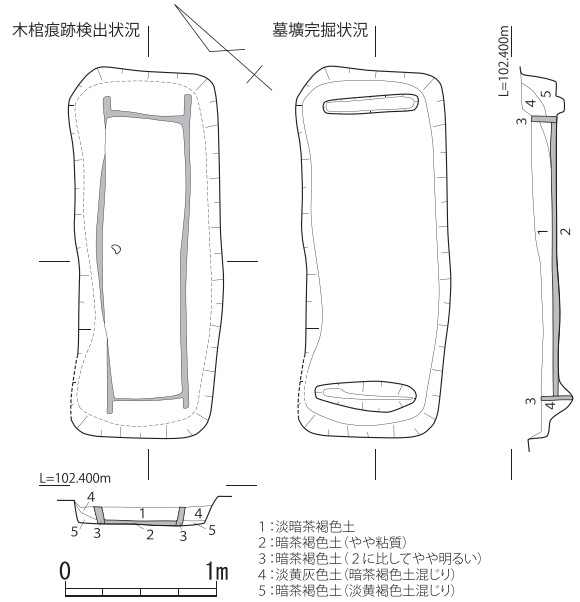
弥生時代に属する遺構として木棺直葬墓1基、竪穴式住居跡1基を検出した。遺構密度は他の地区に比して薄い。

木棺直葬墓ＳＸ20（第117図）　調査区北側で検出された東西方向に主軸をもつ木棺直葬墓である。この遺構周辺には、竪穴式住居跡や廃棄土坑と思われる遺構以外に、溝などの区画を示す遺構は検出されておらず、無区画の木棺墓であると考える。

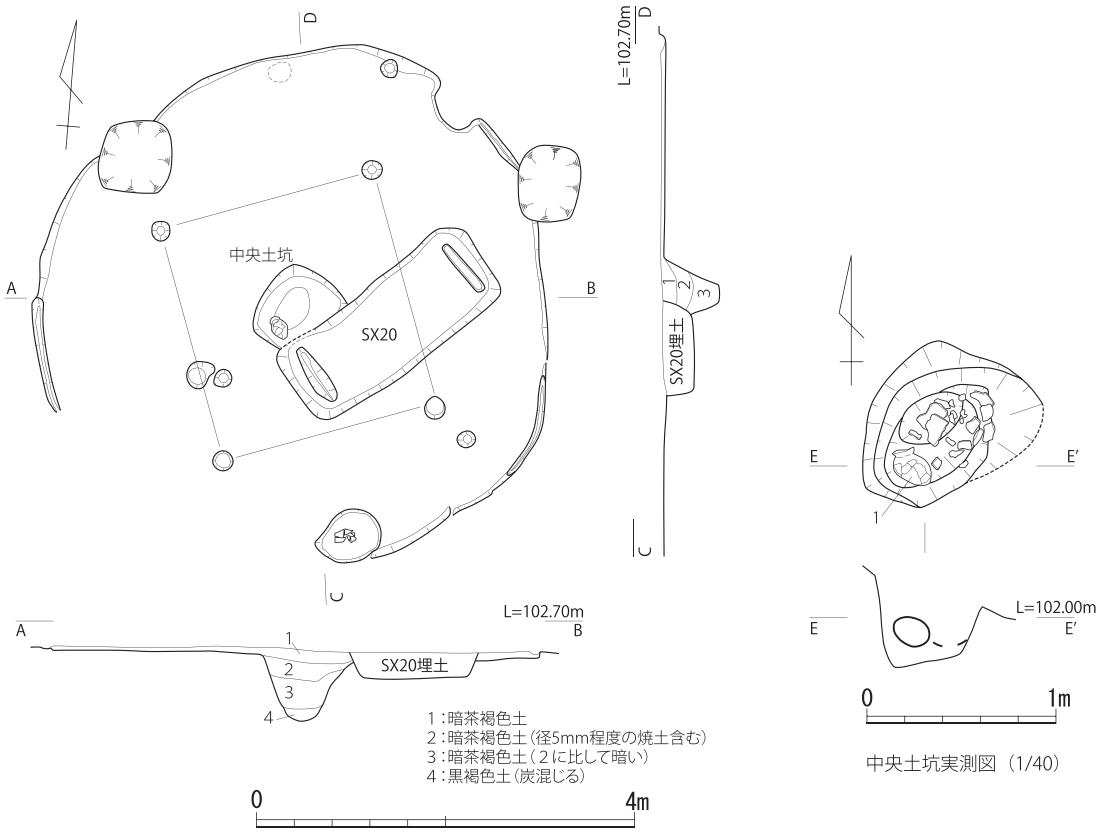
墓壙の平面形は長方形プランを呈し、全長2.5m、幅0.95m、深さ0.2mを測る。棺は墓壙を5cm掘削した段階で棺の痕跡を確認することができた。棺の形状は、組合式箱型木棺であり、長側板が小口板を挟み込む形状をとる。また、小口部分は、墓壙底面に掘削された小口板固定用の掘形に固定している。東側では、土圧のためか、棺の痕跡は小口板固定用の掘形より南側に寄って検出された。底板の有無や形状については明



第116図　4地区検出遺構配置図
（弥生時代、1/400）



第117図　木棺直葬墓ＳＸ20実測図（1/50）



第118図　竪穴式住居跡ＳＨ16実測図

らかにできなかった。木棺の規模は内法で長軸1.9m、短軸0.5mを測る。なお、北側の幅が広いことから、北側に頭位をもつものと考える。

墓壙埋土中、木棺の腐朽に伴う落込み土の中から弥生土器の小片が検出された。

なお、この木棺直葬墓は、竪穴式住居跡ＳＨ16の中央土坑を切っており、住居廃絶後に構築された木棺墓であることが明らかとなった。

竪穴式住居跡ＳＨ16（第118図）　4地区北部で検出された円形の竪穴式住居跡である。住居の遺存状況は悪く、深さは床面まで7cmのみ遺存していた。

住居の平面形は径5.4mを測る円形プランを呈する。住居北東部分には、壁面に沿って幅0.6m、住居内側に0.3m突出する掘り残しがあり、正円形は呈さない。周壁溝は部分的に検出され、完周するものではない。主柱穴は4基を特定した。直径20～30cm、深さ20～38cmを測る。住居の中央には中央土坑が検出された。一辺0.8mを測る不整な方形を呈し、埋土中には炭が混入していた。土坑内からは無文の広口壺（第119図1）1個体が横位で検出されたほか、多数の細片化した弥生土器が検出された。木棺直葬墓との切り合い関係から、この地区周辺では、集落が形成され、集落の廃絶もしくは移動時に墓域として土地利用がなされたことを示す好資料といえる。

ＳＫ12　竪穴式住居跡ＳＨ16の北東で検出された長軸約1m、短軸0.6m、深さ15cmを測る楕円形の土坑である。埋土中から細片化した弥生土器が出土している。遺構の性格については廃棄土坑の可能性が考えられる。この周辺まで集落としての土地利用がなされていたことを示す資料

といえる。

（岩松　保・石崎善久）

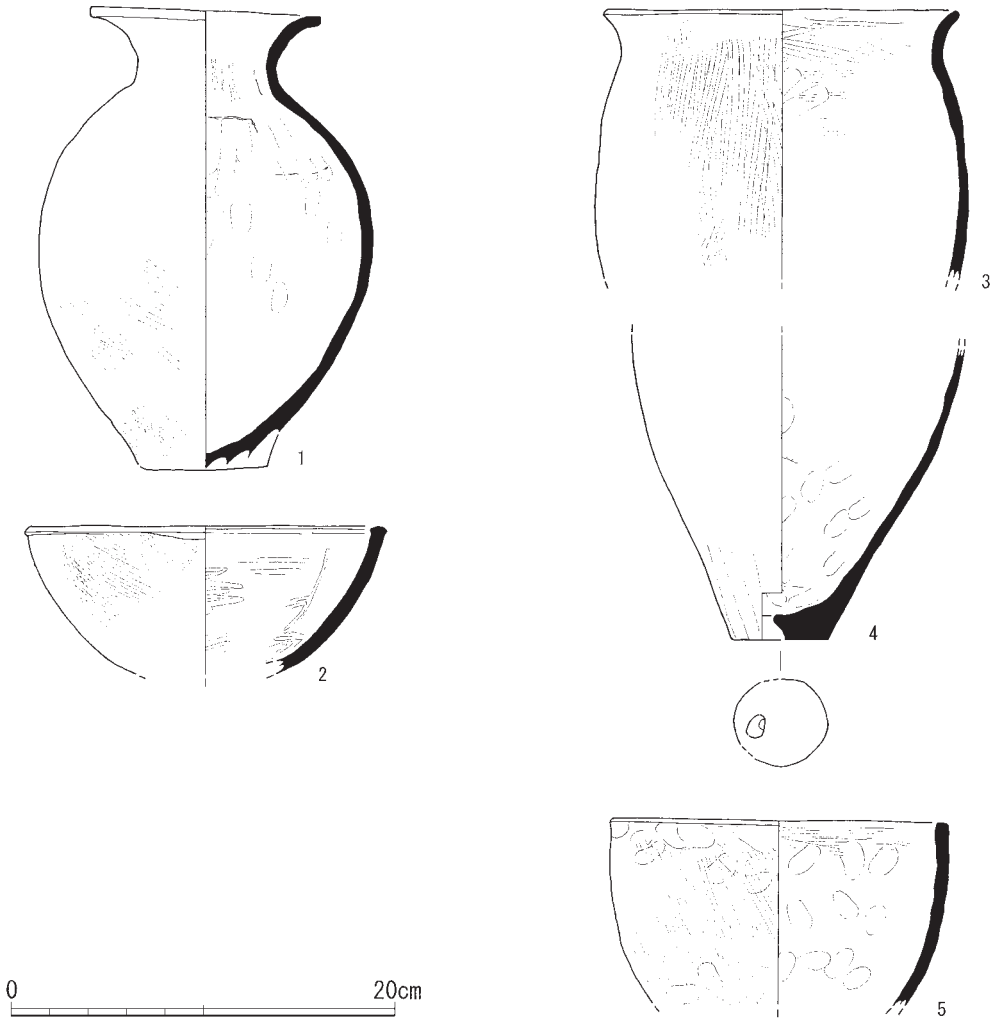
B．出土遺物（第119図）

５地区出土遺物として、竪穴式住居跡ＳＨ16およびＳＫ12から出土した弥生土器を図示した。

竪穴式住居跡SH16（第119図１・２）　住居跡中央の土坑から出土したものである。１は、無文の広口壺で、ナデ及びミガキ調整が施される。２の鉢にも、内面にミガキ調整がみられる。他の遺構出土の土器と比較して、きめの細かい胎土をもち、堅く焼き上げられている。

土坑SK12（第119図３～５）　３は、ゆるく折り曲げられた口縁をもつ甕である。４は甕底部であるが、底面が小さくやや不安定である。底面に穿孔のようなものをもつ。５の鉢は、直口の深いものである。作りが粗い。

（谷上真由美）



第119図　Ｌ５地区出土遺物実測図（１）

2）奈良時代以降の遺構・遺物

A．検出遺構

15－5地区では、奈良時代以降の遺構として、掘立柱建物跡2棟、溝などを検出した。遺構密



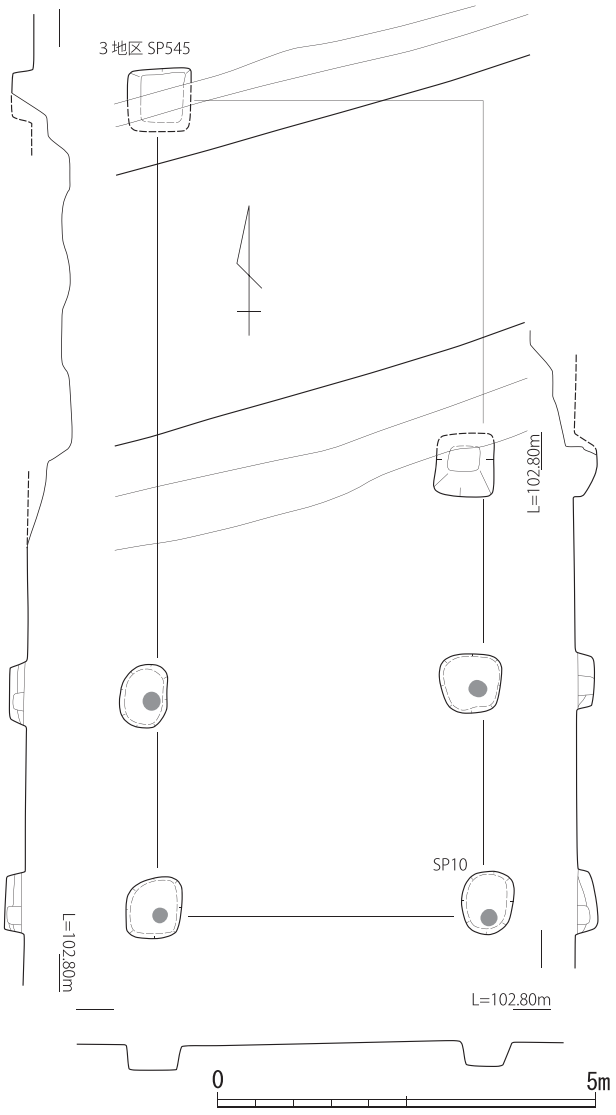
第120図　5地区検出遺構配置図(奈良・平安時代、1/400)

度は１地区などと比較すると希薄である。

掘立柱建物跡ＳＢ５－01（第121図）　調査区北部と３地区にまたがって検出された南北軸の掘立柱建物跡である。一部の柱穴については、調査区外のため確認することはできないが、北に柱穴列が検出されないことから、南北方向の規模、構造の推測は可能である。ただし、西側に建物が展開する可能性は否定できない。主軸はほぼ真南北方向にとる。

建物の規模は東西１間（4.3m）、南北推定４間（10.8m）を測る。柱穴は平面方形を呈し、規模は一辺0.6～0.8m、深さ0.4m前後を測る。断面形は全て素掘りの形態を示す。柱痕跡の確認されたものから、径25cm前後の柱が使用されていたものと考えられる。

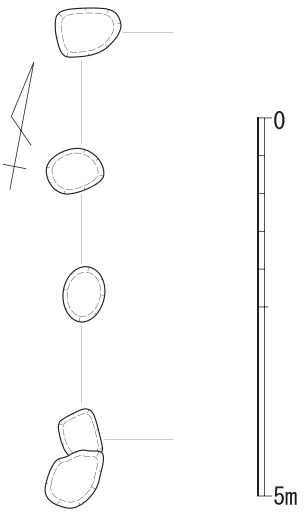
図示しうる遺物は出土していない。



第121図　掘立柱建物跡SB５－01実測図（1/100）

柱列ＳＢ５－02（第122図）　トレンチ北東部で検出された南北の柱穴列である。掘立柱建物跡になる可能性が高いが、後述するＳＤ13の北側屈曲部分と軸を揃え、ＳＤ15の延長部に相当すること、さらに北側の柱穴やＳＤ４などとと併せて区画施設の一端を構成する柵の可能性もある。南北３間分（5.5m）を確認した。主軸は北から西に振る。柱穴の平面形は方形、もしくは楕円形を呈し、その規模は直径0.5～0.7m、深さ0.2m前後を測る。柱痕跡の確認されたものはない。

図示しうる遺物は出土しなかった。



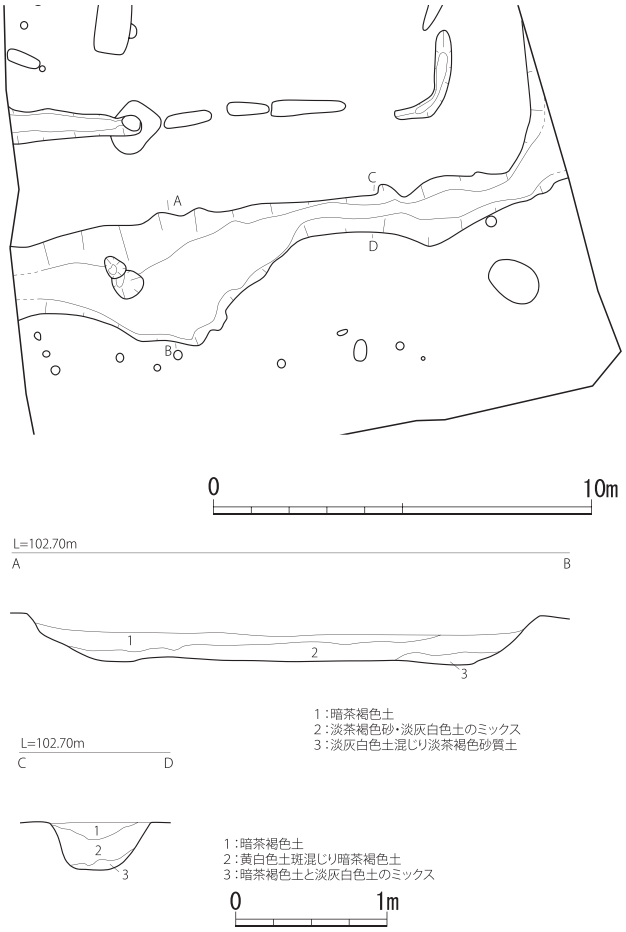
第122図　柱列ＳＢ５-02実測図（1/100）

ＳＤ13（第123図）　調査区南部で検出された東西方向の溝である。最大幅3.6m、最小幅0.6m、深さ0.3mを測る。主軸方位は真東西から東でやや北に振っている。溝は東側で北に屈曲する。平面的な形状から区画溝の可能性が高いと考える。４地区で検出された東西方向のＳＤ30と一連の遺構である可能性が高く、ほぼ同一時期の遺物が出土している。遺物は埋土内から須恵器などが出土している。４地区のＳＤ30は東端で立ち上がって終わることから、当初より、この

部分で途切れていたものと考えられる。この４地区のＳＤ30と５地区のＳＤ13との間の空間に門などの施設を想定することも可能かと考える。

また、その北側で検出されたＳＤ15はＳＤ13に沿うように掘削されており、厳密に同時性を検証することはできなかったが、関連する遺構である可能性が高い。

（岩松　保・石崎善久）



第123図　ＳＤ13実測図（平面：1/200、Ｓ＝1/50）

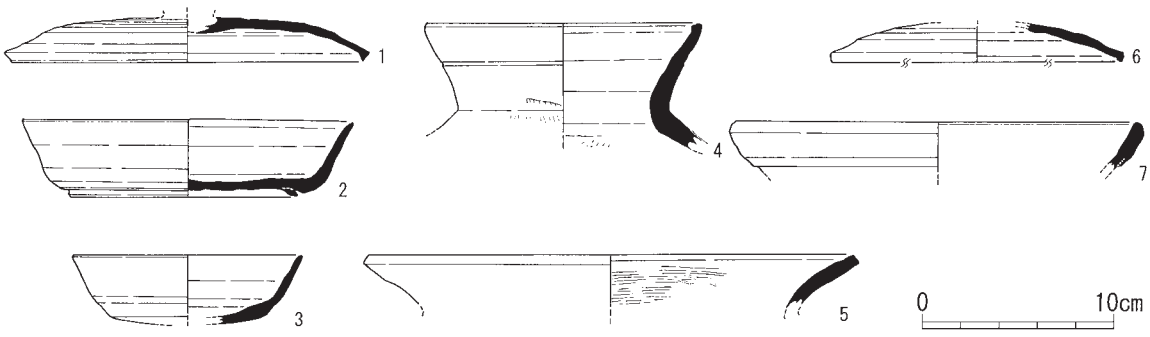
Ｂ．出土遺物（第124図）

５地区出土遺物として溝、柱穴出土土器を図示した。遺物の総量は少なく、建物に伴うものも図示し得るものはない。

１～５はＳＤ13出土遺物である。１は須恵器杯蓋である。２は須恵器杯Ｂである。高台は底部のやや内面にとりつく。３は杯Ａであるが、丸みを帯びたやや古相を示すものとみられる。４は須恵器甕口縁である。短く内湾気味に立ち上がるする口縁をもつ。やや小型品と考えられる。５は土師器甕である。口縁端部に面を形成する在地通有のものとみられる。これらＳＤ13出土遺物は奈良時代後半のものと考えられる。時期的には４地区で検出されたＳＤ30出土遺物との同時性を考えることができる。

６はＳＰ19出土の須恵器杯蓋である。天井部は低い笠形を呈し、口縁端部を下方に折り曲げる。７はＳＰ７出土の甕口縁片である。

（石崎善久）



第124図　５地区出土遺物実測図（２）

２．時塚遺跡第17次

（１）調査経過

17次調査は京都府教育委員会の実施した第16次調査の北側、用水路により遺構の損壊する部分と、田面造成に伴い、遺構が掘削される部分を対象に地区を設定した。地区はＬ１～７地区の７か所を設定し、表土･床土の除去された地区から順次、人力作業を行った。調査前の現況ではＬ４地区が植木栽培に利用されており、その他は水田として、耕作がなされていた。なお、Ｌ７地区の北側に設けた調査時の排土置き場で、床土直下で遺構が露出していたため、平板による検出状況の記録作業のみを実施した。

現地調査は、調査第２課調査第１係係長小池寛、同主任調査員松井忠春、同専門調査員岡﨑研一、黒坪一樹、同調査員石崎善久、筒井崇史、松尾史子が担当した。

調査は平成19年４月23日に着手し、各地区ごとに調査を進めた。

基本的な層序はこれまでの調査区と変わることはなく、表土・床土・クロボク層・黄灰色粘質土を基本とする地山の順である。17次調査ではＬ５地区にのみクロボク層の堆積が認められ、その他の地区にはクロボク層はみられず、地山面で遺構を検出した。

調査の結果、奈良時代の掘立柱建物跡群・古墳時代の群小古墳・弥生時代の方形周溝墓群など多様な遺構を検出することができた。また、群小古墳は京都府教育委員会・亀岡市教育委員会との協議の結果､新たに時塚４～14号墳と命名された。平成19年９月８日には現地説明会を実施し、約70名の参加を得ることができた。また、９月13日にはラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。９月27日には全ての掘削・図化業務を終了し、撤収作業を行った。調査面積は4,320㎡である。

以下、各地区ごとに報告を行うが、遺構番号は各地区ごとに通し番号を付した。方形周溝墓は15次調査同様17－１号墓のように周溝墓を復原したうえで報告を行う。なお、17次調査では、原則として周溝墓の溝を墳丘中心から放射状に８地区に分けて調査し、遺物の取り上げを実施している。また、周溝墓の溝が分離する地区では便宜的に遺構番号を新たに付したものもある。掘立柱建物跡については複数の地区にまたがるものはないため､各地区ごとに番号を付して報告する。

（石崎善久）

（２）Ｌ１地区

Ａ．検出遺構

Ｌ１地区は今回の調査対象地の中で最も南に設定された。京都府教育委員会の実施した16次調査地の北側に位置し、京都府教育委員会の調査区と連続する地区である。遺構はベース面上で検出した。古墳時代の竪穴式住居跡１基、時期不明の掘立柱建物跡１棟、不整形な弥生時代の溝などを検出した。以下、各遺構について述べる。

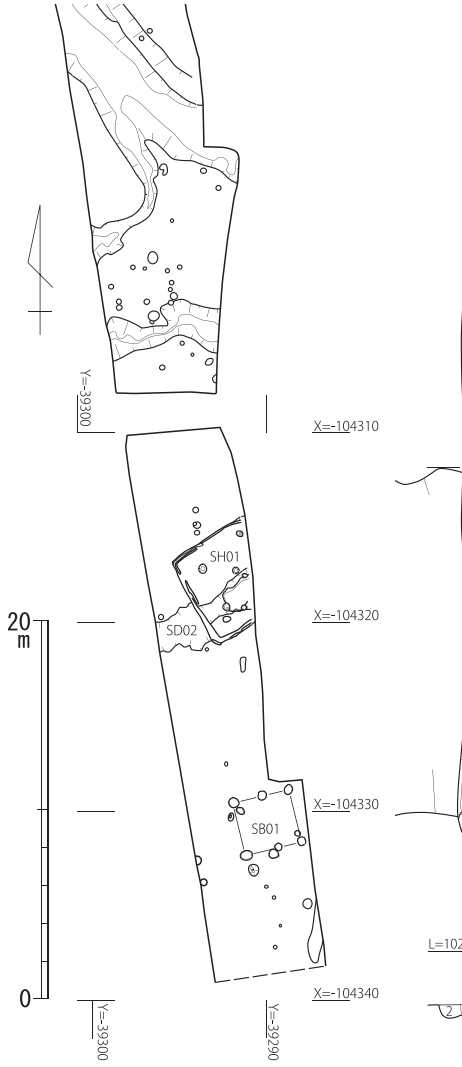
竪穴式住居跡ＳＨ01（第128図）　調査区の北側で検出した。東側の一部は調査区外となっている。平面は方形プランを呈し、規模は南北5.1m、東西4.3m以上、掘形の深さ0.2mを測る。住居内の施設として、主柱穴２基、周壁溝を確認した。周壁溝は住居内をほぼ完周するが、複数の溝



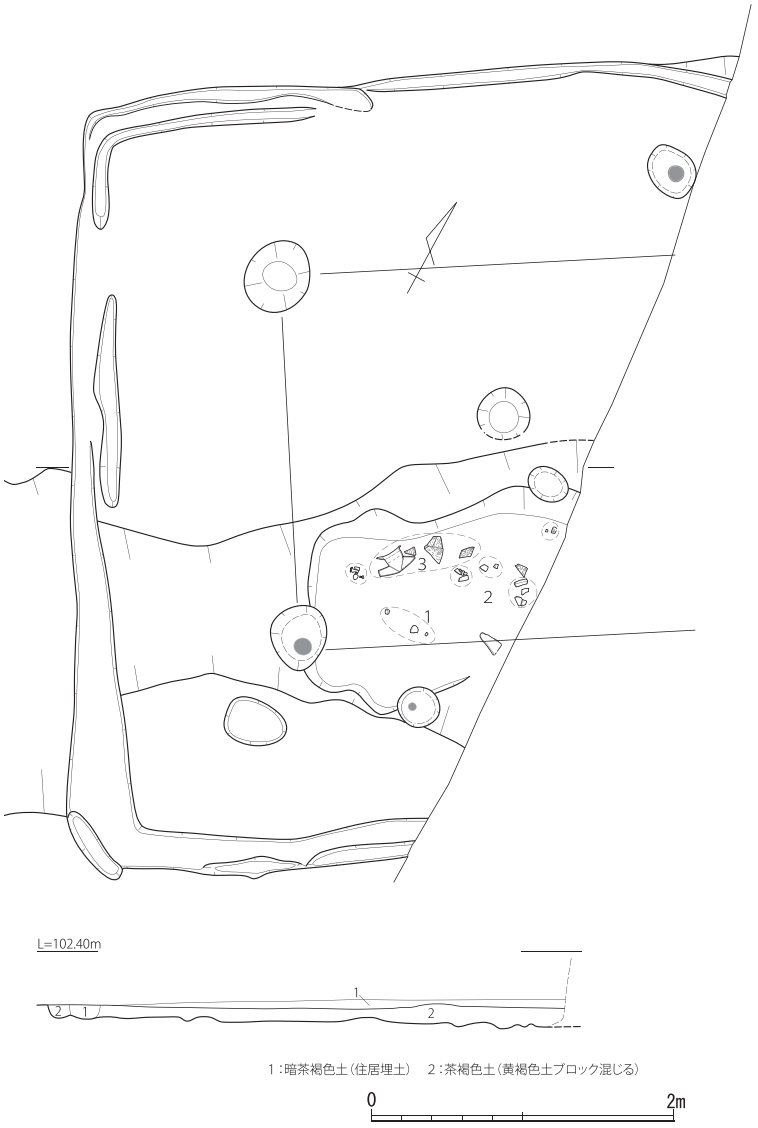
第125図　時塚遺跡17次調査区全体図(1/1,000)



第126図　時塚遺跡17次調査区方形周溝墓復原図(1/1,000)

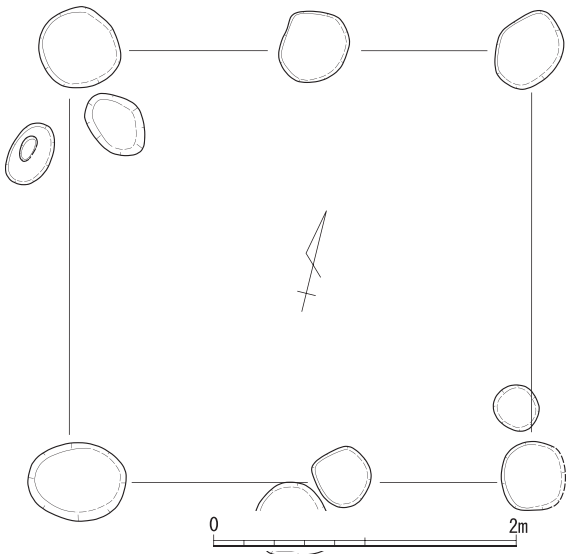


第127図　Ｌ１地区検出遺構配置図
（1/400）

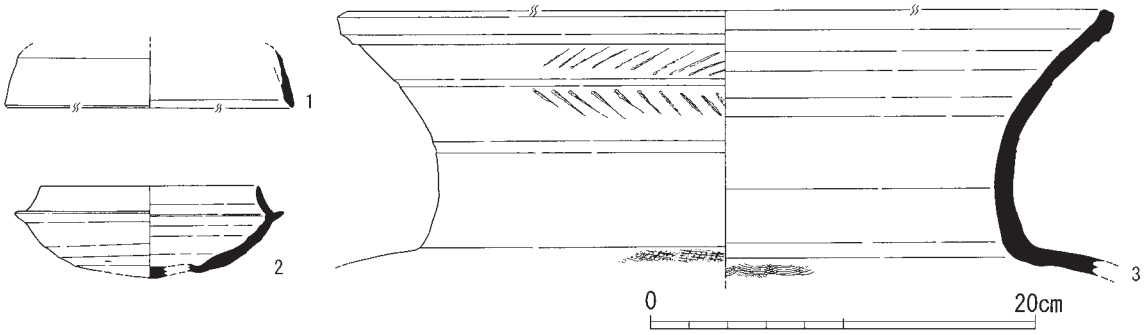


第128図　竪穴式住居跡SH01実測図（1/50）

が掘削されている。主柱穴は北側のもので、径40cm、深さ50cmを、南側のもので径35cm、深さ50cmをそれぞれ測る。また、この住居では、須恵器甕（３）、須恵器蓋杯（１・２）などが住居の東側で検出されているが、いずれも、第128図２層上面で確認されている。また、２層はきわめて硬質であり、人為的な叩き締めがなされているものと判断された。この点からこの第２層は住居床面の整地層と考えることができ、この上面が生活面であると判断される。遺物はいずれも細片化しているが、古墳時代後期に属する。



第129図　掘立柱建物跡ＳＢ01実測図（1/50）



第130図　Ｌ１地区出土遺物実測図

掘立柱建物跡ＳＢ01（第129図）　Ｌ１地区南で検出された東西２間（３ｍ）、南北１間（2.8ｍ）の掘立柱建物跡である。柱穴は径0.4～0.5ｍの円形で深さは0.2～0.3ｍを測る。出土遺物はないが、主軸方位が竪穴式住居跡ＳＨ01に近似することから古墳時代後期の遺構であると考えておきたい。

ＳＤ02　調査地北側で検出した不整形な東西方向の溝である。竪穴式住居跡ＳＨ01に切られている。幅1.6ｍ、深さ0.17ｍを測る。弥生土器の小片のみが出土している。後述するＬ２地区のＳＤ05とともに方形周溝墓（17－28号墓）を構成する溝であると考える。

Ｂ．出土遺物（第130図）

Ｌ１地区出土遺物として、竪穴式住居跡ＳＨ01出土の須恵器３点を図示した。いずれも生活面と思われる硬化面状から検出されているため住居廃絶時に遺棄されたものとみられる。

１は須恵器蓋である、小片のため、口径や器高、傾きなどは明確ではない。口縁端部をやや内側に面をもつように整形する。天井部との境目の稜は退化し、ナデを利用して表現されており、ほとんど突出していない。２は須恵器杯身である。ほぼ全容をうかがうことができる。口径11.2cm、器高4.8cmを測り、やや丸みを帯びたプロポーションを呈している。口縁端部は丸く収められ､段を意識したような整形はなされていない。底部外面の回転ヘラケズリはやや雑であり、ケズリの範囲も狭い。３は須恵器甕である。復原口径39.2cmを測る。口縁をやや肥厚させ、外端面下方に稜を造り出す。頸部の装飾は２条の沈線を施し、上方の沈線を挟むように櫛状工具を利用した斜行刺突文を施文する。肩部外面には格子状タタキ、内面には青海波文がみられる。

これらの遺物は、杯身に丸みを帯び、深い体部をもつやや古い様相がみられるものの、蓋や杯身の端部の整形などから新しい要素がうかがわれるため、陶邑ＴＫ43型式に併行する土器群と考える。

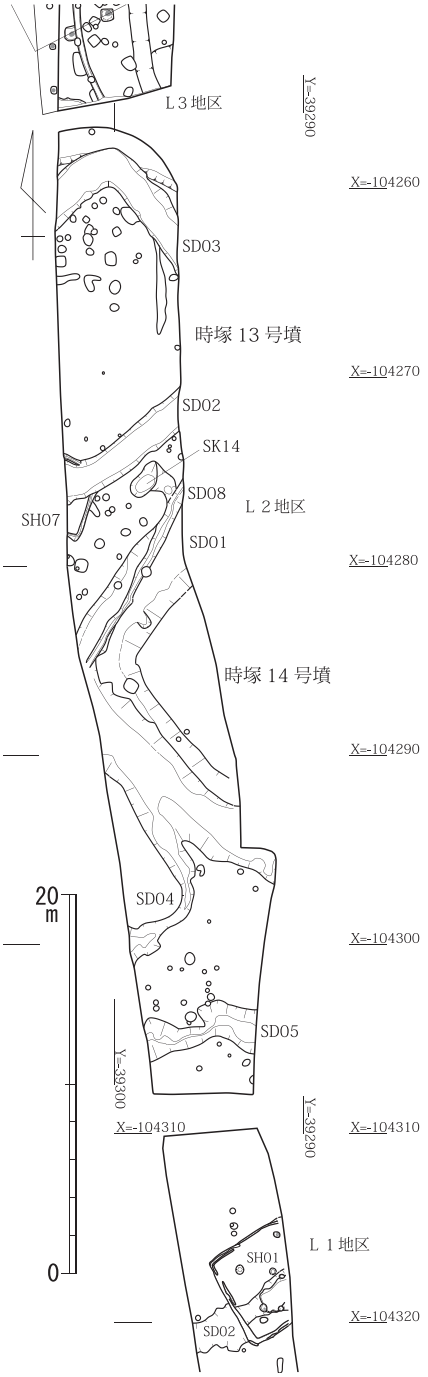
（石崎善久）

（3）Ｌ２地区

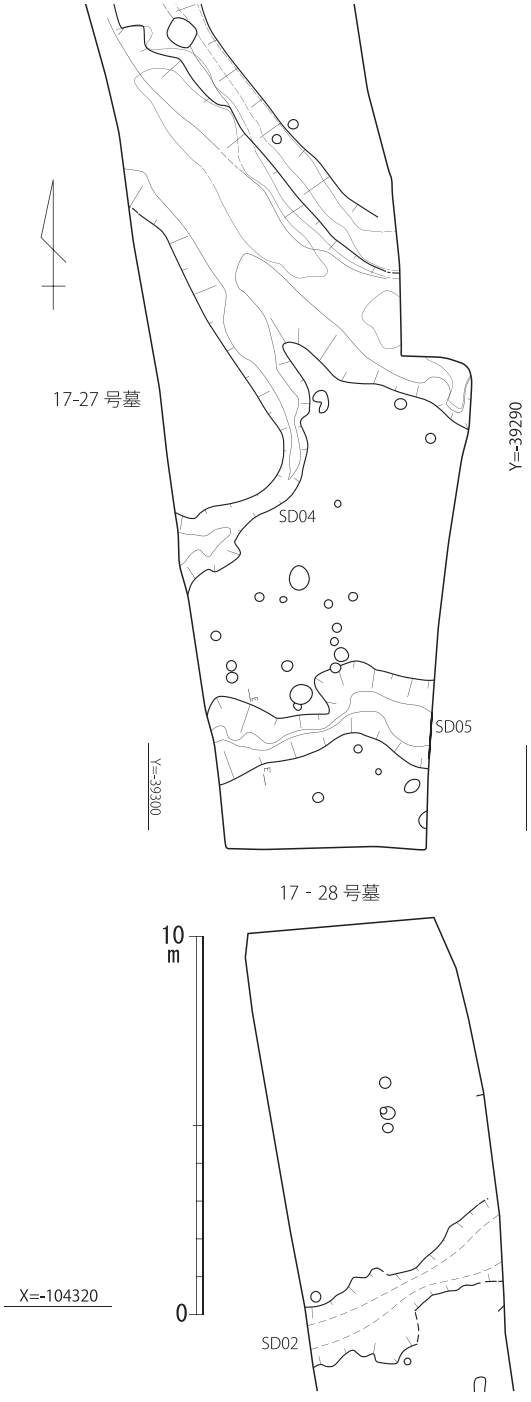
Ａ．検出遺構

Ｌ１地区の北に設定した南北に長い地区である。方墳２基と古墳時代の竪穴式住居跡１基、弥生時代の方形周溝墓２基(17－27･28号墓)などを検出した。また、複数のピットを検出しているが、建物として復原するには至らなかった。以下、各遺構の概要について述べる。

17－28号墓(第132図)　Ｌ２地区の南で検出した不整形なＳＤ05(幅２ｍ、深さ0.2m)とＬ１地区で検出したＳＤ02で区画される方形周溝墓である。表土および床土掘削段階での出土遺物であ



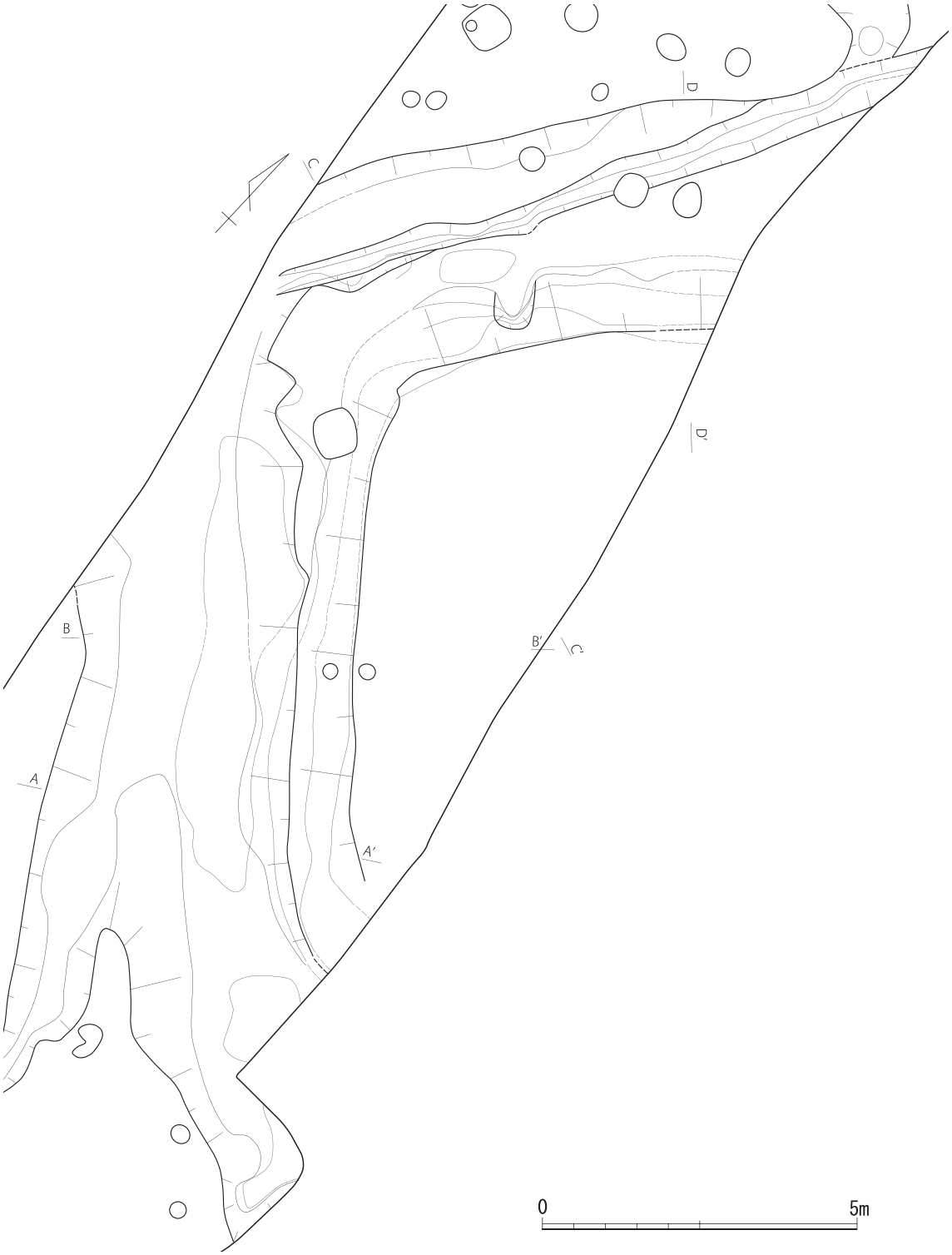
第131図　Ｌ２地区検出遺構配置図
(1/400)



第132図　Ｌ１・２地区方形周溝墓平面図(1/200)

る須恵器がこの周辺に置かれていたため、当初、古墳時代の溝と考えたが、溝埋土の遺物は細片化した弥生土器のみであり、Ｌ１地区で検出したＳＤ02と併せて方形周溝墓を構成する溝と考える。周溝墓の規模は東西７ｍ以上、南北15ｍを測る。周溝埋土中からは細片化した弥生土器が出土しているものの図示できる個体はない。

17－27号墓（第132図）　Ｌ２地区西壁付近で検出された「Ｌ」字状に屈曲するＳＤ04で区画さ

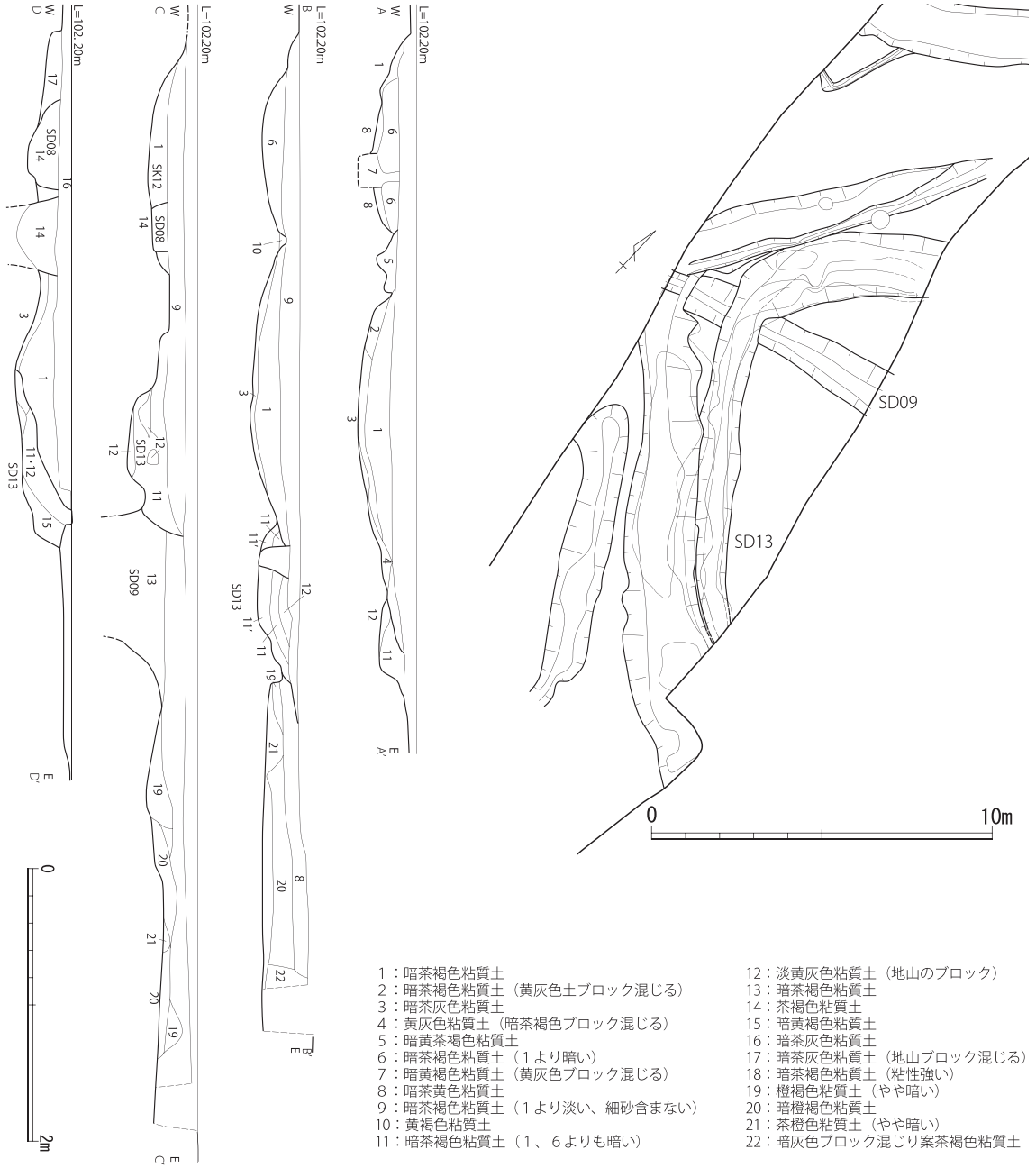


第133図　時塚14号墳実測図（1/100）

れる方形周溝墓である。時塚14号墳の周溝ＳＤ01に切られている。周溝の規模は東側で幅1.4m、深さ0.3m、南側で幅0.6m、深さ0.1ｍを測る。南側周溝の南東部は浅くなっている。周溝墓の規模は東西3.4m以上、南北8.4m以上を測る。

時塚14号墳（第133・134図）　Ｌ２地区中央で検出したＳＤ01を周溝とする方墳である。大部分が調査区外となっている。周溝は北側で幅3.5m、深さ４ｍ、西側で幅3.8～4.2m、深さ0.4ｍを測る。基底部分での墳丘規模は南北11m、東西７ｍ以上となる。西に主軸を振っている。葺石や埴輪などの外表施設、埋葬施設は確認されなかった。

時塚14号墳での遺物は周溝埋土内から須恵器・土師器（２～９）が出土したほか、墳丘南西部斜面から須恵器杯蓋（１）が転落したような状態で出土している。

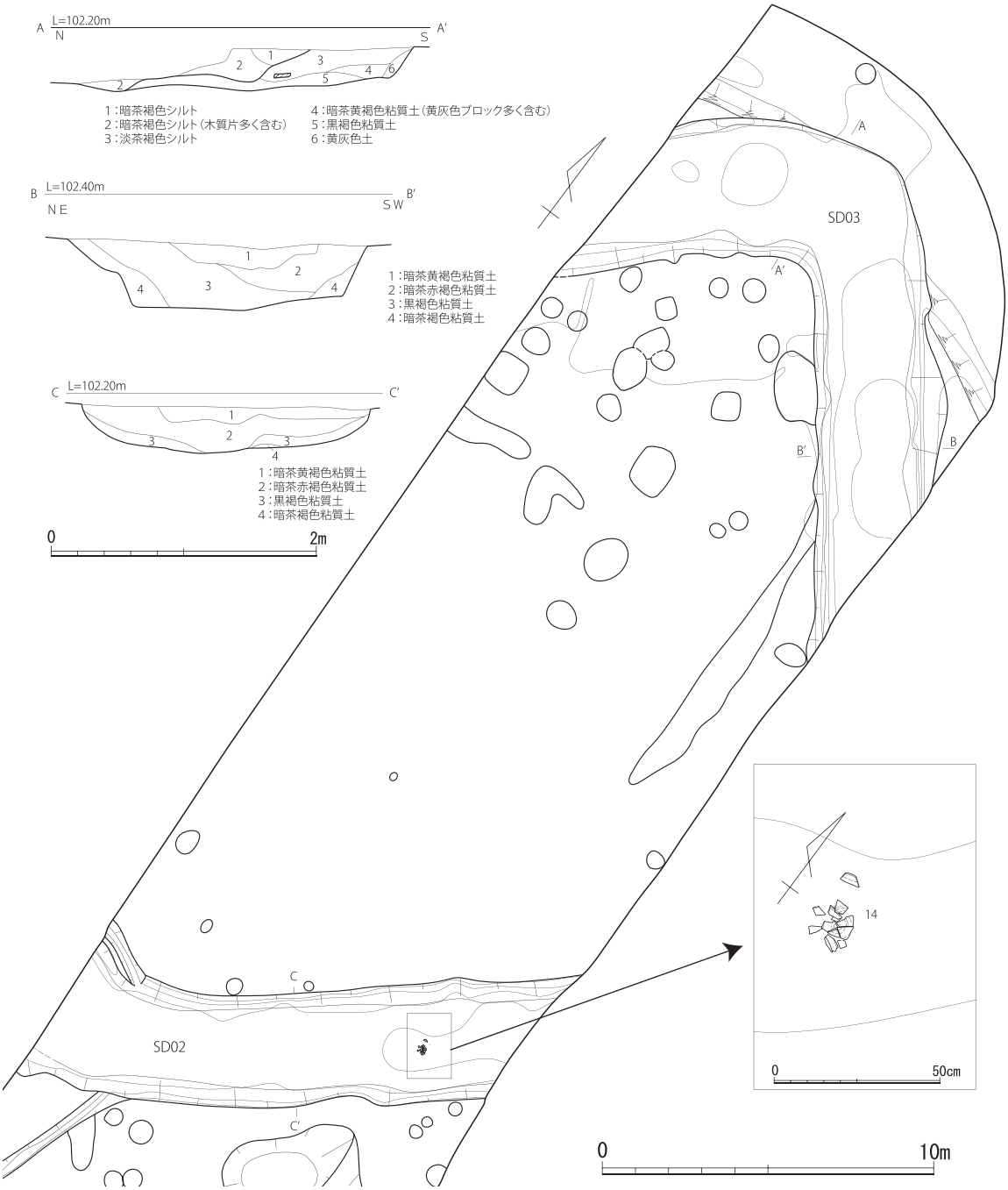


第134図　時塚14号墳実測図（盛土除去後平面：1/200、断面：1/50）

この古墳では、墳丘に盛土と思われる土色の変化が認められたため、これを除去したところ、墳丘に沿うように屈曲するＳＤ13と、東西方向に墳丘中央を走るＳＤ09を検出した（第134図）。周溝埋土の切り合い関係から、古墳築造時もしくはそれ以前の遺構であることは間違いない。

ＳＤ13は、墳丘南側では墳丘斜面に沿って掘削され、墳丘北側では周溝底面とほぼ同一面まで掘削されている。当初の墳丘裾である可能性があるが、あるいは古墳築造時の墳丘の計画線のような性格も考慮される。最大幅２ｍ、最大深さ0.4ｍを測る。遺物は埋土中から土師器甕（11）が出土している。

ＳＤ09はＳＤ13に切られており、また墳丘や古墳周溝とは無計画な方位を示し、ほぼ東西方向



第135図　時塚13号墳実測図（平面：1/100、断面：1/50、遺物出土状況図：1/20）

に調査区を横切っている。幅1.1m、深さ0.7mを測り、断面は逆台形に近い。遺物が出土していないため、時期については明らかにしがたいが、直接古墳に関連する遺構ではないものと考える。

時塚13号墳（第135図）　時塚14号墳の北に位置するＳＤ02と、ＳＤ03を周溝とする方墳である。周溝は北側で幅２m、深さ0.3m、東側で幅1.8m、深さ0.5m、南側で幅1.7m、深さ0.4mを測る。基底部分での墳丘規模は南北11.5m、東西11.5m以上となる。主軸はやや西に振っており、時塚14号墳とほぼ同一の方向をとっている。葺石や埴輪などの外表施設は確認されなかった。また、埋葬施設も検出されなかった。

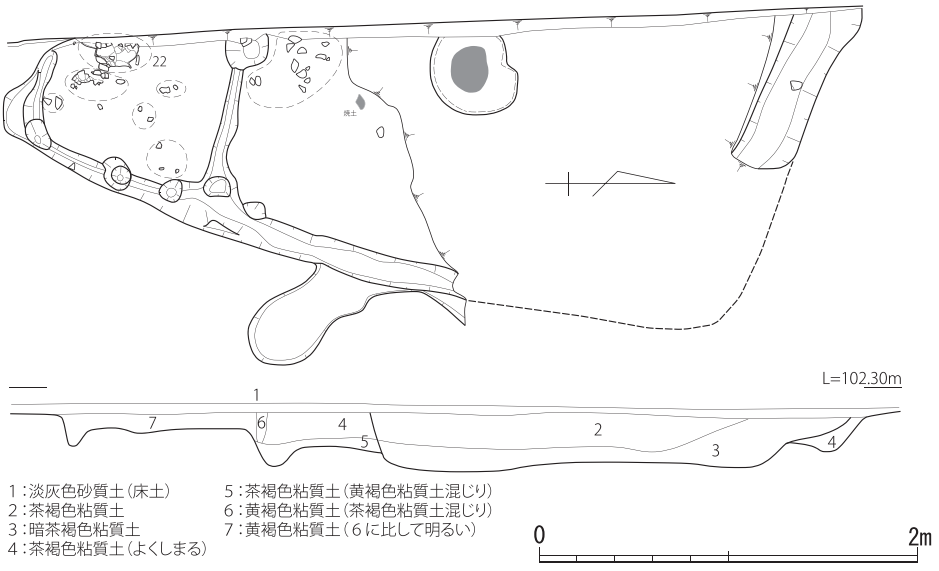
墳丘は地山で形成されており、削平のためか、盛土や埋葬施設を確認することはできなかった。また、周溝の北東側は近･現代の水路により大きく削平を受けている。

遺物はＳＤ02埋土中から土師器が出土したほか、周溝中央の底面直上で須恵器杯蓋(14)１個体がその場で割れたような状態で検出された（第135図遺物出土状況図）。墳丘からの転落か、周溝外からの転落あるいは遺棄か明確ではないが、底面直上で検出されたことからこの古墳の築造時期を示すものであると考える。ＳＤ03埋土中からは須恵器平瓶(16)などが出土している。

竪穴式住居跡SH07（第136図）　Ｌ２地区西側で検出された竪穴式住居跡である。時塚13号墳のＳＤ02に切られており、大部分は調査区外のため、全容をうかがうことはできない。現状での規模は南北４m、東西１m井助、深さ0.24mを測る。

住居内の施設として、周壁溝および主柱穴と想われる柱穴を確認した。周壁溝はＳＤ02により削平されている部分を除けば、完周する。また、住居の内側に東西方向に壁溝が分岐する部分がありこの面から北側は住居の床面が一段深くなっている。埋土の状況から住居の拡張が行われ、古い段階の住居に伴う周壁溝の可能性が高いものと判断される。また、カマドは検出されていないが、床面上から焼土が微量ながら確認されている。遺物は住居の南側を中心に土師器甕など、布留式段階の土器が出土している。

ＳＤ08　ＳＤ01を切って、北東から南北方向に斜行する素掘り溝である。埋土中から須恵器



第136図　竪穴式住居跡ＳＨ07実測図(1/40)

などが出土している。古墳時代後期に属すると考える。土層の観察から時塚13号墳の周溝が一定程度埋没してから掘削されたものであると判断される。

ＳＫ14　ＳＤ08の北東で検出された長軸2.1m、幅１m、深さ0.3mの不整形な土坑である。ＳＤ08とは小規模な溝でつながっている。出土遺物がＳＤ08と接合関係にあるため、両者で一連の遺構として機能していたものとみられる。

Ｂ．出土遺物（第137図）

Ｌ２地区出土遺物として、各遺構出土の遺物を図示した。遺構ごとに概観する。

時塚14号墳（１～10）　１は墳丘斜面から出土した須恵器蓋である。この古墳の築造時期を示す資料と考える。口縁端部は段を形成し、天井部の稜は比較的鋭い、口径13.4cm、器高4.7cmを測り、天井部が高く丸みを帯びた形態を示す。陶邑編年ＴＫ47併行期と考えたい。２～３は須恵器蓋杯類である。周溝埋土中から出土しているが、この古墳に直接関連するものではない。４～６は奈良時代の須恵器である。古墳の最終的な埋没時期を示す資料といえる。７は須恵器壺の口縁である。8～９は布留式の土師器甕である。下層遺構からの混入遺物であろう。10は瓦器椀である。古墳の周溝から出土しているが、直接的な関係はない。内面にのみミガキがみられる。この地区でも新しい段階の資料である。

ＳＤ13（11・12）　11は土師器甕である。布留式併行のものである。12は縄文土器鉢の口縁細片である。外方に屈曲した口縁に刻目を施す。これらの遺物が、この溝の時期を示しているか不明である。

ＳＤ04（13）　13は土師器甕である。混入遺物の可能性が高い。飛鳥時代以降のものとみられる。

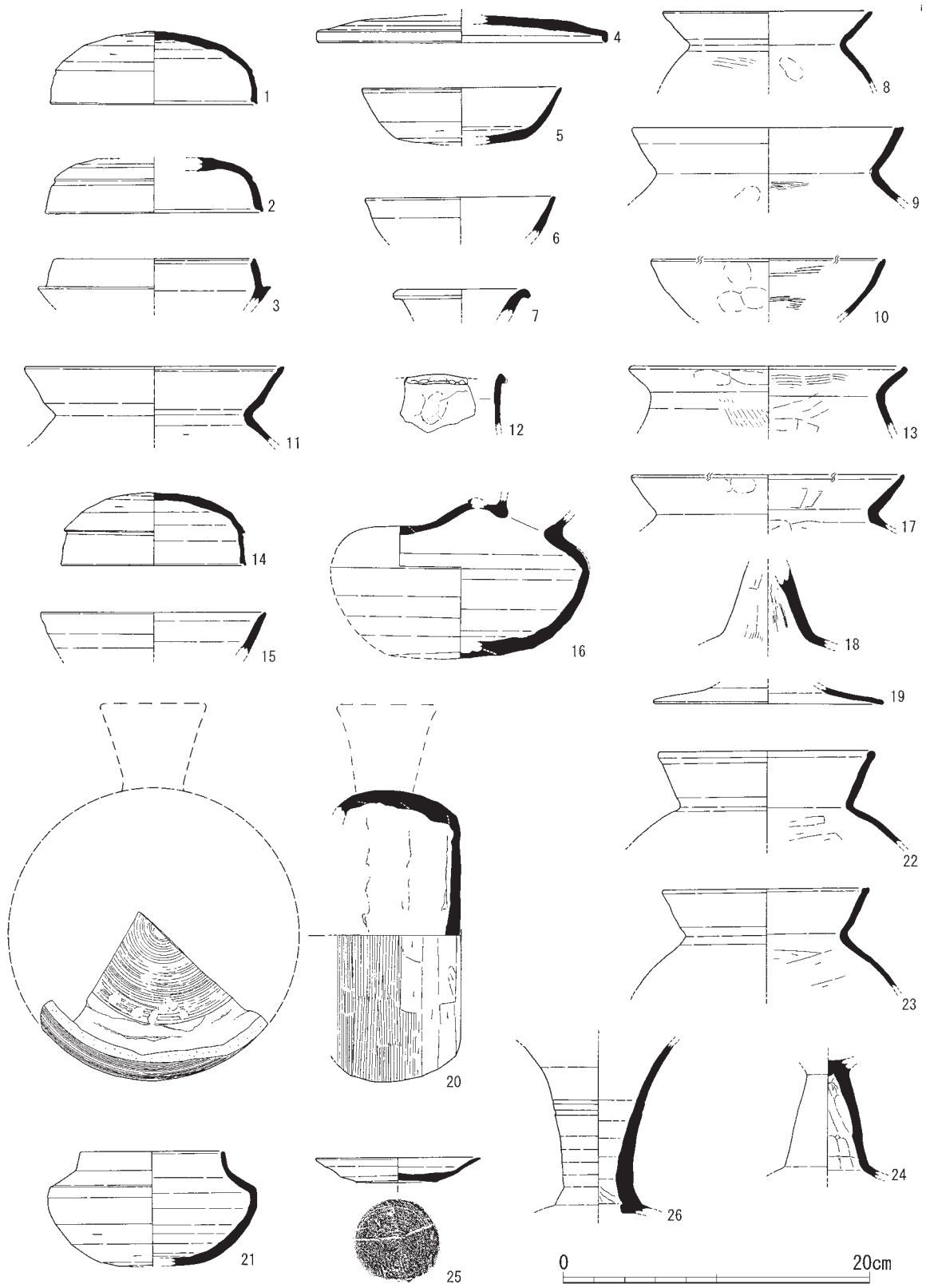
時塚13号墳（14～19）　14はＳＤ02から出土した須恵器蓋である。この古墳の築造時期を示す資料と考える。口径12.0cm、器高4.75cmを測る天井部が高く、丸みを帯びた形態をとる。稜や、口縁端面の段も明瞭であり、天井部の回転ヘラケズリも範囲が広くていねいに行われている。陶邑編年ＴＫ23もしくはＴＫ47形式に併行するものと考える。15はＳＤ02出土の布留式段階の土師器甕である。16はＳＤ03出土の須恵器平瓶である。溝の中層から出土しており、埋没過程での混入品とみられる。17～18はＳＤ03出土の土師器である。いずれも下層遺構の混入遺物とみられる。

ＳＤ08（20・21）　20は須恵器提瓶の体部である。ＳＫ14の出土遺物と接合関係にあり、両者は同時期に機能していた遺構とみられる。外面にカキメが施されている。21は須恵器短頸壺である。肩部に沈線をもち、口縁はやや内傾する。

竪穴式住居跡ＳＨ07（22～24）　22は甕口縁である。摩滅のため調整が不明瞭である。口縁はやや直線的につくられ、端部の肥厚は丸みを帯びている。23は口縁端面が水平面を形成しており、わずかに内面に肥厚する。両者とも薄手のつくりである。24は高杯の脚柱部である。中空の脚柱であり、残存高7.8cmを測る。これらの遺物は布留２式段階に併行するものと考える。

包含層（25･26）　25は土師器皿である。床土直下から出土している。26は須恵器長頸壺である。ＳＤ01とＳＤ02の間の包含層中からの出土である。

（筒井崇史・石崎善久）



第137図　Ｌ２地区出土遺物実測図

（4）Ｌ３地区

Ｌ３地区は、Ｌ２地区の北側の用水路部分に設定した南北方向に長い調査区である。この地区では調査区南側で、２基の方墳とそれを切る建物群を、調査区の北側ではピット群を検出した。以下、古墳時代の遺構と、それ以降の遺構に分けて概要を報告する。遺物については出土量が少ないため、まとめて報告を行う。

１）古墳時代の遺構・遺物

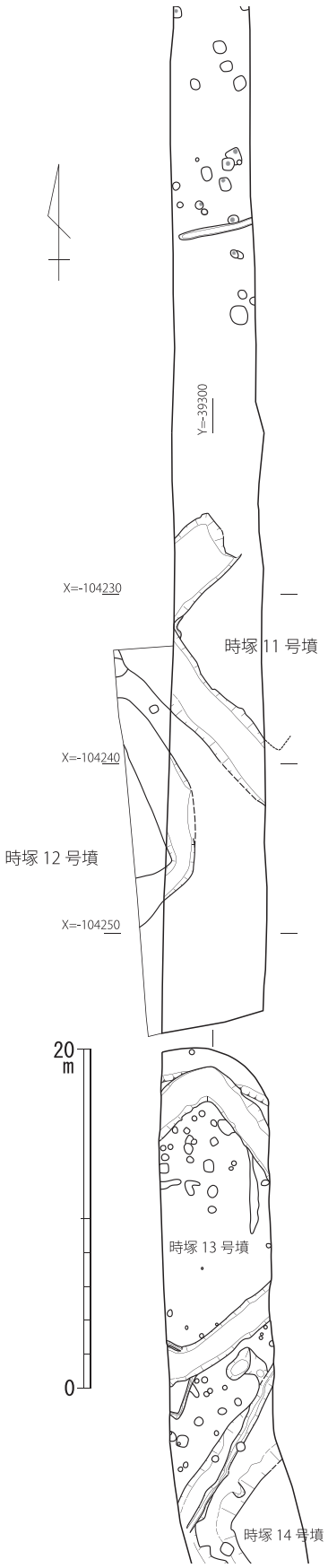
Ｌ３地区では古墳時代の遺構として、２基の方墳を検出した。なお、調査区南西部は排土置き場確保のため、床土を除去したところ、古墳周溝およびピットなどが露出したため、検出状況の平面図作成のみを行っている。

時塚11号墳（第139図）　調査地南東部で検出した方墳である。「Ｌ」字状に屈曲するＳＤ29 を検出し、これを古墳の周溝と判断した。

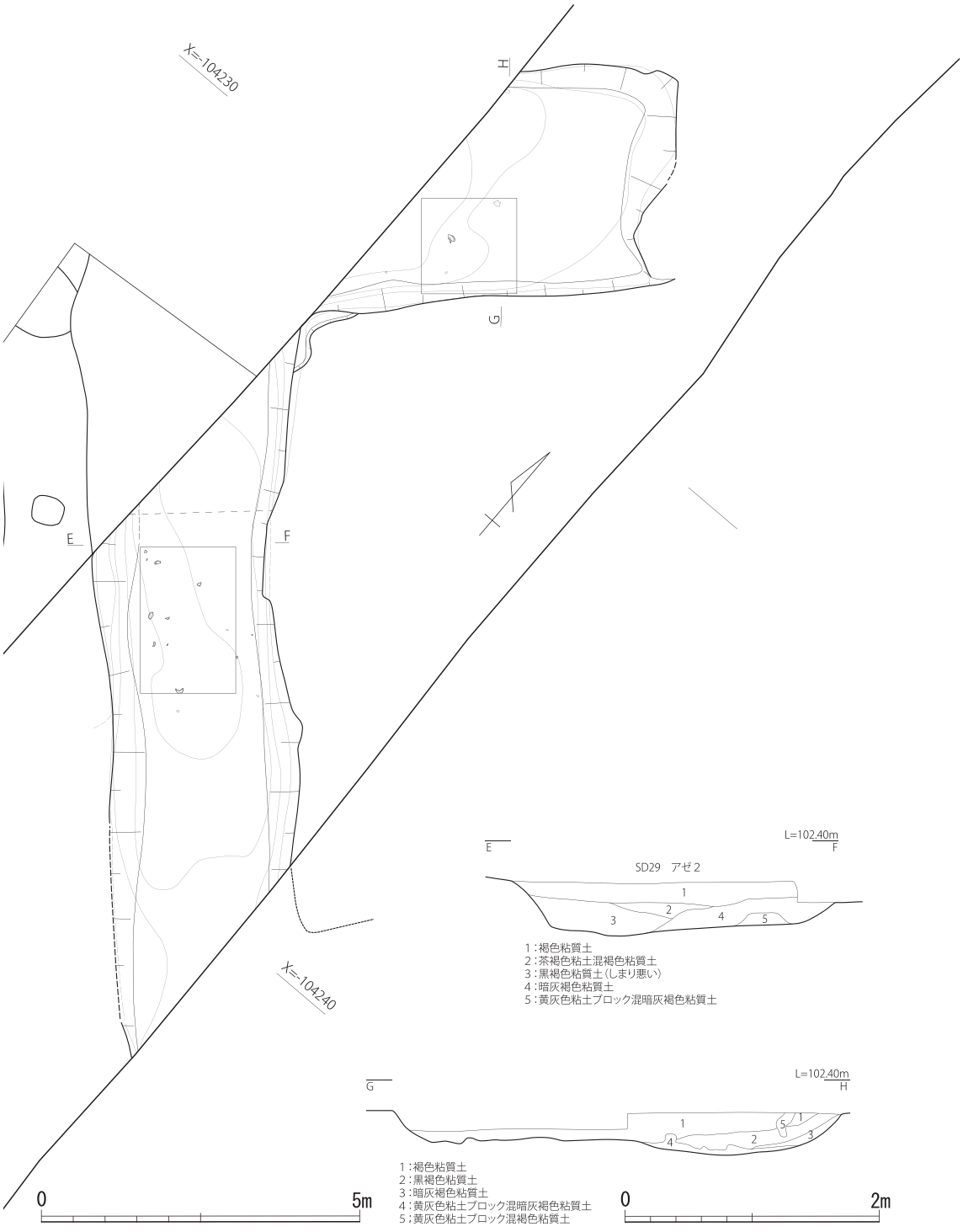
周溝は、西側で幅３ｍ・深さ0.4m、北側で幅3.5m・深さ0.4ｍを測る。また、北側の周溝は完周しておらず、途中で途切れている。これが、築造当初より、この部分が浅く掘削されていたのか、あるいは陸橋部のように途切れていたのかは明確ではない。周溝の断面形は北側周溝、西側周溝ともほぼ逆台形を呈しているが、周溝外周側がわずかながら深く掘削されている。また、埴輪・葺石などの外部表飾施設や埋葬施設は確認されていない。

墳丘の規模は基底から東西6.5m以上、南北方向については墳丘の南西隅を周辺部の清掃中に部分的に検出しているため、約10.5m程度を測るものと考えられる。主軸方位は、時塚13・14号墳と同様、約45°西へ振っている。

遺物は北側周溝および、西側周溝内から須恵器が出土している（第140・141図）。西側周溝からは須恵器杯身（２）・杯蓋（１）・甕（５）が出土している。いずれも破片化した状態で検出されているが、大部分のものが接合関係にあり、位置関係から墳丘外からの転落もしくは遺棄によるとみられる。また、周溝掘形より若干遊離した状態で検出されているため、これらの須恵器は、周溝が一定埋没したのちに溝内に転落、もしくは遺棄されたものと判断する。その他、埋土中から須恵器



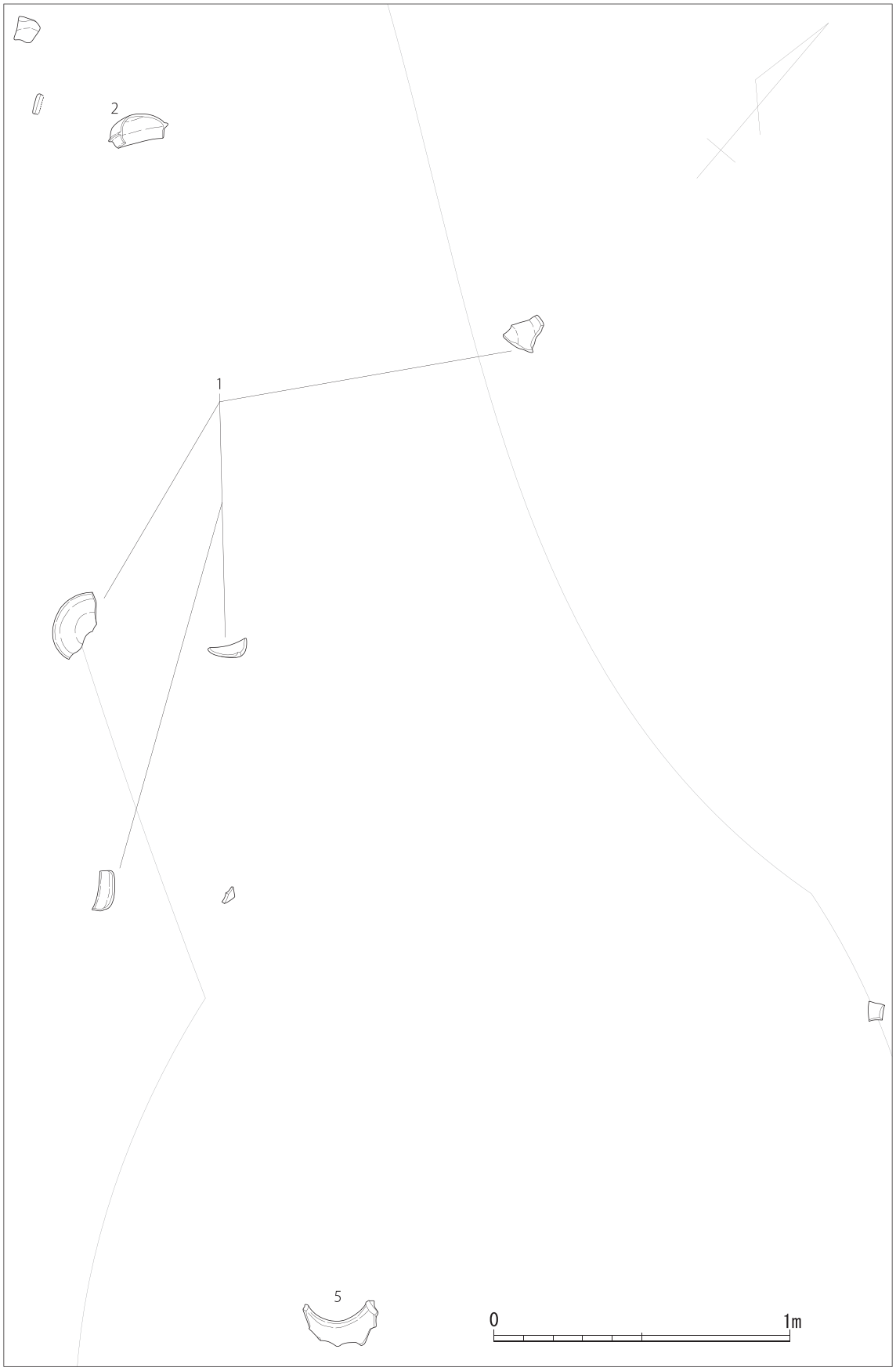
第138図　Ｌ３地区検出遺構配置図
（古墳時代、1/400）



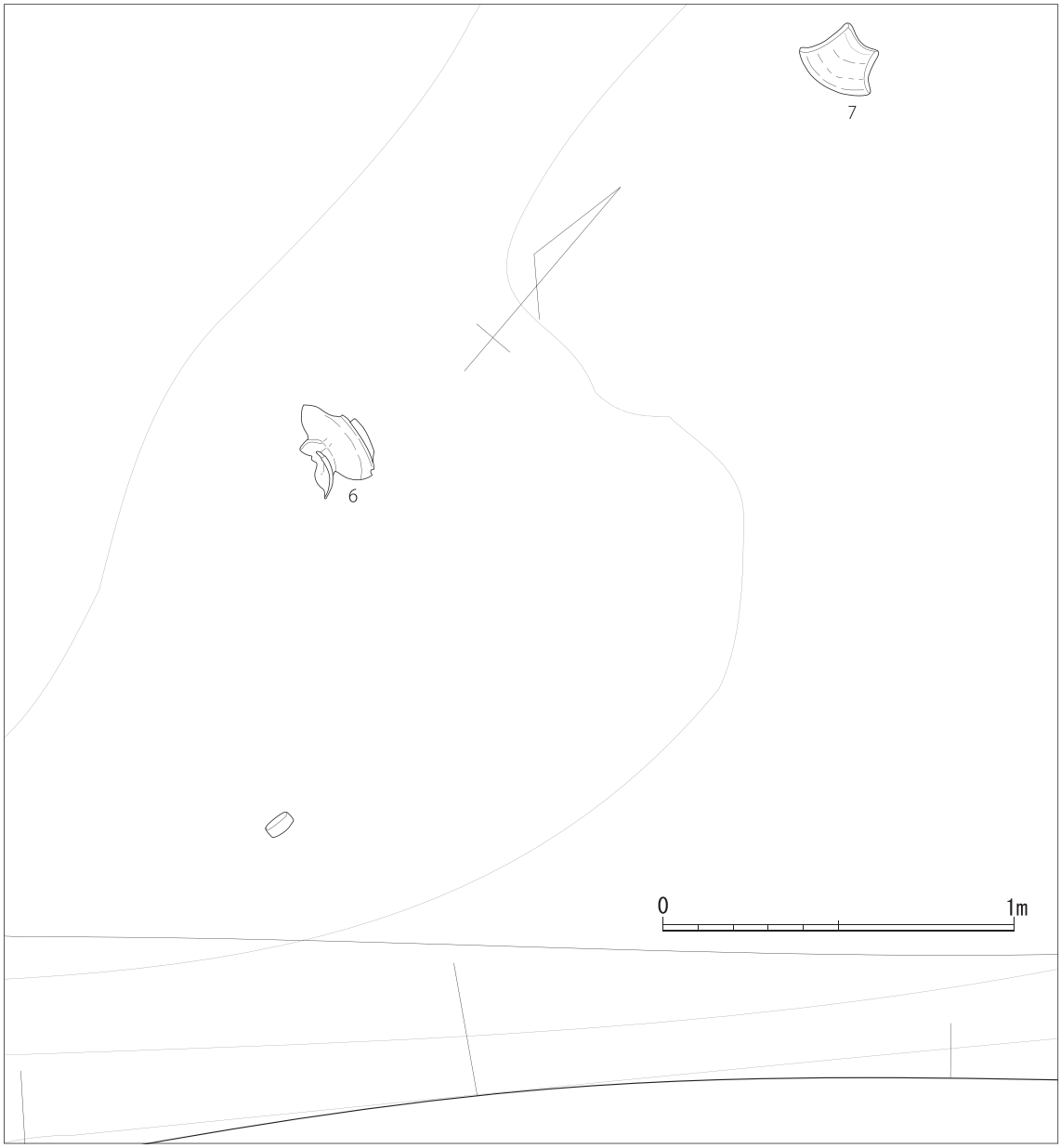
第139図　時塚11号墳実測図（平面：1/400、断面：1/50）

蓋細片（３・４）が出土した。

北側周溝では須恵器高杯（６）、須恵器壺（７）などが検出された。高杯はほぼ完形に近い状態で検出され、出土状況からは墳丘からの転落による可能性が高いものと判断された。須恵器壺についても、ほぼ同一地点からの出土であり、墳丘からの転落の可能性が高いものと判断された。



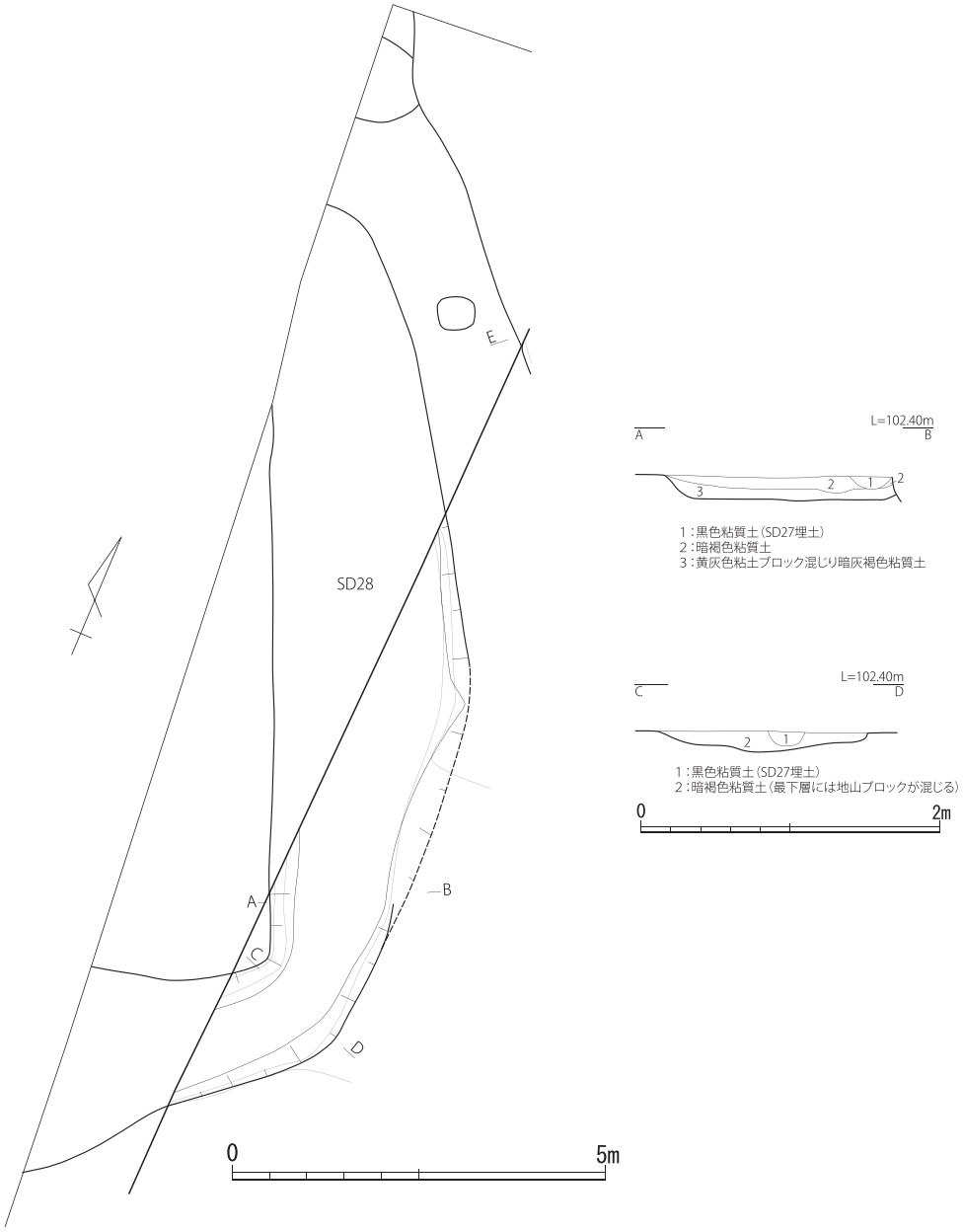
第140図　時塚11号墳遺物出土状況図(1)(1/20)



第141図　時塚11号墳遺物出土状況図（２）(1/20)

時塚12号墳（第142図）　調査区南西部で検出した「Ｌ」字状に屈曲するＳＤ28を方墳の周溝と判断した。古墳の墳丘および周溝の大部分は調査区外であり、全容をうかがうことはできなかった。また、周溝の一部は排土置き場で平面形のみを検出している。葺石や埴輪などの外表施設はなく、盛土、埋葬施設も検出することはできなかった。墳丘の主軸は北からやや西に振るが、時塚11・13・14号墳に比べると、やや北に向く形となる。

周溝は東側で幅2.5m・深さ0.15m、南側で幅1.5m・深さ0.12mを測る。時塚11号墳より周溝が浅い。また、東側周溝の東掘形は中央部分が東側にふくらんでおり、墳丘に平行していない。調査区西側の排土置き場で周溝外周の屈曲部を平面的に検出することができた。この検出状況などから、古墳の墳丘規模は東西３m以上、南北約10mの規模をもつ方墳であると推定される。東側周溝の断面形は逆台形を呈し、明確な墳丘基底部を削り出している。一方、南東隅部分では皿状



第142図　時塚12号墳実測図（平面：1/100、断面：1/50）

を呈し、明確な基底部を削り出していない。

遺物は、周溝埋土中から土師器甕（11）が出土しているが、周溝床面より遊離した状態で検出されている。出土状況からは墳丘側からの転落か、墳丘外からの転落あるいは遺棄なのか判断することはできなかった。また、混入遺物である可能性も考えられるため、この土師器甕がこの古墳の時期を示すものとは断定できない。

（松尾史子・石崎善久）

2）奈良時代以降の遺構・遺物

A．検出遺構

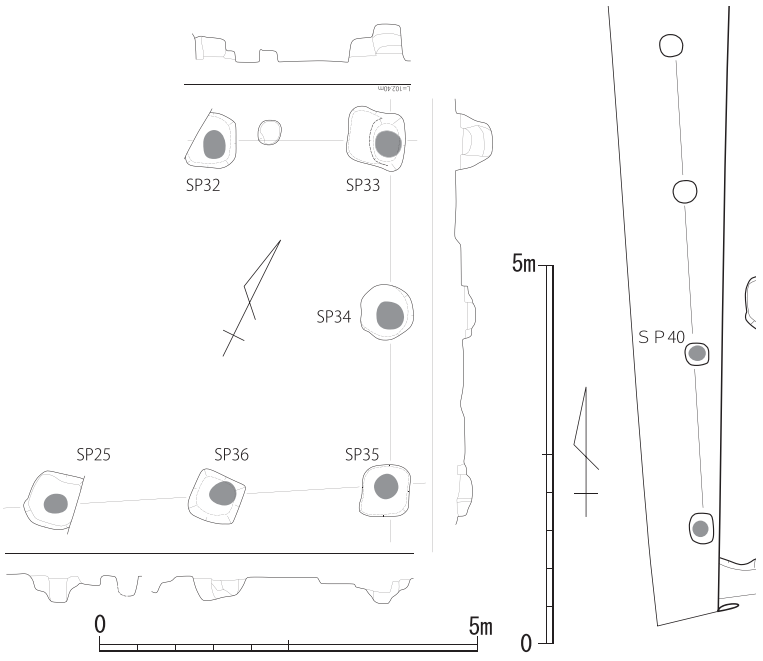
Ｌ３地区では古墳の周溝埋土上を中心に奈良時代以降の遺構・遺物を検出した。特に南半部で遺構の密度が高い。以下主要なものについて概観する。

掘立柱建物跡ＳＢ01（第144図左）　調査区の南で検出された掘立柱建物跡である。ＳＤ27に切られている。主軸を北から西に振る。東西２間（4.3m）以上、南北２間（4.5m）の規模をもつ。総柱の建物跡にはならず、おそらくは東西棟の掘立柱建物跡とみられる。

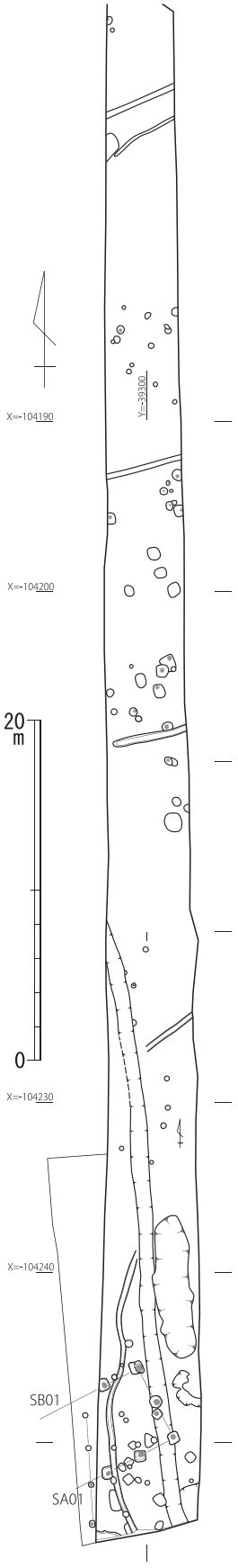
建物を構成する柱穴は平面方形もしくは不整方形を呈し、断面形では、柱を据え付けるために底面を一段深く掘り込む形態のものが多い。柱穴の規模は一辺0.6～0.8m、深さ0.2～0.5mを測る。検出した全ての柱穴から柱痕跡を検出した。柱痕跡からこの建物には径30cm前後の柱が使用されていたものと考えられる。

ＳＰ25から土師器甕(12)が、ＳＰ34から製塩土器(13)が出土している。奈良時代後半の建物跡とみられる。

ＳＤ27　調査地南半部をやや蛇行しながら南北方向に主軸をとる幅0.2m、深さ0.2mを測る素掘り溝である。掘立柱建物跡ＳＢ01を切っており、この調査区の中では新しい段階に属する遺構



第144図　掘立柱建物跡ＳＢ01、柵ＳＡ01実測図
（1/100）



第143図　Ｌ３地区検出遺構配置図
（奈良時代以降、1/400）

である

柵ＳＡ01（第144図右）　調査区外ではあるが、南北方向に並ぶ柱穴群を排土置き場で検出した。平面のみの検出と、露出した遺物の記録、取り上げ作業のみを行っているため、柱穴の深さなどについては不明である。南北３間（6.4m）分を検出した。遺物はＳＰ40から瓦器椀（21）が検出されている。

以上の遺構のほかに、この調査区では南半部分を中心に多数のピットを検出しているが、建物を復原するには至らなかった。遺物を図示した土坑やピットは第145図に番号のみで示した。

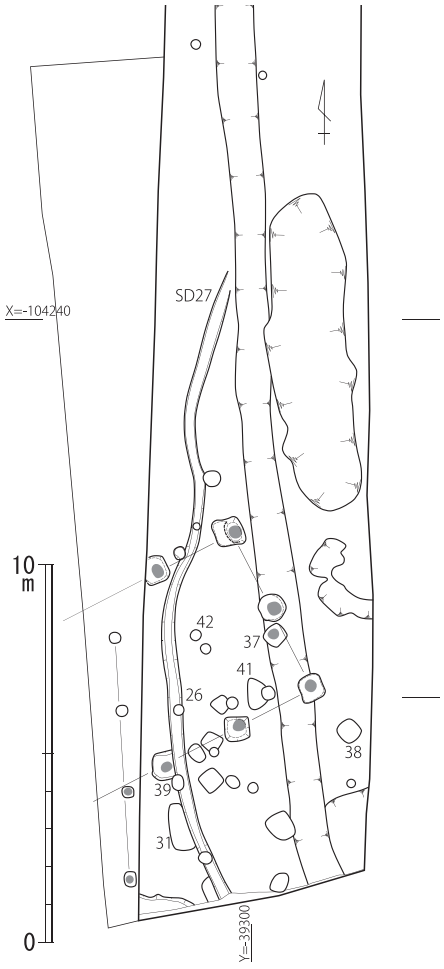
また、北から約45°東に主軸をとり、調査区を斜行する素掘り溝を複数検出しているが、これらは近・現代の耕作に伴う溝であると判断された。

（岡崎研一・松尾史子・石崎善久）

Ｂ．出土遺物（第146図）

Ｌ３地区の各遺構出土遺物を図示した。以下、遺構ごとに概観する。

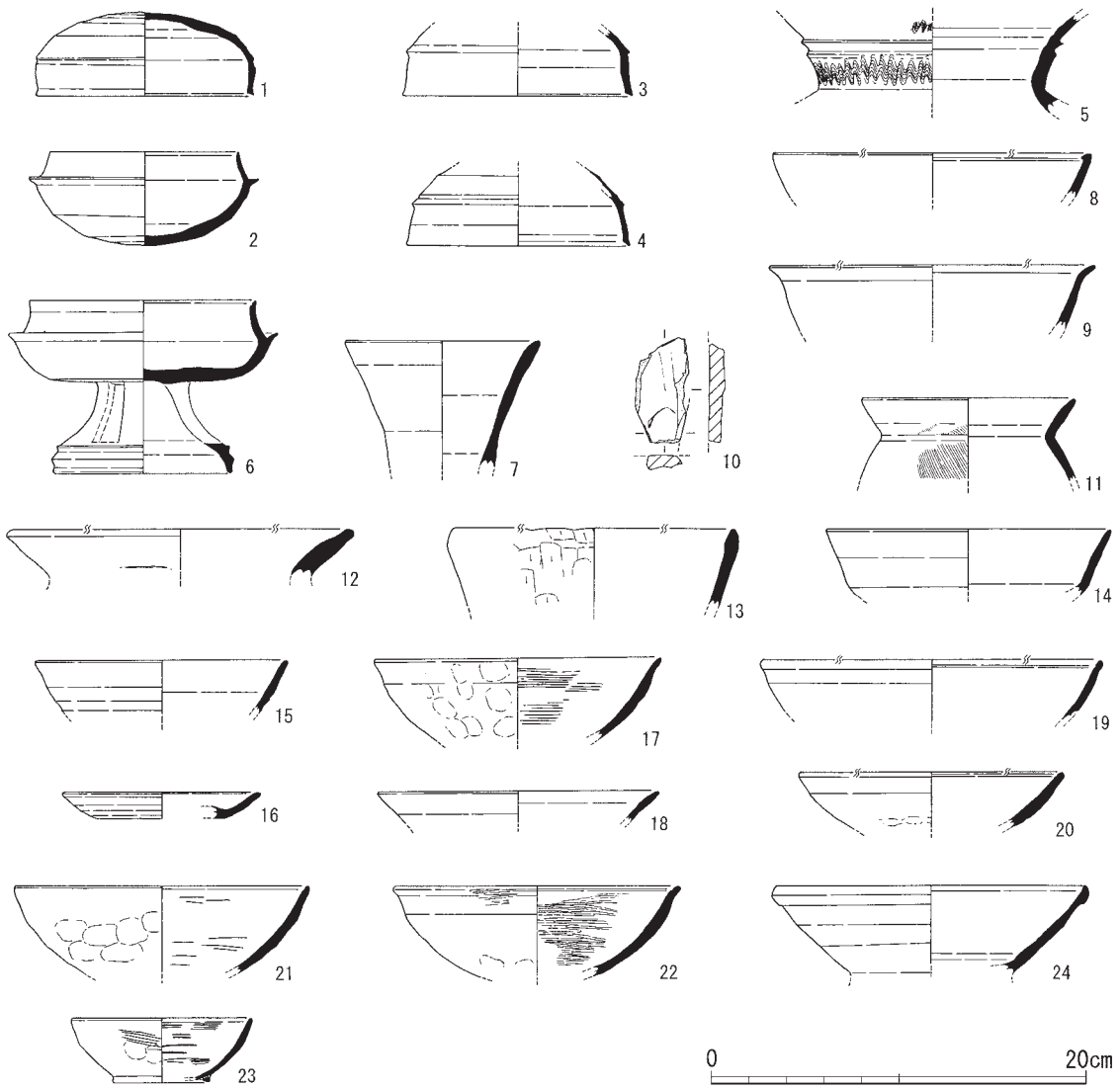
時塚11号墳（１～10）　１・２・５は周溝外から周溝ＳＤ29に転落した遺物とみられる須恵器である。１・２はセット関係とみられる須恵器杯身・杯蓋である。両者とも内面に赤色顔料が付着する。天井部や底部は丸みを帯びた形態をとるが、蓋の稜はやや退化し、杯身の口縁もやや面をなすだけの新しい要素がみられる。陶邑編年ＴＫ47型式からＭＴ15形式に併行する段階のものと考える。５は須恵器壷の頸部である。２条の突帯を削り出し、下部に波状文を施す。６・７は墳丘からの転落遺物であり、本墳に伴うものである。６は短脚有蓋高杯である。三方にスカシをもつ。杯部は復原口径が12.0cmを測る大形品であり、陶邑編年ＭＴ15型式に併行する地方窯産の須恵器と考える。７は須恵器壷の口縁である。３・４・８・９・10はいずれもＳＤ29の埋土中からの出土遺物である。８は布留式段階の土師器甕口縁片、９は須恵器の椀であり、この古墳の埋没年代を示す資料と考える。10は粘盤岩製の砥石片である。



第145図　Ｌ３地区南半部遺構配置図
（奈良時代以降、1/200）

時塚12号墳（11）　図示できるものはこの土師器甕のみである。直線的に延びる口縁をもつ。外面は縦方向のハケにより調整される。古墳時代中期後半から後期前半頃の年代を考えたい。この古墳の築造年代を直接示す資料ではないと判断する。

掘立柱建物跡ＳＢ01（12・13）　12はＳＰ25掘削中に出土した土師器甕片である。大きく外反する厚手のものであり、奈良時代後半以降に属すると思われる。13はＳＰ34出土の製塩土器である。外面は荒いケズリにより調整される。



第146図　Ｌ３地区出土遺物実測図

ＳＫ31（15・16）　15は須恵器の杯身片である。16は土師器皿である。

ＳＰ39（17～20）　17は瓦器椀である。内面に横方向のミガキがみられる。18は土師器の皿とみられる小片である。19は須恵器椀である。口縁内端面に沈線を施す。20は土師器椀である。浅い形態を呈する。

柵ＳＡ01（21）　柵を構成するＳＰ40出土の瓦器椀を図示した。深い形態を呈し、内面は横方向のミガキ、外面はユビ押さえが観察される。口縁内端面に段を形成する。

ＳＰ42（22）　22は瓦器椀である。内外面ともミガキが観察される。

ＳＰ43（23）　23は小型の瓦器椀である。内外面にミガキを施し、高台は外方に開き、断面台形を呈する。

包含層（24）　24は白磁の椀である。復原口径16.2cmを測る。椀外面には上から2/3程度のみ施釉される。

（松尾史子・石崎善久）

（５）Ｌ４地区

Ｌ４地区は、Ｌ３地区北半部の西に設定した地区である。この地区は調査前の現況が他の地区と異なり、杉や檜などの植樹・育成が行われていた。そのためか、この地区での遺構検出時には撹乱坑が多数検出され、遺構も損壊が著しいところがあった。

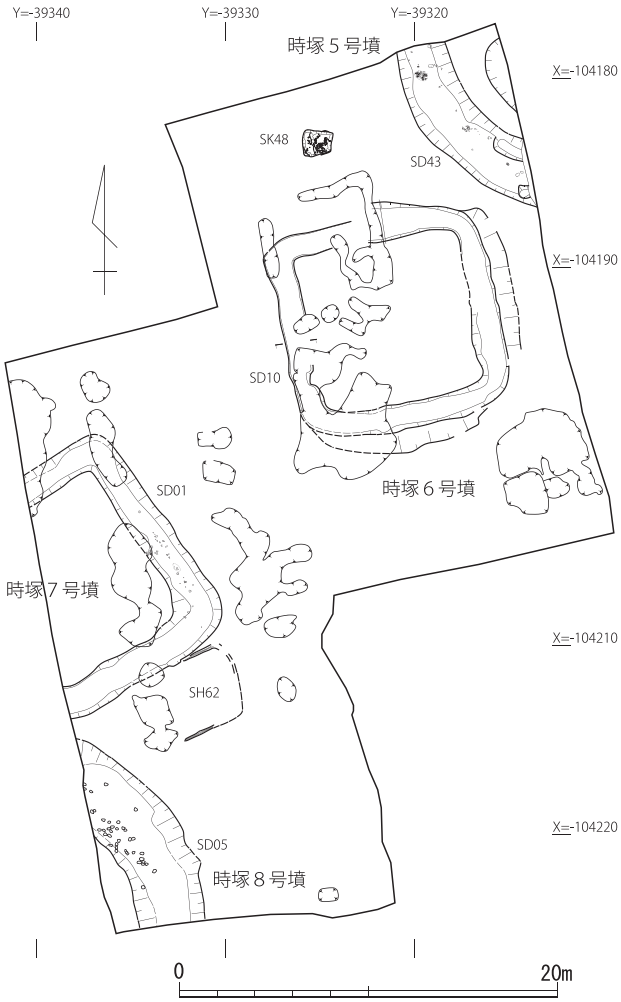
遺構は全て地山である黄灰色系粘質土の上で検出したが、時期的には、下層遺構として古墳時代前期の土坑・竪穴式住居跡各１基、古墳時代中期後半の方墳・円墳４基などを、上層遺構として掘立柱建物跡３基・溝、その他、時期不明の柱穴などに分離することができる。

以下、古墳時代を中心とする下層遺構と、奈良時代を中心とする上層遺構に分けて概観することとする。

１）古墳時代の遺構・遺物

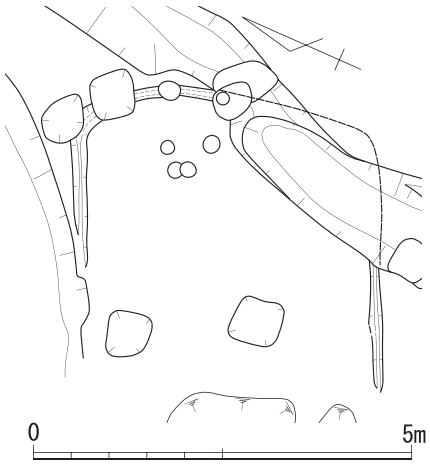
Ａ．検出遺構

古墳時代に属する遺構として、竪穴式住居跡１基・土坑１基・古墳４基を検出した。



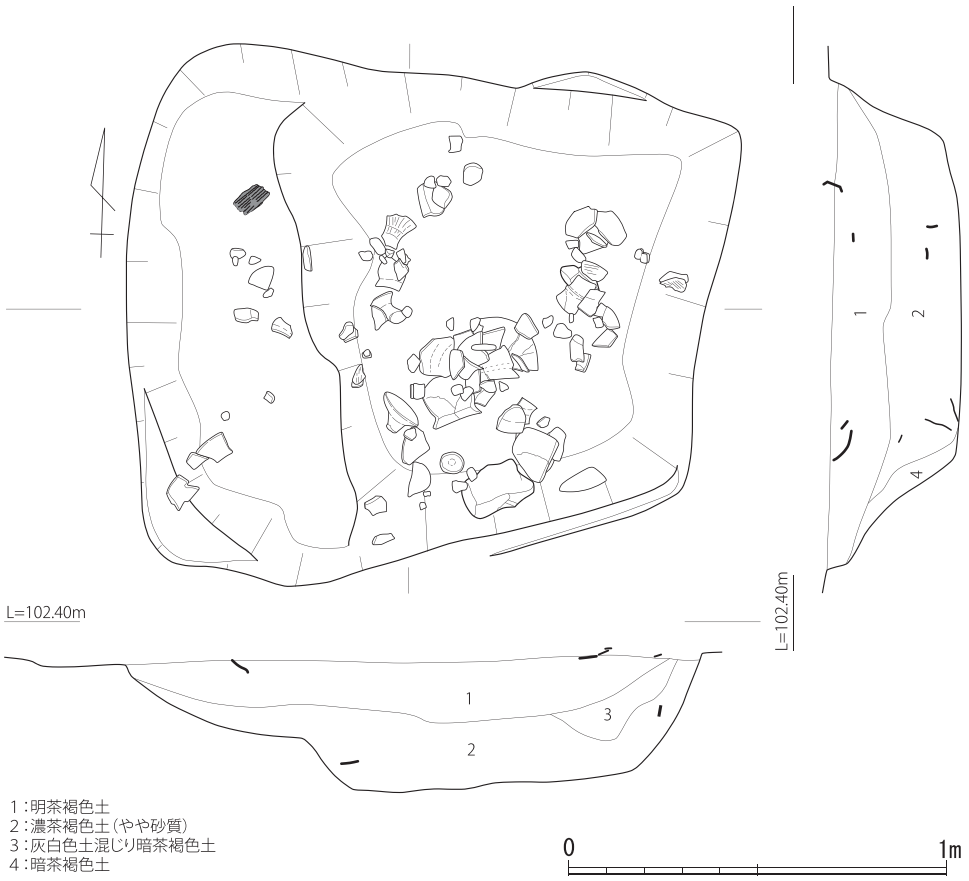
第147図　Ｌ４地区検出遺構配置図（古墳時代、1/400）

竪穴式住居跡ＳＨ62（第148図）　調査区の南で検出された竪穴式住居跡である。主軸は北より西に振る。平面は方形プランを呈し、規模は東西４ｍ以上、南北4.1ｍを測る。遺構の遺存状況はきわめて悪く、周壁溝が深さ２～５cm程度遺存しているに過ぎず、西側は削平のため、全く遺存していない。また、主柱穴などの住居内施設を特定することもできなかった。遺物はこの住居床面相当部を精査中に土師器小片が数点出土している。図示することもできず、明確な時期を示すことはできないが、古墳時代前期から中期に属するものと考える。



第148図　竪穴式住居跡ＳＨ62平面図（1/100）

ＳＫ48（第149図）　調査区の北側で検出された土坑である。平面は西側がやや幅広い長方形プランを呈し、長軸1.5m、西側幅1.4m、東側幅1.0ｍを測る。西側のほう



第149図　ＳＫ48実測図（1/20）

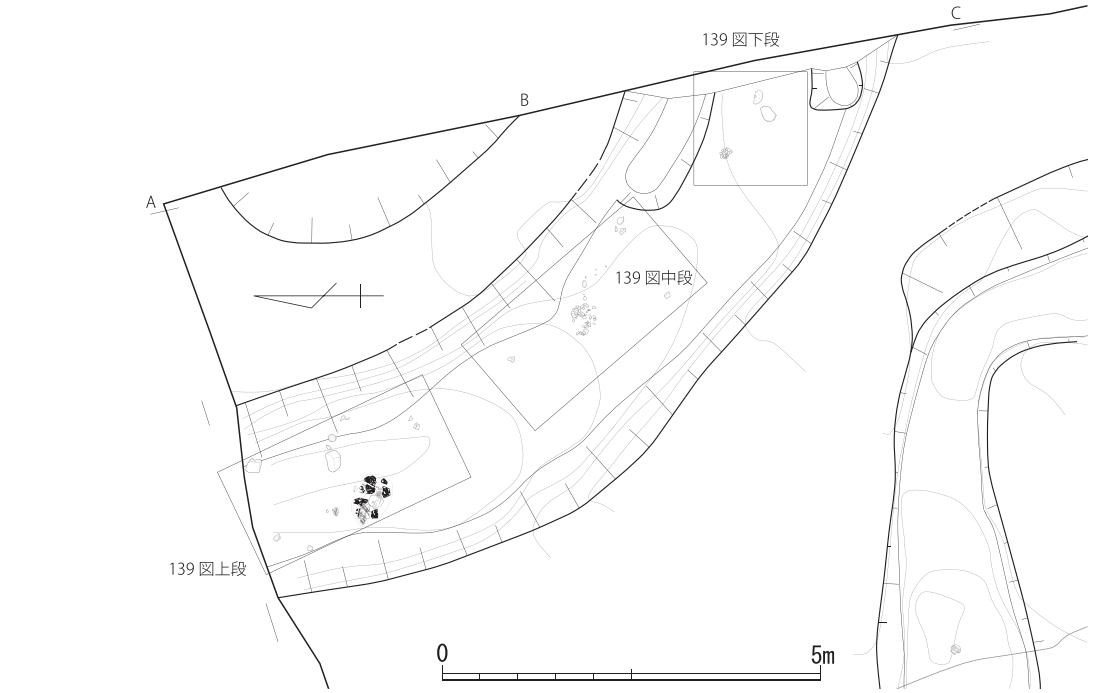
に段をもち、東側はさらに一段深く掘削されている。西側の段までの深さは0.2m、東側で土坑底面までの深さ0.35mを測る。

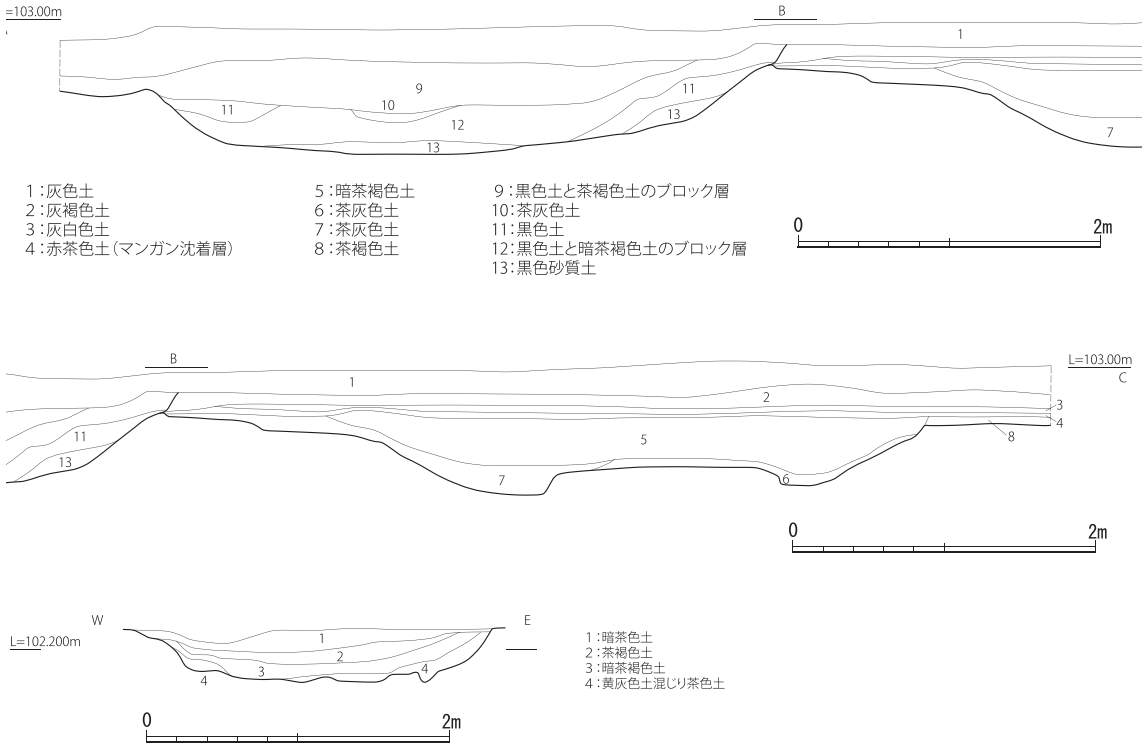
土坑内からは多数の土師器（第156図１～10）が検出された。甕・高杯・器台・蓋・ミニチュア土器など、多様な器種がみられ、大型の破片が中心である。出土層位は第149図第２層を中心にするが、第１層中からも小破片が検出されている。また、これらの土器群とともに、角礫と炭が検出されている。

遺構の性格については明確ではないが、現況では湧水点に達しているため、集落に伴う素掘りの井戸の可能性を考えておきたい。埋土の状況からは人為的な埋め戻しがなされたとは考えられず、遺構廃絶時に投棄された遺物が自然に埋没したものと判断する。また、ミニチュア土器が出土していることは祭祀が行われたことを示唆している。

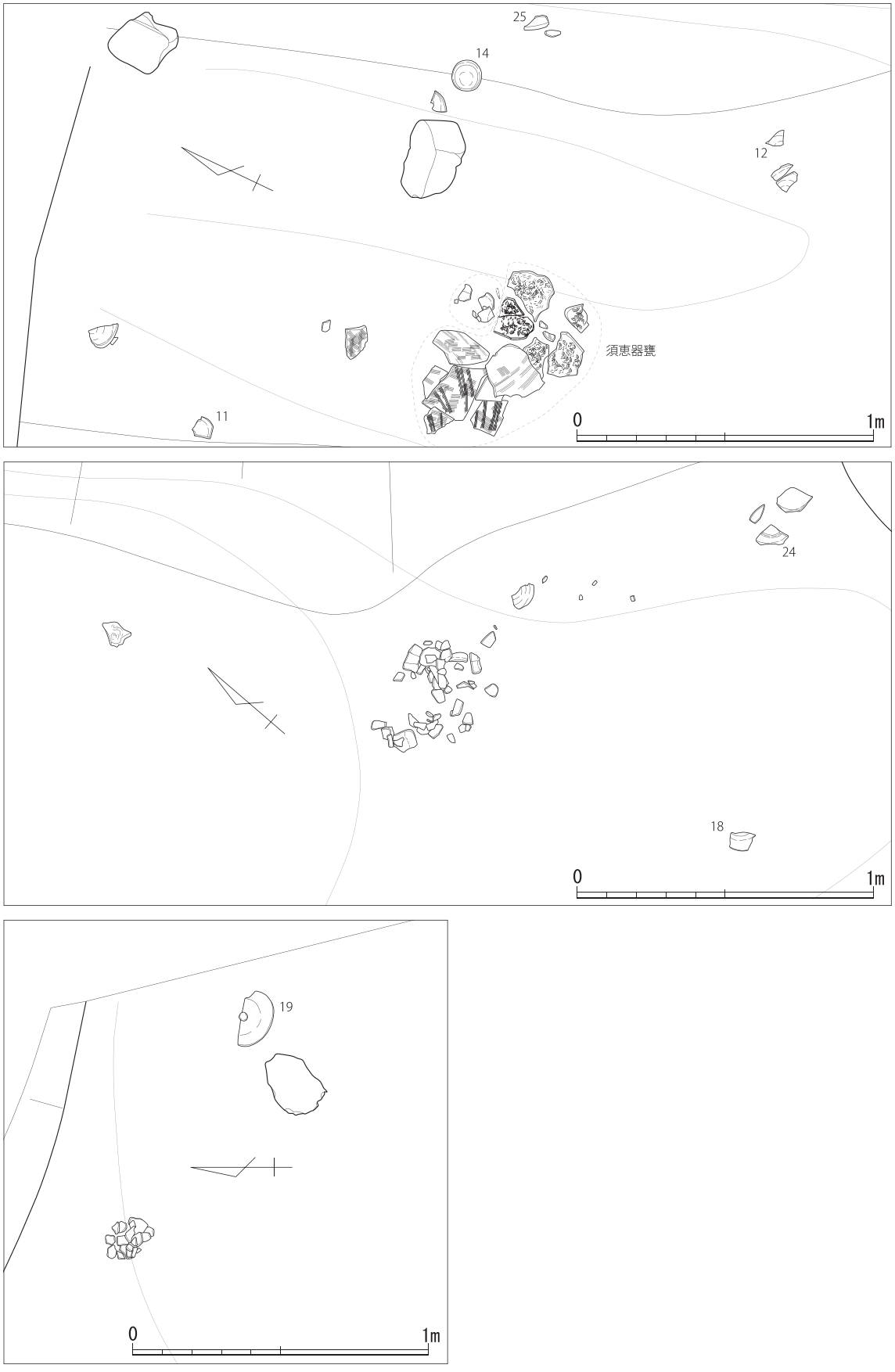
時塚５号墳（第150図）　調査区の北東部で検出された平面が弧を描くＳＤ43を古墳の周溝と判断した。ＳＤ43の平面形が弧状を呈することから、円墳と判断される。古墳の南西部を検出したと考えられる。

周溝は幅3.0m、深さ0.4～0.5mを測るが、周溝床面は南から北へ傾斜している。また、周溝の北東の土坑を当初、墓壙の可能性があるものと考えて調査を実施したが、壁面の土層観察の結果、この土坑は周溝埋土のさらに上層の層位から掘り込まれていることが明らかとなり（第150図）、





第150図　時塚５号墳実測図（平面：1/100、断面1/50）



第151図　時塚５号墳遺物出土状況図(1/20)

埋葬施設ではないものと判断した。

周溝内から須恵器や土師器が検出されている（第151図）。いずれも周溝底面に接するか、やや遊離した状態で検出されているが、中には、第157図19～26の奈良時代の須恵器も含まれているため、この古墳は奈良時代には完全には埋没していなかったものと考える。時塚３号墳と同様、奈良時代以降に周溝が埋没し新たな土地利用がなされていったものと判断される。また、遺物と同時に人頭大の角礫が検出されているが、墳丘基底に据え付け痕などを検出することはできず、これらがこの古墳の外部表飾として使用されたものである確証を得ることはできなかった。

時塚６号墳（第153図）　時塚５号墳の南西で検出された方形に巡るＳＤ10を古墳の周溝と判断した。墳形は方墳である。周溝は西側が撹乱と削平により遺存状況が悪いが、完周する。今回の調査の中で、唯一全体を調査できた古墳である。

周溝の規模は北側で幅2.1m・深さ0.3m、東側で幅1.7m・深さ0.3m、南側で幅1.4m・深さ0.2m、西側で幅1.2m・深さ0.1mをそれぞれ測る。また、東および南側の周溝では、周溝外が一段緩やかな傾斜を呈した後、深く掘削されている状況が観察された。また、周溝外よりも墳丘側の方が傾斜角が大きい点も特徴的である。墳丘の規模は基底部で東西９m、南北９mを測る。墳丘の主軸方向はＮ11°Ｗを測り、北からわずかに西に振る。埴輪、葺石などの外部表飾は確認されておらず、時塚５号墳のような角礫も検出されていない。

墳丘は削平のため、基底の地山削り出し部分のみが遺存しており、埋葬施設を検出することはできなかった。

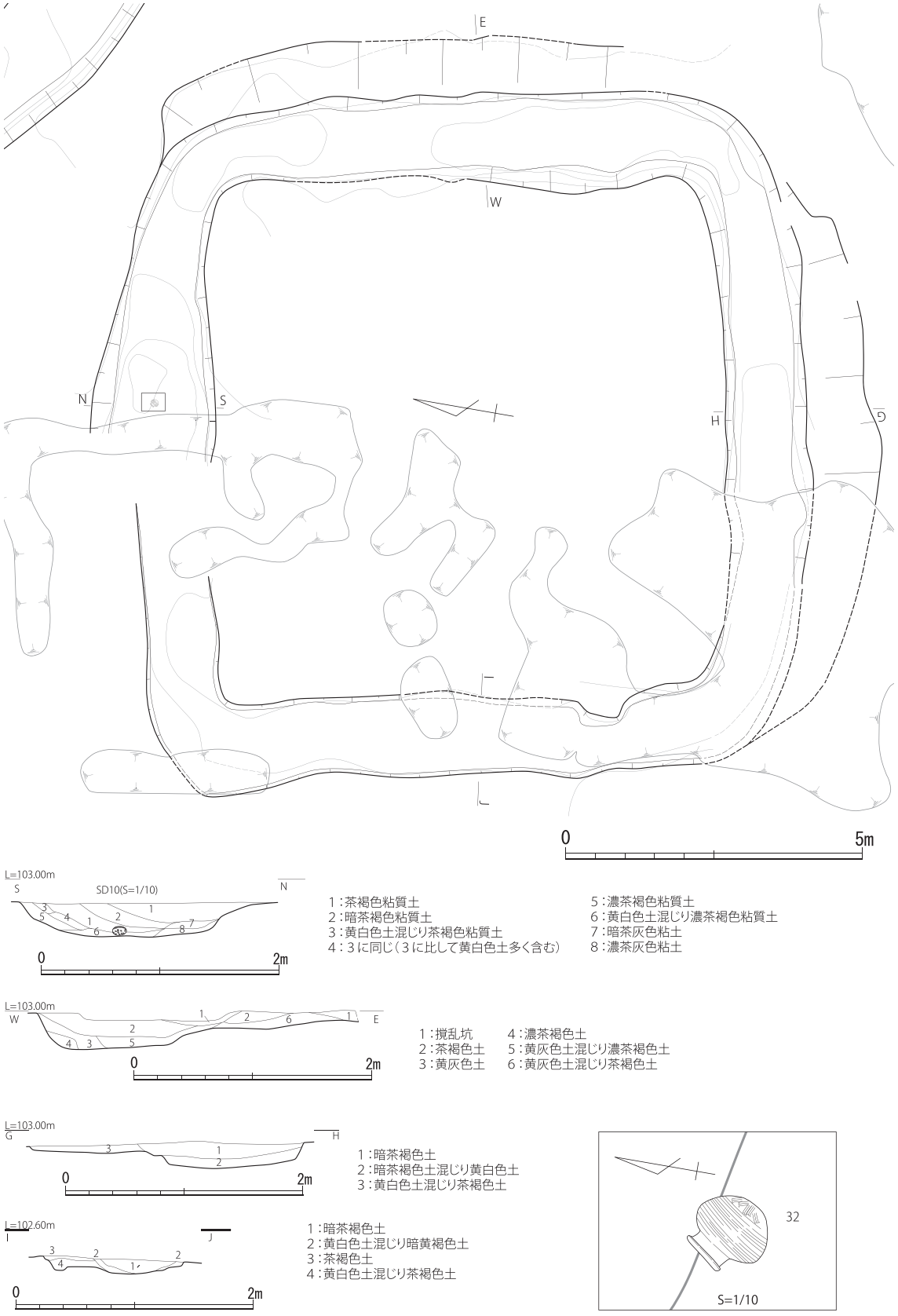
周溝内から細片化した須恵器が数点出土しているほか、北周溝中央部で、須恵器壺１個体（第157図32）が横位で検出された。ほぼ周溝床面に接していることから、周溝埋没前の築造時に近い時期を示すものとみられる。ただし、この須恵器壺が、墳丘外からの転落あるいは遺棄なのか、墳丘側からの転落なのか、この場に供献されたものなのか確証を得ることはできなかった。

時塚７号墳（第153図）　調査区西側で検出されたＳＤ01を古墳の周溝と判断した。墳形は方墳である。墳丘西側が調査区外となっており、全容は不明である。また、北側と北東隅部分は大きく撹乱を受けている。周溝は検出した範囲では完周しており、陸橋部などはみられない。

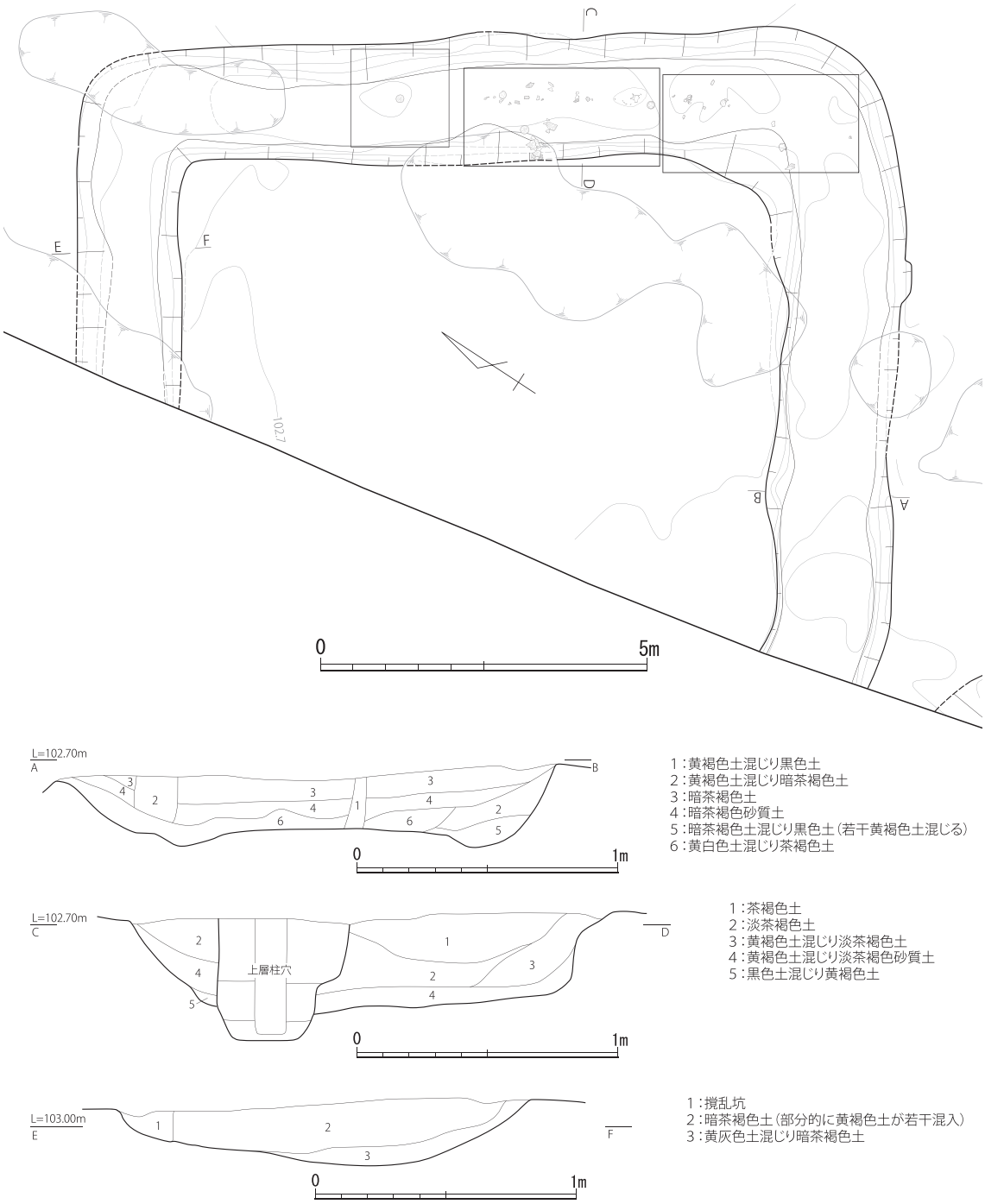
周溝の規模は北側で幅3.2m・深さ0.5m、東側で幅3.7m・深さ0.7m、南側で幅3.8m・深さ0.6mをそれぞれ測る。周溝断面では、墳丘側の方が、周溝外側より傾斜角が大きい点が特徴的である。また、周溝南側では基底部および、周溝外側底面に浅い掘り込みを行っている部分も断面から確認された。墳丘の規模は基底部で東西８m以上、南北9.8mを測る。墳丘の主軸方向はＮ31°Ｗを測り、北から西に振る。埴輪、葺石などの外部表飾は確認されておらず、時塚５号墳のような角礫も検出されていない。

墳丘は削平のため、基底の地山削り出し部分のみが遺存しており、盛土や埋葬施設を検出することはできなかった。

東側周溝底面上で、多数の須恵器、土師器を検出した（第154図）。器種には、杯身・杯蓋・甕・壺などが認められる。いずれも完形個体もしくは、大型の破片の状態で検出された。なかでも壺



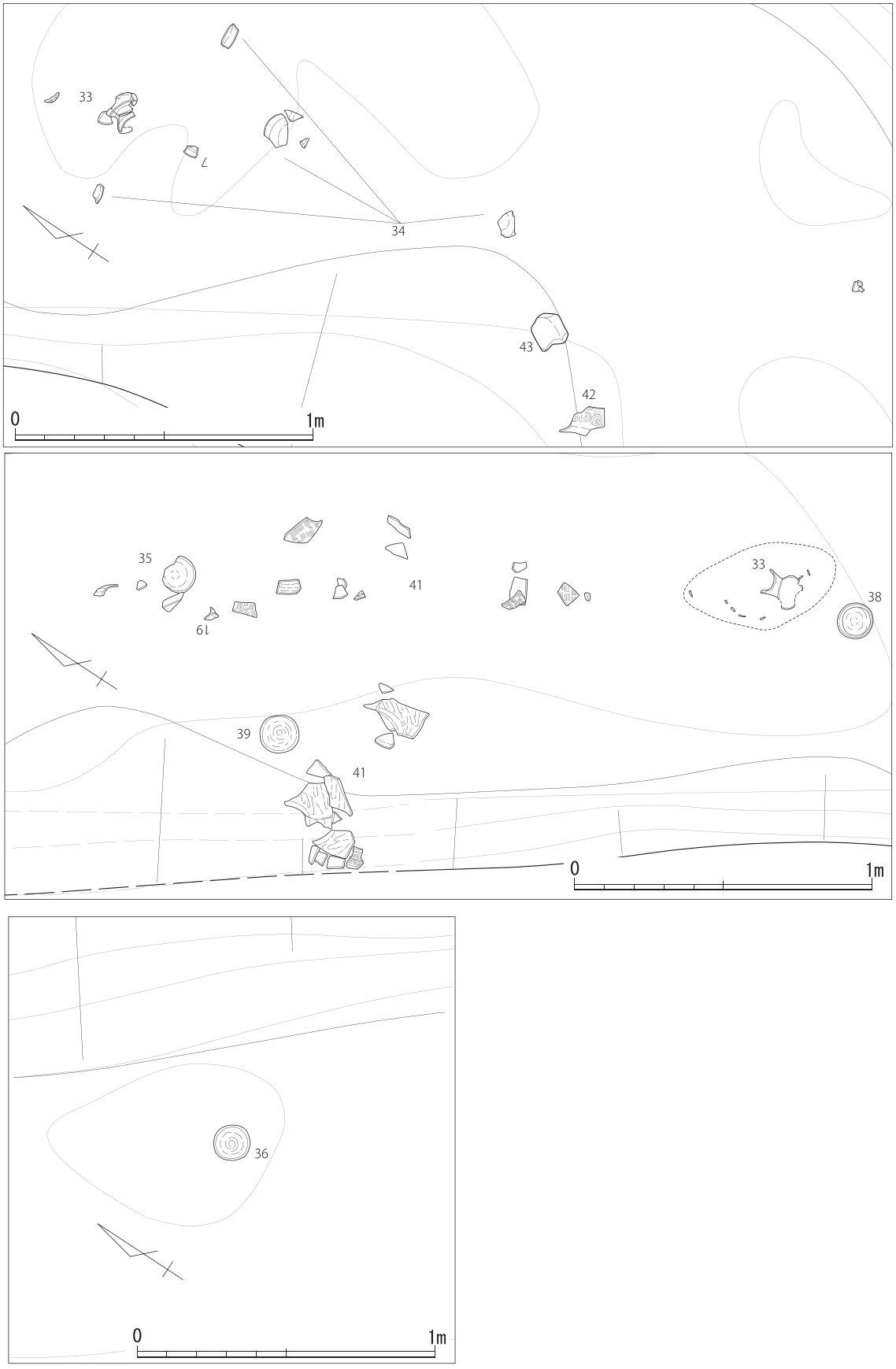
第152図　時塚６号墳実測図（平面：1/100、断面1/50、遺物出土状況図：1/10）



第153図　時塚７号墳実測図（平面：1/100、断面：1/50）

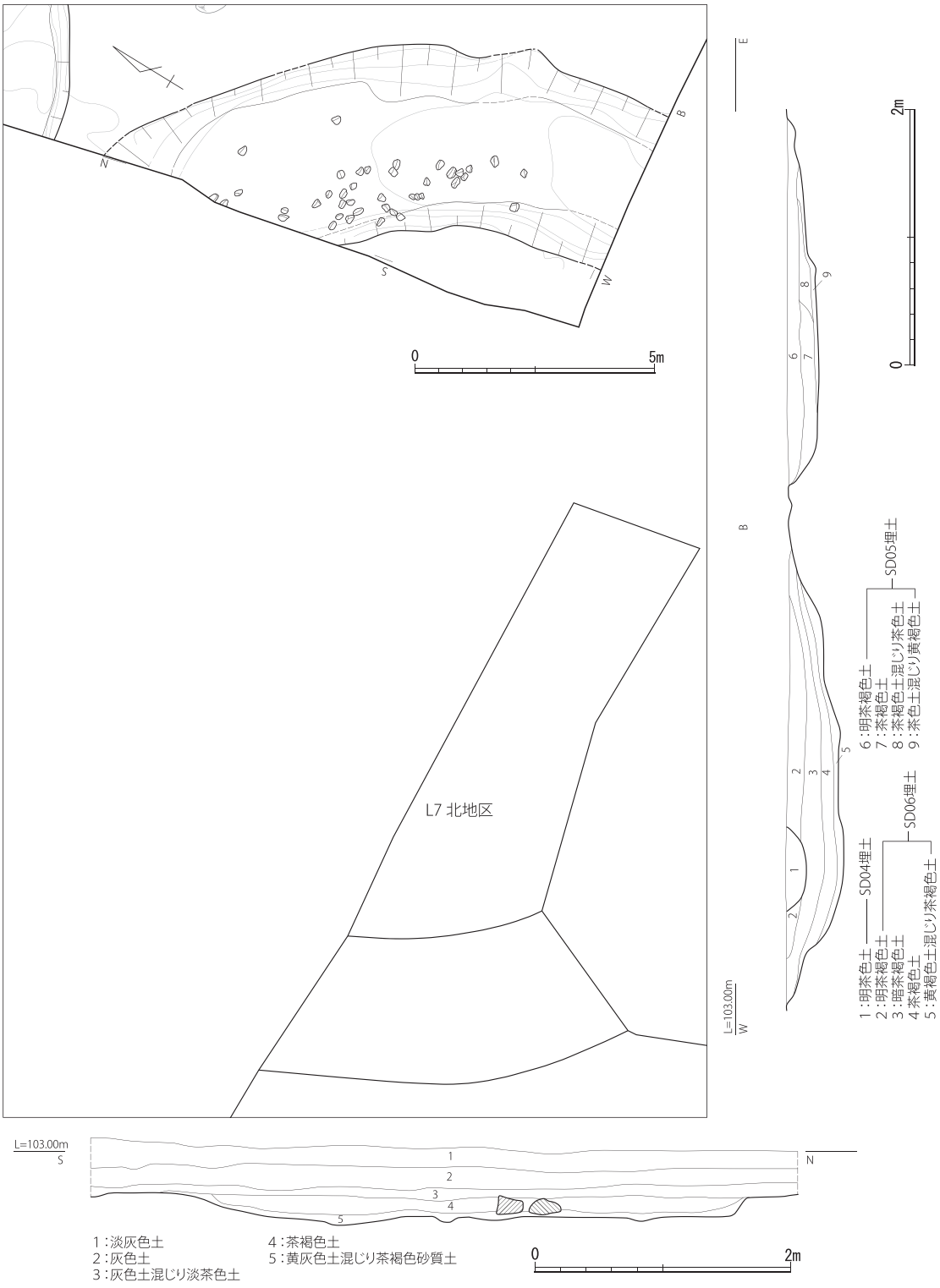
(41)は墳丘斜面直上で検出されており、墳丘側から転落した状態とみられる。また、その他の個体も周溝底面直上、もしくはやや遊離した状態で検出されているため、この壺と同時期に溝内に墳丘側から転落したものとみられる。また、周溝底面や、墳丘肩部直上で検出されていることは、周溝埋没以前に土器群が転落した状況を示しているものと考えられ、古墳の削平時や、墳丘の流失に伴って混入した遺物ではないと考える。したがって、これらの土器群は、埋葬施設内のものではなく、墳丘上で使用された土器群として評価できる。

時塚８号墳（第155図）　調査地の南西部で検出されたＳＤ06を古墳の周溝と判断した。ＳＤ06



第154図　時塚７号墳遺物出土状況図(1/20)

は弧状を呈しているため、墳形は円墳と判断された。また、Ｌ７地区の北側に設けた排土置き場で床土直下から検出された溝が、平面的にこの溝と連続する可能性が高いことが明らかとなり、基底部で直径約23mを測る円墳であると考えられる。周溝は部分的に検出したに過ぎないが、幅６m、深さ0.5mを測る。また、周溝底面は北から南へ傾斜している。



第155図　時塚８号墳実測図（平面：1/125、断面：1/50）

墳丘は削平のため、基底の地山削り出し部分のみが遺存しており、埋葬施設を検出することはできなかった。

遺物は周溝内から細片化した須恵器・土師器が出土しているが、いずれも周溝底より遊離している。また、周溝内からは多数の拳大の角礫が検出された。ほぼ周溝床面に接しているものも存在したが、遊離しているものも多く認められる。角礫の平面的な検出状況からは墳丘側からの転落の可能性が高いものと考えられるが、古墳の基底にこれらの礫を据え付けた痕跡などは認められず、古墳の表飾施設としての確証を得ることはできなかった。

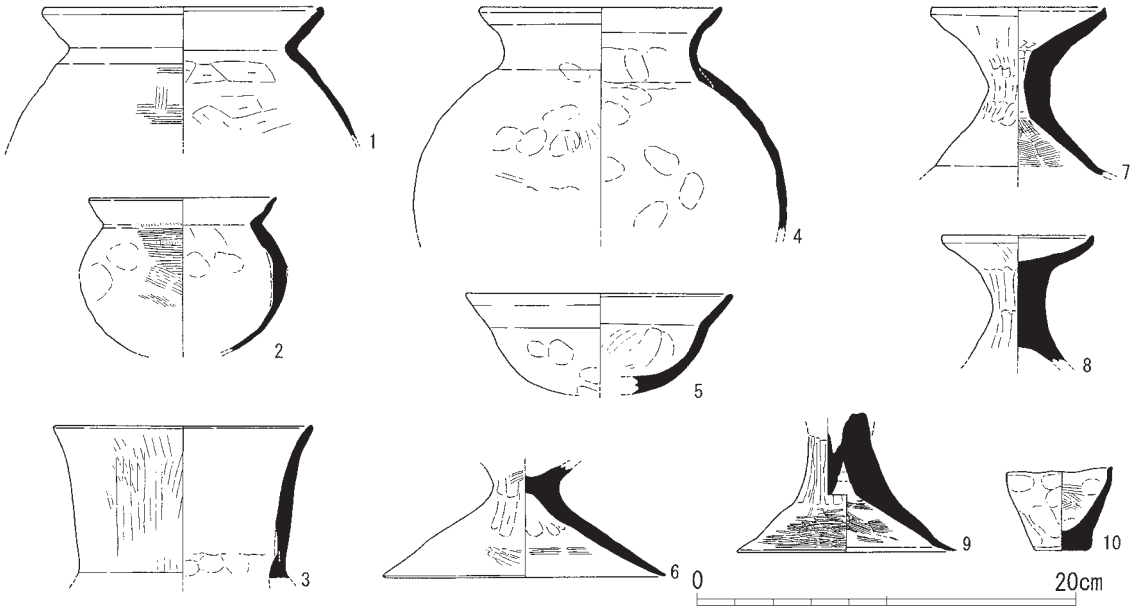
（岡﨑研一・石崎善久）

B．出土遺物（第156～158図）

Ｌ４地区出土遺物として、ＳＫ48出土の土師器および古墳出土遺物を図示した。

ＳＫ48（第156図）　１・２は土師器甕である。１は復原口径14.6cmを測る。口縁端部は内側に折り曲げて肥厚させる。体部内面のケズリは口縁部との屈曲部までは及ばず、屈曲部はナデにより仕上げられている。外面は横方向を主体とするハケで調整する。煤の付着が認められる。２は復原口径9.8cmを測る小型の甕と考えるが、粗製の小型丸底壺の可能性もある。火を受けているためか、器壁の剝離が著しい。短く内湾気味に立ち上がる口縁をもつ。３は直口壺の口縁である。外面は荒いハケがみられる。４は広口壺である。頸部は短く外反し口縁部はやや内湾する。体部は球形に近い。５は粗製の鉢である。外面に煤が付着している。６は蓋である。薄手のつくりである。７・８は小型器台である。７は中空の、８は中実の脚柱部をもつ。９は高杯脚部である。中実で短い形態をとる。底部側と、杯部側の両方に貫通しない工具の刺突痕がみられる。10はミニチュア土器である。鉢の模倣品と考える。底部は平底を呈する。これらの土師器は当地域における布留甕導入段階の土器組成を示しているものと評価したい。

時塚６号墳（第157図11～29）　ＳＤ43出土遺物を図示した。古墳時代から奈良時代の遺物が混

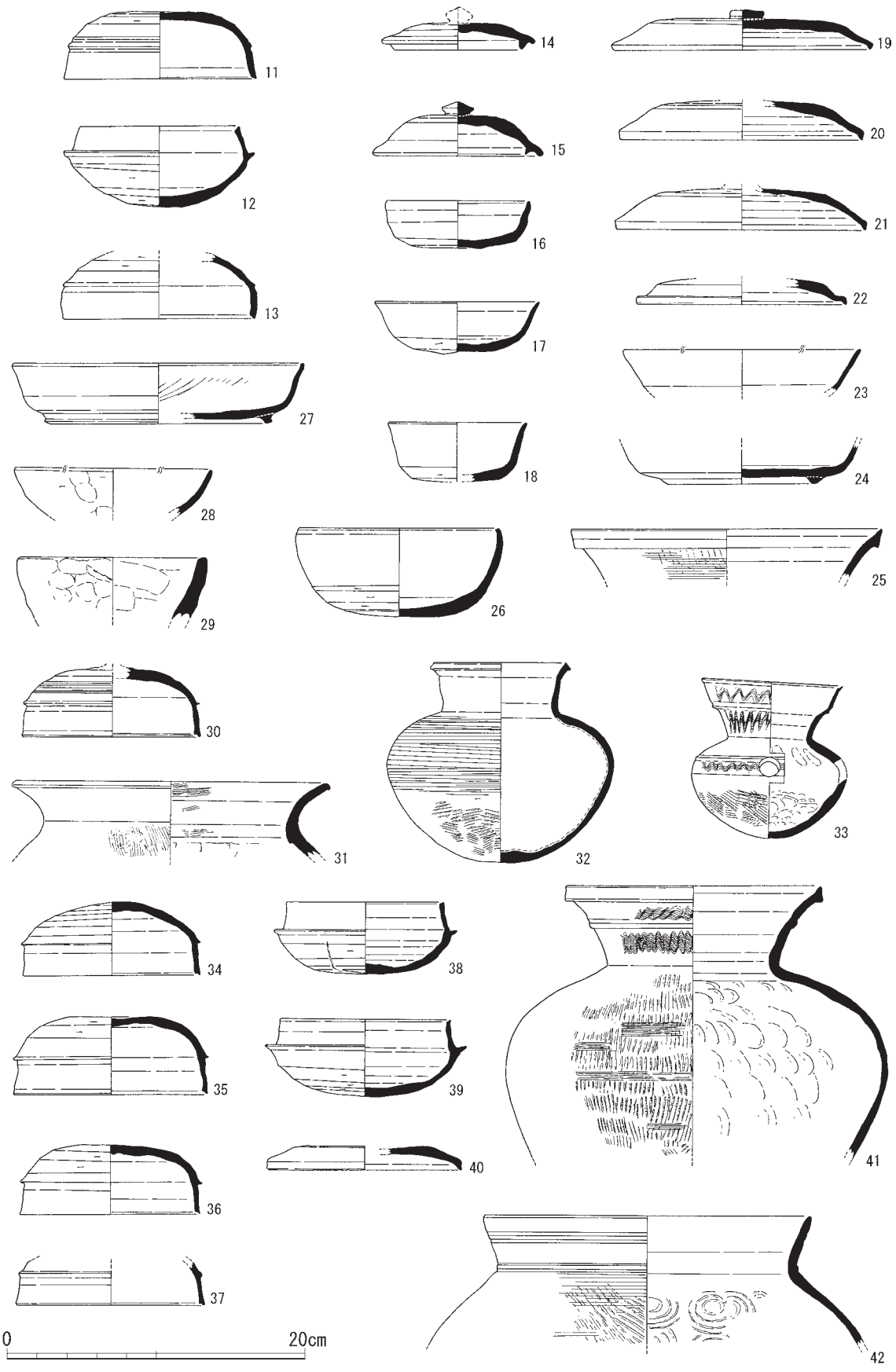


第156図　Ｌ４地区出土遺物実測図（１）（ＳＫ48）

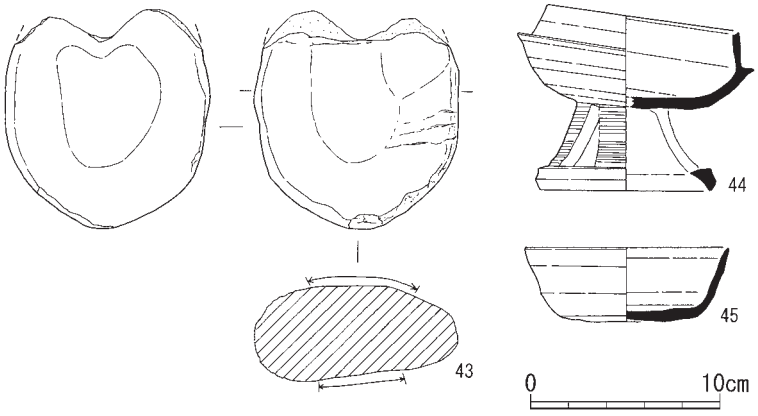
在する。このうち、この古墳の築造時期に近いものとして、須恵器蓋杯のセットである11・12を当てる。杯蓋11は天井部の高い形態を示すが、天井部はやや平坦に整形され、稜や端部にもやや新しい要素をみることができる。杯身12は口縁がやや内傾気味になり、口縁端面は平坦に整形される。これらの点から、この須恵器は在地産であり、陶邑編年ＭＴ15型式に併行する段階のものと考えておきたい。13は周溝埋土中から出土した須恵器杯蓋である。稜が沈線で表現される。14は須恵器蓋である。壺に伴うものと考えられる。15～18は飛鳥時代の須恵器蓋杯である。19は杯Ｇ蓋であり、高い天井部に突出するかえりをもつ。19～24は奈良時代後半に属する須恵器蓋杯類である。25は須恵器甕の口縁部である。26は須恵器椀である内湾する体部と平底気味の底部からなる。28は土師器杯である。29は製塩土器であり、奈良時代のものと考える。これらの遺物から、この周溝は奈良時代に埋没したものと考えられる。また、飛鳥時代の土器が出土していることは、飛鳥時代にも、この地区で何らかの土地利用がなされていたことを示唆するものである。

時塚７号墳（第157図30～32）　周溝内出土遺物３点を図示した。30は周溝埋土出土の須恵器高杯蓋である。復原口径11.8cm、残存高4.65cmを測る。天井部にはカキメが施される。稜は鋭利に削り出され、口縁端面は段を形成する。31は周溝埋土出土の土師器甕である。外反する口縁をもち、口縁端部は平坦面をなす。32は須恵器直口壺である。短く直立する頸部に短く外反する口縁が付く。口縁端面は平坦に仕上げられる。体部は上半がカキメ、下半にタタキが観察される。内面は回転ナデにより調整される。これらの遺物のうち、この古墳に確実に伴うのは32であるが、やや特異な器形のため、この個体のみから帰属年代を示すことはできない。一方、埋土出土ながら30は陶邑編年ＴＫ23・47型式に併行する段階のものと考えられる。32の調整技法などと矛盾しないため、この古墳の築造時期をＴＫ23・47型式併行段階と考える。

時塚８号墳（第157図33～42、第158図43）　周溝内出土遺物11点を図示した。出土状況から古墳墳丘側から転落した遺物群であり、この古墳の築造時期を直接示す資料として評価できる。33は須恵器𤭯である。体部は扁平であり、体部最大径は体部やや上方にもつ。肩部に一条の沈線を施し、その下方に波状文を施文する。頸部は短く、口縁との境に鋭い稜をもつ。口縁端部は凹面を形成し、口縁外側面には波状文を施文する。体部下半外面には細かなタタキが残される。34～36は須恵器蓋である。34は口径11.8cm、器高5.0cmを測る。天井部は高く丸みを帯びている。稜は鋭く突出し、口縁端面は段を形成する。35は口径12.9cm、器高5.2cmを測る。天井部は平坦であるが、天井部の高い形態をとる。稜は鋭く突出し、口縁端部は段をなす。36は口径12.0cm、器高4.7cmを測る。天井部は高く、稜は鋭く突出し、口縁端部は段をなす。37は周溝埋土出土の小片であるが、形態的にこれらの須恵器杯蓋と近似する。38・39は須恵器杯身である。38は口径10.4cm、器高4.85cmを測る。口縁は高く直立し、口縁端部はやや肥厚し、端面は平坦に整形される。わずかに平底気味であり、広範にヘラケズリが施される。39もほぼ同様の形態をとるが、口縁端面は段を形成する。口径11.25cm、器高5.2cmを測る。内面に赤色顔料が付着する。41は須恵器壺である。頸部中央に一条の突帯を削り出し、その上下に波状文を施文する。口縁端部は外面に面をなし、端部は上方につまみ上げるように納める。外面は平行タタキを施した後、横方



第157図　Ｌ４地区出土遺物実測図（２）



第158図　Ｌ４地区出土遺物実測図（３）

向のカキメにより調整する。内面は青海波紋を擦り消している。外面には自然釉が付着する。器壁の薄い個体である。42は直立する口縁をもつ須恵器甕である。短く立ち上がる口縁外側面には２条の沈線を施す。40は須恵器杯蓋である。埋土中出土の遺物であり、周溝の埋没時期を示す資料である。平らな天井部と下方に短く屈曲する口縁部をもつ。奈良時代後半の遺物と考える。43は使用痕の残る石製品である。上端を欠損するが、扁平な円形の砂岩系の石材を用いている。明瞭な擦痕は観察できないが､両面とも中央が皿状にわずかに窪んだ形態を呈し、その部分が磨かれたように平滑になっている。磨石の用途が考えられる。以上、時塚８号墳出土遺物は今回調査した古墳のなかでも古相を示す須恵器群で構成されている。陶邑編年ＴＫ23型式に併行する段階のものとして位置づけておきたい。

時塚９号墳（第158図44・45）　ＳＤ06出土遺物２点を図示した。このうち、直接古墳に関連する遺物は44である。44は短脚有蓋高杯である。焼け歪みが著しいが、復原口径10.1cm、器高約9.2cm、杯部の高さ4.8cmを測る。脚はほぼ三角形に近いスカシを三方に施す。また、脚柱外側面には２段にわたってカキメを施している。杯部の立ち上がりはやや内傾し、口縁端部はわずかに段を形成する。杯部がやや扁平な形態をとり、口径も大型化していることなどから、在地産の須恵器であり、陶邑ＭＴ15型式併行期のものと考えておきたい。45は埋土中出土の須恵器杯Ｇの身である。当古墳の埋没年代を示す資料と考える。

（岡﨑研一・石崎善久）

2）奈良時代以降の遺構・遺物

A．検出遺構

Ｌ４地区では、奈良時代以降の遺構として、掘立柱建物跡３棟・溝・土坑などを検出した。また、掘立柱建物跡に復原できなかったピットも多数検出している。以下、主要な遺構について概観する。

掘立柱建物跡ＳＢ01（第160図） 調査区北東部で検出した南北２間（3.2m）、東西２間（３m）の総柱の掘立柱建物跡である。

主軸方位はN11°Wを測り、若干西に主軸を振る。

建物を構成する柱穴の平面形は方形、もしくは不整方形を呈し、規模は一辺0.4～0.7mを測る。断面形は素掘りのものと、柱穴を据え付けるため底面を一段深く掘り込むものの両者が認められる。深さは0.2～0.3mを測る。柱痕跡の検出されたものからこの建物には径20cm程度の柱が使用されていたものと考えられる。

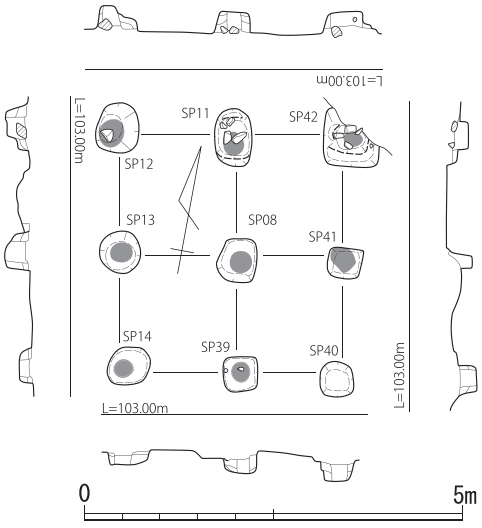


第159図　Ｌ４地区検出遺構配置図（奈良時代、1/400）

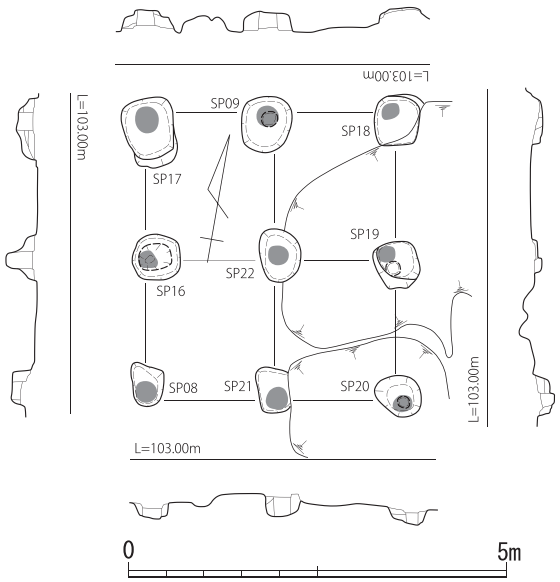
この建物では、柱穴内に拳大の石材が検出された柱穴が多くみられた。柱痕跡に沿うように配されていることから、柱固定用に使用されていたものと考えられる。

掘立柱建物跡ＳＢ02（第161図） 調査区南西部で検出した南北２間（3.8m）、東西２間（3.3m）を測る総柱の掘立柱建物跡である。西側は後世の撹乱により、遺存状況は悪い。

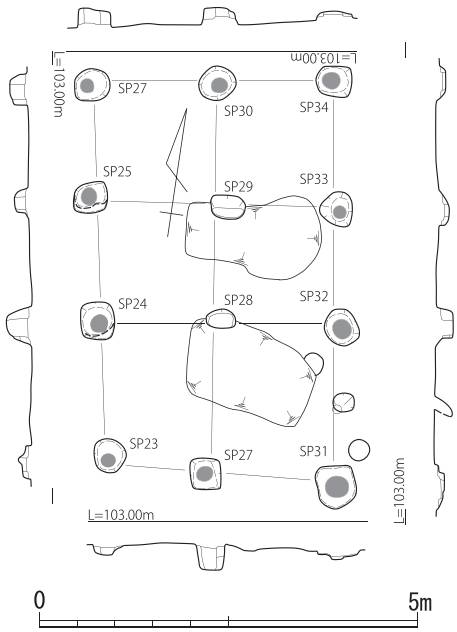
主軸方位はN11°Wを測り、掘立柱建物跡ＳＢ01とほぼ同軸で、若干西に主軸を振る。建物を構成する柱穴の平面形は方形、もしくは不整方形を呈し、規模は一辺0.4～0.8mを測る。断面形は素掘り



第160図　掘立柱建物跡ＳＢ01実測図（1/100）



第161図　掘立柱建物跡ＳＢ02実測図
（1/100）



第162図　掘立柱建物跡ＳＢ03実測図
（1/100）

のものと、柱穴を据え付けるため底面を一段深く掘り込むものの両者が認められる。深さは0.1～0.4mを測る。柱痕跡の検出されたものからこの建物には径20cm程度の柱が使用されていたものと考えられる。遺物は柱穴から須恵器・瓦が出土している。



第163図　ＳＫ49実測図（1/20）

掘立柱建物跡ＳＢ03（第162図）　調査区中央で検出した東西２間（３m）、南北３間（5.1m）を測る総柱の掘立柱建物跡である。南梁行の柱通りがやや悪く、東桁行で5.3m、西桁行で5.1mと差が生じており、ややいびつな平面形を呈する。また中央の２か所の柱穴は後世の撹乱により大きく削平を受けている。主軸方位はＮ９°Ｗを測り、やや西に振る。

建物を構成する柱穴の平面は、方形もしくは不整方形を呈し、規模は一辺0.3～0.6mを測る。断面形は素掘りのものが大部分であるが、柱を据え付けるために床面を一段深く掘り込んだものも存在する。深さは0.1～0.3mを測る。柱痕跡の検出されたものから、この建物には径20cm程度の柱が使用されていたものと考えられる。遺物は柱穴から須恵器が出土している。

ＳＫ49（第164図）　掘立柱建物跡ＳＢ01の北西で検出された長軸1.5m、短軸0.9m、深さ0.1m

を測る不整形な土坑である。埋土は単層であり、埋土中から須恵器片が出土している。廃棄土坑の可能性が考えられる。

ＳＤ04　調査区を南西から北東にむけて斜行する幅0.6m、深さ0.2mの素掘り溝である。調査区の中央付近では削平のため検出することはできなかった。また、他の遺構との切り合い関係から、この地区では最も新しい段階の遺構であると考える。

ＳＤ05　調査区の南東側で検出された幅2.9m、深さ0.3mの溝である。複数回の再掘削がなされたものとみられ、溝底面は凹凸が著しい。

ＳＤ50　ＳＤ05の東で検出された幅２m、深さ0.1～0.2mの溝である。平面的にはやや弧を描いているが、古墳に関連する遺物の出土をみることがなく、古墳とは判断できなかった。

（岡﨑研一・石崎善久）

Ｂ．出土遺物（第164図）　Ｌ４地区出土遺物として、掘立柱建物跡・土坑・溝からの出土遺物を図示した。

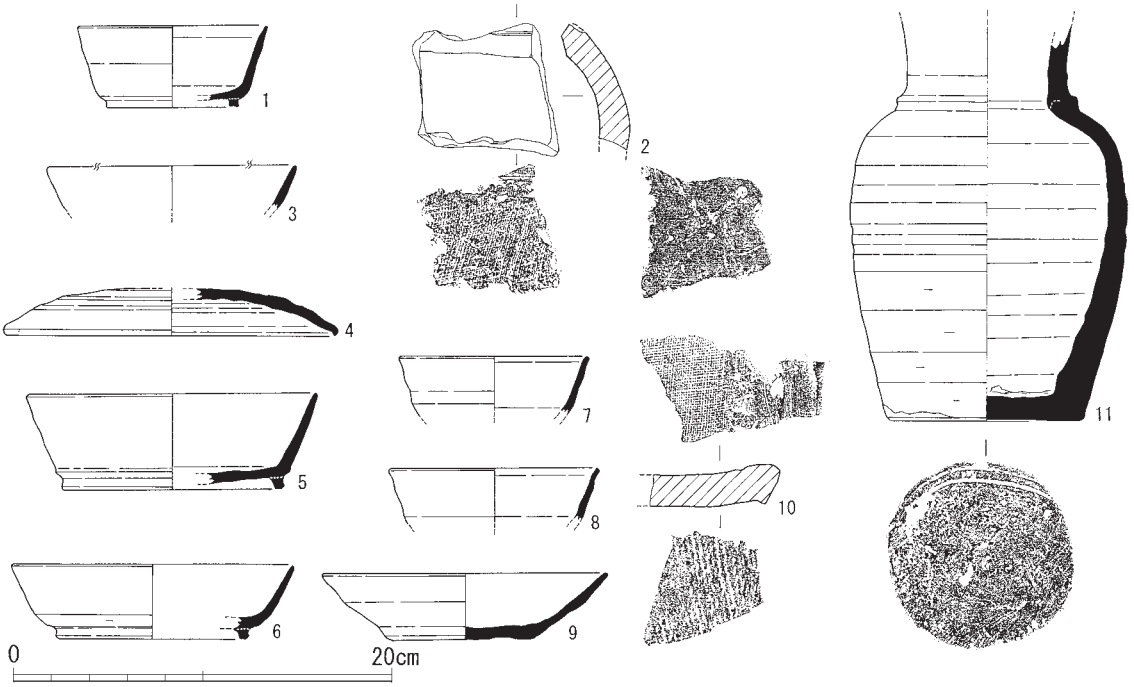
ＳＢ02（１・２）　１はＳＰ16出土の須恵器杯Ｂである小法量で器高の高い形態をとる。２はＳＰ21出土の丸瓦片である。内面に布目が残る。

ＳＢ03（３）　３はＳＰ27出土の須恵器杯小片である。

ＳＫ49（４・5）　４は須恵器杯蓋である。笠型で器高のやや高い形態をとる。口縁部はわずかに下方に屈曲する。５は須恵器杯身である。体部は直線的にのび、高台は底部外縁につく。

その他の遺構の出土遺物（６～11）　６はＳＤ05出土の須恵器杯である。７はＳＰ57、８はＳＰ37出土の須恵器杯、９はＳＰ56出土の土師器皿である。10はＳＤ04出土の平瓦であり、凹面は布目、凸面には縄目タタキが残る。11はＳＤ06上面で出土した陶器の壺である。軟質で底面に糸切りがみられる。

（岡﨑研一・石崎善久）



第164図　Ｌ４地区出土遺物実測図（４）

（6）Ｌ５地区

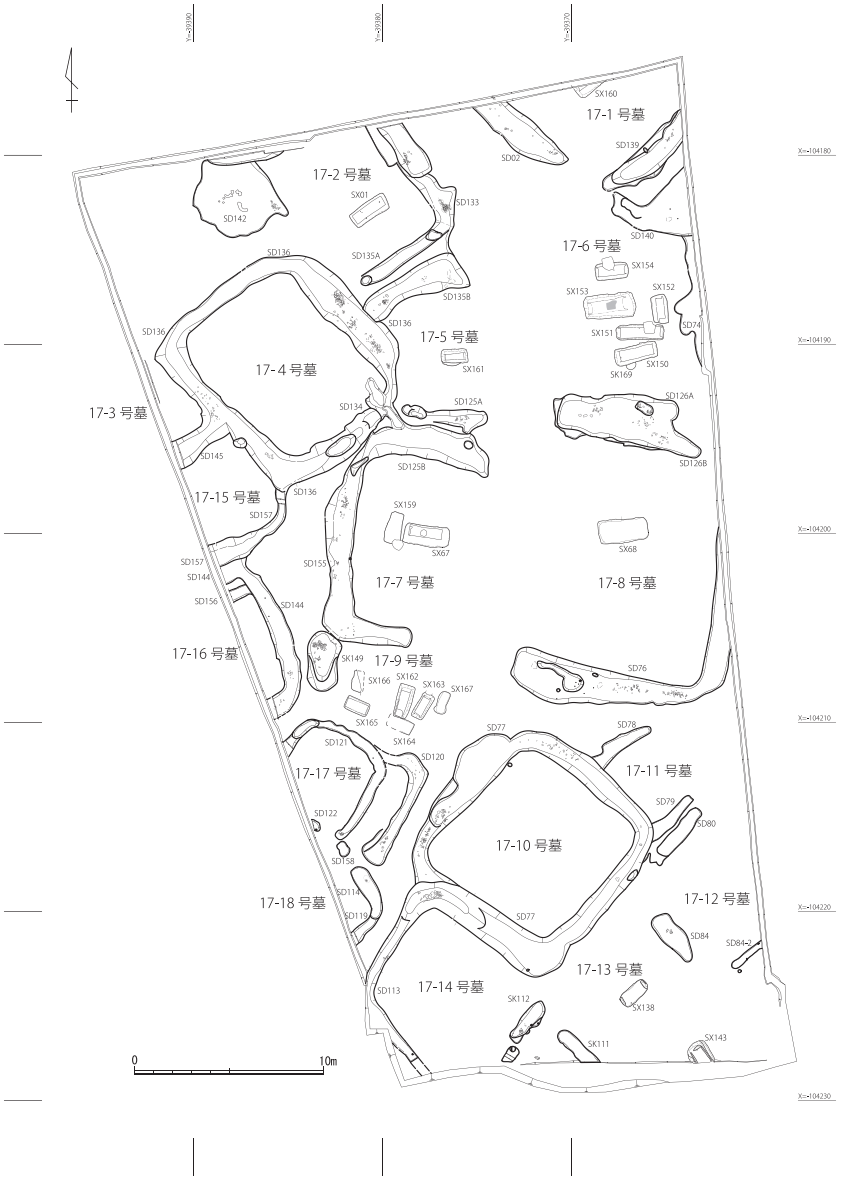
Ｌ５地区は、今回の調査区では最も北西に設定した調査区である。この地区では、上層で奈良時代を中心とする掘立柱建物跡群を、下層では方形周溝墓群を検出した。以下、弥生・古墳時代の遺構・遺物と、飛鳥時代以降の遺構・遺物の２時期に大別して概観する。

１）弥生・古墳時代の遺構・遺物

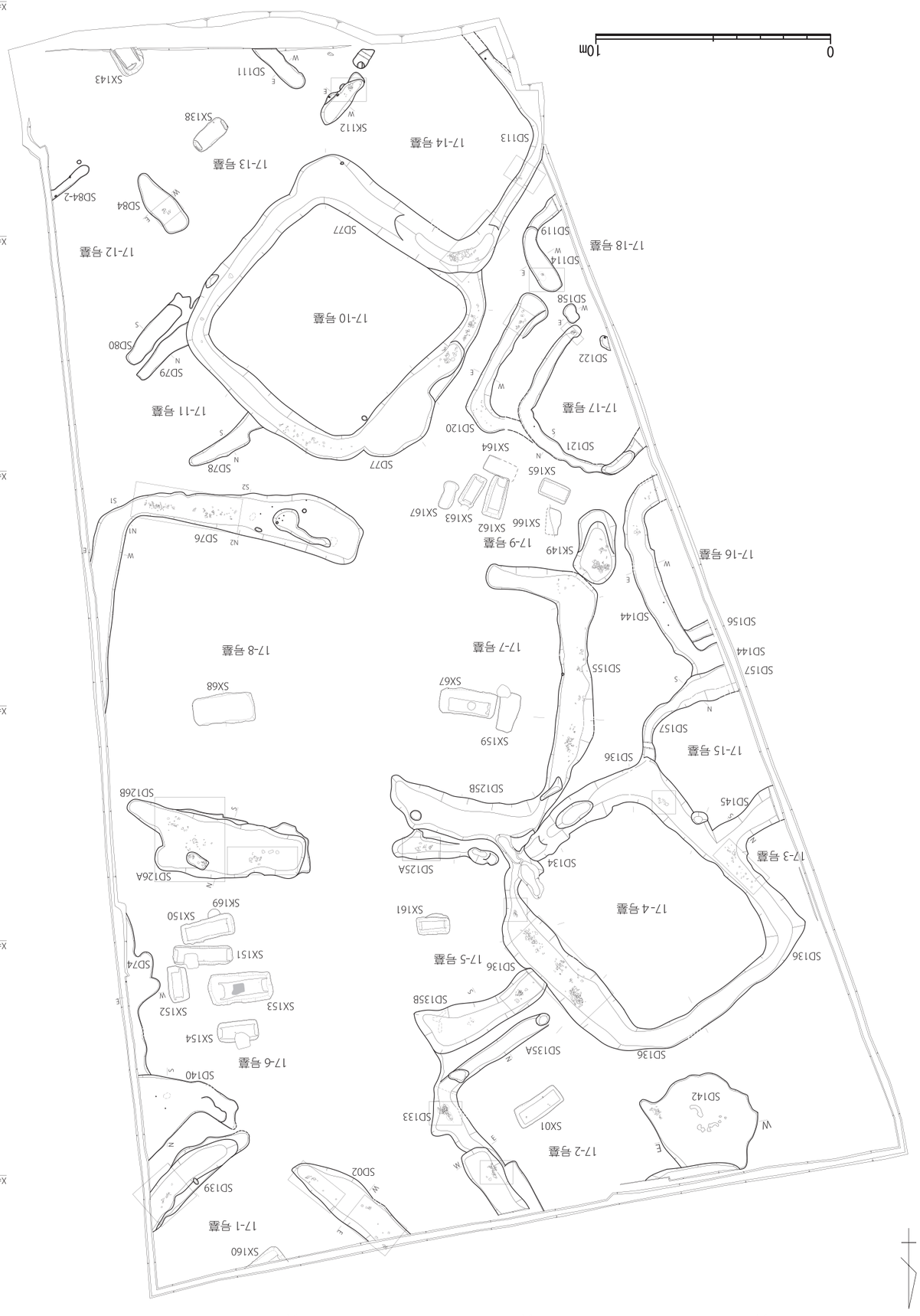
Ａ．検出遺構

Ｌ５地区では総数18基の方形周溝墓を検出した。以下、各周溝墓について概観する。

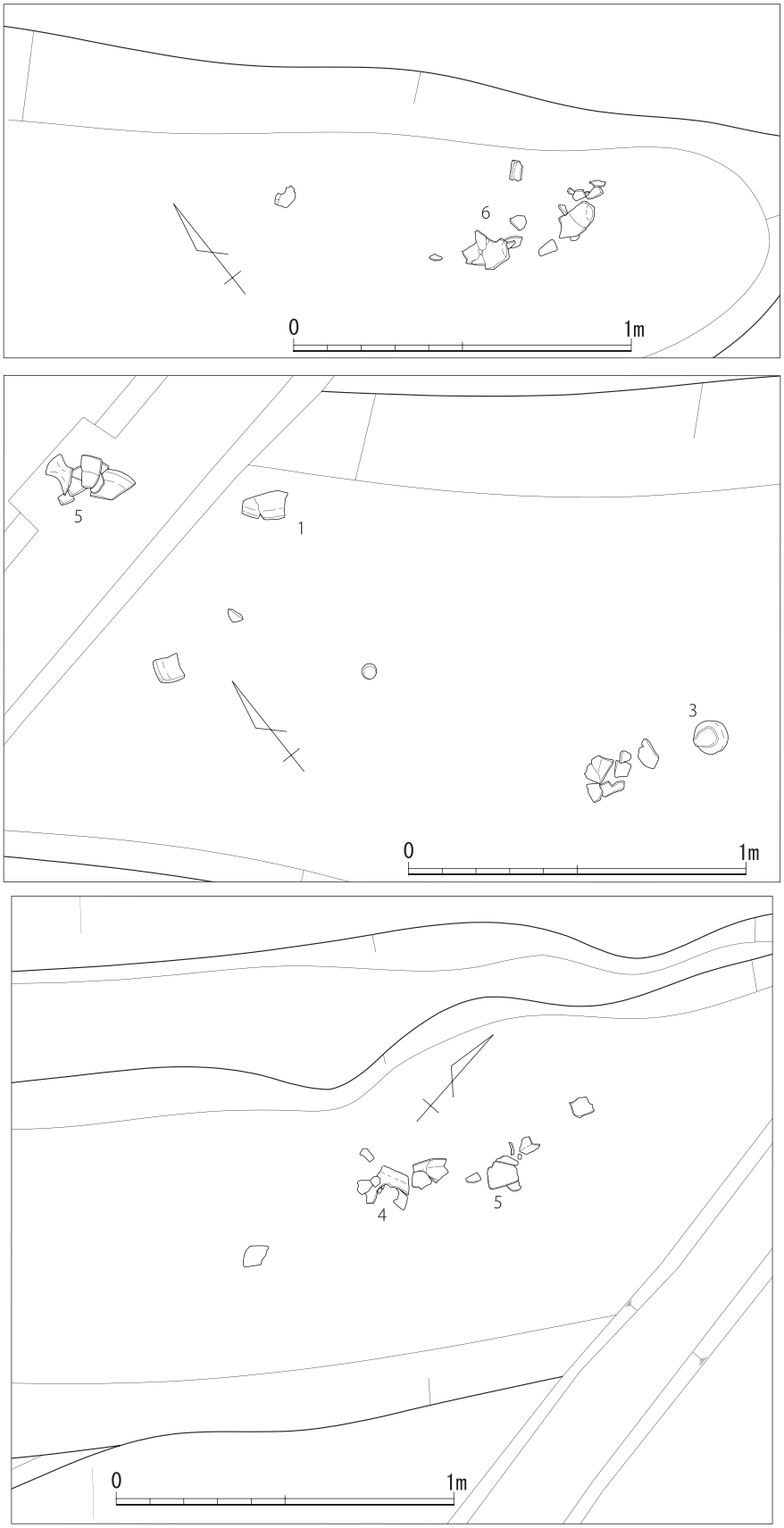
17－１号墓　調査区の北東部で検出したＳＤ02（幅1.6m・深さ0.8m）を西側区画溝、ＳＤ139を東側区画溝とする方形周溝墓である。大部分が調査区外であり、全容は不明である。周溝は南西隅が途切れており、完周しない。また近接する周溝墓と周溝を共有しない点も特徴的である。盛土は確認できなかった。



第165図　Ｌ５地区検出遺構配置図（弥生・古墳時代、1/400）



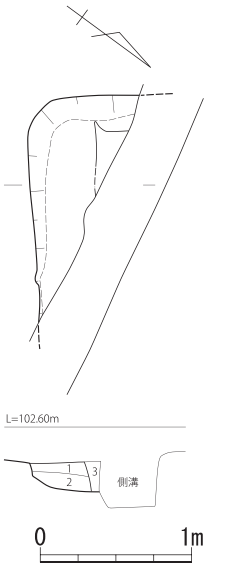
第166図　Ｌ５地区方形周溝墓平面図(1/200)



第167図　SD02・SD139遺物出土状況図(1/20)

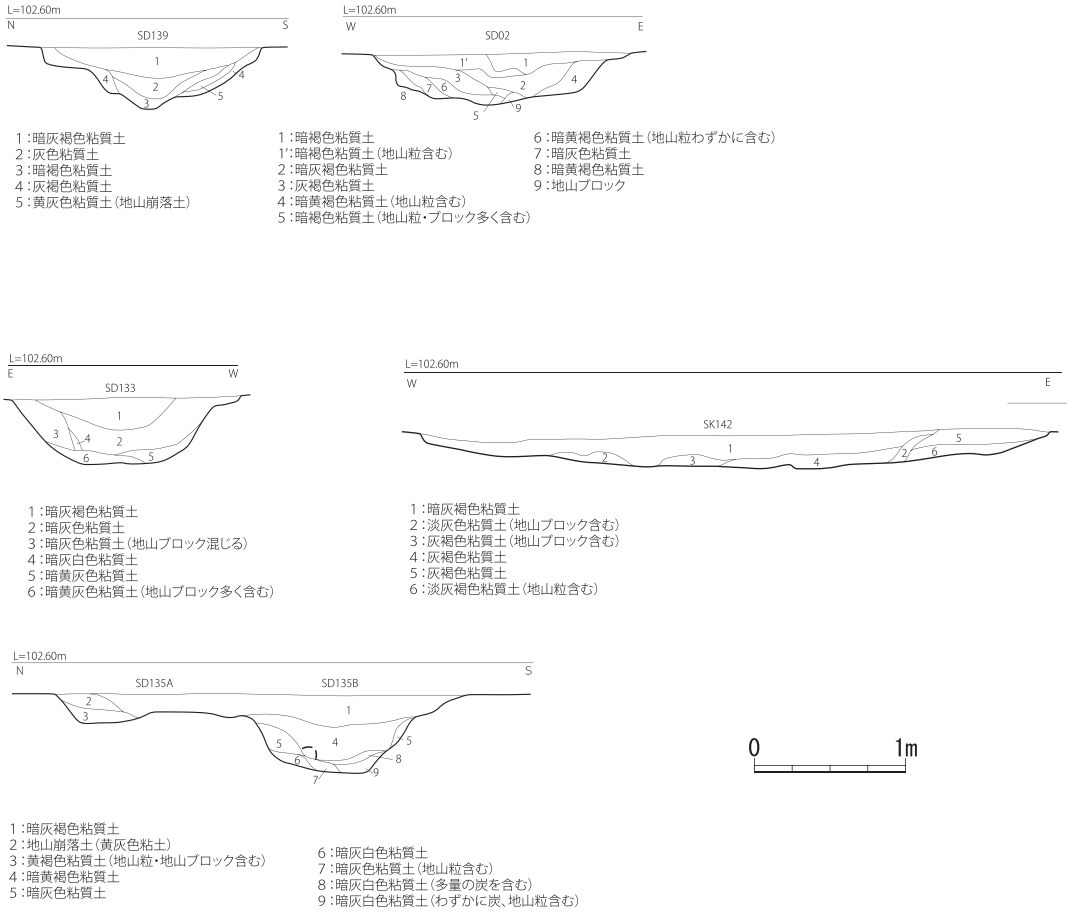
ＳＤ02では高杯（第196図１）・脚（第196図２・３）などが検出された（第167図）。脚（３）は周溝墓側からの転落の可能性が高い。また、埋土中から磨製石斧（第202図52）が出土している。ＳＤ139でも、甕（第196図４・５）が墳丘側から転落した状態で検出された（第167図下）。

この周溝墓に伴う埋葬施設として、木棺墓ＳＸ160（第168図）を検出した。大部分が調査区外のため、詳細は不明である。検出部分で、墓壙は平面長方形プランを呈し、断面は素掘りの形状をとる。主軸は東西方向にとる。墓壙の規模は長軸1.5m以上、幅１m以上、深さ0.2mを測る。棺は組合式の箱型木棺の痕跡を検出した。木棺は長側板が小口板を挟み込む形態を示す。小口板は下に突出しない。検出部分で幅0.2m、長さ0.45mを測る。副葬品は認められない。

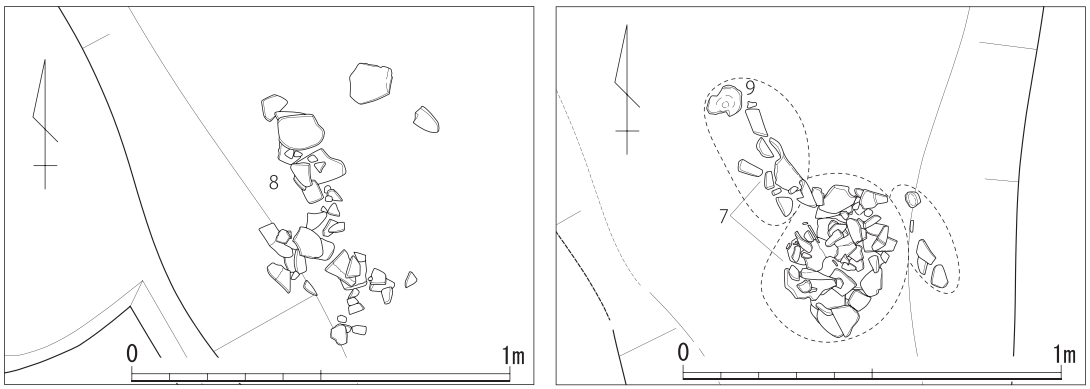


第168図　木棺墓ＳＸ160実測図（1/50）

17－２号墓　17－１号墓の西に位置する。ＳＤ133（幅1.3m・深さ0.5m）を東側区画溝に、ＳＤ135Ａ（幅0.7m・深さ0.2m）を南側区画溝、ＳＤ142（西：幅4.2m・深さ0.25m、北：幅0.6m以上・深さ0.35m以上）を西および北の区画溝とする方形周溝墓である。また、西側に位置する17－４号

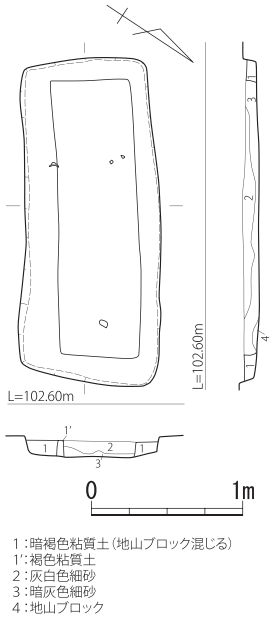


第179図　17－１・２号墓周溝断面（1/50）



第170図　ＳＤ133遺物出土状況図(1/20)

墓のＳＤ136と一部周溝を共有し、西側の区画溝としている。ＳＤ133とＳＤ135Ａは連続し、ＳＤ135ＡとＳＤ136の間は深さを減じて、17－２号墓の墳丘斜面と連続して終わる。ＳＤ133は平面的に北側が一部再掘削されたように深くなっているが、断面の観察からは再掘削を行った確証を得ることはできなかった。南側区画ＳＤ135Ａは南に位置する17－５号墓の北側区画ＳＤ135Ｂと同一面で検出し、掘形を共有するが、底面付近で２条の溝に分かれている。また、断面観察からは17－４・５号墓との前後関係をうかがうことはできなかった。北西の区画ＳＤ142は南側が浅い土坑状を呈し、北西の屈曲部から深さを増しているが、北側は調査区外のため、詳細を明らかにすることはできなかった。以上のように周溝は完周せず、西側中央部が途切れた形態を示している。周溝墓の規模は南北8.3m以上、東西８ｍを測る。



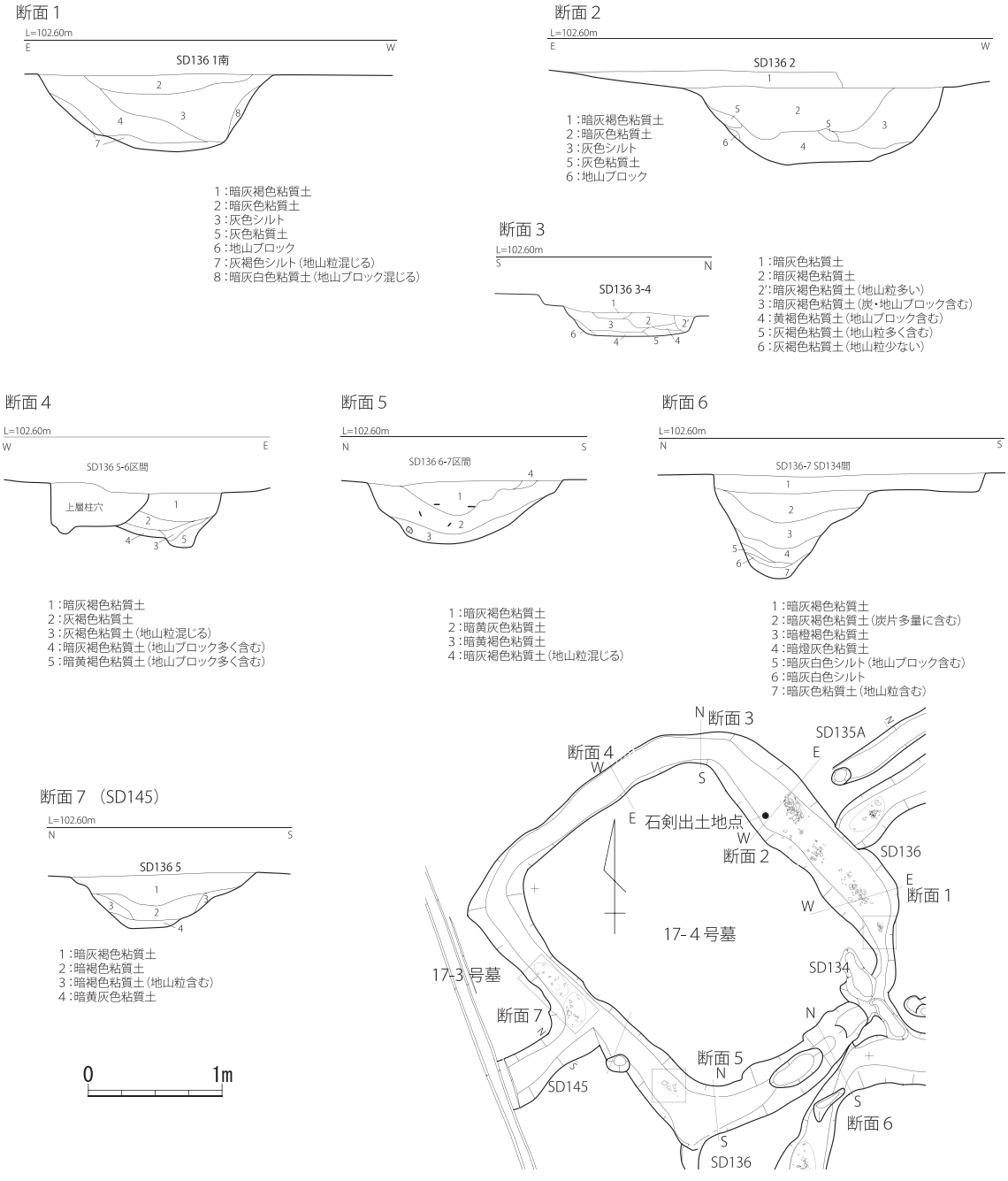
第171図　木棺墓ＳＸ01
実測図(1/50)

周溝内からの遺物としては、ＳＤ133の北側で墳丘側から転落した状態で、甕（第196図８）などが破片化した状態で検出された（第170図）。また、ＳＤ133の南側では墳丘外から転落したような状態で甕（７）、壺底部（９）などが検出された。また、17－４号墓の項で後述するが、ＳＤ136で出土した遺物の中にはこの周溝墓側からの転落と思われる弥生土器が存在する。

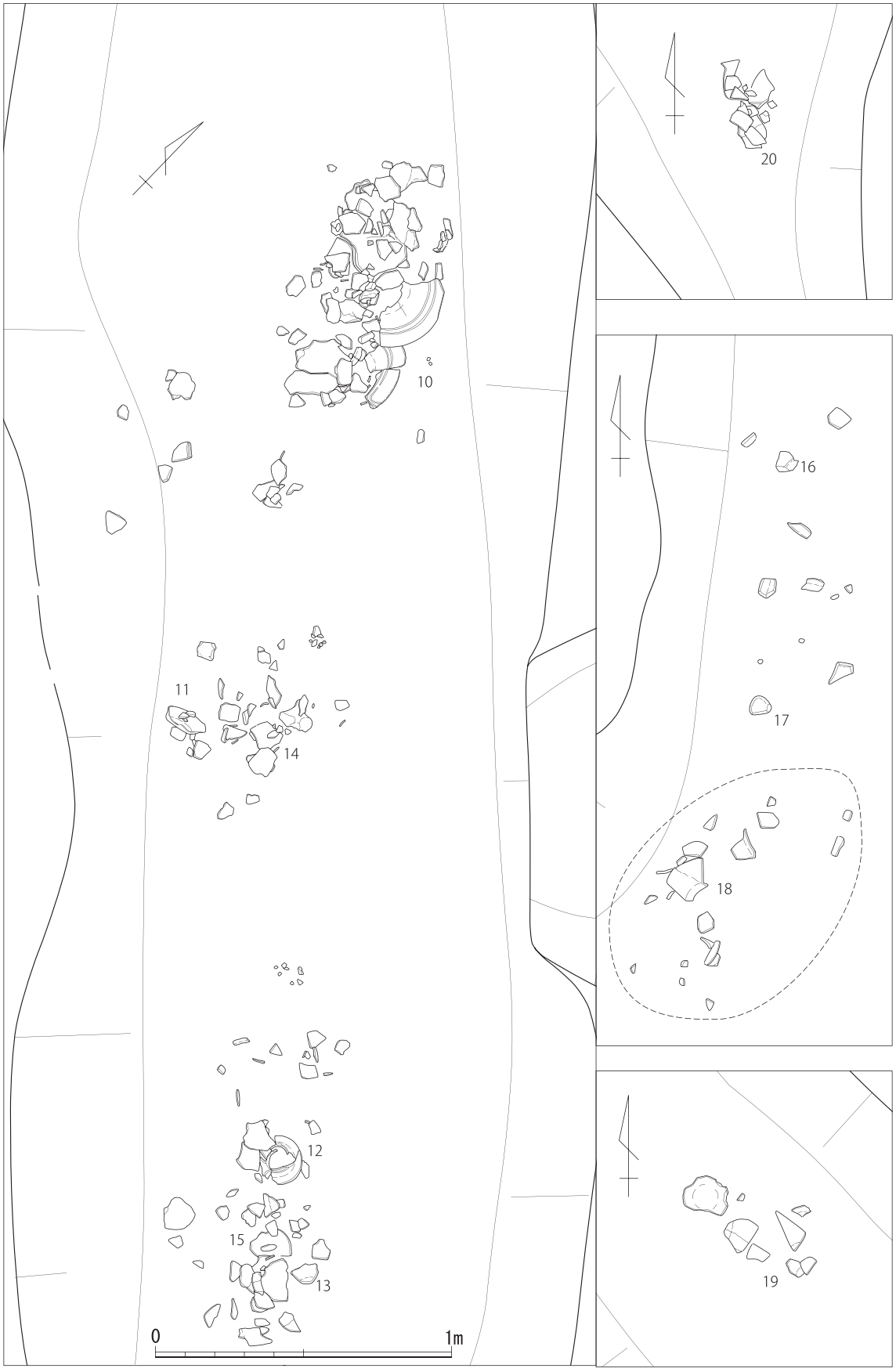
周溝墓の埋葬施設として、木棺墓ＳＸ01を検出した（第171図）。主軸を東西方向にとる。この軸は墳丘の軸とほぼ一致する。墓壙の平面形は長方形プランを呈し、規模は長軸2.15m、短軸0.9m、深さ0.2mを測る。墓壙の断面形態は素掘りである。棺は箱型木棺の痕跡を検出した。小口の組み方など詳細は明らかにできなかった。規模は長軸1.8m、短軸0.54mを測る。墓壙埋土中から細片化した弥生土器が検出されたが、この埋葬施設に伴うものか判断できなかった。

17－３号墓　17－４号墓の西側区画ＳＤ136を東側区画溝として共有し、この溝の中央から西へ分岐して延びるＳＤ145（幅1.1m、深さ0.4m）を南側区画溝にもつ方形周溝墓として想定した。大部分が調査区外のため詳細は不明である。なお、17－4号墓の周溝北西隅が深く掘り込まれており、この周溝墓の盛土確保のため再掘削された可能性が考えられる。

17－４号墓　完周するＳＤ136(北：幅1.1m・深さ0.4m、西：幅１m・深さ0.4m、南：幅1.3m・深さ0.4～１m、東：幅2.1m・深さ0.6m)により区画される方形周溝墓である。なお、調査中、他の周溝と接する部分には便宜上別の遺構番号(ＳＤ134)を与えて遺物の混乱を避けたが、報告ではＳＤ136とする。周溝の北西部は他の部分より周溝が深く掘削されており、隣接する17－３号墓の盛土確保のため、再掘削された可能性が高いものと判断された。また、南側周溝の中央も一段深く掘り込まれているが、溝内埋葬などの可能性は考えられず、この周溝墓の盛土確保のため掘削された痕跡と思われる。また、周溝南西隅で、17－15号墓の南側区画ＳＤ157が分岐するが、前後関係をうかがうことはできなかった。周溝墓の規模は東西８m、南北10mを測る。また、埋



第172図　SD136断面図(1/50)



第173図　SD136遺物出土状況図(1/20)

葬施設は確認されなかった。

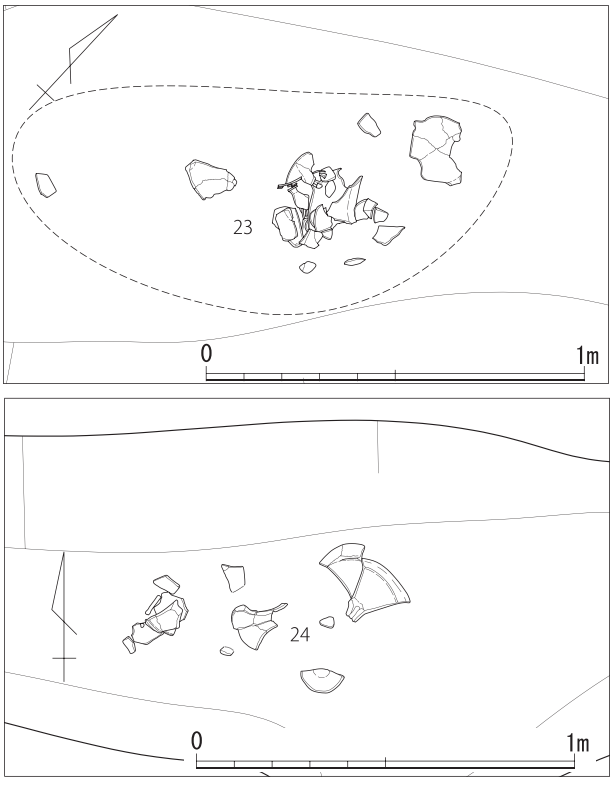
遺物は周溝の各所から検出されている。特に西側周溝では弥生土器がまとまって出土している。これらの遺物は第172図断面１・２に示す第４層内もしくは第４層上から検出された。そのためこれらの遺物は周溝が一定埋没してからの転落などによるものとみられる。とくに北側の壺（第196図10）は17－５号墓側から転落したものとみられる。また、この地点では土層観察用畦除去中に完形の磨製石剣（第202図57）が断面２の第３層内から出土している。この磨製石剣は17－４号墓側からの転落、もしくは周溝墓の盛土流失などに伴って、周溝内に埋没したものと判断される。また、ＳＤ145付近での遺物の出土状況（第173図）は17－３号墓側からの転落の様相を示している。

17－５号墓　17－４号墓の東に隣接する。西側は17－４号墓のＳＤ136と共有し、北側をＳＤ135Ｂ（幅1.8m・深さ0.5m）で、南側をＳＤ125Ａ（幅0.6m・深さ0.4m）により区画する方形周溝墓である。東側に区画溝は検出されなかったが、埋葬施設が遺存していることから大きく削平されているとは考えがたく、当初から区画溝が存在しなかった可能性が高いものと考える。周溝墓の規模は南北7.5m、東西５ｍを測るが、南北両周溝は東に向かって「ハ」字状に開いているため、平面プランはややいびつな台形となる。南に位置する17－7号墓との前後関係は明らかではない。

周溝内からは弥生土器が出土している。北側のＳＤ135Ｂ西側溝中央部では壺（第198図23）が破片となって出土している（第174図上段）。すぐ北に17－２号墓の南周溝ＳＤ135Ａが存在することから、17－５号墓側からの転落によるものと判断する。

南側のＳＤ125Ａでは周溝東側で高杯（24）１個体分を検出した（第174図下段）。周溝床面より遊離していることから周溝が一定程度埋没してから、17－５号墓側から転落、あるいは遺棄されたものと考える。

墳丘のほぼ中央部で東西に主軸をとる埋葬施設木棺墓ＳＸ161（第175図）を検出した。墓壙は平面長方形プランを呈し、規模は長軸1.4m、短軸0.7m、深さ0.4ｍを測る。墓壙の断面形態は素掘りである。棺は箱型木棺の棺痕跡を確認した。棺材の痕跡そのものは確認できなかったが、小口裏込め土と長側板裏込め土との差異から長側板が小口板を挟み込む形態の組合式箱型木棺と判断された。規模は内法で長軸0.95m、短軸0.35ｍを測る。東側の棺幅が若干広くなっていることから被葬者は東頭位と推定される。棺内、墓壙埋土中から遺物は検出されなかった。



第174図　ＳＤ135Ｂ・125Ａ遺物出土状況図
（上段：ＳＤ135Ｂ、下段125Ａ、1/20）

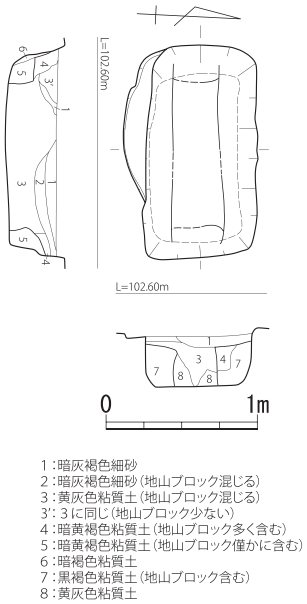
17－6号墓　17－5号墓の東に位置する。北側を不整形なＳＤ140（幅1.2～3.6m・深さ0.15m）、東側をＳＤ74（幅１m以上・深さ0.2m以上）で南側をＳＤ126Ａ（幅１m以上・深さ0.5m）で区画する方形周溝墓である。西側には区画溝は検出されなかったが17－５号墓同様、埋葬施設が遺存していることから大きく削平されているとは考えがたく、当初から存在しなかったものと判断する。おそらく、低墳丘の盛土により墓域を確保し、視覚的に区画していたものと考えられる。周溝のうち、ＳＤ126Ａは平面的にはＳＤ126Ｂと切り合い関係をもつように見えるが、断面観察からは同時期の埋没と判断され、前後関係を示すものではない。おそらく短期間のうちに先行する溝を拡張する形で掘削し、盛土を確保したものと考えられる。周溝墓造墓の際には意識的に個別の溝として新たに掘削作業を行ったものと考える。また、溝底部東側で土坑状に一段掘り込まれた部分を検出した。溝内埋葬施設の可能性を考慮しながら調査を実施したが、埋土の状況からその可能性はないものと判断した。周溝墓の規模は東西８m、南北10mを測る。

ＳＤ126Ａの底面近くから細片化した壺をはじめとする弥生土器を検出した（第177図）。この周溝墓からの転落とみられるが、劣化が著しく取り上げることのできない個体も存在した。そのため図示しうる資料に恵まれなかった。また、土器とともに砥石（第202図59）が出土している点は周溝墓の遺物として注目される。

この周溝墓では５基の埋葬施設を確認した。以下、各遺構について概観する。

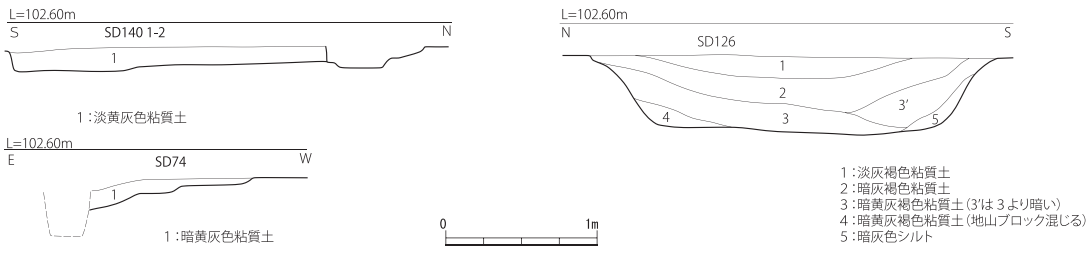
木棺墓ＳＸ150（第178図）　この周溝墓の埋葬施設のうち最も南に位置する東西方向に主軸をとる木棺直葬墓である。墓壙の平面形は長方形プランを呈し、規模は長軸2.3m、短軸0.9m、深さ0.17mを測る。墓壙の断面形態は素掘りである。木棺は棺材そのものの痕跡は確認されなかったが、小口部分と、長側板部分の裏込め土との差異を確認した。棺の型式は長側板が小口板を挟み込む形態の組合式箱型木棺と判断された。小口板は下に突出することはない。木棺の規模は内法で長軸1.8m、短軸0.55mを測る。

小口側棺内の流入土中から石庖丁（第202図56）の破片が出土しているが、小破片であり、供献などに伴うものではないものと考える。



第175図　木棺墓ＳＸ161実測図（1/50）

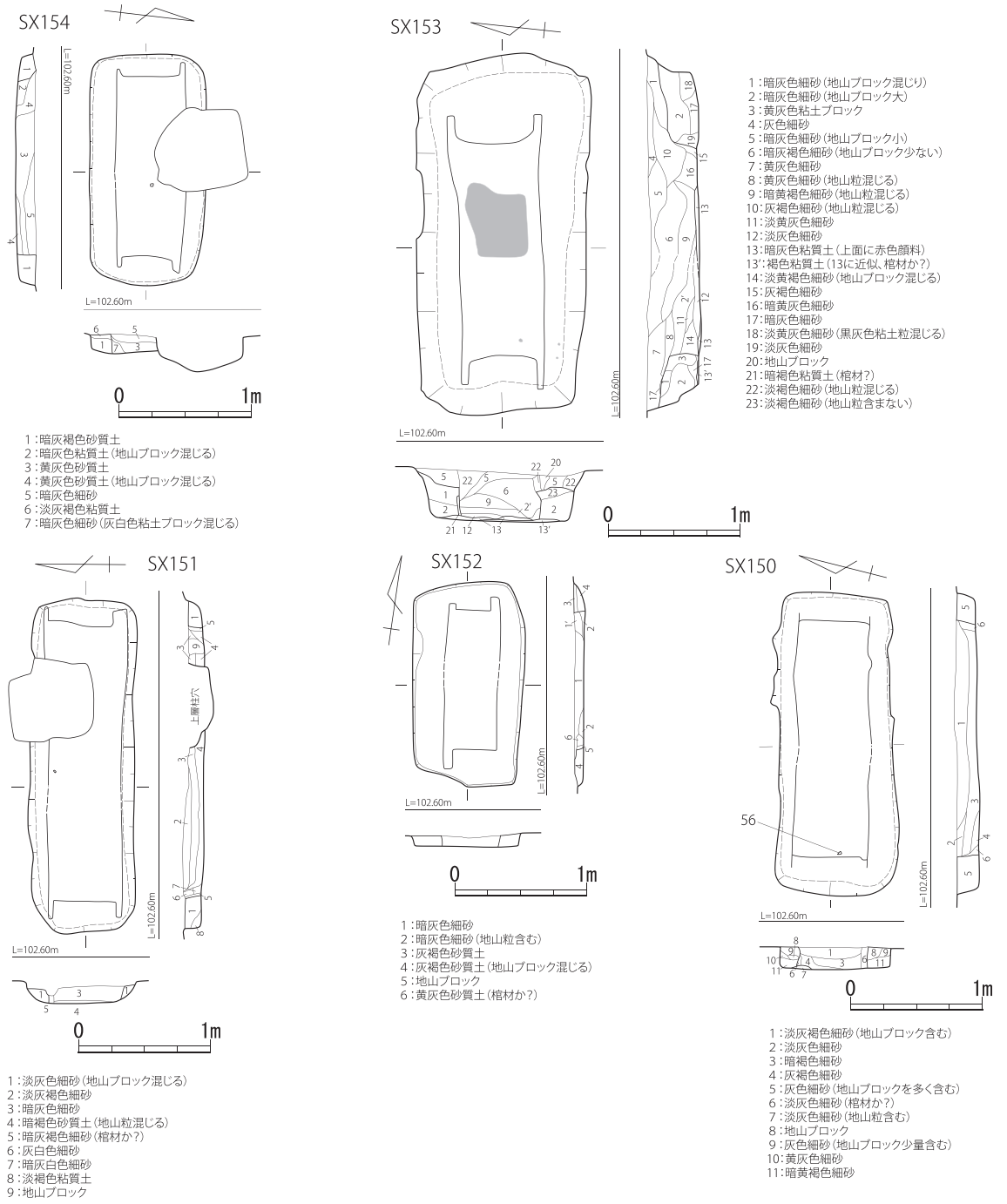
木棺墓ＳＸ151（第178図）　木棺墓ＳＸ150の北に近接する木棺



第176図　17－６号墓周溝断面（1/50）



第177図　ＳＤ126遺物出土状況図(1/20)



第178図　17－6号墓埋葬施設実測図（1/50）

直葬墓である。主軸はほぼ東西方向にとる。墓壙の平面形は長方形プランを呈し、規模は長軸2.52m、短軸0.8m、深さ0.18mを測る。墓壙の断面形態は素掘りである。木棺は棺材そのものの痕跡を確認できず、裏込め土と棺の腐食痕・棺内流入土の差として認識された。棺の型式は長側板が小口板を挟み込む形態の組合式箱型木棺と判断された。小口板は下に突出することはない。木棺の規模は長軸2.1m、短軸0.55mを測る。

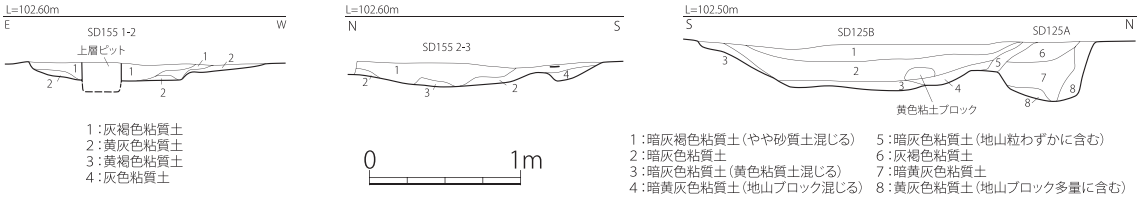
木棺墓ＳＸ152（第178図）　ＳＸ151の北東に近接して検出された木棺直葬墓である。この周溝墓の埋葬施設で唯一南北方向に主軸をとる。墓壙の平面形は長方形プランを呈し、規模は長軸

1.5m、短軸0.8m、深さ0.1mを測る。墓壙の断面形態は素掘りである。木棺は棺材そのものの痕跡を確認できず、裏込め土と棺の腐食痕・棺内流入土の差として認識された。棺の型式は長側板が小口板を挟み込む形態の組合式箱型木棺と判断された。南東長側板が南に突出する状況は確認することができなかった。小口板は下に突出することはない。木棺の規模は長軸1.05m、短軸0.4mを測る。小型の木棺直葬墓である。

木棺墓ＳＸ153（第178図）　ＳＸ151の北、この周溝墓のほぼ中心に位置する木棺直葬墓である。主軸は南北方向にとる。墓壙の平面形は長方形プランを呈し、規模は長軸2.68m、短軸1.27m、深さ0.4mを測る。遺存状況は良好である。墓壙の断面形態は素掘りである。木棺は棺材そのものの痕跡を確認できず、裏込め土と棺の腐食痕・棺内流入土の差として認識された。棺の型式は長側板が小口板を挟み込む形態の組合式箱型木棺と判断された。小口板は下に突出することはない。また土層断面の観察結果から底板を有し、底板の上に長側板、小口板がのる形態の棺と判断される。棺内、棺外からは水銀朱と思われる赤色顔料が棺底よりわずかに遊離した状態で検出された。被葬者の胸部周辺に散布されたものとみられる。また、顔料は棺外の底板と思われる土層の上からも検出されており、棺材を組み合わせた段階で被葬者の安置、顔料の散布がなされた可能性が高い。木棺の規模は長軸1.6m、短軸0.6mを測る。東側の幅がやや広く、被葬者は東頭位で埋葬されたものとみられる。

木棺墓ＳＸ154（第178図）　ＳＸ153の北に位置する東西方向に主軸をとる木棺直葬墓である。墓壙の平面形は長方形プランを呈し、規模は長軸1.75m、短軸0.9m、深さ0.15mを測る。墓壙の断面形態は素掘りである。木棺は棺材そのものの痕跡を確認できず、裏込め土と棺の腐食痕・棺内流入土の差として認識された。棺の型式は長側板が小口板を挟み込む形態の組合式箱型木棺と判断された。小口板は下に突出することはない。木棺の規模は長軸1.3m、短軸0.53mを測る。棺の幅は西側の方がわずかに広く、被葬者は西頭位と思われる。棺内流入土から弥生土器小片が出土したが、この埋葬施設に伴うものか判断できない。

17－７号墓　「コ」字状に巡る溝、ＳＤ125Ｂ（幅1.6m、深さ0.3m）、ＳＤ155（西：幅0.4m、深さ0.3m、南：幅1.2m、深さ0.2m）により区画される方形周溝墓である。東側に区画溝は検出されていないが、埋葬施設が遺存しており大きく削平を受けているとは考えられず、東側区画溝は当初から存在しないものと考える。周溝墓の規模は東西7.4m、南北10.6mを測る。17－５号墓との前後関係については土層から見る限り、第179図５層がＳＤ125Ｂの掘形と一致しないため、一見切り合いがあるように見えるものの、埋没時期の差として認識する。盛土は確認されなかった。



第179図　17－７号墓周溝断面（1/50）

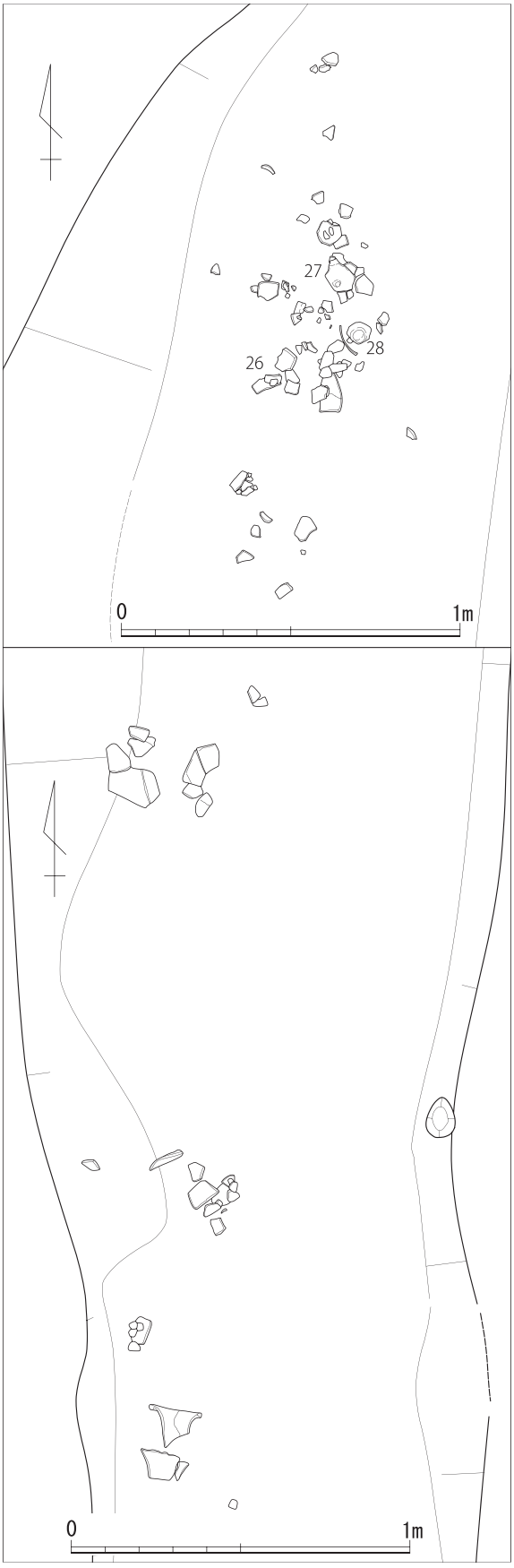
西側区画溝ＳＤ155から破片化した弥生土器が検出された。北側の一群（第180図上段）は溝のほぼ中央で細片化した壺類を中心とした弥生土器が検出された。また、溝の中央部でも細片化した壺が確認されたが（第180図下段）、周溝外からの転落もしくは遺棄の可能性が高いものと考えられる。周溝の南西隅でも細片化した弥生土器が検出されているが、体部の小片のみである。

また、溝125Ｂの東端で太型蛤刃石斧（第202図53）の基部が出土している。

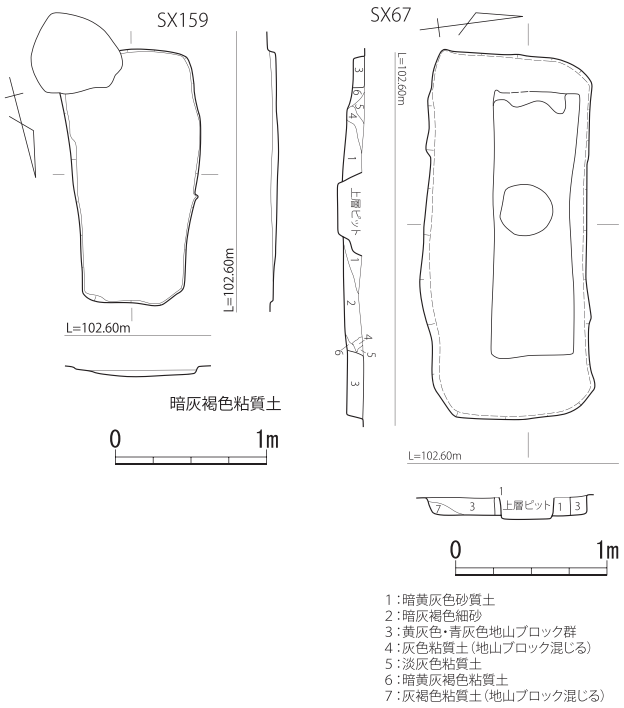
この周溝墓では墳丘中央から２基の埋葬施設を検出した。以下、各遺構について概観する。

埋葬施設ＳＸ159（第181図）墳丘中央よりやや西寄りで検出された埋葬施設である。墓壙の平面形は南側の幅が広い長方形を呈する。規模は長軸1.6m、南側幅0.88m、北側幅0.68mを測る。墓壙の断面形は素掘りであり、深さ0.07mと遺存状況はきわめて悪い。そのため、この埋葬施設では棺の痕跡を断面、平面からも確認することができなかった。しかし、墓壙の形態・規模からは南頭位の木棺が納められていた可能性が高いものと考える。

木棺墓ＳＸ67（第181図）　ＳＸ159の東、墳丘のほぼ中央に位置する東西方向に主軸をとる木棺直葬墓である。墓壙の平面形は長方形プランを呈し、規模は長軸2.3m、短軸1.1m、深さ0.16mを測る。墓壙の断面形態は素掘りである。木棺は棺材そのものの痕跡を確認できず、裏込め土と棺の腐食痕・棺内流入土の差として認識された。棺の型式は箱型木棺であるが、西側小口では長側板が小口板を挟み込む状況が確認できたが、東側では長側板が突出する状況は確認できなかった。小口板は棺底より下には突出しない。木棺の規模は長軸1.6m、短軸0.5mを



第180図　SD155遺物出土状況図（1/20）



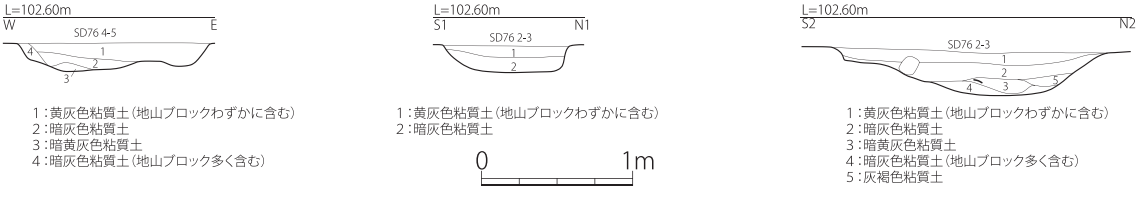
第181図　17－７号墓埋葬施設実測図(1/50)

測る。遺物は検出されなかった。

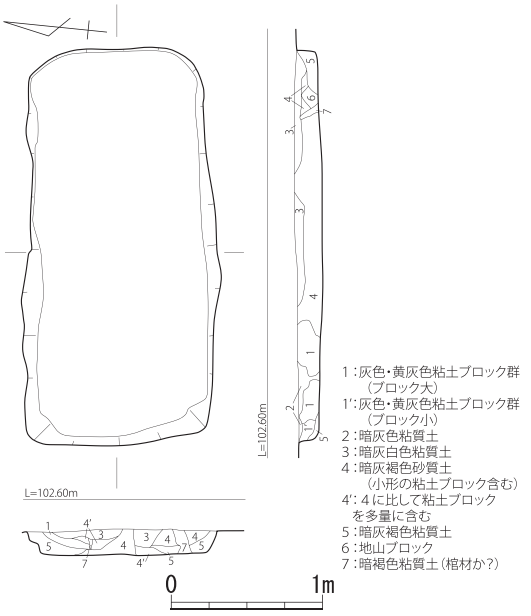
17－８号墓　17－７号墓の東に位置する。ＳＤ126Ｂ（幅1.4m以上、深さ0.5m）を北側区画溝に、「Ｌ」字状に屈曲するＳＤ76（南：幅1.8m・深さ0.3m、東：幅1.3m・深さ0.2m）を南および東の区画溝とする方形周溝墓である。西側には区画溝が検出されなかったが、埋葬施設が遺存しており、大きく削平を受けているとは考えられず、当初から存在しなかったものと考える。また、ＳＤ126ＢとＳＤ76は連続しておらず、北東隅が途切れる形態をとる。周溝墓の規模は東西10m、南北13.6mを測り、今回検出した周溝墓の中では最も広い占有面積をもつ。盛土は確認されなかった。

ＳＤ126Ｂ埋土上層中から細片化した弥生土器が検出された（第177図）。また、ＳＤ76では上層から細片化した弥生土器が検出された（第184図）。壺類（第199図29～31）が中心であるが、いずれも底面より遊離しており、周溝が一定埋没したのちに入った遺物と考えられる。溝底面付近では細片化した弥生土器とともに石庖丁（第202図55）、石斧（第202図54）などが出土したが、正確な図化作業を実施する前に台風による被害で検出位置から移動してしまい、出土地点のみの記録に留めざるを得なかった。

墳丘の中央部では東西方向に主軸をとる木棺直葬墓ＳＸ68（第183図）を検出した。墓壙の平面形は長方形を呈し、規模は長軸2.6m、短軸1.27m、深さ0.18mを測る。墓壙の断面形態は素掘りである。棺の痕跡は平面的には確認することができなかった。しかしながら、断面の中には、棺材の置換した土層とみられる部分が複数存在したため木棺直葬墓であることは間違いないと考える。おそらく、蓋材が腐朽して棺内に流入土が堆積するより先に、側板や小口板が崩壊したものと考える。また、墓壙の幅は西側がわずかながら広くなっており、被葬者は西に頭位をもつ可能性がある。遺物は検出されなかった。



第182図　ＳＤ76断面図(1/50)

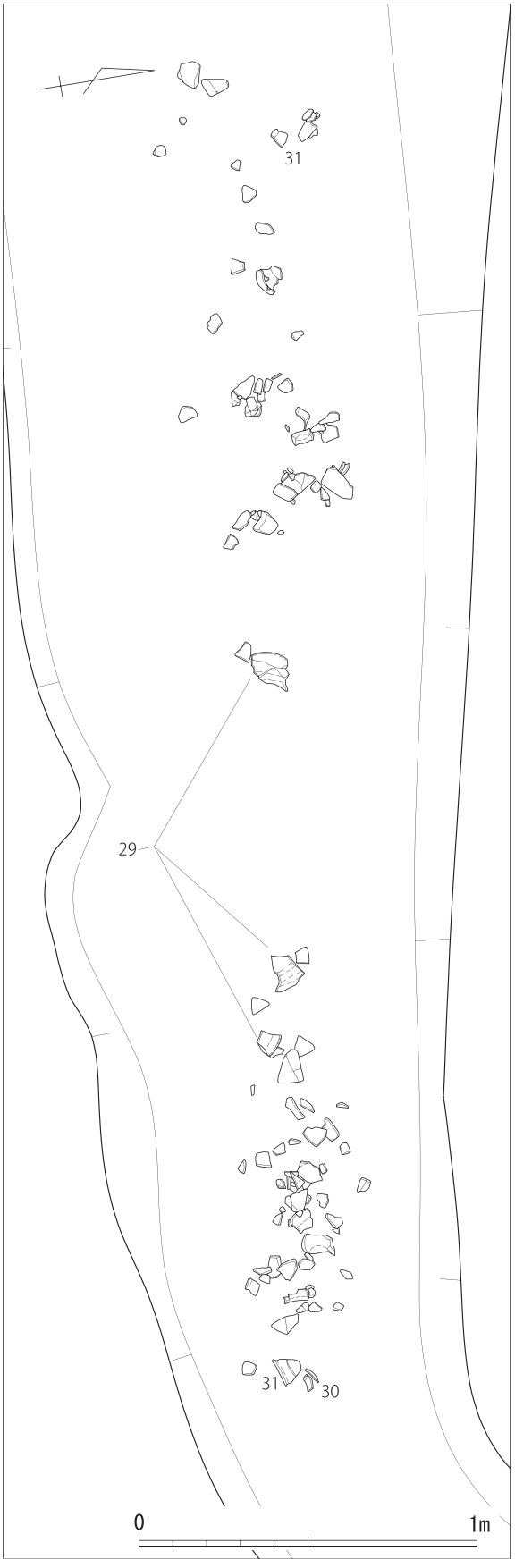


第183図　木棺墓ＳＸ68実測図(1/50)

17－９号墓　17－8号墓の南西に位置する墳墓である。西側にはＳＫ149があり、一定の墳墓としての領域は意図していると考えられるが、北は17－７号墓、南は17－17号墓の周溝を利用し、その間の空間を利用した、明確な区画をもたない木棺墓の集合体のような様相を呈する。なお、この墳墓の上面は上層の遺構であるＳＤ03により大きく削平を受けているが、埋葬施設が遺存していることから、その他の区画溝については当初から存在しなかったと考える。

ＳＫ149（第185図）は長軸3.2m、短軸1.5m、深さ0.2mを測る不整な長楕円形を呈している。壺（第199図34～37）、高杯（第199図38）が破片となって検出された。いずれも第185図２層内から土坑底面に近接して検出されており、土坑に一括して投棄されたものと考えられる。また、第２層には炭や焼土が混入しており、葬送儀礼の際に火を使った行為があったことを予想させる。

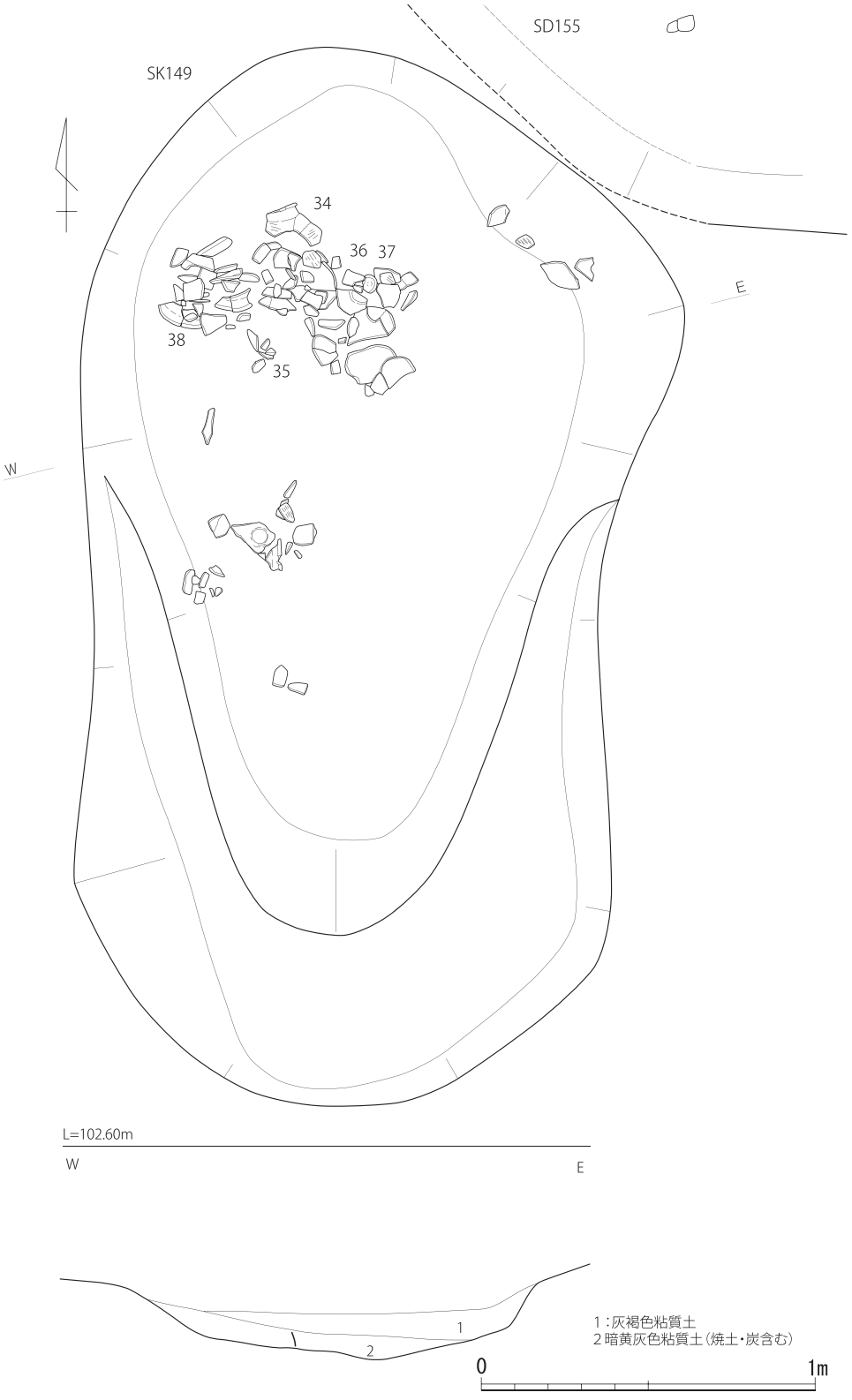
17－９号墓では６基の埋葬施設を検出し



第184図　ＳＤ76遺物出土状況図(1/20)

た。以下、各遺構の概要を記す。

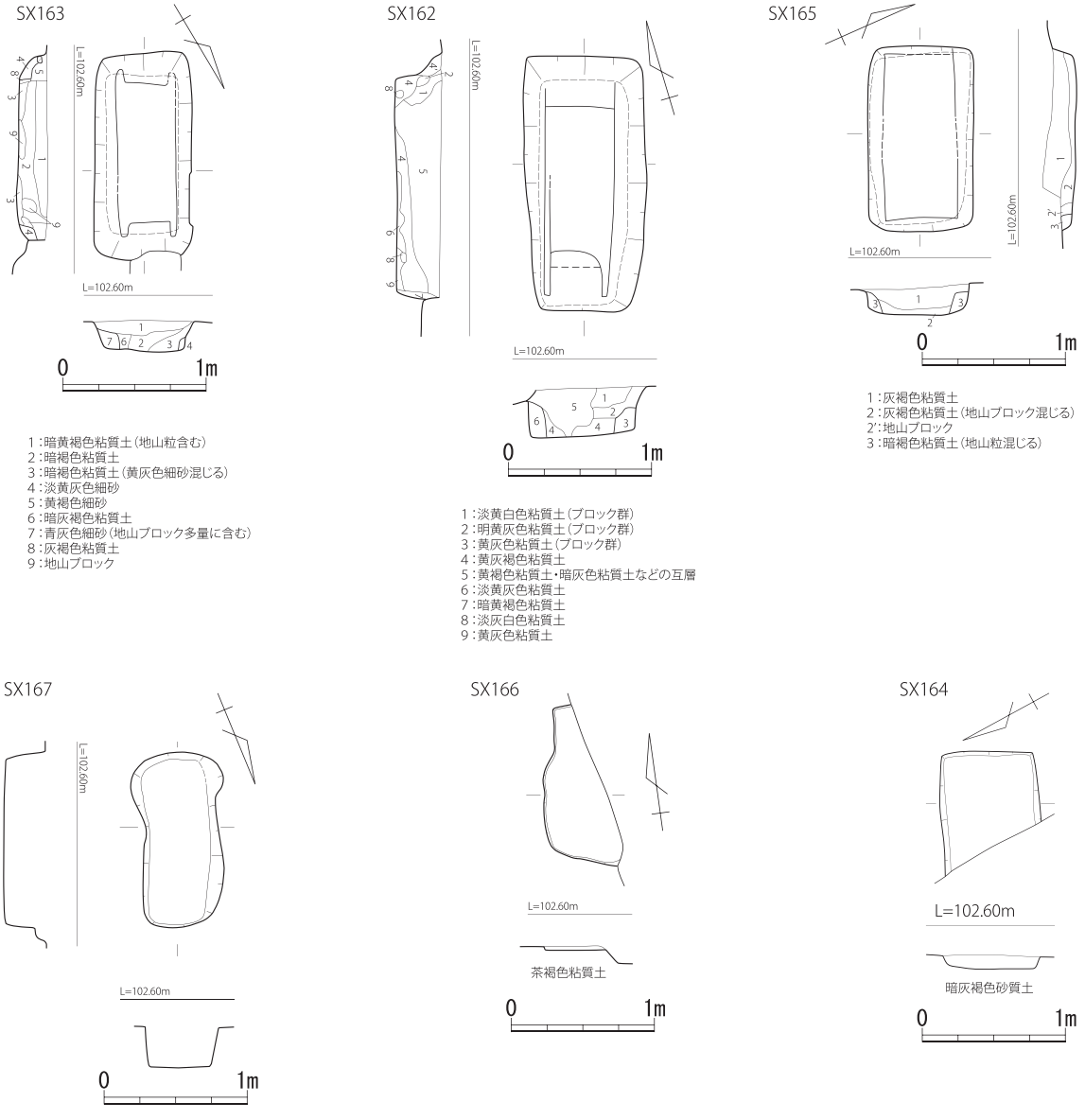
木棺墓ＳＸ162（第186図）　この墳墓の中心に位置する木棺直葬墓である。主軸は南北方向に



第185図　ＳＫ149実測図（1/20）

とる。ＳＤ03、埋葬施設ＳＸ164に切られている。墓壙の平面形は長方形を呈し、規模は長軸1.77m、短軸0.85m、深さ0.33mを測る。墓壙の断面形は素掘りである。木棺は組合式箱型木棺であることを確認した。棺材は長側板が小口板を挟み込む形態であり、小口板は下方に突出しない。南小口板は土圧による崩壊が早かったためか棺の内側に湾曲した状態で確認された。本来の小口板は東側長側板との接点にあるものと考える。棺の規模は長軸1.1m、短軸0.48mを測り、北側の方がやや幅が広いことから、被葬者は北に頭位を置くものと考える。遺物は検出されなかった。

木棺墓ＳＸ163（第186図）　ＳＸ162の東に位置する南北に主軸をもつ木棺直葬墓である。墓壙の平面形は長方形を呈し、規模は長軸1.45m、短軸0.66m、深さ0.2mを測る。墓壙の断面形は素掘りである。木棺は長側板が小口板を挟み込む形態をとる組合式箱型木棺であることを確認した。棺の規模は長軸0.96m、短軸0.4mを測る。遺物は検出されなかった。



第186図　17－９号墓埋葬施設実測図（1/50）

埋葬施設ＳＸ164（第186図）　木棺墓ＳＸ162の南に位置し、墓壙南辺を切る東西方向に主軸をとる埋葬施設である。ＳＤ03により大きく削平を受けている。墓壙の平面形は長方形を呈し、規模は長軸0.9m以上、幅0.7mを測る。遺存状況は悪く、棺の痕跡を確認することはできなかったが、位置や形状、埋土の状況から弥生時代の遺構と判断した。遺物は検出されなかった。

木棺墓ＳＸ165（第186図）　埋葬施設ＳＸ164の西で主軸を揃えるように検出された木棺直葬墓である。ＳＤ03に切られている。墓壙の平面形は長方形を呈し、規模は長軸1.32m、短軸0.73m、深さ0.2mを測る。墓壙の断面形は素掘りである。棺は箱型木棺であることを確認したが棺材の組み合わせ方を特定するには至らなかった。棺は長軸1.1m、短軸0.5mを測る。遺物は検出されていない。

埋葬施設ＳＸ166（第186図）　木棺墓ＳＸ165の北に位置する南北に主軸をとる埋葬施設である。ＳＤ03により東辺を大きく削平されているが、位置や形状、埋土の状況から弥生時代の遺構と判断した。墓壙の平面形はやや不整形な長方形を呈し、規模は長軸1.1m、短軸0.5m以上、深さ0.05mを測る。断面形は素掘りである。遺存状況が悪く、棺の痕跡を確認することはできなかった。遺物は検出されていない。

埋葬施設ＳＸ167（第186図）　木棺墓163の東に位置する南北に主軸をもつ埋葬施設である。当初は切り合い関係にある２基のピットと考えて掘削を行ったが、掘削を進めるうちに掘形が同一であることが明らかとなり、弥生時代の埋葬施設であると判断した。墓壙の平面は長方形を呈し、規模は長軸1.27m、短軸0.5m、深さ0.25mを測る。棺の痕跡を確認することはできず、木棺墓か土壙墓か判断できない。遺物は検出されなかった。

17－10号墓　17－８号墓の南に位置する。完周するＳＤ77（北：幅1.9～2.2m・深さ0.6m、東：幅1.3m・深さ0.6m、南：幅１m・深さ0.6m、西：幅1.8m・深さ0.5m）により区画される方形周溝墓である。周溝の断面は逆台形を呈しており、墳丘基底を明瞭に削り出している。盛土は確認されず、埋葬施設も遺存していない。周溝墓の規模は基底部で、南北8.5m、東西９mを測る。北側周溝は外側に向かってやや広がっている。これは断面観察の結果、第187図上段左に示すように、周溝埋没以前に掘削が行われた結果と判断した。この周溝墓の盛土、あるいは北西に位置する17－９号墓の盛土を確保するために、周溝が埋没する以前の段階でこの部分の再掘削作業がなされているものと判断する。また、周溝南西隅部分では隣接する17－14号墓の周溝により、この周溝底面がえぐり取られている状況が観察された。西側周溝は他の部分に比して幅広いが、これは、17－14号墓造墓時に盛土確保のために再掘削がなされたためと判断する。したがって、17－10号墓は17－14号墓に先行して造墓されたと考える。東に隣接する17－11号墓や南に隣接する17－13・12号墓との前後関係は明らかではないが、この周溝墓を中心に計画的に小規模な周溝墓が配置されているようであり、この周溝墓が先行する可能性が高い。

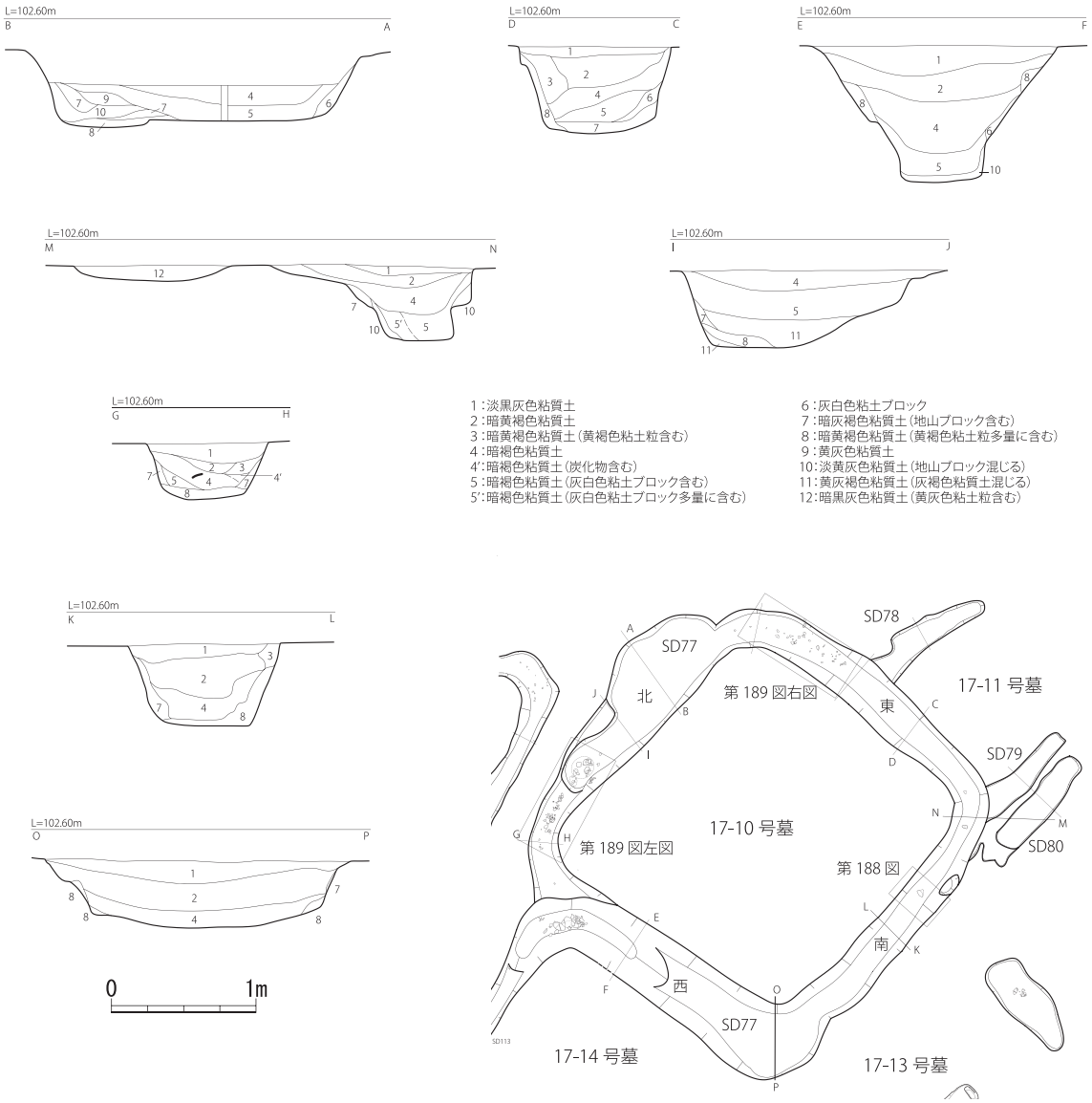
周溝各所から弥生土器が検出された。南側周溝中央の底部付近では壺底部（第200図39）が横位で検出された（第188図）。ほぼ床面近くから出土していることから、この周溝墓造墓後まもなく転落もしくは遺棄されたものと考えられる。また、埋土中からは石皿片（第202図58）が出土して

いる。

周溝の北西部では壺（第200図40・41）・甕（第200図42）が転落した状態で検出された（第189図左）。これらの土器群は、いずれも第187図Ｇ－Ｈ断面に示す４層中から検出された。周溝が一定程度埋没してから遺棄された遺物群とみられる。また、周溝墓の墳丘肩からは破片となった砥石が検出された。この砥石は周溝墓の墳丘側からの転落あるいは遺棄と考えられ、葬送儀礼に石器が使用されている可能性を示唆するものである。

周溝北東部では、周溝検出面とほぼ同レベルで細片化した弥生土器が検出された（第189図右図）。壺や高杯（第200図43）などが存在する。いずれの小片も第187図Ｃ－Ｄ断面に示す１層中から出土しており、これらの土器群は周溝がほぼ埋没してからのものと判断される。この地区における墳墓としての利用の最終段階を示す土器の可能性が考えられる。

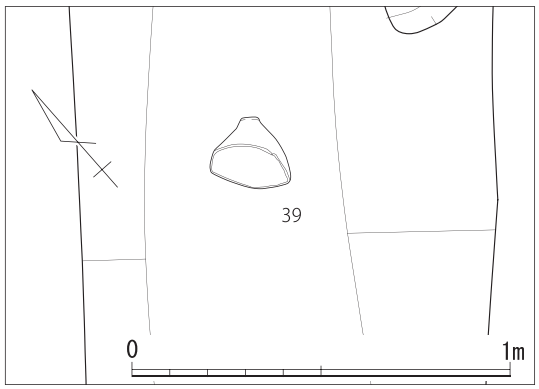
17－11号墓　17－10号墓の西に隣接する方形周溝墓である。東は17－10号墓のＳＤ77を共有し、北はＳＤ78（幅0.7m・深さ0.2m）で、南はＳＤ79（幅0.6m・深さ0.07m）で区画される。東側



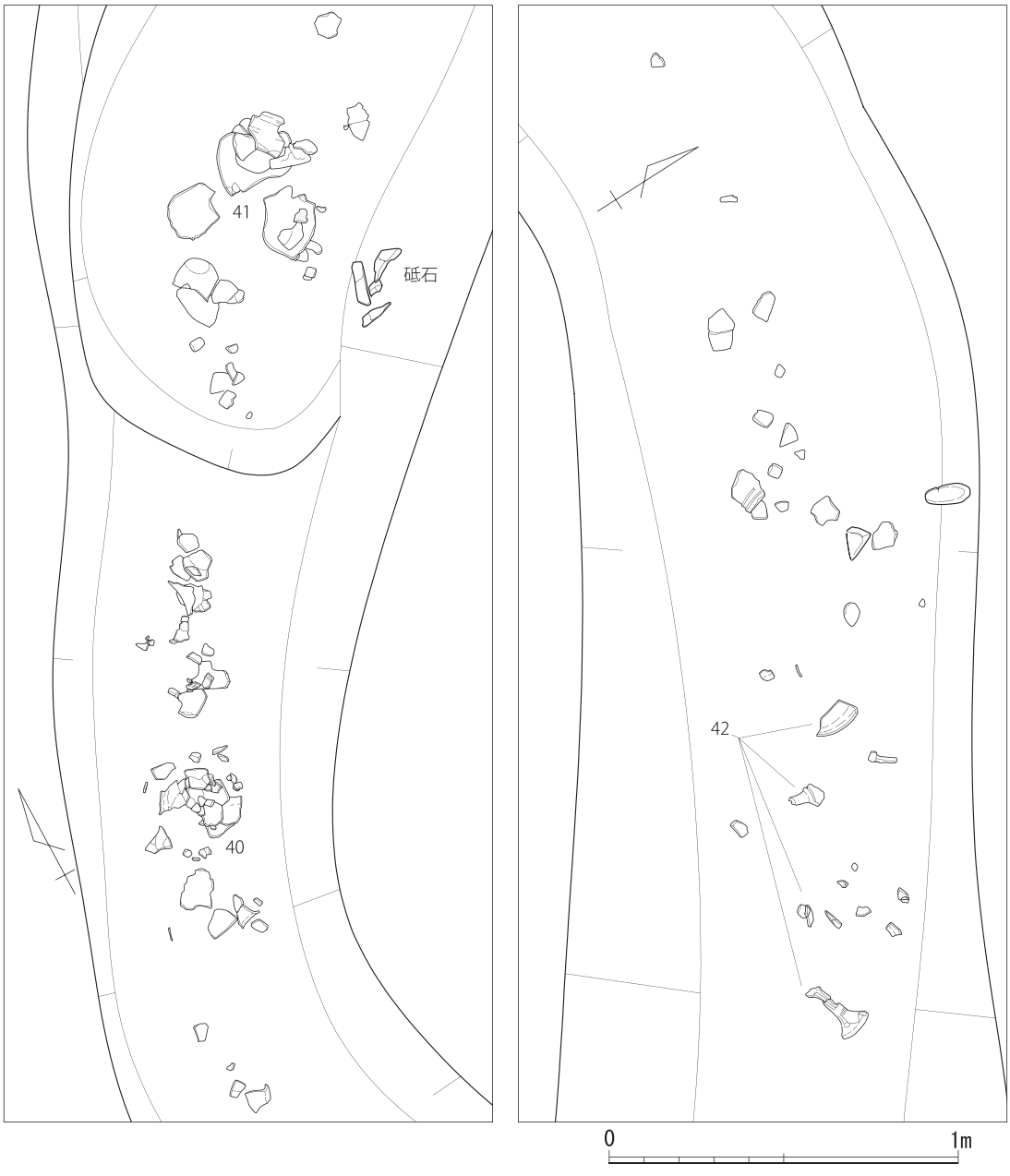
第187図　17－10号墓周溝断面（1/50）

の区画溝は検出されなかったが、当初から存在しなかったのか、削平により失われたのかは明らかではない。盛土は確認できず、埋葬施設も検出できなかった。また、この墳墓に確実に伴う遺物もない。周溝墓の規模は東西４ｍ程度、南北4.8mを測る。

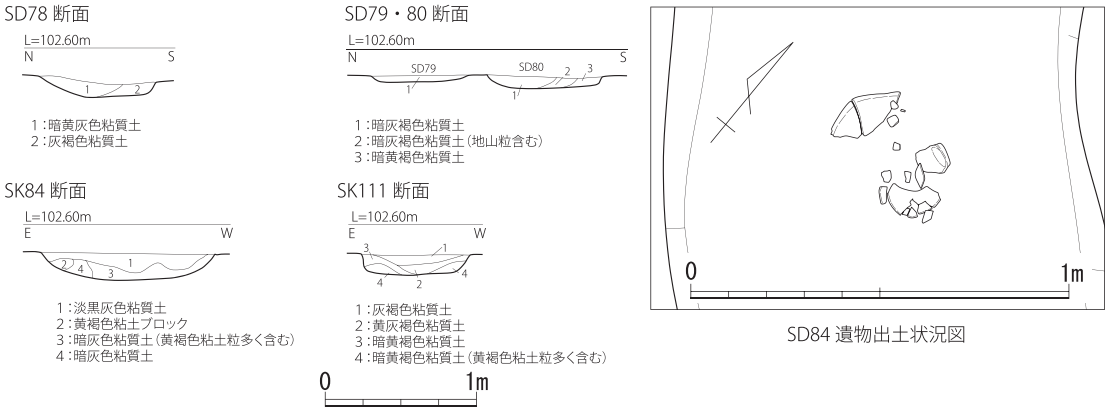
17－12号墓　17－11号墓の南に位置する。北はＳＤ80（幅0.8m・深さ0.15m）、西は17－13号墓と共有する土坑状の溝ＳＤ84（幅1.2m・深



第188図　ＳＤ77遺物出土状況図（１）
（1/20）



第189図　ＳＤ77遺物出土状況図（２）（1/20）

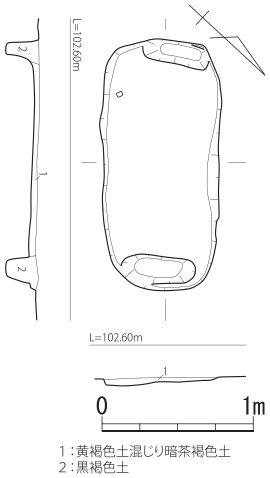


SD84 遺物出土状況図

第190図　17－11～13号墓周溝断面図（1/50）、ＳＤ84遺物出土状況図（1/20）

さ0.2m）、南はＳＤ84－２（幅0.3m・深さ0.15m）で区画される方形周溝墓である。東側の区画溝は検出できなかったが、調査区外になっているものと判断される。周溝は完周せず四隅が途切れているものと判断される。盛土は確認できず、埋葬施設も検出できなかった。周溝墓の規模は東西5.6m以上、南北7.2mを測る。

土坑状の区画溝ＳＤ84のほぼ中央で壺底部を検出した（第190図右）が、17－11号墓に伴うものか、17－13号墓に伴うものか判断できなかった。



第191図　木棺墓ＳＸ138実測図（1/50）

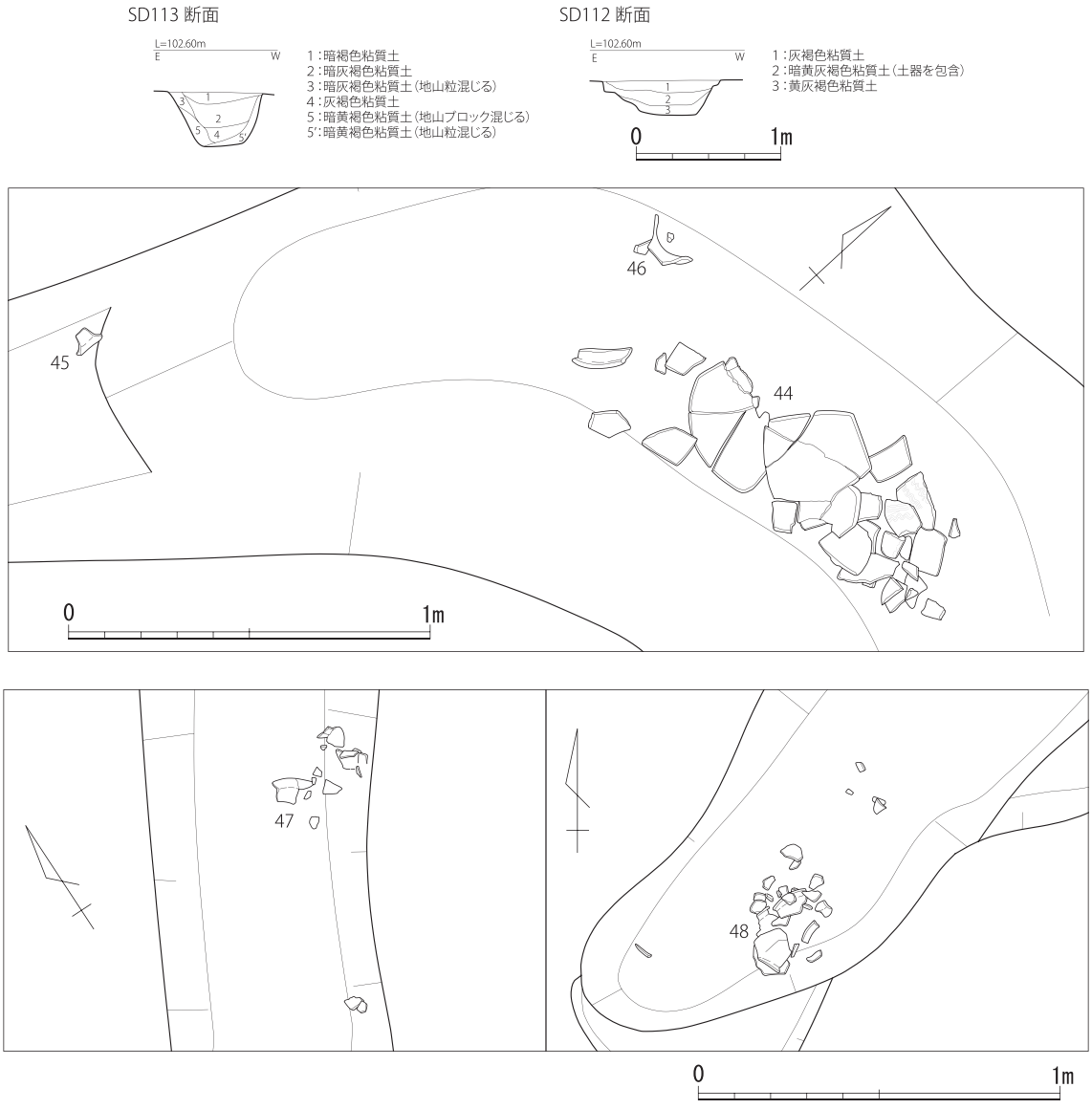
17－13号墓　17－12号墓の西に隣接する方形周溝墓である。北は17－10号墓のＳＤ77で、東は17－12号墓の西側区画溝ＳＤ84を共有し、西は土坑状の溝ＳＤ111（幅0.7m・深さ0.15m）で区画される方形周溝墓である。南側の区画施設については有無を明らかにできなかったが、埋葬施設が遺存していることから大きく削平を受けているとは考えられず、当初から存在しない可能性が高い。またＳＤ111は、西に位置する17－14号墓の南側区画ＳＤ112を避けて掘削していることから、この周溝墓は17－10・14号墓に後出する方形周溝墓と考えられる。周溝墓の規模は東西7.8m、南北８m程度を測る。

木棺墓ＳＸ138（第191図）　ＳＤ84とＳＤ111のほぼ中間で東西方向に主軸をとる木棺墓ＳＸ138を検出した。墓壙の平面形は両端が丸みを帯びた長方形を呈し、規模は長軸1.68m、短軸0.75m、深さ0.05mを測る。墓壙両小口部分には小口板を据え付けるための土坑が掘削されている。棺の痕跡は平面的には検出できなかったが、この小口穴の存在から小口板が棺底より突出する形態をとる箱型木棺が納められていたものと考えられる。なお、今回、区画墓で小口板が棺底より下に突出する形態の木棺を採用しているのは本例のみである。埋土中から弥生土器の小片が出土しているが、この埋葬施設に伴うものか判断できない。

17－14号墓　17－10号墓の南西、17－13号墓の西に位置する。「Ｌ」字状に屈曲するＳＤ113（西：幅0.6m・深さ0.4m、北：幅0.7m・深さ0.4m）を西および北の区画溝とし、東側は17－10号

墓のＳＤ77を再掘削し、南側はＳＤ112（幅0.8m・深さ0.25m）で区画する。南側が調査区外のため、全容は不明であるが、周溝の北東隅と南東隅は途切れる形態をとる。周溝墓の規模は東西８ｍ、南北８ｍを測る。盛土や埋葬施設は検出されなかった。

周溝内の各所から遺物を検出している。ＳＤ77とＳＤ113の接する地点はこの周溝墓に沿って深く掘り込まれており、この部分の底から大型壺（第201図44）の破片が検出された（第192図中）。破片数が少なく、完形個体が転落したとは考えがたい状況であるが、溝底面にほぼ接して検出されていることから、この周溝墓の築造時期を示す土器と考えられる。また、同地点では周溝埋土中から壺（第201図45・46）などが出土している。出土状況から、周溝が一定程度埋没してからこの地点に遺棄された遺物と考えられる。ＳＤ113北側中央では甕（第201図47）が墳丘側から転落した状態で検出されている（第192図左下）。これらの遺物は第192図２層中から検出され、溝底面から遊離しているため、周溝が一定程度埋没した後に、墳丘から転落した遺物の可能性が高いものと



第192図　17－14号墓周溝断面（1/50）、遺物出土状況図（1/20）

考える。南側のＳＤ112からは溝南東部で周溝外から遺棄された状態で甕１個体（第201図48）が検出された（第192図右下）。周溝外から転落もしくは遺棄され、この場で崩壊したものと考えられる。

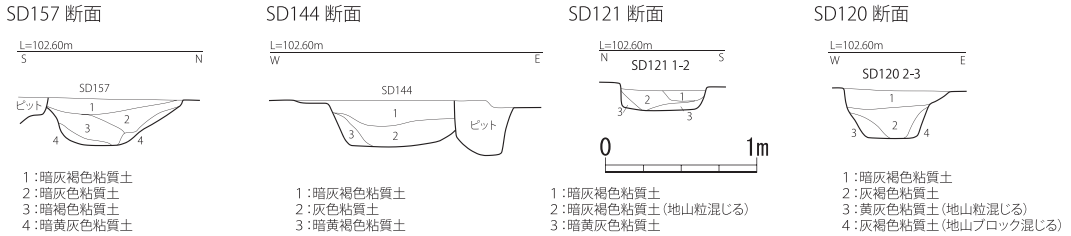
17－15号墓　17－４号墓の南西に位置する。東は17－４号墓のＳＤ136、北は17－３号墓の南側区画溝ＳＤ145で、南は「Ｌ」字状に屈曲するＳＤ157（幅0.5～1.2m・深さ0.3m）によって区画される方形周溝墓として認識した。西側は調査区外のため全容は不明である。盛土や埋葬施設は検出できなかった。周溝墓の規模は東西５m以上、南北６mを測る。墳丘の北東隅が不自然な角度をしているため、ＳＤ157は17－３号墓の拡張に伴うものの可能性も考慮しておきたい。この周溝墓に確実に伴う遺物は確認されていない。

17－16号墓　17－15号墓の南に位置する。「コ」字状を呈するＳＤ144（北：幅１m・深さ0.3m、東：幅1.1m・深さ0.3m、南：幅1.1m・深さ0.3m）により区画される方形周溝墓である。なお、墳丘内北側で検出した東西方向のＳＤ156（幅0.7m・深さ0.3m）は平面的な観察からＳＤ144により切られているものと判断した。このＳＤ156は17－16号墓の拡張前の北側区画溝と考えられる。17－15号墓との前後関係は明らかにすることができなかった。周溝墓の規模は拡張前が南北6.4m、東西２m以上、拡張後の規模は南北7.6mを測る。盛土や埋葬施設は検出できなかった。周溝南東部で細片化した弥生土器が検出されているが、体部片のみであり図示するには至らなかった。

17－17号墓　17－16号墓の南に位置する。「コ」字状を呈するＳＤ121（北：幅0.6m・深さ0.2m、東：幅0.6m・深さ0.2m、南：幅0.6m・深さ0.2m）と、西側で検出されたＳＤ122（幅0.5m・深さ0.1m）により区画される方形周溝墓である。また、この周溝墓の外縁部に沿うＳＤ120（幅0.6m・深さ0.3m）をこの周溝墓の拡張に伴うものと考える。ＳＤ121とＳＤ120の間はＳＤ03により削平され、土層などの観察によって拡張の確証を得ることはできなかったが、平面的な位置関係から、拡張を考えてよいものと判断した。ＳＤ121の北西隅は一段深く掘り込まれているが、平面形からみて溝内埋葬の可能性は低く、再掘削によるものと考える。周溝墓の規模は拡張前が南北５m、東西５mを測り、拡張後南北７mを測る。盛土や埋葬施設は検出できなかった。

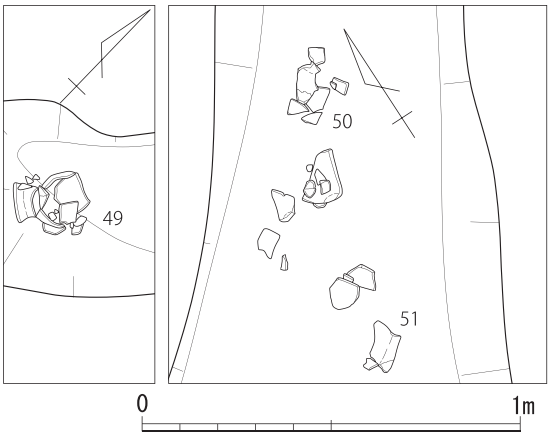
ＳＤ121西端で壺（第201図49）の大型破片を検出した（第194図左）。ほぼ溝底面に接しており、周溝墓の築造後まもなく埋没した遺物と考える。また、ＳＤ120南端では細片化した壺（第201図51）・鉢（第201図50）を検出した（第194図右図）。溝底面より遊離しており周溝が一定埋没してからの遺物である。また、ＳＤ120の北側でも床面から遊離した弥生土器小片を複数検出している。

17－18号墓　17－17号墓の南に位置する。「L」字状に屈曲するＳＤ114（幅0.9m、深さ0.2m）



第193図　17－15～17号墓周溝断面（1/50）

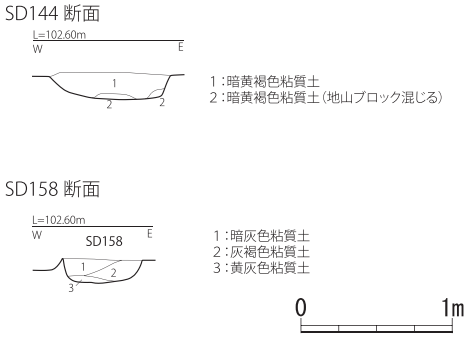
とＳＤ119（幅0.8m、深さ0.2m）と、ＳＤ114の北に位置する土坑状の溝SD158（幅0.5m、深さ0.15m）により区画される方形周溝墓である。大部分が調査区外のため詳細は不明であるが、平面的な位置関係からＳＤ158の延長上にあるＳＤ122を17－17号墓と共有している可能性が高い。周溝墓の規模は東西1.6m以上、南北5.6m以上を測る。盛土や埋葬施設は検出できなかった。ＳＤ114北側で周溝外からの遺棄もしくは転落と思われる弥生土器小片を検出している（第195図）。

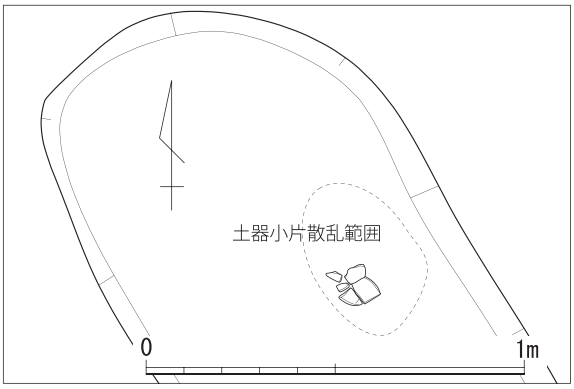


第194図　17－17号墓遺物出土状況図
（左：ＳＤ121、右：ＳＤ120）（1/20）

Ｂ．出土遺物（第196～202図）

Ｌ５地区から出土した弥生時代の遺物として、弥生土器、石器を図示した。全て方形周溝墓の周溝および埋葬施設からの出土遺物である。以下、弥生土器については遺構ごとに概観し、石器についてはまとめて報告を行う。



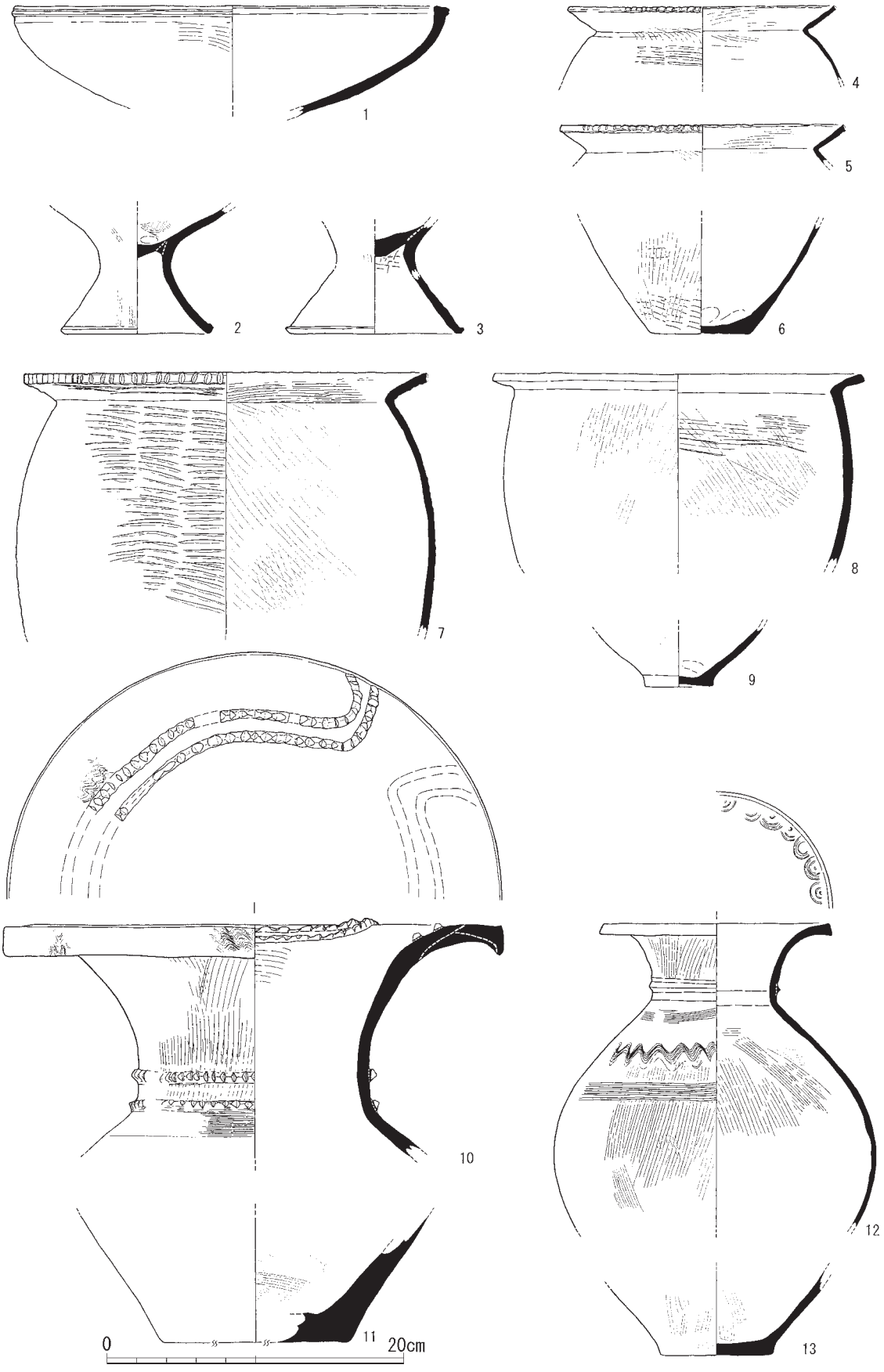


第195図　17－18号墓周溝土層断面（1/50）
遺物出土状況図（1/20）

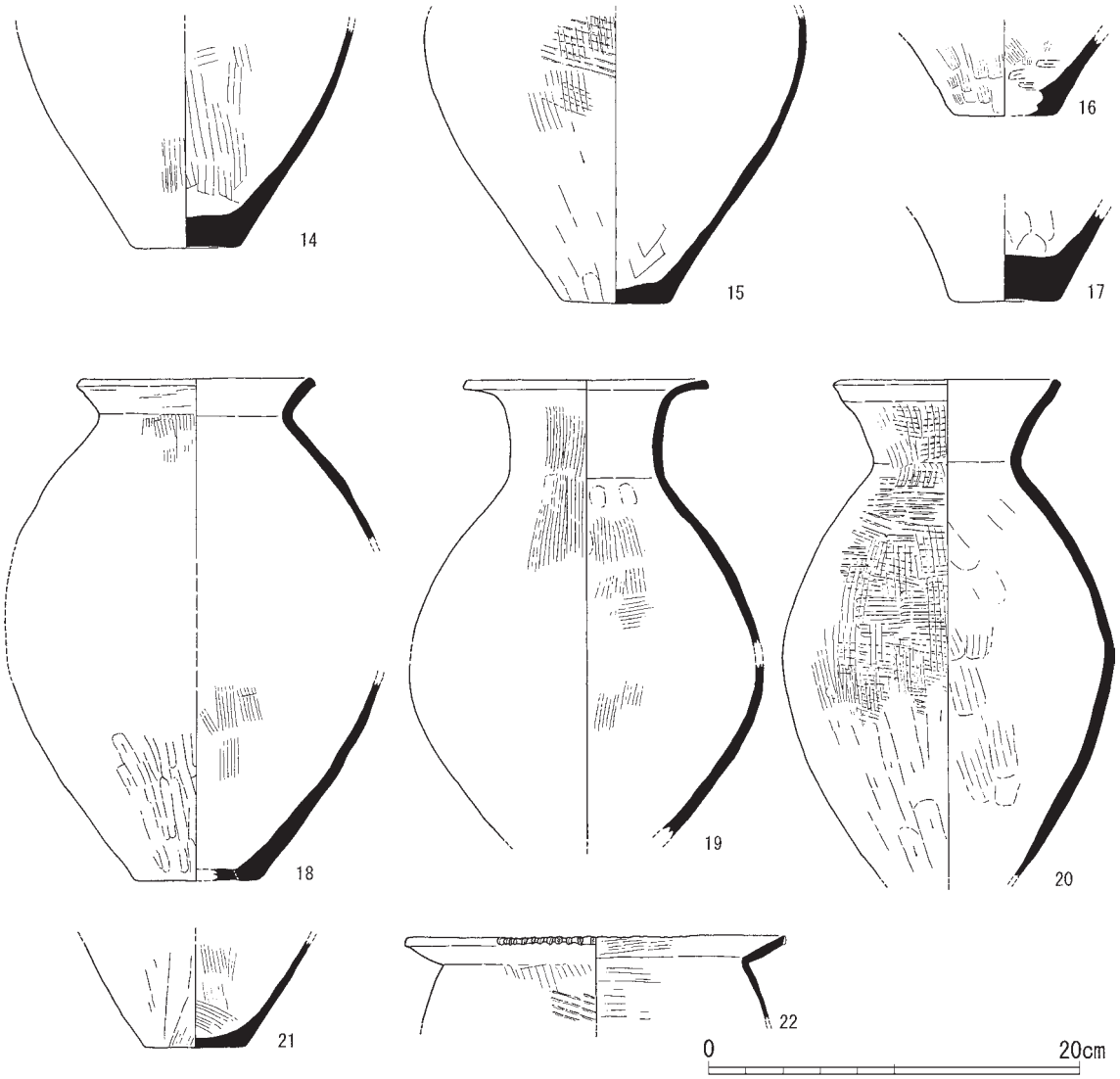
17－１号墓（第196図１～６）　１～３・６はＳＤ02から、４・５はＳＤ139から出土した。１は高杯である。浅い鉢状の杯部をもち、口縁を凹線文で加飾する。２・３は台付壺などの脚部の可能性がある。６は壺底部である。外面はタタキののちハケで調整する。４・５は甕である。「く」字状口縁をもち、口縁端部に刻目を施す。４はタタキの後、ハケで調整する。

17－２号墓（第196図７～９）　いずれもＳＤ133からの出土である。７は「く」字状口縁をもつ甕である。口縁端面に面を形成し、刻目を施す。外面はタタキ、内面はハケで調整する。口縁下端までタタキが及んでいる。８は無文の「く」字状口縁をもつ甕である。内外面ともハケにより調整する。９は壺の底部である。

17－４号墓（第196図10～13、第197図14～22）　全てＳＤ133からの出土であるが、10～15は17－５号墓側からの転落の可能性が高い。10は大型の加飾壺である。口縁内面および頸部に突帯による加飾を行う。播磨系の土器とみられる。11は10の底部になる可能性の高い個体である。12は広口壺である。口縁内面に扇形文を施す。頸部には１条の突帯をもち、体部上半は櫛描直線文と



第196図　Ｌ５地区出土遺物実測図（１）



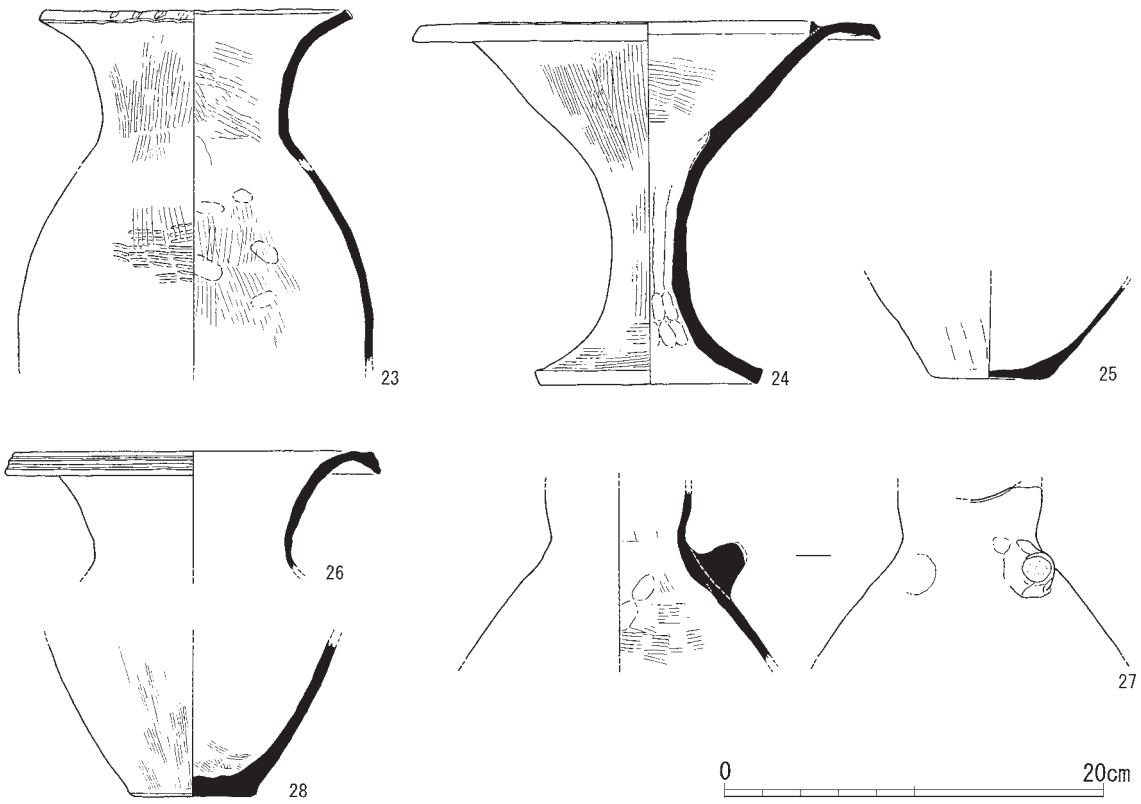
第197図　Ｌ５地区出土遺物実測図（２）

波状文で加飾する。内外面ともハケにより調整される。13は同一地点から出土した壺の底部である。14～17は壺の底部から体部である。18は短い口縁をもつ無文の広口壺である。体部上半はハケ、底部外面はケズリにより調整する。19は直線的に立ち上がる頸部をもつ無文の広口壺である。20は直口壺である。細長い体部をもち、短く直線的に立ち上がる口縁をもつ。外面はタタキののちハケを施し、最終的に底部外面からケズリ上げている。21は甕の底部。22は口縁端部に刻目を施す「く」字状口縁をもつ甕である。

17－５号墓（第198図23・24）　23はＳＤ135Ｂから出土した広口壺である。口縁端面に刻目を施す。24はＳＤ125Ａから出土した水平口縁をもつ高杯である。

17－６号墓（第198図25）　25はＳＤ126から出土した壺底部である。内外面とも器壁の剝離、劣化が著しい。

17－７号墓（第198図26～28）　いずれもＳＤ155からの出土遺物である。26は広口壺である。口縁端部を下方に拡張し、外側面に２条の凹線文を施す。27は水差し形土器である。短く直立す



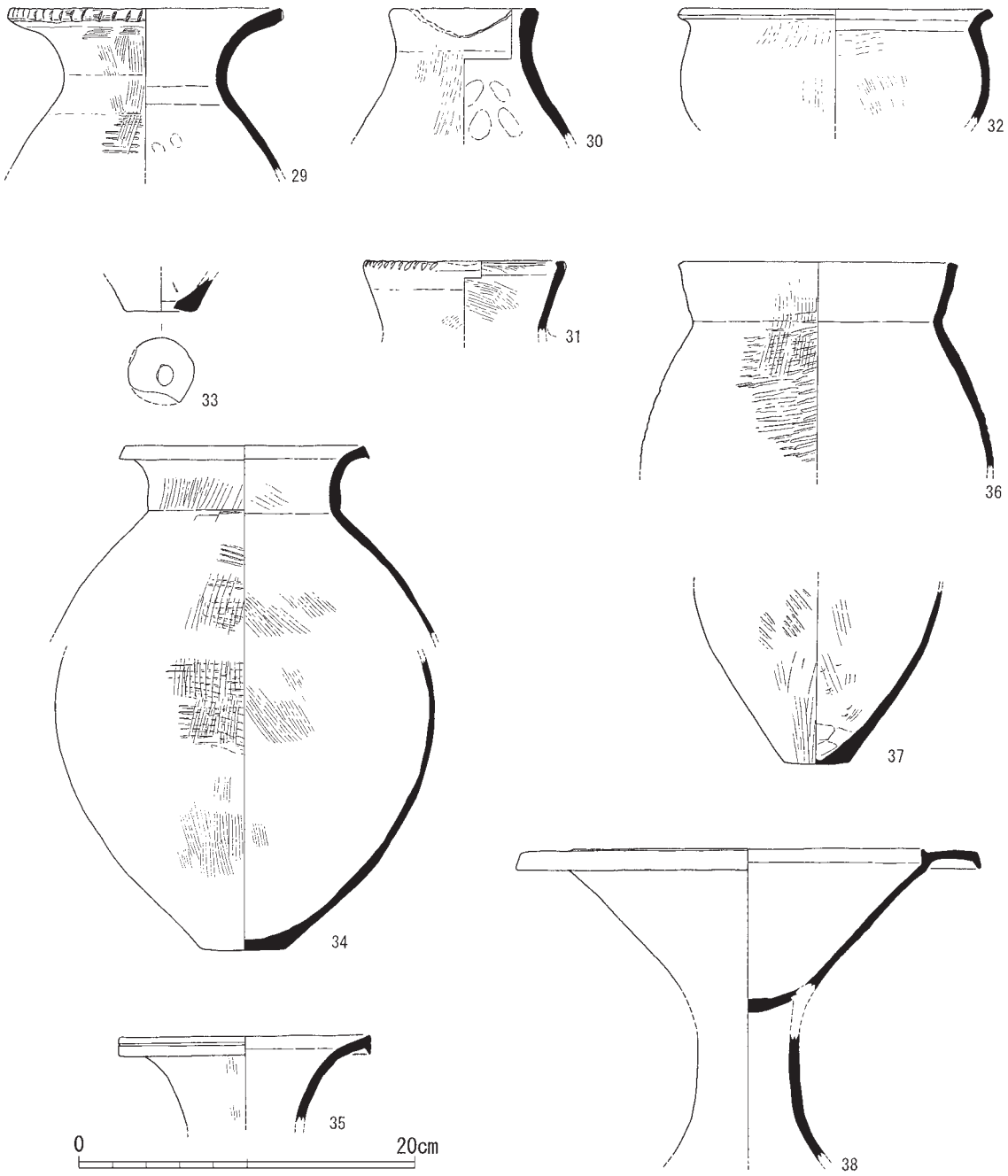
第198図　Ｌ５地区出土遺物実測図（３）

る口縁をもつ。剝離した把手部分の痕跡がみられ、口縁はこの方向に刻り込みをもつ。28は壺の底部と思われる。

17－８号墓（第199図29～33）　全てＳＤ76からの出土遺物である。29は口縁に刻目をもつ広口壺である。30は水差し形土器と思われる口縁。31は口縁端面に刻目を施す直口壺であるが水差し形土器の可能性もある。32は短く外反する口縁をもつ鉢である。33は甕の底部である。焼成後穿孔がなされている。

17－９号墓（第199図34～38）　全て墳墓を区画するＳＫ149からの出土遺物である。出土状況から短期間に投棄された一括性の高い土器群と考える。34は無文の広口壺である。短く直線的に立ち上がる頸部をもち、口縁端部は拡張し、面をなす。外面はタタキの後ハケで、内面はハケで調整する。35は広口壺である。口縁は下方に拡張し、１条の凹線文で加飾する。36は直口壺である。直線的に立ち上がる口縁をもつ。外面はタタキの後ハケで調整する。37は壺の底部と思われる。38は水平口縁をもつ高杯である。

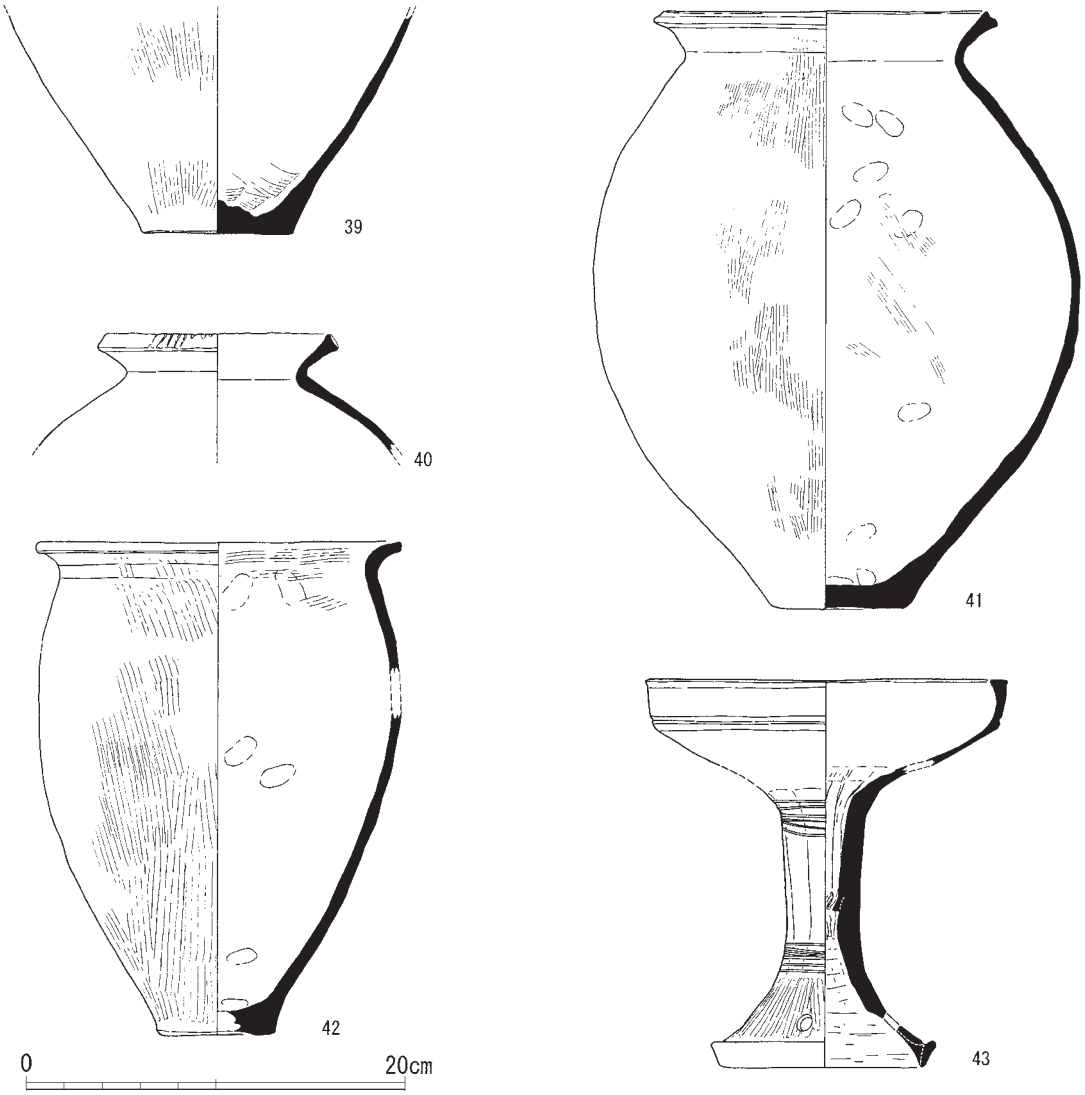
17－10号墓（第200図39～43）　全てＳＤ77からの出土遺物である。このうち39が溝底面直上から出土しており、この墳墓の造墓時期にもっとも近い資料である。また、43は周溝の検出面から出土しており、最終的に周溝が埋没した段階を示す資料といえる。その他の土器は溝が一定埋没してからの資料である。39は壺の底部である。内外面ともハケにより調整される。40は短い口縁をもつ広口壺である。口縁端面はわずかに拡張し面をなす。41は無文の広口壺である。短く外反気味に立ち上がる口縁をもち、口縁端部は面を構成する。42は短く横にのびる口縁をもつ甕であ



第199図　Ｌ５地区出土遺物実測図（４）

る。43は高杯である。浅い椀状の杯部をもち、杯部下端を凹線文で加飾する。脚柱部外面には退化凹線文を施しており、脚端部は上方につまみ上げている。この地区の弥生土器の中でももっとも新しい様相を示す資料といえる。

17－14号墓（第201図44～48）　44～47はＳＤ113、48はＳＤ112からの出土遺物である。44は大型の加飾壺である。垂下する口縁をもつ。口縁は摩滅のため、刻み以外の加飾の有無は不明であるが胴部に櫛描波状文と直線文を施す。45・46は短い口縁をもつ壺である。45は刻みにより加飾する。47は口縁端部に刻目を施す「く」字状口縁をもつ甕である。48は口縁に刻目を施す「く」字状口縁をもつ甕である。体部上半に最大径をもつ。外面上半は摩滅のため調整が不明瞭である

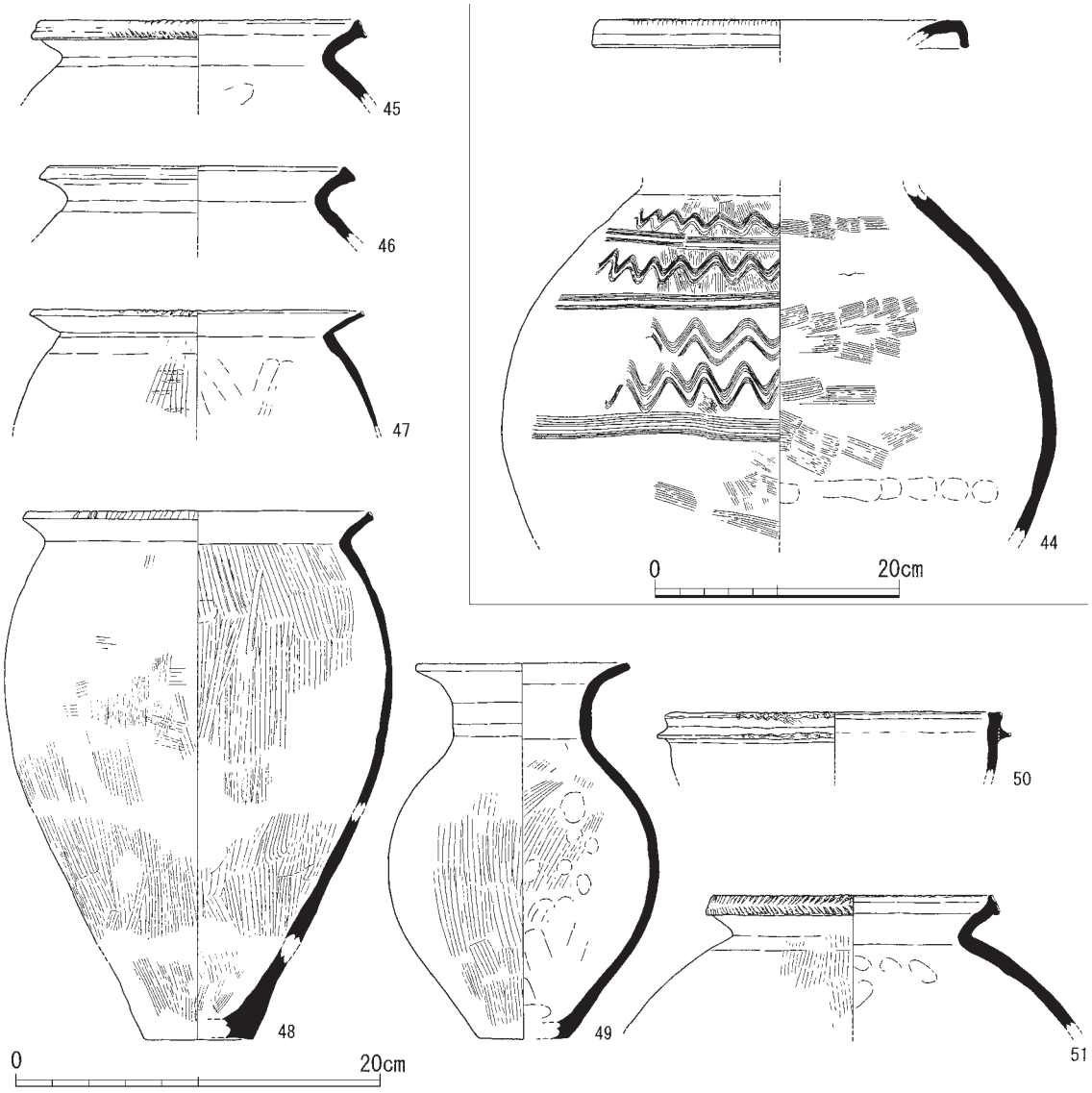


第200図　Ｌ５地区出土遺物実測図（５）

が、内面、および体部下半は縦方向のハケにより調整される。

17－17号墓（第201図49～51）　49はＳＤ121から、50･51はＳＤ120からそれぞれ出土している。この周溝墓は周溝の拡張を行っているものとみられ、49が拡張前の周溝墓に伴う遺物、50・51が拡張後の周溝に伴う遺物である。49は無文の広口壺である。直線的に立ち上がる頸部をもち、口縁端部は丸く収める。50は鉢である。１条の貼り付け突帯をもち口縁端面と突帯に刻目を施す。51は短い口縁をもつ広口壺である。刻目で加飾する。

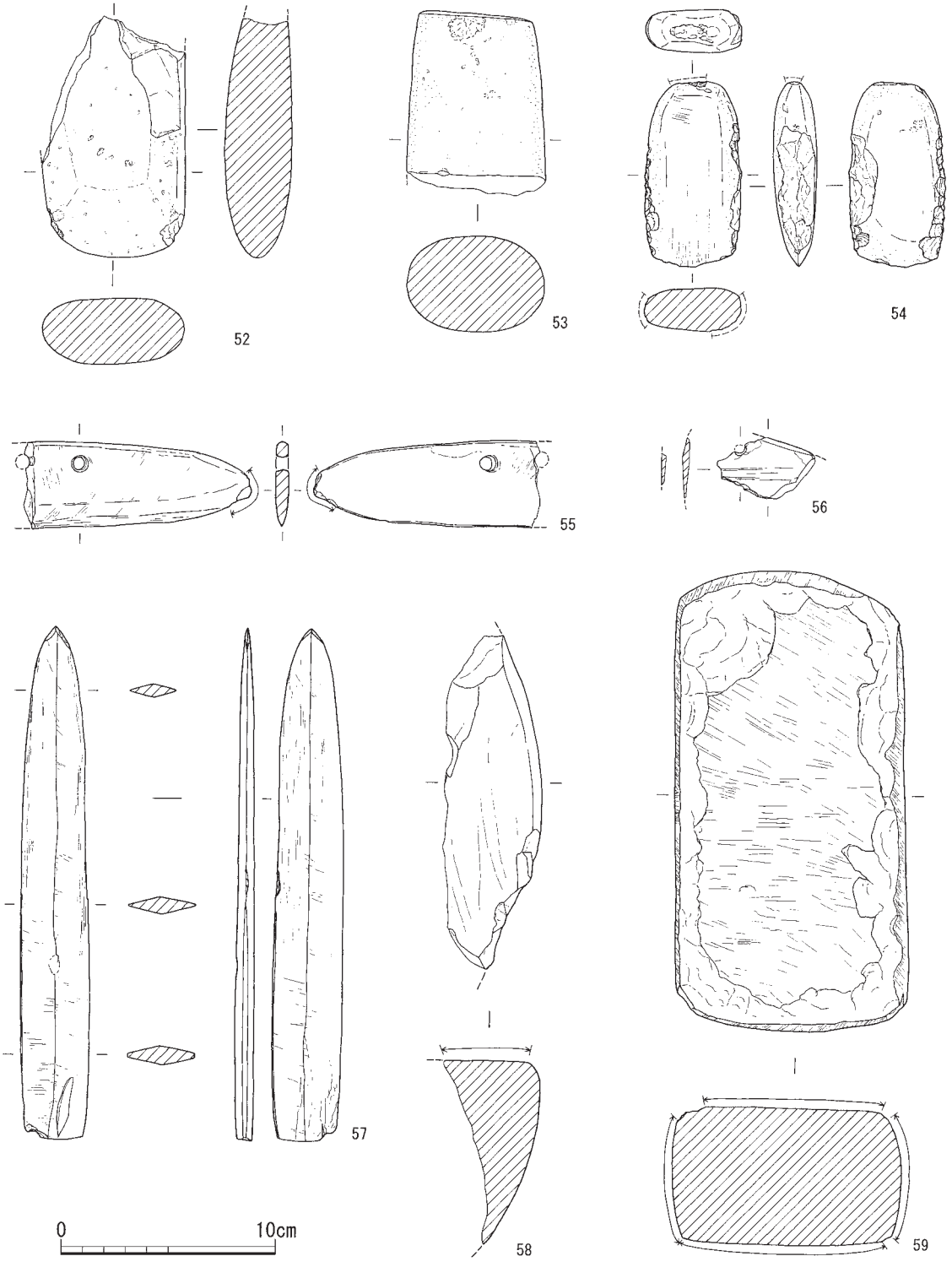
石器（第202図）　52は17－１号墓のＳＤ02から出土した磨製石斧の刃部である。53は17－７号墓のＳＤ125Ｂから出土した太型蛤刃石斧の基部である。基部によく見られる打痕が認められない。54は17－８号墓のＳＤ76から出土した小型の磨製石斧である。55は54とともに出土した石庖丁である。刃部は両刃を形成し、水平に長い形態をとる。56は17－６号墓の木棺墓ＳＸ150棺内流入土から出土した石庖丁の細片である。円孔部付近の破片であり、刃部や裏面が剝離し、本来の形態は不明である。副葬遺物とは考えがたく、混入品であろう。57は17－４号墓のＳＤ133か



第201図　Ｌ５地区出土遺物実測図（６）

ら出土した磨製石剣である。この墳墓に伴う遺物とみられる。ほぼ完形品であり、全長24cmを測る。刃部から基部まで鏑をもつ。刃部は13cmを測り、研ぎ減りとみられる痕跡が確認される。また、基部の一部が変色しているが、石材の色の差か刀装具の痕跡か判断できない。58は17－10号墓のＳＤ77から出土した石皿片である。59は17－６号墓のＳＤ126Ａから出土した砥石である。大型の直方体であり、６面全てに使用痕が認められる。

（石崎善久）



第202図　Ｌ５地区出土遺物実測図（７）

２）飛鳥時代以降の遺構・遺物

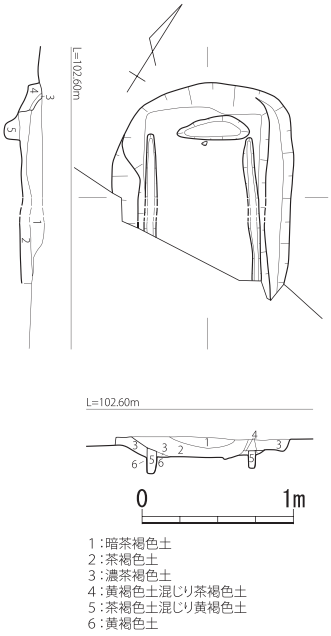
Ａ．検出遺構

Ｌ５地区では飛鳥時代の竪穴式住居跡２基、掘立柱建物跡８棟などを検出した。遺構密度は北半が高く、南側では希薄である。なお、古墳時代の木棺墓と思われるＳＸ143についてもこの項で説明を加える。また、この地区では南北に調査区を縦断するＳＤ03により大きく遺構が削平を受けている部分がある。この溝は、現在の府道整備前の地境溝であり、近年まで掘削を繰り返して使用されてきたものとみられる。以下、主要な遺構について概観する。

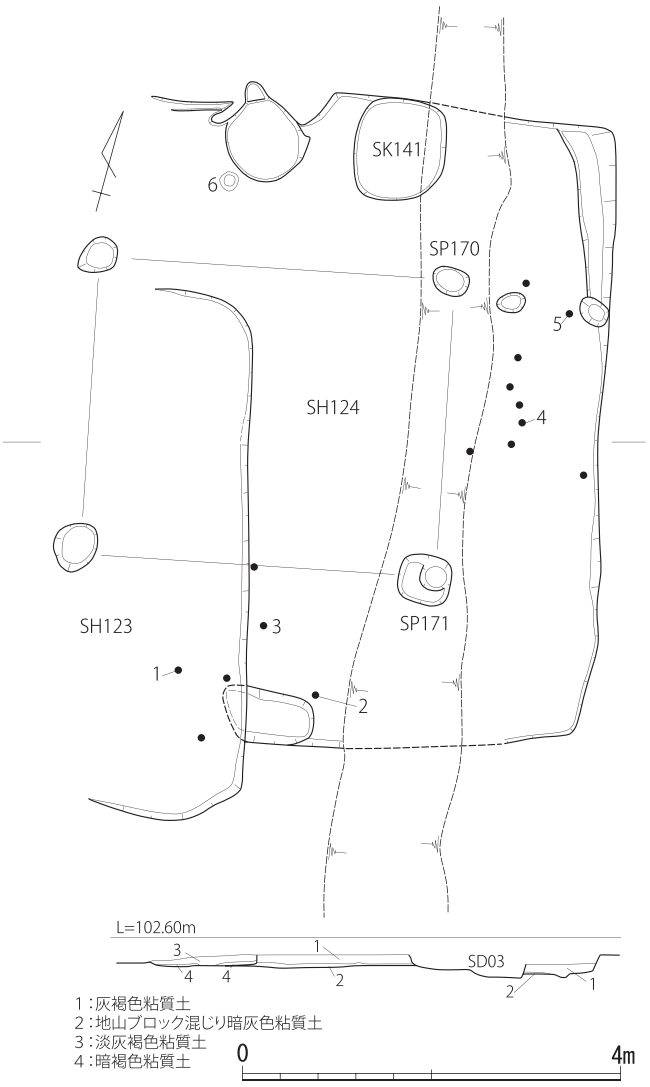
木棺墓ＳＸ143（第204図）　調査区の南に位置する木棺墓である。検出段階では弥生時代の遺構と判断したが、埋土中から須恵器杯身片が出土したため、古墳時代の遺構であることが明らか



第203図　Ｌ5地区検出遺構配置図（飛鳥時代以降、1/400）



第204図　木棺墓ＳＸ143実測図
（1/50）



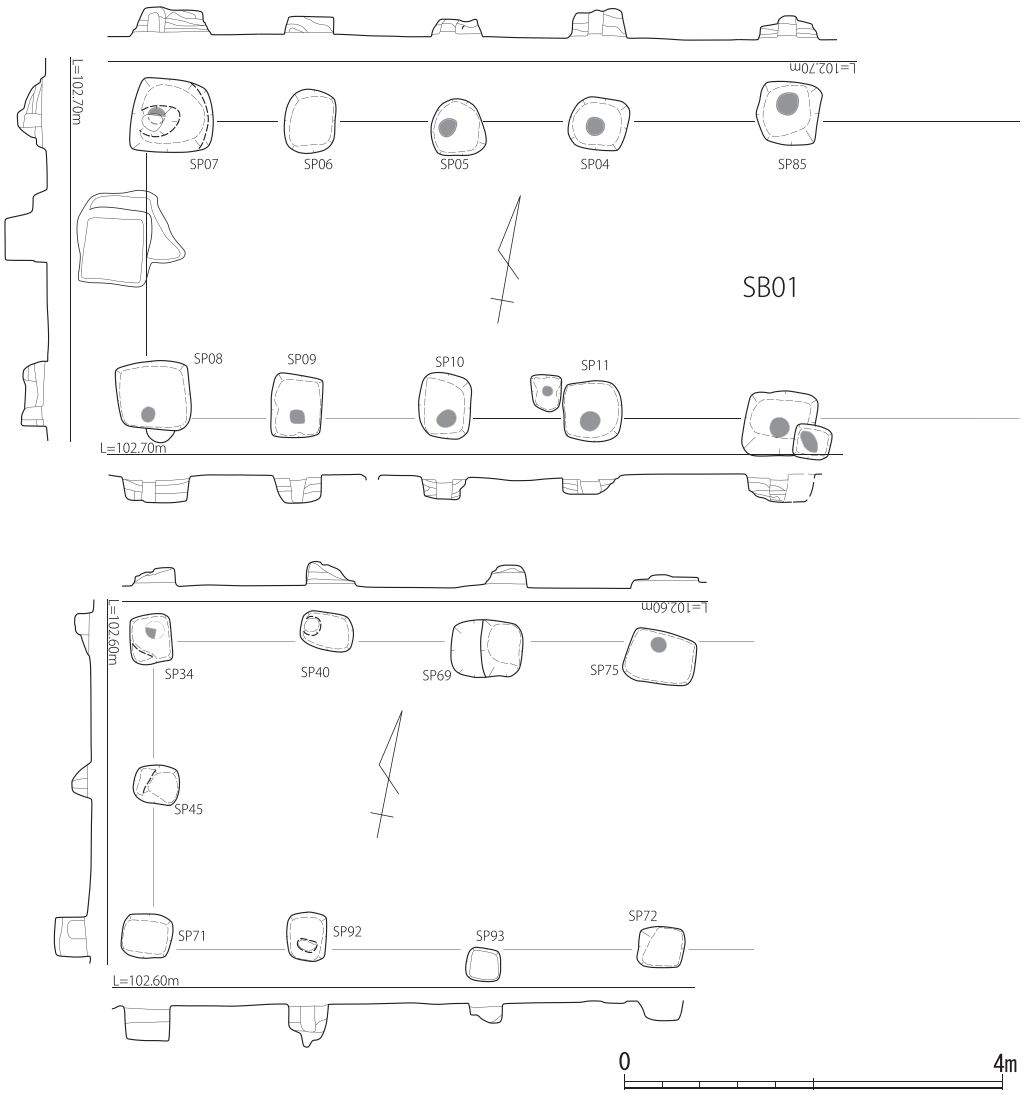
第205図　竪穴式住居跡ＳＨ123・124実測図（1/80）

となった。

墓壙は南北方向に主軸をとる。南側が調査区外のため全容は不明である。墓壙の平面形は小口側がやや丸みを帯びた長方形を呈する。墓壙の断面形は東側に段をもつ変則的な二段墓壙である。木棺の痕跡は平面的には確認できなかったが、棺材を据え付けるための溝や土坑が掘削されており、小口板が底板の下方に突出する組合式箱型木棺と考えられる。副葬品は検出されなかったが、棺内流入土北側で須恵器杯身の小片が検出された。上層遺構の撹乱による混入の可能性はなく、この遺構が古墳時代以降のものであることが明らかとなった。墓壙の規模は長軸1.4m以上、短軸1.2m、深さ0.17mを測る。また、棺は幅0.6m程度のものであったと考えられる。

竪穴式住居跡ＳＨ123（第205図）　調査地中央からやや東寄りの地点で確認された竪穴式住居跡である。平面は方形プランを呈するとみられるが、西側は削平のためか掘形が失われており、全容を確認することはできなかった。南北5.6m、東西１m以上を測る。この竪穴式住居跡は竪穴式住居跡ＳＨ124を切って構築されており、ＳＨ124の建て替えの可能性が考えられる。主柱穴を特定するには至らなかった。床面からは土師器甕（第211図１）が検出されている。飛鳥時代の竪穴式住居跡と考えられる。

竪穴式住居跡ＳＨ124（第205図）　竪穴式住居跡ＳＨ123に切られる。また、ＳＤ03により大き



第206図　掘立柱建物跡ＳＢ01・02実測図(1/100)

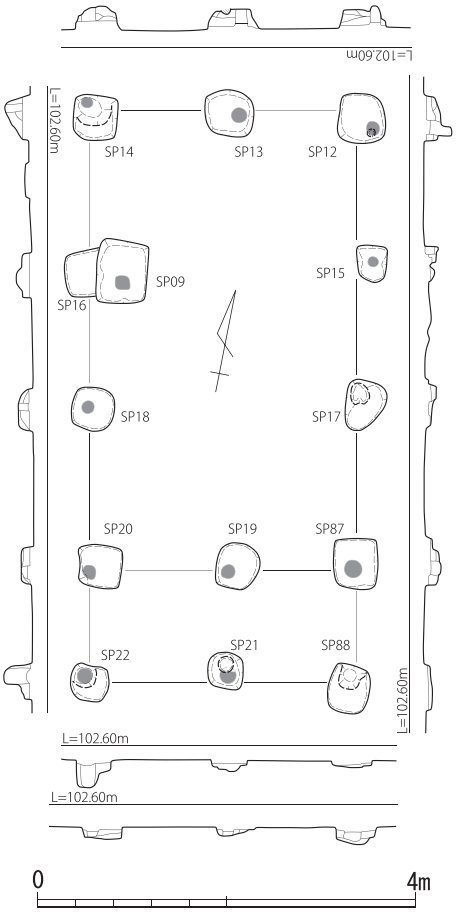
く削平を受けている。住居の平面は方形プランを呈する。西側は削平のため、遺存していない。規模は東西5.6m以上、南北6.5mを測る。住居内の施設として北辺中央に作り付けのカマドを検出した。また、カマドの東側には円形のＳＫ141が存在し、埋土中から土師器甕(第211図８)が検出された。貯蔵穴などの機能をもつ土坑と推定される。主柱穴は４本であり、柱穴間は東西方向がやや長い。住居床面には硬化した土層が観察され貼床を行っているものと判断された(第205図土層図２層)。住居内からは須恵器や土師器(第211図２～７)がやや大型の破片の状態で検出された。飛鳥時代の竪穴式住居跡である。

掘立柱建物跡ＳＢ01(第206図)　調査地北東部で検出した東西に主軸をとる大型の掘立柱建物跡である。建物の規模は南北１間(４m)、東西４間(8.5m)以上を測る。排土置き場として利用するため、東に隣接地の水田耕作土を除去する段階で、この建物の北東の柱穴が存在することを確認しているため、東西は５間以上の規模をもつ。梁行の中央柱穴の有無については撹乱のため明らかにできなかった。各柱穴は平面方形もしくは不整方形を呈し規模は一辺0.7～１m前後を測る。柱穴の断面形は素掘りであり、深さは0.2～0.4mを測る。柱痕跡の確認できたものからこ

の建物には径20cm程度の柱が使用されていたと考えられる。遺物はＳＰ05埋土から須恵器杯片（第211図11）が、ＳＰ04の掘形埋土から須恵器脚付き壺の小片（第211図10）が出土している。

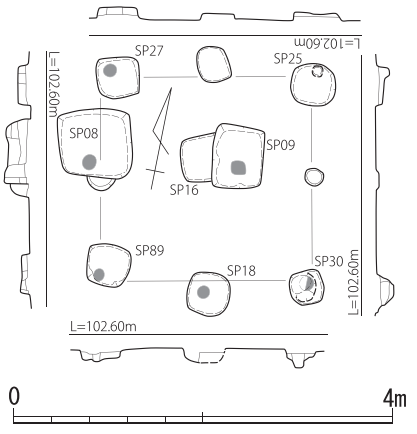
掘立柱建物跡ＳＢ02（第206図）　調査地中央からやや北東で検出された東西方向に主軸をとる掘立柱建物跡である。掘立柱建物跡ＳＢ01と同一方位をとる。規模は南北２間（4.1m）、東西３間（6.9m）以上を測る。柱穴の平面形は方形もしくは不整方形であり、規模は一辺0.5～１m前後である。柱穴の深さはばらつきがあり、一定していない。特に南側の柱列の柱穴が深いが、これは方形周溝墓の溝を切り込んでおり、安定地盤に達していなかったため深く掘削する必要があったものと考える。遺物はＳＰ69から須恵器杯蓋（第211図９）が出土している。奈良時代後半の建物と思われる。

掘立柱建物跡ＳＢ03（第207図）　掘立柱建物跡ＳＢ01と重複関係にある南北に主軸をもつ掘立柱建物跡である。ＳＢ01に切られていることからＳＢ01に先行する建物と考える。規模は南北３間（6.1m）、東西２間（3.5m）の身舎の南に１間（1.5m）分の庇がとりつく構造である。柱穴の平面は方形もしくは不整方形を呈し、断面は素掘りのものと柱を据え付けるため、柱穴底面を一段深くほりこむものの両者が存在する。時期を示すような遺物は出土していない。



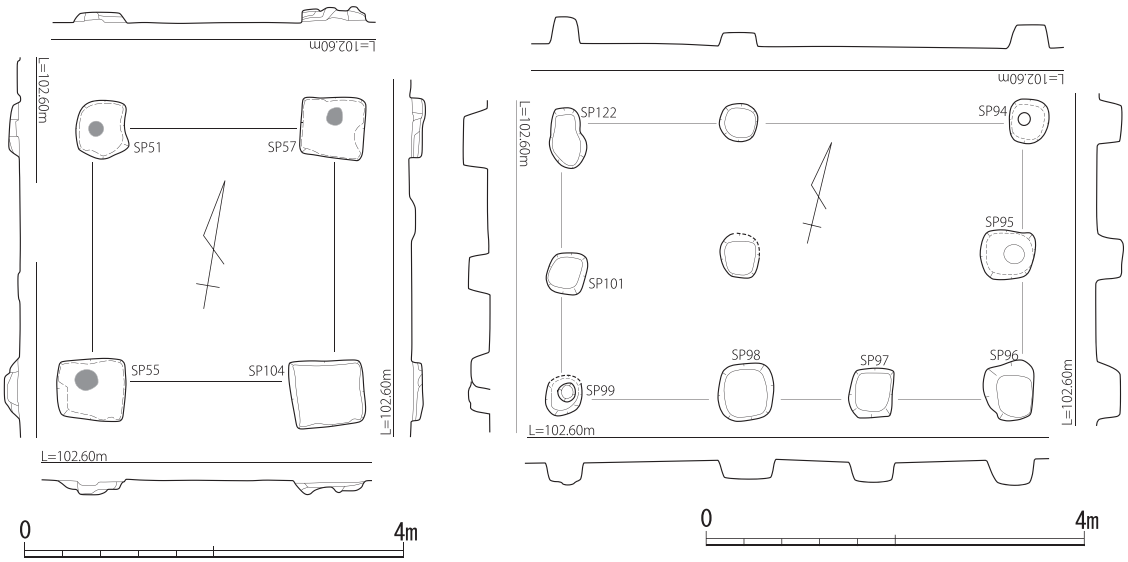
第207図　掘立柱建物跡ＳＢ03実測図（1/100）

掘立柱建物跡ＳＢ04（第208図）　掘立柱建物跡ＳＢ01・03と重複関係にある掘立柱建物跡である。東西２間（2.8m）、南北２間（2.8m）の規模をもつ。総柱の建物になる可能性もある。南側柱列の中央柱穴はＳＢ03の柱穴により削平された可能性が高い。柱穴は四隅が平面方形を呈し、深く掘削されるのに対し、各辺の中心柱穴は小型の円もしくは不整方形であり、浅く掘削されている。時期を示すような遺物は出土していないが、ＳＢ01・03に先行する建物であることは間違いない。



第208図　掘立柱建物跡ＳＢ04実測図（1/100）

掘立柱建物跡ＳＢ05（第209図）　調査区中央で検出した東西１間（3.3m）、南北１間（3.4m）の掘立柱建物跡である。他の建物とは重複関係にない。建物を構成する柱穴の平面は大型の方形プ

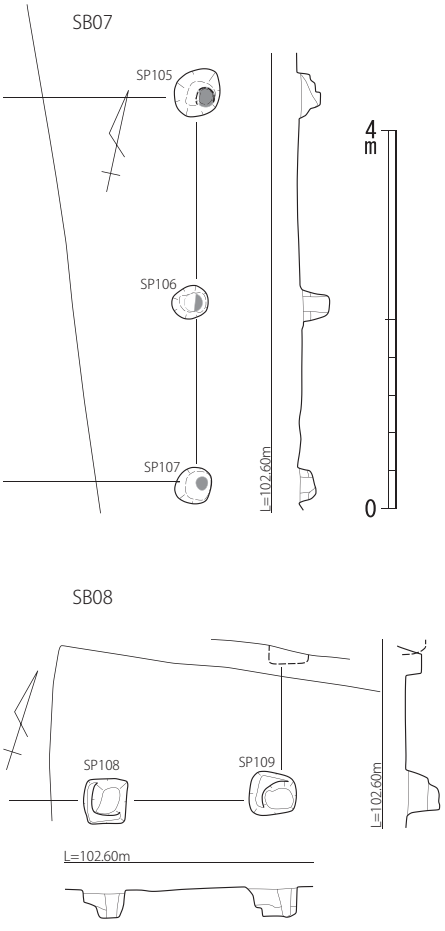


第209図　掘立柱建物跡ＳＢ05・06実測図(1/100)

ランを呈する。柱穴の深さは浅いが、削平を受けている可能性もある。柱痕跡の確認されたものからこの建物には径20～30cm程度の柱が使用されていたものと考えられる。時期を示すような遺物は出土していないが、主軸方向が北からやや西に振っており、他の建物群とほぼ同時期のものと考える。

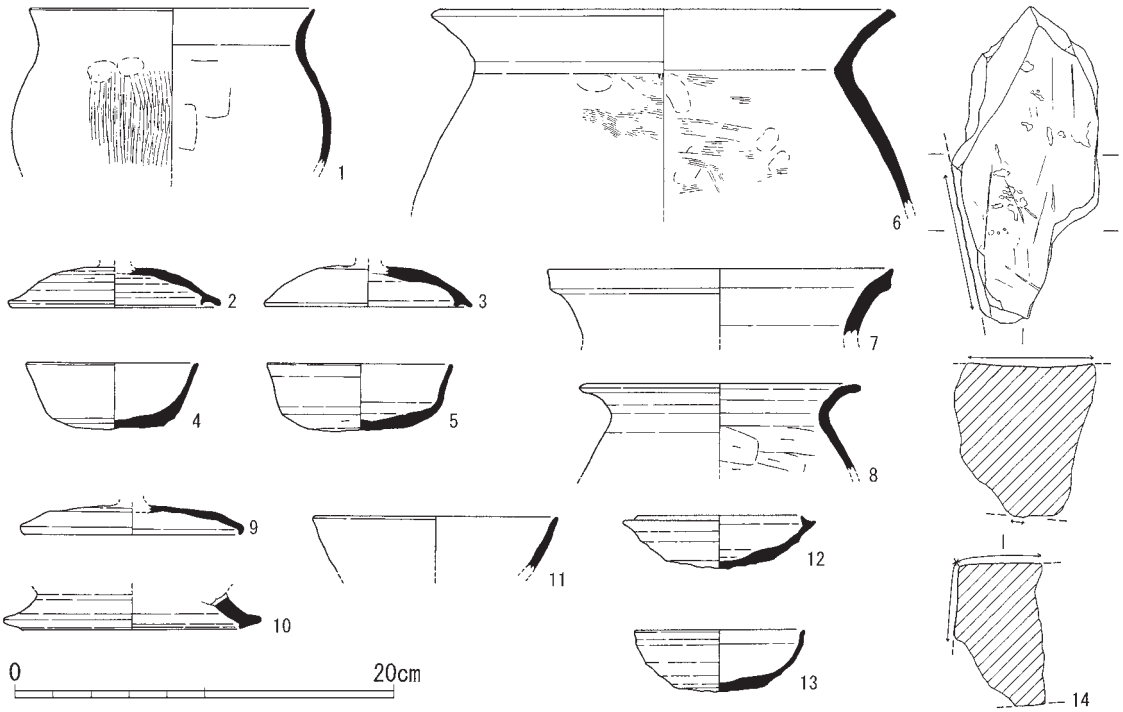
掘立柱建物跡ＳＢ06(第209図右)　調査区中央西で検出した東西方向に主軸をとる掘立柱建物跡である。南北２間(3.6m)、東西４間(5.1m)の規模をもつ。北側柱列の東から２基目は検出することができなかった。他の柱穴の遺存状況から削平を受けているとは考えにくく、当初から存在していないものと判断する。総柱の建物であった可能性がある。柱穴は方形、もしくは不整方形を呈し、断面は素掘りである。遺物は図示し得ないがＳＰ95から須恵器杯蓋片が出土しており、奈良時代後半の建物と考えられる。

掘立柱建物跡ＳＢ07(第210図上)　調査区北東で検出した南北２間(5.1m)の柱穴列である。柱穴は径0.4～0.6mの円形を呈する。小型のため柵の可能性もある。時期を示すような遺物は出土していない。



第210図　掘立柱建物跡ＳＢ07・08
実測図(1/100)

掘立柱建物跡ＳＢ08(第210図下)　調査区北西隅で検出した。東西１間(2.3m)以上、南北１間(２m)以上の建物跡である。北側は排水用側溝の断面に柱穴の存在を確認しているため、建物に



第211図　Ｌ５地区出土遺物実測図（８）

なることは間違いない。柱穴は平面方形を呈し、柱を据え付けるため、柱穴底部を一段深く掘り込む構造をとる。時期を示すような遺物は出土していない。

Ｂ．出土遺物（第211図）

飛鳥時代以降の遺物総量は少なく、図示しうる資料もわずかである。

１は竪穴式住居跡ＳＨ123出土の土師器甕である。口縁は大きく外反せず、直立気味に立ち上がる。外面は粗い縦方向のハケにより調整される。

２～14は竪穴式住居跡ＳＨ124から出土した。２～５は杯Ｇのセットである。６は土師器の甕である。精良な胎土を用いている。７は須恵器小型甕の口縁部である。８は住居内ＳＫ141から出土した土師器甕である。口縁内外面に多段のナデを施す。いわゆる「青野型甕」[注3]とされる由良川流域に分布の中心をもつ甕である。亀岡盆地でも少量ながら分布する資料である。14は住居床面から出土した砥石である。表面のほか、側面と裏面にも使用痕が認められる。12は主柱穴ＳＰ170から出土した小法量の杯Ｈである。13は主柱穴ＳＰ171から出土した杯Ｇの身である。

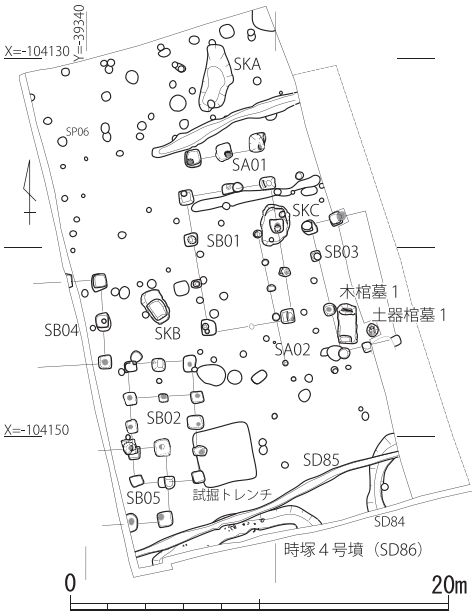
９は掘立柱建物跡ＳＢ02を構成するＳＰ69から出土した須恵器杯蓋である。低い笠型の天井をもち、口縁端部は下方に折り曲げる。

10・11は掘立柱建物跡ＳＢ01を構成する柱穴から出土した資料である。10はＳＰ04から出土した台付壺の脚部である。11はＳＰ05から出土した杯身である。やや丸みを帯びた形態をとる。

（石崎善久）

（7）Ｌ６地区

Ｌ６地区は今回の調査対象地の北東に設定した地区である。この地区では床土直下にクロボク層が堆積しており、奈良時代以降の遺構はこの面で検出を行った。クロボク層を除去した段階でも、奈良時代の遺構を新たに検出し、上層で検出しきれなかった遺構が遺存していたものと判断された。調査段階では上層・下層という認識で調査を実施したが、上記の理由から本報告では、上層・下層に分離せずに報告を行う。遺構は、奈良時代以降ものとして、掘立柱建物跡群･土坑･溝などを、古墳時代の遺構として、方墳１基（時塚４号墳）、弥生時代の遺構として、土坑・木棺墓・土器棺墓などを検出した。以下、時期ごとに各遺構について概観する。



第212図　Ｌ６地区検出遺構配置図（1/400）

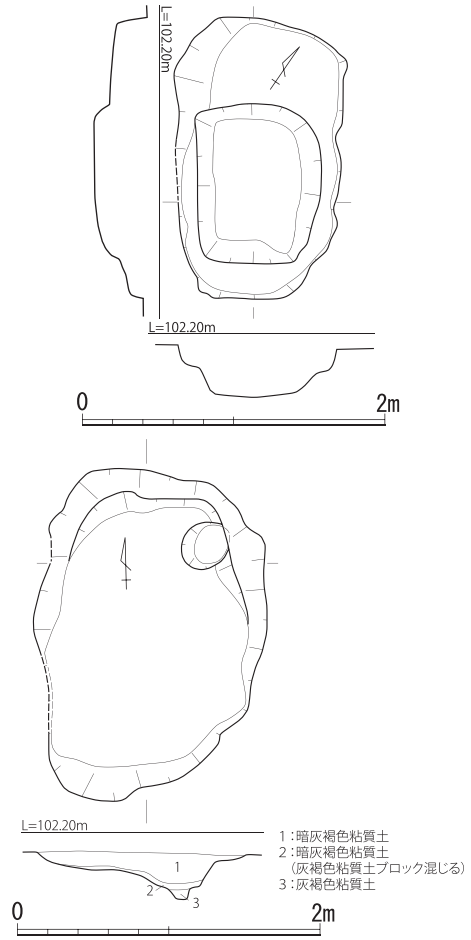
１）弥生・古墳時代の遺構

ＳＫＢ（第213図上）　調査区中央西寄りで検出した不整形な土坑である。土坑の規模は長軸1.8m、短軸1.1m、深さ0.4mを測る。土坑中央は不整な方形に一段深く掘り込まれている。埋土中からは破片化した弥生土器（３）などがまとまって出土しているが、図化の段階で台風のため崩壊してしまい、記録を行うことができなかった。不整形な形態から廃棄土坑の可能性を考えておきたい。

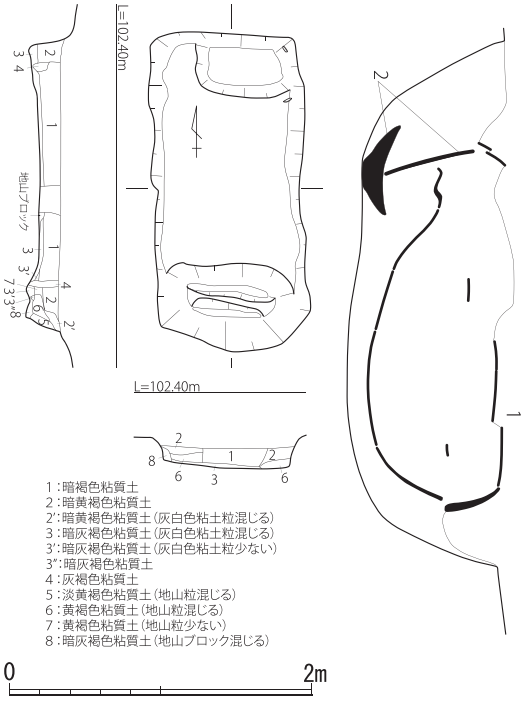
ＳＫＣ（第213図下）　調査区中央東よりで検出した不整形な土坑である。上層の掘立柱建物跡により切られている。規模は長軸2.1m、短軸1.6mを測る。埋土中からは破片化した弥生土器が出土しており、ＳＫＢと同様廃棄土坑の可能性を考えておきたい。

木棺墓１（第214図）　調査区南東部で検出した木棺直葬形態をとる埋葬施設である。この埋葬施設周辺部からは溝などを検出することはできず、区画墓の埋葬施設ではないものと判断した。また、東で近接して土器棺墓を検出しており、両者は近親者の埋葬施設であるものと考える。

墓壙の平面形は長方形プランを呈し、規模は長軸



第213図　ＳＫＢ・ＳＫＣ実測図
（上段：ＳＫＢ・下段ＳＫＣ）（1/50）



第214図　木棺墓１実測図
（1/50）



第215図　土器棺墓１実測図
（1/10）

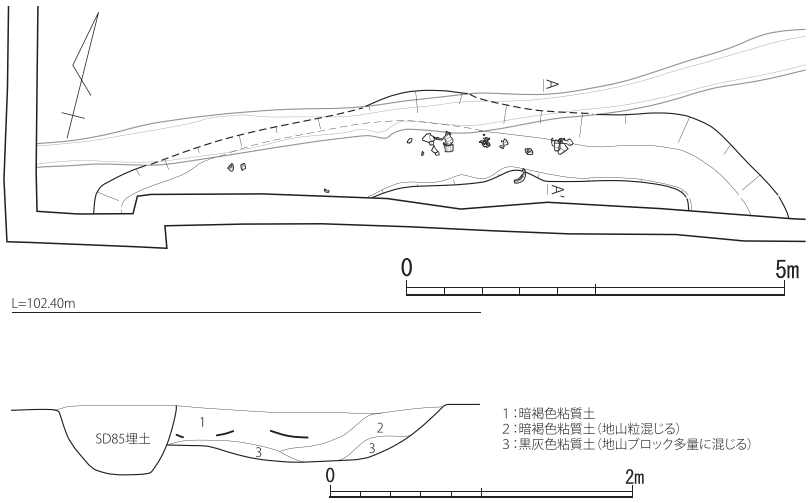
2.08m、短軸0.95m、深さ0.2mを測る。主軸は南北方向にとる。墓壙は小口部分に小口板を据え付けるための溝を掘削している。特に、南小口部分では２条の溝が掘削されており、小口板が２枚使用されていた可能性も考えられる。木棺の痕跡は平面的には確認できなかったが、土層断面や、墓壙の形態から、小口板が底板よりも下に突出する組合式箱型木棺と考えられる。墓壙北東部埋土中から弥生土器の細片が出土しているが、この埋葬施設に伴うものか、混入であるか明確ではない。

土器棺墓１（第215図）　木棺墓１の東で近接して検出された土器棺墓である。この地点は調査区外であったが、重機掘削段階で土器が露出したため、協議を実施し、この部分のみ拡張し、調査を行った。

遺構は不整形な円形を呈する墓壙内に土器を据え付けたものである。墓壙は長軸0.7m、短軸0.61m、深さ0.2mを測り、断面形状は素掘りである。棺身は１個体の壺（第223図１）を横位で用いている。壺は口縁を北に向けほぼ水平に据えられている。口縁部は、別個体の壺体部（第223図２）を用いて蓋をされている。また、この蓋の下部からは蓋に使用された壺と同一個体の底部を用いて、蓋の支えとしている。なお、棺身内からは副葬遺物、人骨などは検出されなかった。

時塚４号墳（第216図）　調査区南端で検出した「コ」字状に屈曲するＳＤ86を古墳の周溝と判断した。溝は幅0.8～1.2m、深さ0.4mを測る。ＳＤ85により削平を受けており、また、大部分が調査区外のため古墳の全容は不明であるが、検出された部分から一辺6.5m程度のの方形墳であると判断される。主軸は北からわずかに西に振っている。外部表飾としての埴輪や葺石は検出されなかった。溝断面は古墳の基底側の傾斜が急で、周溝外側の傾斜が緩やかなのが特徴である。

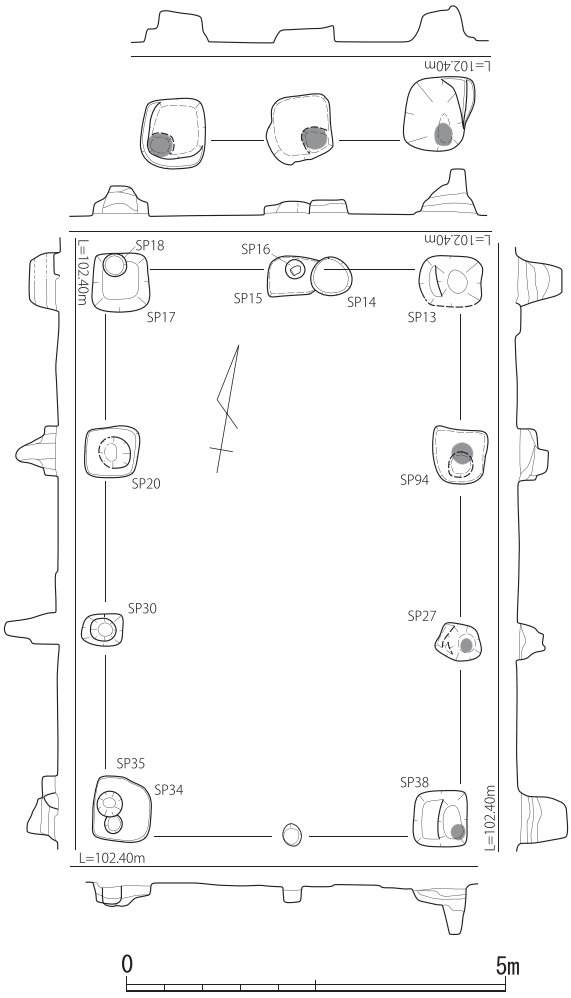
周溝内から土師器壺、須恵器甕・高杯など（第224図６～９）が破片となって検出された。いずれも溝底面より遊離しており、周溝が一定埋没してからの遺物群と考えられる。



第216図　時塚４号墳実測図（平面：1/100、断面：1/50）

２）奈良時代以降の遺構

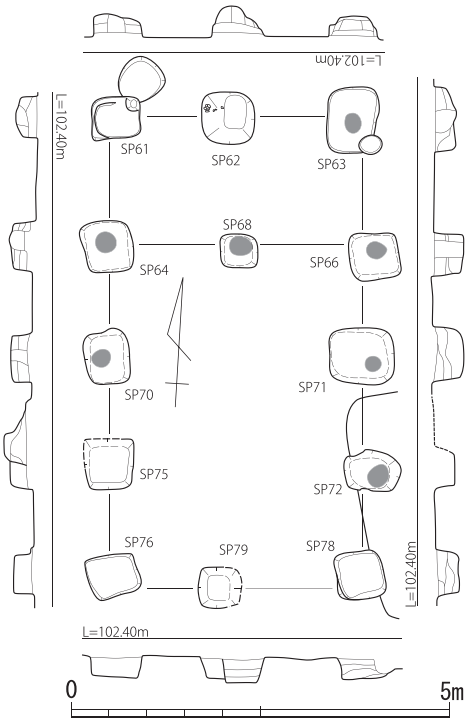
掘立柱建物跡ＳＢ01（第217図）　調査区北東部で検出した南北に主軸をとる掘立柱建物跡である。規模は東西２間（4.7m）、南北３間（7.5m）を測る。建物を構成する柱穴の平面形は方形もしくは不整方形であるが、南側梁行きの中心の柱穴は小型の円形である。また、北側梁行きの中心の柱穴も他の柱穴に比して浅く掘削されているのが特徴的である。柱穴の断面形は素掘りのものと柱を据え付けるため、柱穴底面を一段深く掘り込むものの両者が認められる。柱痕跡の確認された柱穴から、この建物には直径20cm程度の柱が使用されていたものと考えられる。ＳＰ15を切るＳＰ16より須恵器壺（第224図10）が出土した。



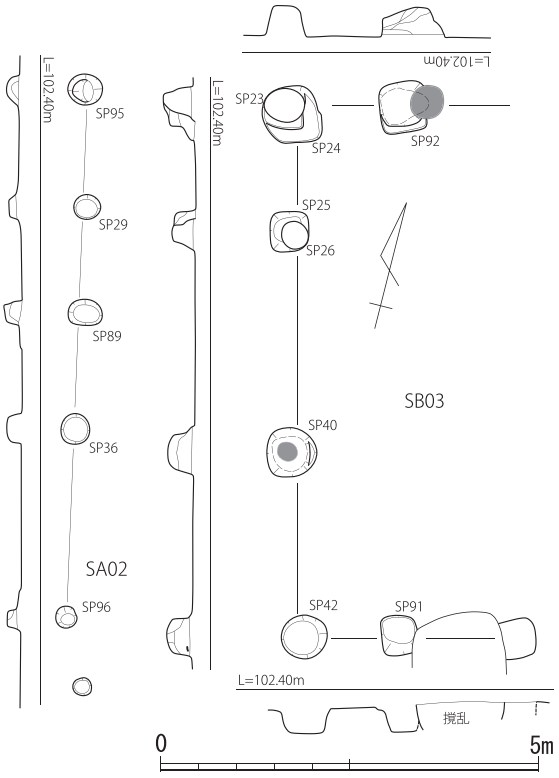
第217図　掘立柱建物跡ＳＢ01・柵ＳＡ01実測図（1/100）

柵ＳＡ01（第217図）　掘立柱建物跡ＳＢ01の北で検出された東西方向の柵である。当初、ＳＢ01に伴う庇の可能性を考えたが、柱間が揃わないため、独立した遺構として把握することとした。東西２間（3.7m）から構成され、柱穴は平面方形である。中央の柱穴のみ浅く、素掘りの形態をとるのに対し、東西の柱穴は柱を据え付けるため、柱穴底面を一段深く掘り込む形態をとるなど、ＳＢ01と同様のあり方を示している。柵の位置や、柱穴のあり方から、ＳＢ01に伴う施設と判断する。

掘立柱建物跡ＳＢ02（第218図）　調査区南西で検出した南北に主軸をもつ掘立柱建物跡であ



第218図　掘立柱建物跡ＳＢ02実測図
（1/100）



第219図　掘立柱建物跡ＳＢ03・柵ＳＡ02実測図
（1/100）

る。

東西２間（4.1m）、南北３間（4.5m）の身舎の北側に一間（1.7m）分の庇がとりつく構造である。建物を構成する柱穴は平面方形を呈する。断面形は素掘りである。柱痕跡の確認された柱穴から、この建物には直径20～30cm程度の柱が使用されていたものと考えられる。

後述する掘立柱建物跡ＳＢ05に切られている。

ＳＰ62・76・69から須恵器（第224図11～15）が出土している。

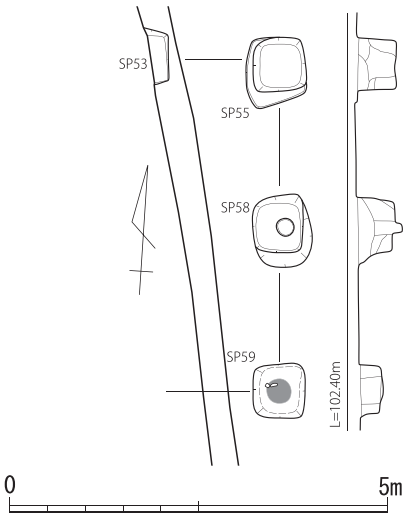
掘立柱建物跡ＳＢ03（第219図）　調査区中央東側で検出した南北に主軸をもつ掘立柱建物跡である。調査段階では、西側の柱穴列を庇と考えたが、柱間や主軸が沿わないことから柵ＳＡ02として、独立した遺構と考えることとした。建物は東西２間（2.7m）以上、南北３間（７m）を測る。主軸は北から西に振る。西側桁行きの中心部の柱穴間距離が他に比して長い。建物を構成する柱穴は平面方形もしくは円形を呈する。断面形は素掘りである。柱痕跡の確認されるものから、直径25cm程度の柱が使用されていたものと考えられる。また、北東のＳＰ92では柱を抜き取った痕跡が確認されている。ＳＰ42から須恵器杯蓋（第224図16）が出土している。

柵ＳＡ02（第220図）　掘立柱建物跡ＳＢ03の西で確認した南北軸の柵である。４間（6.9m）分を確認した。柱穴は全て素掘りであり、平面は円形を呈する。建物群の柱穴に比して浅いのが特徴的である。図示しうる遺物はない。

掘立柱建物跡ＳＢ04（第221図）　調査区中央西側で検出した掘立柱建物跡である。大部分が調査区外であり、全容については不明である。主軸は座標北に近い。検出範囲では南北２間（4.4m）、

東西１間(1.8m)以上の規模をもつ。柱穴は平面方形を呈し、断面形は南北柱穴列の中央のものが、柱を据えるため、柱穴底面を一段深く掘り込むが、その他のものは素掘りの形態をとる。ＳＰ59より土師器甕(第224図17)が出土した。

掘立柱建物跡ＳＢ05(第221図)　調査区南東部で検出した掘立柱建物跡である。大部分が調査区外であり全容については不明である。掘立柱建物跡ＳＢ02と重複しており、ＳＢ02を切っている。ＳＢ02に後出する掘立柱建物跡である。検出範囲では南北２間(3.9m)、東西１間(1.8m)以上の規模をもつ。なお、主軸方向は掘立柱建物跡ＳＢ04とほぼ同一方位にとる。



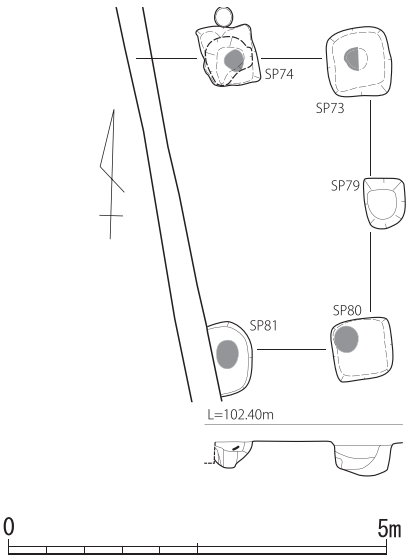
第220図　掘立柱建物跡ＳＢ04
実測図(1/100)

建物を構成する柱穴は平面方形、もしくは不整方形を呈する。柱穴の断面形は素掘りである。柱痕跡の確認できた柱穴から、この建物には直径25～30cm程度の柱が使用されていたものと考えられる。ＳＰ73から須恵器杯蓋(18)が、ＳＰ81柱掘形から平瓦(19)が出土している。

ＳＫＡ(第222図)　調査区北部で検出した不整形な土坑である。長軸3.5m、短軸1.1m、深さ0.2mを測る。埋土中から多数の須恵器・土師器・瓦片などが出土している。廃棄土坑の可能性が考えられる。

ＳＤ85　調査区南部で検出した東西方向に調査区を横断する素掘り溝である。断面形は箱型を呈し、壁面はほぼ垂直に近い。埋土中から土師器杯(21)が出土している。

ＳＤ84　調査区南東部で検出した幅0.8m、深さ0.15mを測る弧状を呈する溝である。ＳＤ85に切られる。埋土中から弥生土器(４・５)が出土しているが、出土遺物が少なく、時期を限定することはできなかった。

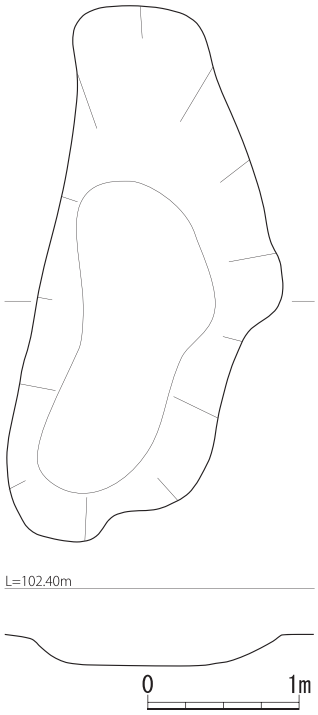


第221図　掘立柱建物跡ＳＢ05
実測図(1/100)

３)出土遺物(第223・224図)

Ｌ６地区出土遺物として、土坑、土器棺墓出土の弥生土器、時塚４号墳出土の須恵器･土師器、各柱穴出土の須恵器・土師器・瓦などを図示した。以下、各遺構ごとに概観する。

土器棺墓１(第223図１・２)　１は土器棺墓の身に転用されていた弥生土器壺である。受け口状の口縁を有し一条の凹線紋で加飾する。頸部には指圧痕文突帯が巡る。調整は外面がタタキのち、縦方向のハケを施し、底部は最終的に倒立状態でケズリ上げる。体部内面は縦方向のハケを行っている。口縁頸部から口縁内面は横方向のハケにより調整される。外面には煤が付着しており、煮沸具として使用していたものを土器棺として転用したものである。内面は土器棺に転用



第222図　ＳＫＡ実測図(1/50)

されたためか器壁の劣化が著しい部分が観察される。２は土器棺の蓋として転用されていた壺底部である。外面は上半にタタキのちハケを施し底部からケズリで調整する。１と同様の整形技法をとる。内面は縦方向のハケにより調整する。

３はＳＫＢから出土した弥生土器甕である。口縁部は受け口状口縁を呈する。口縁端部は上方につまみ上げ、外側面に１条の凹線文を施す。体部外面はタタキにより調整し、口縁部までタタキがおよんでいる。口縁部はタタキののち、ナデで仕上げる。体部外面はタタキののち部分的な縦方向のハケを施し、倒立状態で底部にケズリを施す。内面は縦方向のハケを行い、頸部内面のみ横方向のハケを施す。底部はユビによりナデ上げる。外面に煤が付着しており煮沸具として使用されたものと判断される。

ＳＤ84（第224図４・５）　溝埋土中から出土した弥生土器を図示した。４は鉢である。復原口径15.8cmを測る。頸部の屈曲は緩く口縁端部に刻目を施す。５は壺の底部と想われる。外面に木葉痕が観察される。

時塚４号墳（ＳＤ86）（第224図６～９）　周溝内から出土した遺物を図示した。６は須恵器高杯蓋である。天井部は高くやや丸みを帯びる。稜は一条の沈線により表現される。口縁端部は段を形成する。７は須恵器短頸壺と思われる。８は須恵器甕である。直立気味に立ち上がる頸部に短い口縁部がつく。頸部外面は２条の沈線により表現される突帯の上下に波状文を施すことにより加飾する。９は土師器甕である。厚手の大形品であり、摩滅が著しい。口縁端部はナデにより横方向につまみ出し、面をもって端部を仕上げている。布留式甕の系譜を引くものである。外面は横方向のハケにより調整する。これら一連の土器は短頸壺が含まれている点や、須恵器甕に新しい要素がある。一方、高杯蓋や土師器甕は古相を呈していることから、陶邑ＴＫ47～ＭＴ15型式に併行するものと考える。

ＳＰ16（第224図10）　掘立柱建物跡１を切る柱穴SP16から出土した須恵器壺を図示した。

掘立柱建物跡ＳＢ02（11～15）　建物を構成する柱穴からの出土遺物である。11・12はＳＰ62出土の須恵器である。13はＳＰ76出土の環状つまみをもつ須恵器蓋である。14・15はＳＰ69出土の須恵器蓋杯である。

掘立柱建物跡ＳＢ03（16）　16はＳＰ42出土の須恵器蓋である。

掘立柱建物跡ＳＢ04（17）　17はＳＰ59出土の土師器甕である。長胴傾向のものであろう。

掘立柱建物跡ＳＢ05（18・19）　18はＳＰ73出土の須恵器杯蓋、(19)はＳＰ81出土の平瓦である

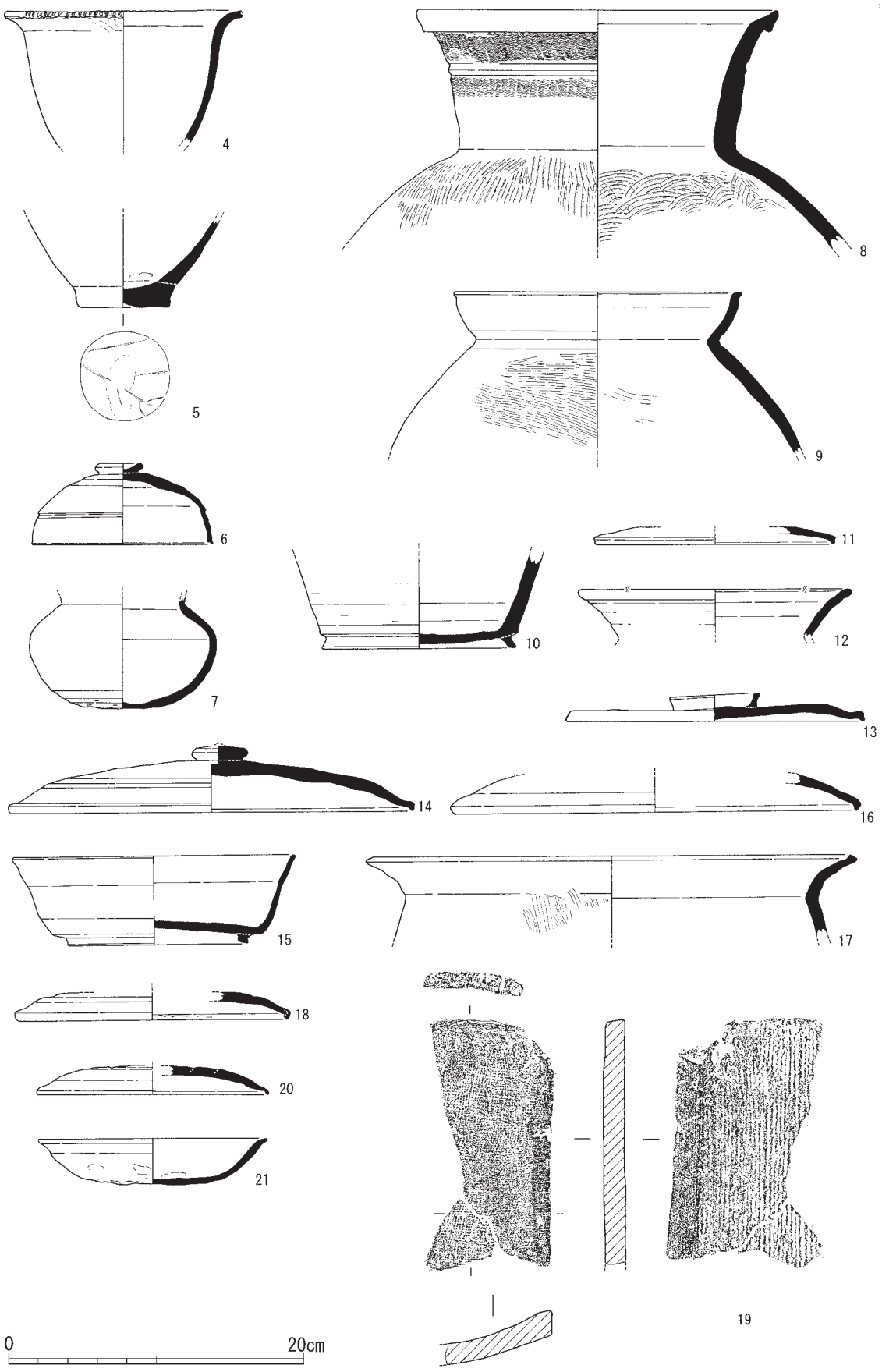
ＳＰ06（20）　ＳＰ06出土の須恵器杯蓋を図示した。

ＳＤ85（21）　21は土師器杯である。器高は低く内外面ともユビ押さえにより調整する。



第223図　Ｌ６地区出土遺物実測図（１）

以上、Ｌ６地区の建物群出土遺物は奈良時代後半を中心とする時期のものが多い、一方、ＳＤ85出土遺物は平安時代初頭頃のものであり、建物群はこの地区では平安時代には廃絶しているものと考えることができる。（石崎善久）



第224図　Ｌ６地区出土遺物実測図（２）

（8）Ｌ７地区

１）検出遺構

Ｌ７地区は今回の調査区の南西に設定した地区である。この地区では方形周溝墓８基と、古墳２基を検出した。また、方形周溝墓や、古墳の周溝を切るピットなどを検出しているが、建物を復原することはできなかった。方形周溝墓や古墳はＬ７地区の北に設定した排土置き場で、遺構の輪郭のみを検出したものと連続するため、ここで併せて報告を行うこととする。以下主要な遺構について概観する。

17－20号墓　Ｌ７地区北西で検出したＳＤ06（南：幅1.4m・深さ0.3m、西：幅１m・深さ0.3m）により区画される方形周溝墓である。調査範囲では周溝は連続している。また、この周溝墓はＬ７地区北の排土置き場で延長部が確認され、その規模は東西８m、南北10mと考えられる。細片化した弥生土器が出土している（第232図１～３）。

17－21号墓　Ｌ７地区中央北で検出されたＳＤ13（西：幅0.35m・深さ0.15m、南：幅0.6m・深さ0.15m）とＳＤ14（幅0.4m・深さ0.2m）により区画される方形周溝墓である。周溝は南東隅が途切れている。周溝はさらに北に延び、排土置き場でその輪郭を検出した。周溝墓の規模は東西5.5m、南北４mを測る。東側のＳＤ14は隣接する17－27号墓と共有する。

17－22号墓　Ｌ７地区南西で検出した「Ｌ」字状に屈曲するＳＤ07（北：幅1.3m・深さ0.25m、東：幅0.65m・深さ0.3m）により区画される方形周溝墓である。大部分が調査区外のため全容は不明である。周溝墓の規模は南北６m以上を測る。弥生土器小片が出土しているが、図示できるものではない。

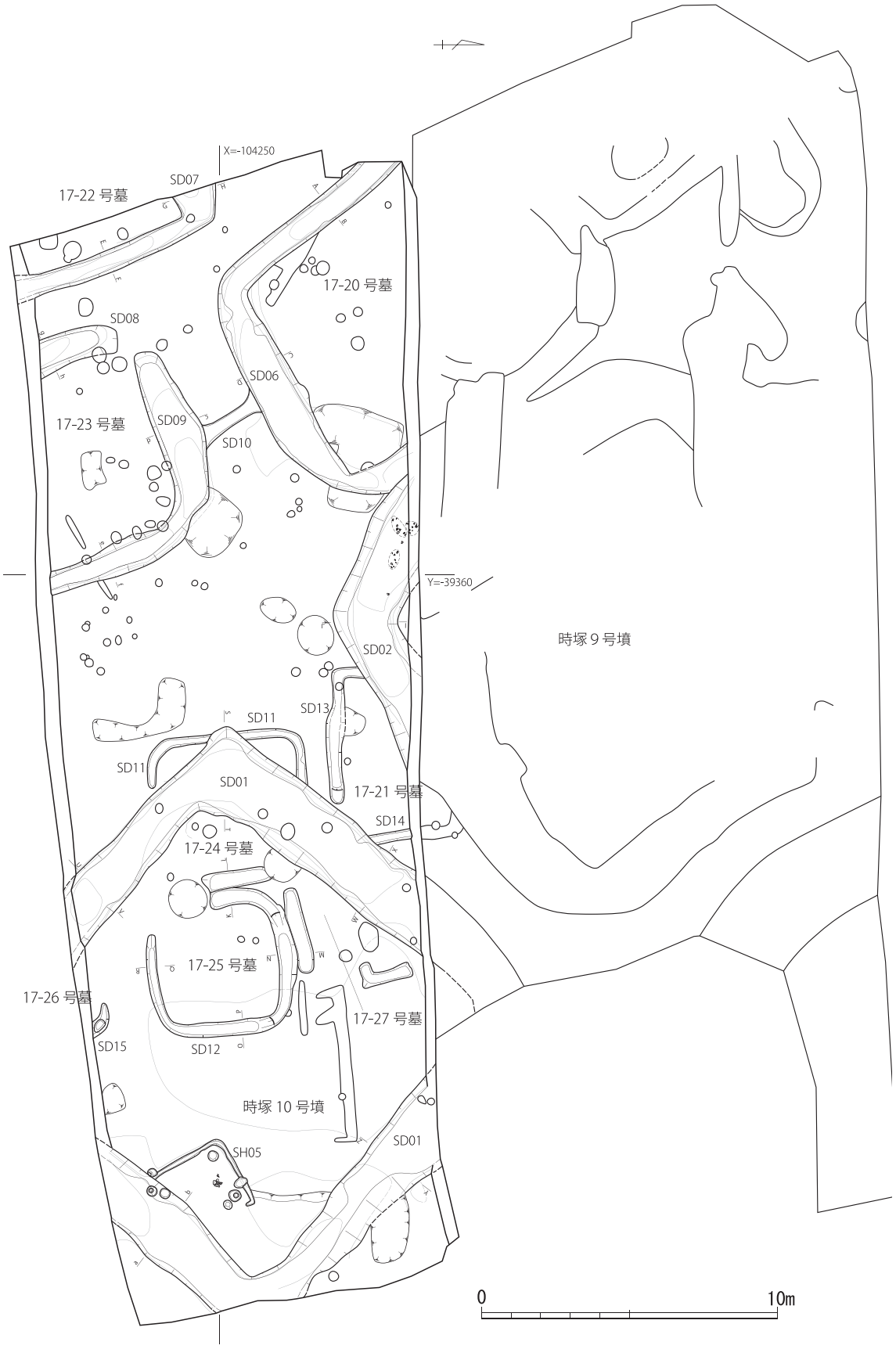
17－23号墓　調査区南側で検出したＳＤ08（幅1.1m・深さ0.6m）と屈曲するＳＤ09（北：幅1.5m・深さ0.4m、東：幅0.8m・深さ0.45m）により区画される方形周溝墓である。周溝は北西部が途切れている。ＳＤ08、09埋土中より弥生土器小片（第232図４・５）が出土している。

17－24号墓　調査区中央で検出したＳＤ11（北：幅0.35m・深さ0.06m、西：幅0.3m・深さ0.1m）とその東側で検出された溝により区画される方形周溝墓である。南西部の一部が途切れ、周溝は完周しない。周溝墓の規模は一辺５mを測る。隣接する17－25号墓の周溝埋土を切っている。

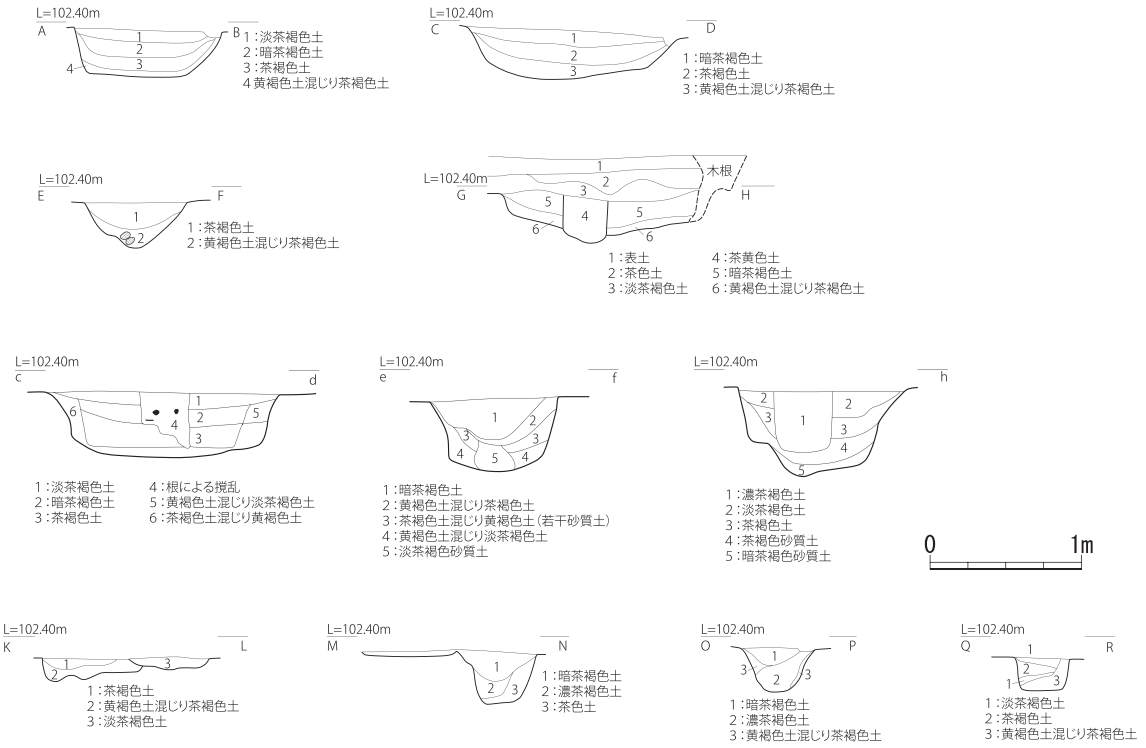
17－25号墓　調査区中央東寄りで検出されたＳＤ12（北：幅0.5m・深さ0.35m、西：幅0.65m・深さ0.15m、南：幅0.35m・深さ0.2m、東：幅0.45m・深さ0.3m、）により区画される方形周溝墓である。北に位置する17－27号墓との前後関係は不明である。

17－26号墓　調査区中央南で検出されたＳＤ15（第227図）を周溝墓を構成する溝の一部と判断した。ＳＤ15は幅0.5、深さ0.15mを測り、北端がわずかに西側に屈曲する。大部分が調査区外のため周溝墓の規模は不明である。溝内からは高杯（第232図６）１個体分が出土している。

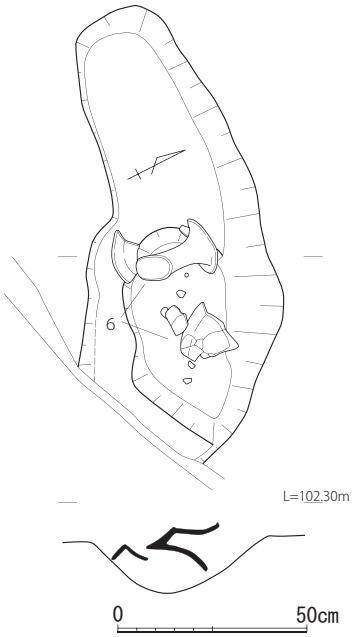
17－27号墓　調査区中央北部で検出された南北方向の溝（幅0.4m・深さ0.25m）と、17－25号墓の北で検出された東西方向の溝（幅0.6m・深さ0.05m）、17－21号墓の東区画ＳＤ14により区画される方形周溝墓を想定する。周溝は完周せず、南東および、南西が途切れている。周溝墓の規模は東西4.5m、南北４m以上を測る。出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。



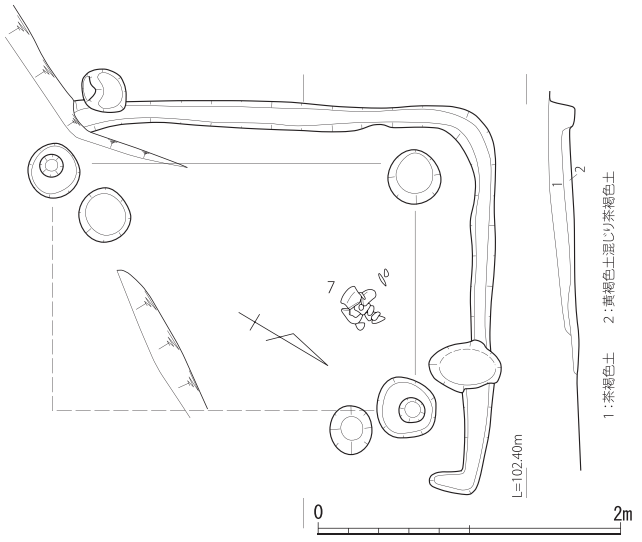
第225図　Ｌ７地区方形周溝墓実測図(1/200)



第226図　Ｌ７地区方形周土層断面図(1/50)



第227図　SD15実測図(1/20)

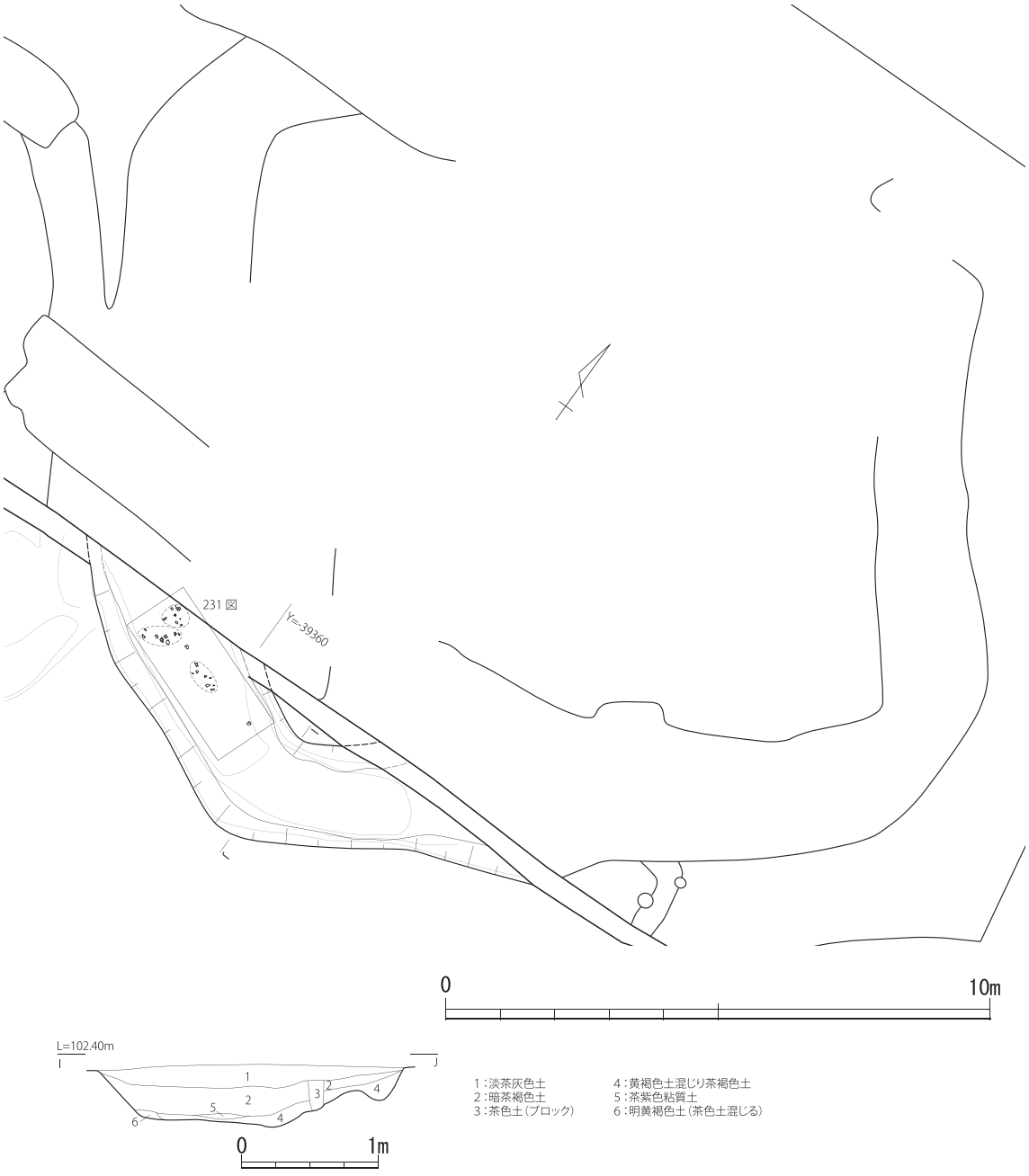


第228図　竪穴式住居跡ＳＨ05実測図(1/50)

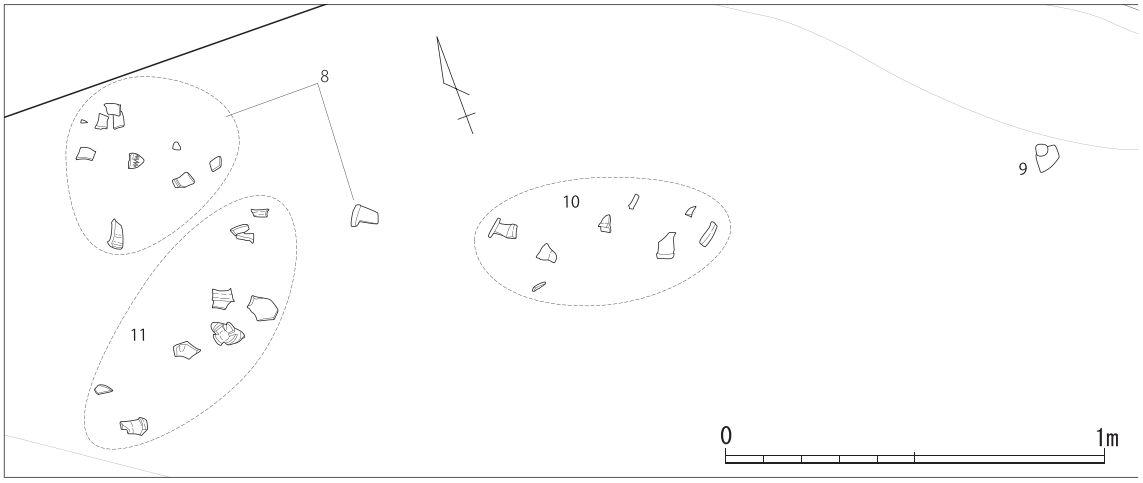
竪穴式住居跡ＳＨ05（第228図）　調査区中央東寄りで検出した竪穴式住居跡である。古墳の周溝による削平が著しく遺存状況は良好ではない。住居内の施設として、主柱穴３基と周壁溝を検出した。周壁溝は床面の遺存している範囲では完周する。主柱穴は３基を確認した。この主柱穴の位置と周壁溝の位置から、住居の規模は東西2.6m、南北3.3mに復原される。住居床面から土師器鉢（第232図７）が細片化した状態で検出された。古墳時代前期に属する。

時塚９号墳（第229図）　調査区の北側で検出された屈曲するＳＤ02を古墳の周溝と判断した。検出地点は古墳の南隅に相当する。また、北側に設置した排土置き場でこの古墳の周溝の延長を確認している。墳形は方墳である。主軸は約45°西に振る。周溝の規模は南東で幅2.1m、深さ0.4mを、南西で幅2.1m、深さ0.4mをそれぞれ測る。周溝の底面は東から西へ傾斜している。墳丘の規模は東西約11m、南北約11mを測る。埴輪や葺石などの外部表飾施設は認められない。

周溝埋土内からは須恵器（第232図８～11）が破片となって検出された（第230図）。いずれも周溝床面より遊離しており、古墳築造直後ではなく、一定程度周溝が埋没してからの遺物と判断される。また、図示していないが、出土遺物中には長頸族の茎、もしくは頸部と判断される鉄製品が



第229図　時塚9号墳実測図（平面：1/125、断面1/50）



第230図　時塚９号墳遺物出土状況図(1/20)

あり、墳丘や埋葬施設を削平した段階で入り込んだ遺物の可能性がある。

時塚10号墳（第231図）　調査区東側で検出したＳＤ01を古墳の周溝と判断した。なお、北西側の周溝延長部分はＬ７地区の北に設定した排土置き場で上面を検出している。南東側については、調査区外となる。墳形は方墳である。主軸は、９号墳同様、約45°西に振る。周溝の規模は、西側で幅2.2m、深さ0.3m、南側で幅1.9m、深さ0.4m、東側で2.1m、深さ0.1m、北側で幅2.1m、深さ0.2mを測る。墳丘の規模は基底部で南北12.3m、12.2mをそれぞれ測る。なお、東側の周溝が浅いのは削平によるものである。周溝埋土中から須恵器杯蓋、甕（第232図12・13）が出土している。周溝が一定埋没してからの遺物である。

（岡﨑研一・石崎善久）

２）出土遺物（第232図）

Ｌ７地区出土遺物として周溝墓、竪穴式住居、古墳の出土遺物を図示した。各遺構ごとに概観する。

17－20号墓（１～３）　１・２は壺底部、３は甕底部である。やや上げ底の形態をとる。

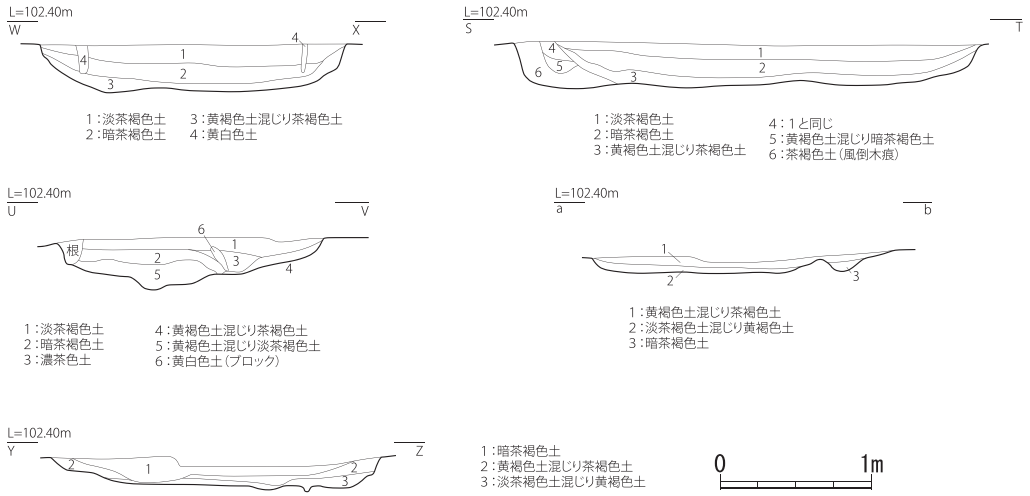
17－23号墓（４・５）　４はＳＤ08から出土した壺底部、５はＳＤ09から出土した甕の底部である。両者とも摩耗が著しい。

17－26号墓（６）　ＳＤ15より出土した高杯を図示した。深い杯部をもつ水平口縁高杯である。脚柱部には内面から２孔一対の穿孔が２か所なされている。穿孔は１か所ごとに行われており、一方は貫通していない穴が存在し、内面には３か所の穿孔部がみられる。脚端部は下方に折り曲げている。摩耗が著しいが、脚柱部には縦方向のミガキが観察される。

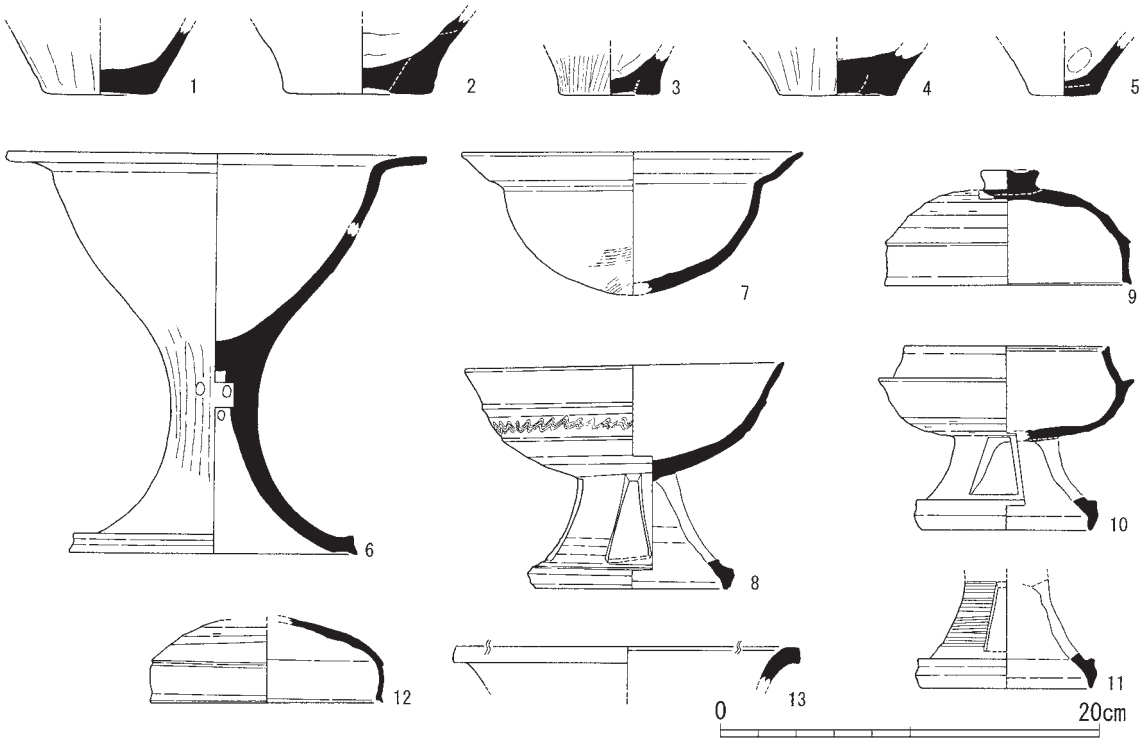
竪穴式住居跡ＳＨ05（７）　７は住居中央から検出された土師器鉢である。有段口縁を有し、口縁は外方に大きく広がる。この形式の鉢としては口径に比して器高の高いものである。布留１式に位置づけておきたい。

時塚９号墳（８～11）　いずれも周溝底より遊離した状態で検出された須恵器である。８は大型無蓋高杯である。口径16.8cm、器高12cmを測る。脚部の方形スカシは４方向に施される。杯部





第231図　時塚10号墳実測図（平面：1/125、断面1/50）



第232図　Ｌ７地区出土遺物実測図

外面は下方に１条の沈線を、上方に２条の沈線により突帯をつくりだし、その間に波状文を施す。９は有蓋高杯蓋である。天井部は高く、稜は下方を棒状工具で、上端をナデにより造り出されるが、突出度は高く、鋭利である。口縁端部には段をもつ。また、天井部外面に赤色顔料が付着する。10は有蓋高杯である。胎土や焼成から９とセット関係をなす。スカシは３方向に施される。11は短脚高杯片であり、外面にカキメをもつ。大型無蓋高杯の存在や、有蓋高杯の形状から陶邑ＴＫ23～47形式に平行するものと考える。

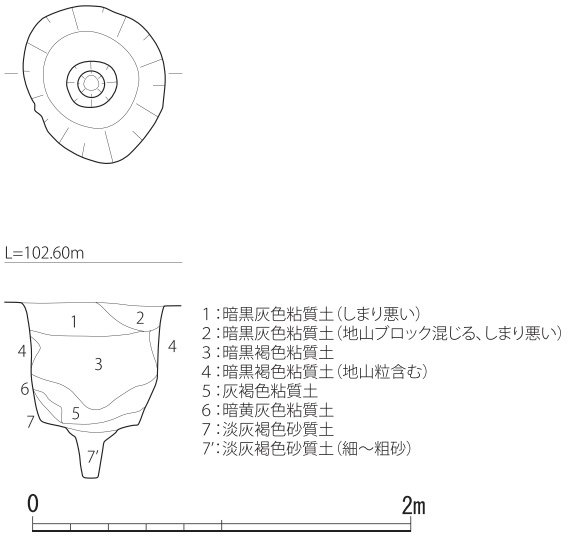
時塚10号墳（12・13）　いずれも周溝埋土から出土している。12は須恵器杯蓋である。天井部は高く、丸みを帯びる。若干の焼き歪みがあるが、ケズリは丁寧に広範に行われる。稜は１条の沈線を下方に施して表現する。口縁端面は段をなす。内面に赤色顔料の付着が認められる。13は弥生土器広口壺口縁片である。周辺の周溝墓からの混入品であろう。時塚10号墳出土須恵器は稜にやや新しい要素がみられるが、陶邑ＴＫ47型式に併行するものと考える。

（石崎善久）

おわりに

以上、時塚遺跡第15－・17次の調査概要について記してきたが、各時期ごとに改めて概観、問題点を提起し、一応のまとめとしておきたい。

縄文時代　縄文時代の遺構としては、概要では触れなかったが、17次Ｌ５地区で検出された落とし穴と考えられる遺構がある（第233図、位置については第166図参照）。方形周溝墓の埋葬施設ＳＸ150に切られていることから縄文時代に遡る遺構である可能性が極めて高い。遺構は直径0.7m、深さ0.6mを測る円形の土坑底面に直径0.12m、深さ0.2mの小孔を穿っている。



第233図　Ｌ５地区ＳＫ169実測図（1/40）

また、図示していないが、17次Ｌ６地区ではクロボク層掘削中にチャート製の凹基式石鏃２点が出土している。その他、17次Ｌ１地区や、15－１地区からは、縄文晩期と思われる土器が検出されており、第６・８次調査区Ａ地区で検出された縄文時代の土坑とともに、この遺跡が縄文時代中期から晩期にかけて人々の生活領域であったことは間違いない。

今後、周辺部で新たな遺構が確認されるとともに、隣接する車塚遺跡などの縄文時代の遺跡との関連性について検討する必要があると考える

弥生時代　弥生時代では、総数46基にもおよぶ方形周溝墓が検出された点が注目される。これまでの調査成果と考え合わせると、遺跡の北半が集落域、南半が墓域として利用されていたものと考えられる。墓域は17次調査区Ｌ１地区や、京都府教育委員会の実施した、16次地区にもおよび、やや距離は離れるものの、車塚遺跡Ａ地区で検出された方形周溝墓も、時塚遺跡から続く一連の墓域である可能性が高まった。

この時塚遺跡周辺地域では、馬路遺跡、池尻遺跡第７次Ｄ地区、時塚遺跡第10次Ｊ地区などで中期後半を中心とする方形周溝墓が確認されているが、これらの墓域形成と、時塚遺跡の墓域形成は無関係ではないものと思われる。中期の集落として現在明らかなのは現在のところ時塚遺跡のみであり、今後の周辺部の調査により、複数の集落が各々の墓域を形成しているのか、あるいは時塚遺跡の集落内における、いわゆる「単位集団」による造墓活動の結果なのか様々な検討課題が残されているといってよいと思われる。

17次Ｌ５地区では方形周溝墓の造墓原理について、様々な所見を得ることができた。方形周溝墓の性格のひとつとして、溝により区画される区画墓としての性格が強調されてきたが、当遺跡における周溝墓のあり方の原則は盛土による墳丘墓としての側面を明らかにしたものと考える。

例えば埋葬施設の遺存する17－６号墓では中心に位置する木棺墓ＳＸ153が遺存状況がよく、

その他の埋葬施設は墓壙の遺存状況が悪いという点が注目される。これは、もともと無墳丘に近い周溝墓の中心に初期の埋葬が行われ、その他の埋葬施設は一定の盛土上から掘削されたため、後世の削平により、盛土上から掘り込まれた埋葬施設の遺存状況は悪く、盛土下部から掘り込まれていた埋葬施設は遺存状況が良いという結果を生んだものと考える。

同様の状況は複数の埋葬施設の遺存する17－７・９号墓においても認められるものであり、この遺跡における造墓原理の中に、同一墳墓における追葬行為として複数回の盛土や周溝墓の拡張に伴う墳墓の改修などが行われていたことを示唆するものである。そのためか、各周溝墓の周溝には再掘削が行われたことを示す遺構が多くみられる。これまで、周溝内における土坑状の掘り込みについては多くの場合、溝内埋葬施設として捉える傾向が強かったが、当遺跡の場合は、新たな埋葬施設の造営とそれに伴う盛土確保のためと考えるのが妥当と考える。埋葬施設の遺存していない周溝墓は概して周溝の深いものが多く、築造当初の盛土が厚く、盛土上から掘り込まれた埋葬施設が削平により失われてしまったと考えるのが妥当である。

今回の調査では多数の埋葬施設を検出することができたが、確認された木棺は組合式木棺であり、長側板が小口板を挟むタイプ（福永分類Ⅱ型[注4]）と、小口板が下に突出するタイプ（福永分類Ⅰ型）の２形態に大別できる。また、これ以外に土器棺がある。土壙墓として積極的に評価できる埋葬施設は実際にはなく、確実に埋葬施設として捉えうるものは全て木棺直葬墓であったと考える。

棺型式による墓域内でのありかたは比較的明確に分かれる。区画をもつ周溝墓に採用される棺はほとんどⅡ型であり、Ⅰ型を採用するものは17－13号墓のみである。一方、Ⅰ型木棺や、土器棺墓は15－３地区や17次Ｌ６地区でみられるように、無区画の墳墓の埋葬施設として用いられる傾向が強い。こうした棺の型式による墓域内での差異が何に起因するものか多角的な検討が必要であろう。厳密な意味での副葬品はないが、17－６号墓の初期の埋葬施設とみられるＳＸ153では赤色顔料が用いられていた点は注目してよいだろう。

今回、検出した方形周溝墓における遺物の出土状況には注目されるものがある。特に15－１地区を中心とする周溝におけ遺物の出土量には17次Ｌ５地区などや、時塚６・８・10次調査で検出された周溝墓の遺物出土量とは格段の差がある。この状況が何を意味するのか十分検討する資料を提示することはできないが、可能性のひとつとして、15－１地区は墓域の北辺に相当するため、集落からの廃棄物が集積されたとみる案。いまひとつは集落全体での祭祀行為がこの地区で行われ、祭祀に利用された土器や石器が遺棄されたとみることも可能である。周溝墓における遺物の出土状況に関しては、深澤氏の論考[注5]があるが、今回の状況は新たなあり方を示したものとみられる。遺物の中に穿孔がなされたものがみられることや、遺構内で大きな時期差がみられないことはむしろ後者の案を支持しているものかと考える。17次Ｌ５地区では周溝墓外からの土器の遺棄行為が周溝が一定埋没してから行われたことを示す資料があるが、15－１地区での遺物出土状況は、こうした行為がさらに大きな集団で行われていたことを示すものかもしれない。この点に関しても今後の検討課題としておきたい。

また、各周溝墓から出土した土器について、基礎的な図化作業を行えたことを評価したい。今

後、さらなる型式の細分化、地域性の抽出など南丹波における基準資料を提示し得たものと考えておきたい。

古墳時代　古墳時代では前期の竪穴式住居跡が複数検出された点が注目されるが、大規模な集落を形成していたとは言い難い。

古墳時代中期以降では新たに12基の古墳を検出し、従来、２基を確認していた時塚古墳群がさらに多くの古墳から形成されることが明らかとなった。

古墳は時塚１号墳が最も古く、出土土器はないものの、埴輪や馬具、武器の検討から中期後半でも第３四半期頃の造墓と考える。今回調査した方墳群の造墓時期は、この１号墳とほぼ同時か後出するものであり、陶邑ＴＫ23型式併行段階からＭＴ15併行段階にかけて方墳群が造墓されているものと考えられた。一方、円墳は今回の調査では３基を確認することができた。時塚３号墳はその規模や造り出し付きの円墳という形態からも時塚１号墳の系譜上にある地域首長墓の可能性が高い。出土遺物からは陶邑ＴＫ10型式併行段階、６世紀中葉の古墳と考えられる。一方、時塚５・８号墳は時塚３号墳に先行するＭＴ15型式併行段階の須恵器を出土しており、方墳群に直接後続する古墳であると考えることができる。南丹波における古墳の動向で、方墳から円墳への変換が６世紀段階で行われたとする考えがあるが、今回の調査はそのことを如実に物語るものといえる。

方墳群の造墓された５世紀後半には、時塚１号墳を核とした古墳群が形成されている。この状況は周辺での中古墳群や、坊主塚古墳を盟主墳とする池尻古墳群でも同様のあり方を示しているといえ、中･小地域首長を核とした複数の政治的集団が存在したことを物語っているといえよう。

一方、時塚古墳群における方墳から円墳への変換は、桂川上流域東岸の古墳共通のあり方である。保津車塚古墳を初現とする前方後円墳の出現と動向を一にし、続く大規模前方後円墳である千歳車塚古墳の造墓などと無関係ではない。当時の社会的な動向がダイレクトに造墓活動に現れている点は興味深い。これが、群小古墳の一古墳から始まったものであるのか、あるいは時塚３号墳と時塚１号墳の間に未検出の首長墓があり、その被葬者を介して始まったものであるのか明確にはしがたいが、いずれにしろ、南丹波の古墳の動向を考える上で、貴重な資料を提示したといえよう。

古墳時代後期には17次Ｌ１地区で竪穴式住居跡が検出され、15－４地区や、17次Ｌ５地区では続く飛鳥時代の竪穴式住居跡が確認されているように墓域から集落域への土地利用の変化がなされたようである。しかしながら調査範囲では大規模な集落が形成されているとは言い難い状況である。飛鳥時代後半の土器は15－１地区で出土しており、継続的な人々の生活はあったようであるが、この時期の遺構は希薄である。

奈良時代　奈良時代では後半代を中心に大規模な掘立柱建物群が17次Ｌ５地区から15－１地区にかけて展開する。出土遺物は遺跡のほとんどの地区から同時期のものが出土し、後半に開発行為、土地利用が大規模になされたことを示している。建物群に関しては出土遺物や、主軸方位から複数時期の分離が可能かと思われるが、今回そこまでの検討ができていない。また、15－４地

区と５地区で検出された区画溝とみられる４地区ＳＤ30と５地区ＳＤ13の存在は特筆されるものである。この区画に伴う遺構群の抽出を今後行っていく必要があるものと考える。また、奈良時代後半代の建物の中に複数のクラとみられる建物が存在することは、この遺跡の官衙的性格を物語るものといえる。

この地域では、奈良時代前半に池尻遺跡で大規模な掘立柱建物群が計画的に配置され、官衙的性格、それも国府の可能性があることを指摘してきたが、奈良時代中葉、国分寺の造営開始に伴い、池尻遺跡は廃絶、移転しているようである。この動向に合わせるように、奈良時代後半代に車塚遺跡や今回調査した時塚遺跡で大規模な掘立柱建物群が展開するようであり、池尻遺跡や国分寺の動向と無関係ではないものとみられる。とくに、この周辺に想定される古山陰道との関連が強く意識されるところである。

遺物では、15－１地区ＳＫ220で出土した「神」と描かれた墨書土器と多量の製塩土器が注目される。多くの掘立柱建物跡の柱穴からも製塩土器が出土しており、内陸部における製塩土器が集積されている遺跡のあり方を示す資料を提示したといえる。

平安時代　平安時代でも、15－３・６地区や、５地区で大規模な掘立柱建物が展開している。一方、遺跡の範囲は縮小しているようであり、遺構・遺物ともこの地区に集中する傾向がある。平安時代後期から末葉にかけては15－４地区掘立柱建物跡４－ＳＢ01や、古相を示す瓦器を出土した掘立柱建物跡ＳＢ４－02などが造営されるが、大規模な集落形成はなされていないようである。

鎌倉時代　鎌倉時代に確実に属する遺構を抽出することはできず、小規模な溝や柱穴から遺物の出土をみるに過ぎず、大規模な土地利用が調査区内ではなかったものと考えられる。

以上、簡潔ではあるが、各時代ごとに再度、遺跡の調査成果について概観してきた。今後、周辺の遺跡の動向などと併せ、さらなる検討を加えていく必要があるものと思われる。

（石崎善久）

調査参加者は以下のとおりである（順不同・敬称略）。

－平成18年度－

調査補助員　天池佐栄子・伊藤佑香・稲畑航平・井上亮・梅村大輔・奥浩和・小原康子・木村悟・木村涼子・草嶺大蔵・黒慶子・黒田玲子・後藤大輝・白川晴章・大道真由美・田中奈津子・谷口翔平・寺尾多慧子・橋爪侑也・原口彰太・坂内裕志・平井耕平・平田和範・福重麻木・向井菜都子・森田善久・安井蓉子・山花可奈子・吉村駿吾・魚谷典主・加藤吉人・平井祐成・平田陽一

整理員　荒川仁佳子・稲垣あや子・荻野富沙子・柿谷悦子・春日満子・陸田初代・高田眞由美・堤百合美・長尾美恵子・中川由美子・中島恵美子・藤井矢壽子・松元順代・山本弥生・中澤一義・松村弘子

作業員　浅田圭二・浅田マサ子・浅田義幸・飯田久美子・井上美代子・小川益次郎・興津嘉子・河原伍逸・河原祐輔・川村敏雄・川村フクエ・川村有加子・才津鈴美・鈴木真佐子・鈴木秀雄・堤藍子・堤明裕・堤明・堤和代・堤清子・堤純子・堤末夫・堤智恵子・堤務・堤翼・堤謹子・堤政茂・堤真凡・堤悠代・中川しづゑ・中川末男・中川浩子・中川坦・中川寛之・中川章代・中川まゆ子・中澤一雄・中澤多美・中澤紀男・中澤まゆみ・中澤美津子・中澤義己・中野和子・名倉清司・名倉達雄・名倉恵・橋本幸子・畑克己・畑純子・畑信弘・畑正彦・畑きく恵・林勝代・林彩和子・林節子・林八郎・林儀治・人見茂実・

人見美子・平岩利男・藤井多恵子・堀口茂徳・俣野明美・三浦禮司・村上英子・森江津子・良原南吉

－平成19年度－

調査補助員　天池佐栄子・平井耕平・田中奈津子・坂内裕志・安井蓉子・梅村大輔・谷上真由美・廣瀬慶典・平田陽一・松本享大・魚谷典主

整理員　山本弥生・中島恵美子・松下道子・髙田眞由美・荒川仁佳子・村上優美子・藤井矢壽子・柿谷悦子・松本順代・清水友佳子・天池左栄子・春日満子・田中奈津子・堤百合美・中川優美子・坂内裕志・谷上真由美・平田陽一・魚谷典主・堤和代・畑きく恵・森江津子・堤純子・中川まゆ子・名倉恵・西岡秀晃

作業員　杉崎征夫・橋本幸子・堤和代・才津鈴美・畑信弘・北村博・堤昭裕・中沢義己・中澤一義・堤洋一・中澤多美・人見正毅・堤純子・平野かすみ・堤達也・名倉艶子・堤翼・名倉清司・鈴木秀雄・藤井多恵子・中川坦・浅田圭二・俣野明美・浅田マサ子・中川寛之・河原鈴子・岡本晴子・澤田勲・井上美代子・林勝代・名倉恵・中澤美代子・中川良三・良原南吉・中澤繁・名倉勝・堤正人・浅田洋子・今西良裕・畑美代子・平野市子

－平成20年度－

整理員　荒川仁佳子・谷上真由美

また、現地作業および整理作業に関しては、以下の関係諸機関、個人から様々なご教示、ご指導を受けた。

京都府教育委員会・亀岡市教育委員会・藤井　整・谷上真由美

注１　飛鳥時代以降の須恵器・土師器の器種名については原則として奈良文化財研究所が使用している器種名を用いた。

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』（『奈良国立文化財研究所学報』第26冊）　1976ほか

注２　田辺昭三　『須恵器大成』（角川書店）　1981ほか

注３　石崎善久「『青野型甕』について」（『京都府埋蔵文化財論集』第３集　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1966

注４　福永伸哉「弥生時代の木棺墓と社会」（『考古学研究』32－１　考古学研究会）　1985

注５　深澤芳樹「墓に土器を供えるという行為について」（上・下）（『京都府埋蔵文化財情報』第61・62号　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1996

図　　版



（1）時塚遺跡全景（上空から、上が西）



（2）時塚遺跡15次調査地全景（上空南から ）



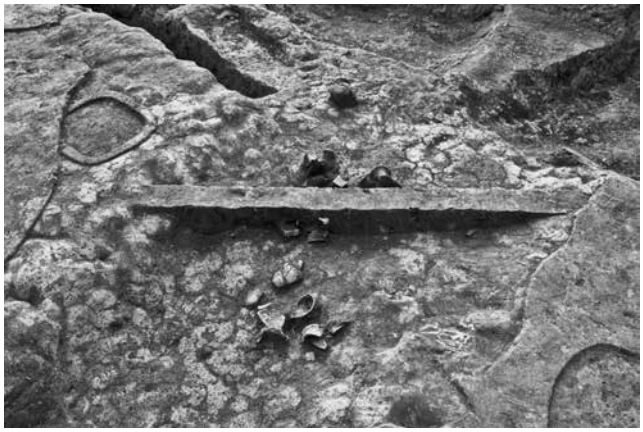
（1）15－1 地区
7・8 号墓全景
（北から）



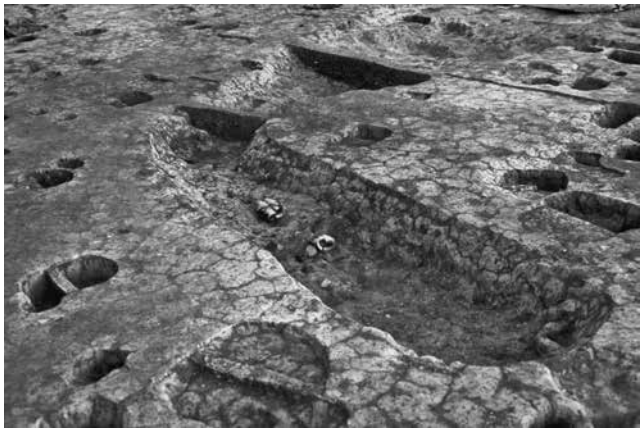
（2）15－1 地区
15－8号墓全景
（西から）



（3）15－1 地区
15－7 号墓全景
（北から）



（1）15－ 1 地区　ＳＤ517北西部遺物出土状況（東から）



（2）15－ 1 地区　　ＳＤ198遺物出土状況（北から）



（3）15－ 1 地区　ＳＤ534遺物出土状況（北から）



（4）15－ 1 地区　３・４号墓全景　（東から）



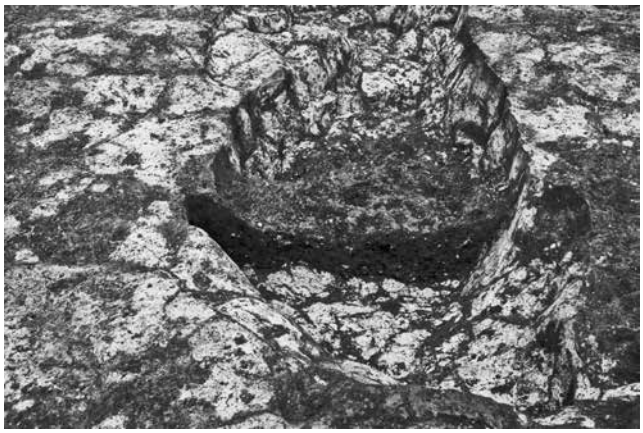
（5）15－ 1 地区　北東部遺構検出状況　（南から）



（6）15－ 1 地区　北部建物群　（南から）



（7）15－ 1 地区　南半遺構検出状況　（北から）



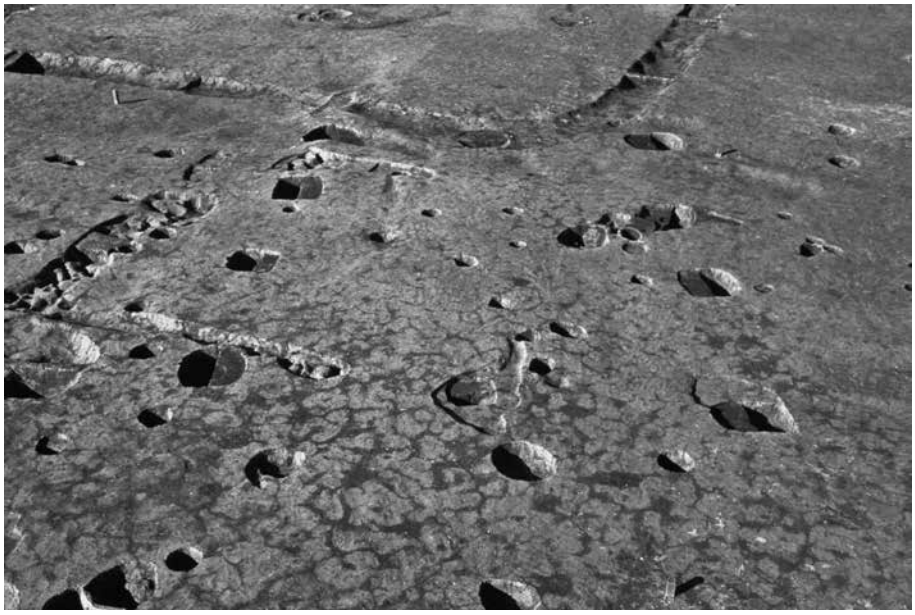
（8）15－1地区　ＳＫ220（南から）



（１）15－２地区
時塚３号墳全景
（南東から）



（２）15－２地区
南半部遺構検出状況
（東から）



（３）15－２地区
掘立柱建物跡ＳＢ２－02
（東から）



（１）15－３地区
調査区全景
（南から）



（２）15－３地区
掘立柱建物跡SB３－01
（西から）



（３）15－３地区
ＳＫ11
（東から）



（１）15－4地区全景
（北東から）



（２）15－15号墓全景
（南から）



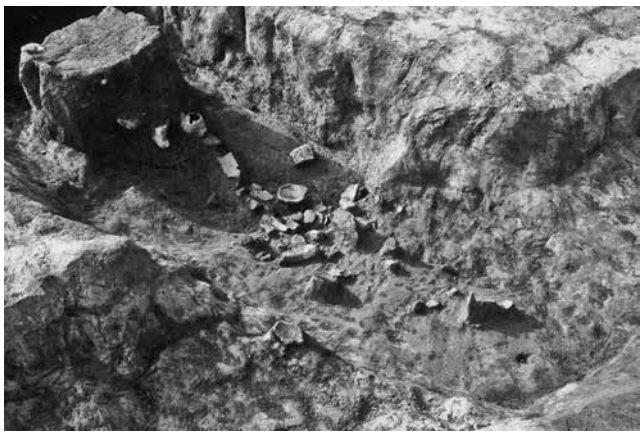
（３）15－16号墓全景
（南西から）



（１）15－16号墓 ＳＸ122検出状況（北から）



（２）15－16号墓 ＳＸ122掘削状況（北から）



（３）15－４地区 ＳＤ31遺物出土状況（北から）



（４）15－４地区 ＳＤ121遺物出土状況（北から）



（５）15－４地区 ＳＫ143検出状況　（東から）



（６）15－４地区　ＳＤ30東端土坑検出状況（西から）



（７）15－４地区　竪穴式住居跡ＳＨ32掘削状況（西から）



（８）15－５地区　ＳＨ16中央土坑遺物出土況（東から）



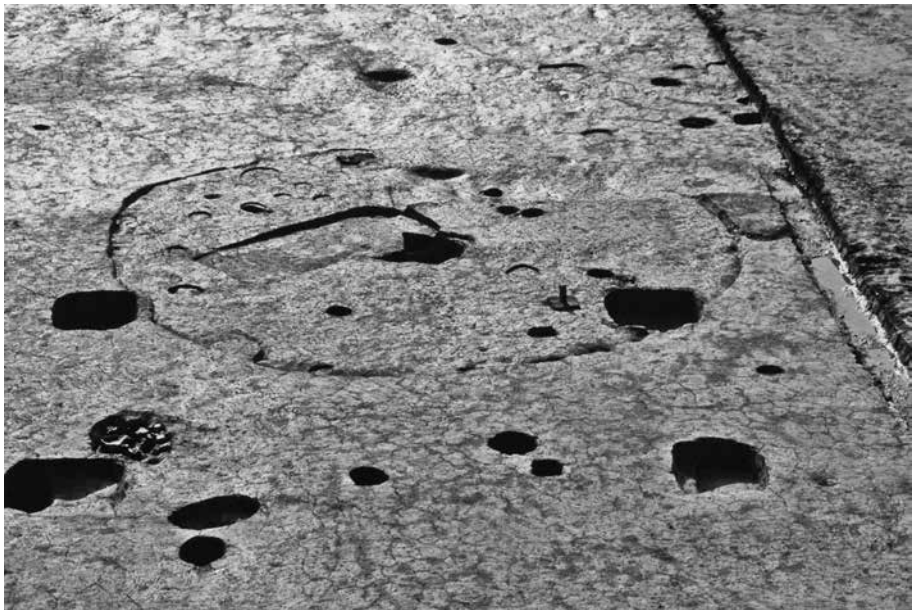
（１）15－17～19号墓全景
（北東から）



（２）15－17・18号墓全景
（北西から）



（３）15－５地区全景
（北から）



（１）15－５地区
竪穴式住居跡ＳＨ16全景
（北から）



（２）15－５地区
ＳＸ20完掘状況
（東から）



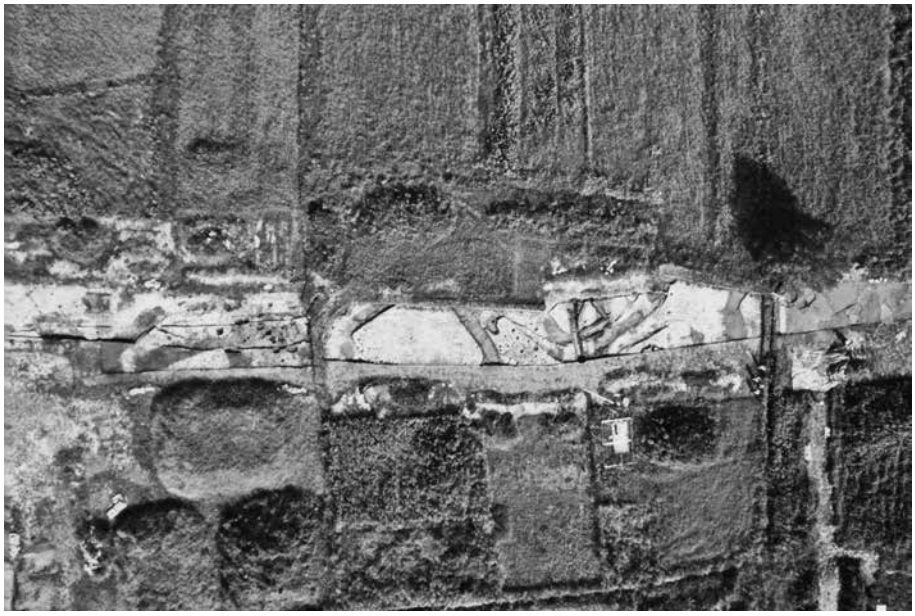
（３）15－５地区
ＳＤ13・15全景
（西から）



（１）時塚遺跡17次調査地全景（南上空から）



（２）時塚遺跡17次調査地全景（北上空から）



（1）17次Ｌ１～３地区全景
（上空から、上が東）



（2）17次Ｌ１地区
竪穴式住居跡ＳＨ01
（東から）



（3）17次Ｌ１地区
掘立柱建物跡ＳＢ01
（南から）



（１）17次Ｌ２～３地区全景
（南上空から）



（２）17次Ｌ２地区全景
（北から）



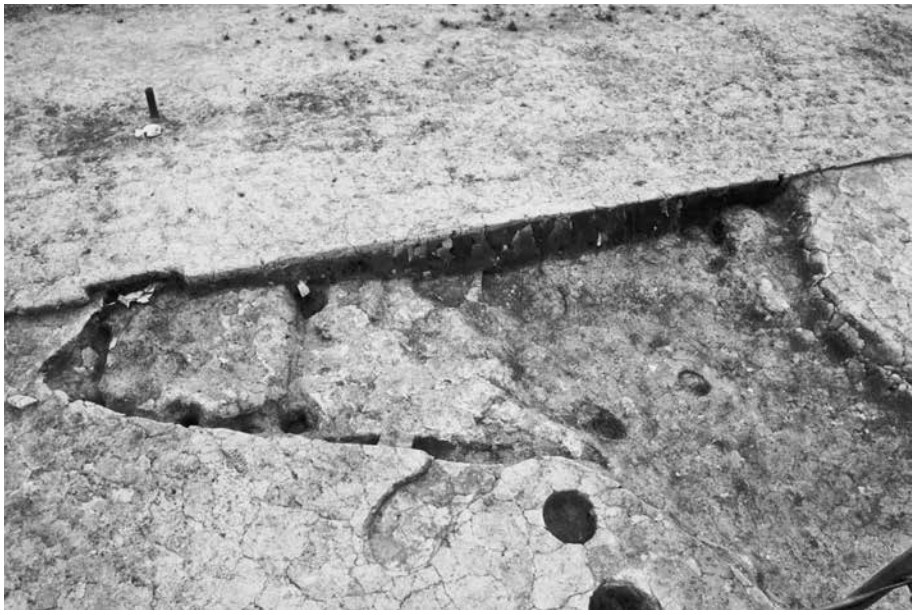
（３）17次Ｌ２地区
時塚14号墳全景
（盛土除去前、南西から）



（１）17次Ｌ２地区
時塚14号墳全景
（盛土除去後、北西から）



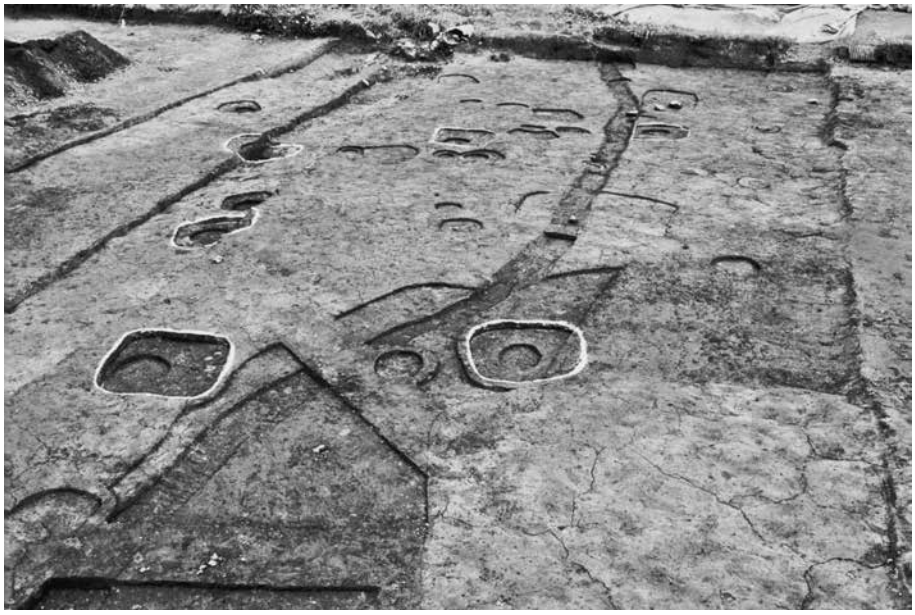
（２）17次Ｌ２地区
時塚13号墳全景
（南西から）



（３）17次Ｌ２地区
竪穴式住居跡ＳＨ07全景
（東から）



（１）17次Ｌ３地区全景
（南から）



（２）17次Ｌ３地区
掘立柱建物跡ＳＢ01
（北から）



（３）17次Ｌ３地区
時塚11・12号墳全景
（北から）



（１）17次Ｌ３地区
時塚11号墳遺物出土状況
（東から）



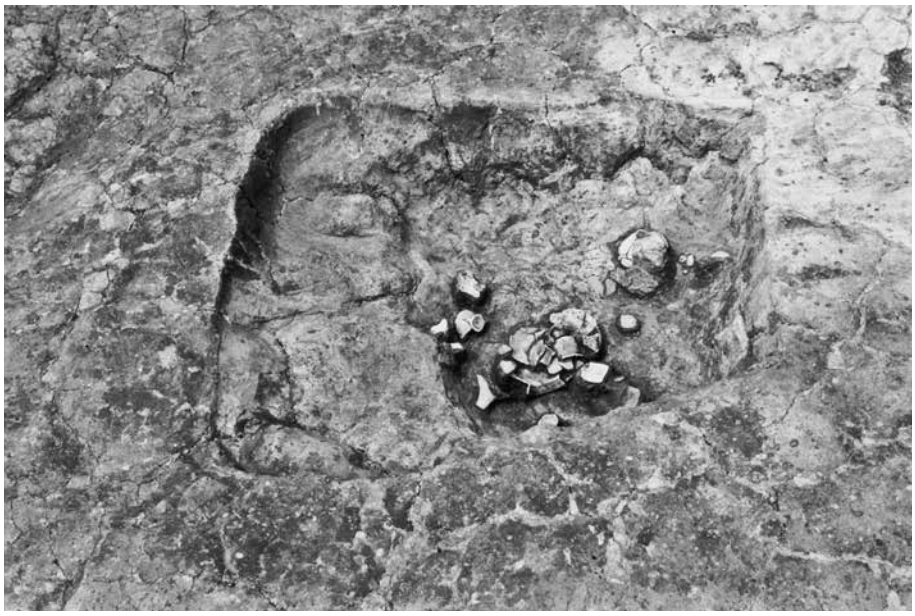
（２）17次Ｌ４地区全景
（上空から、上が東）



（３）17次Ｌ４地区全景
（上空南から）



（１）17次Ｌ４地区
ＳＫ48遺物出土状況１
（南から）



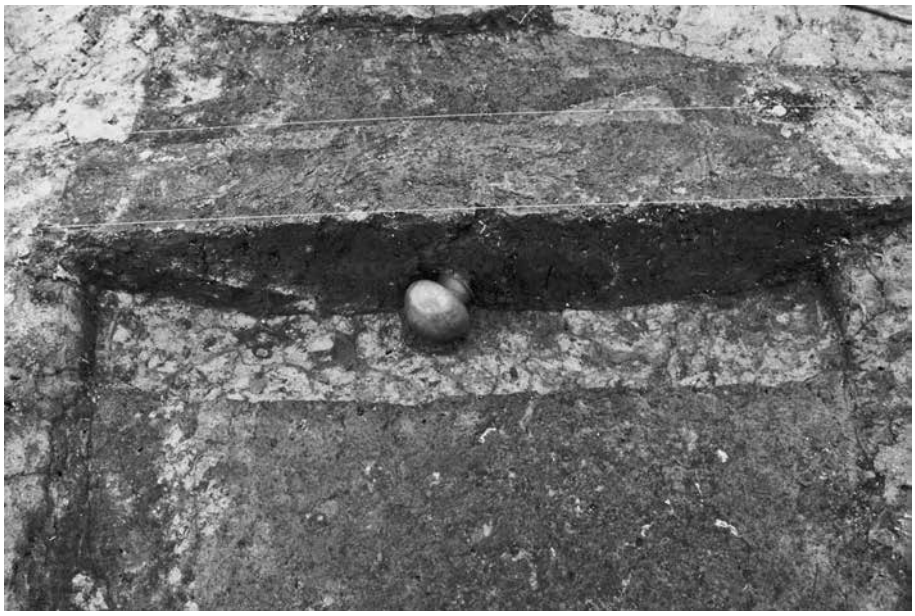
（２）17次Ｌ４地区
ＳＫ48遺物出土状況２
（南から）



（３）17次Ｌ４地区
時塚５号墳全景
（南から）



（１）17 次Ｌ４地区
時塚５号墳周溝内遺物出土状況（南から）



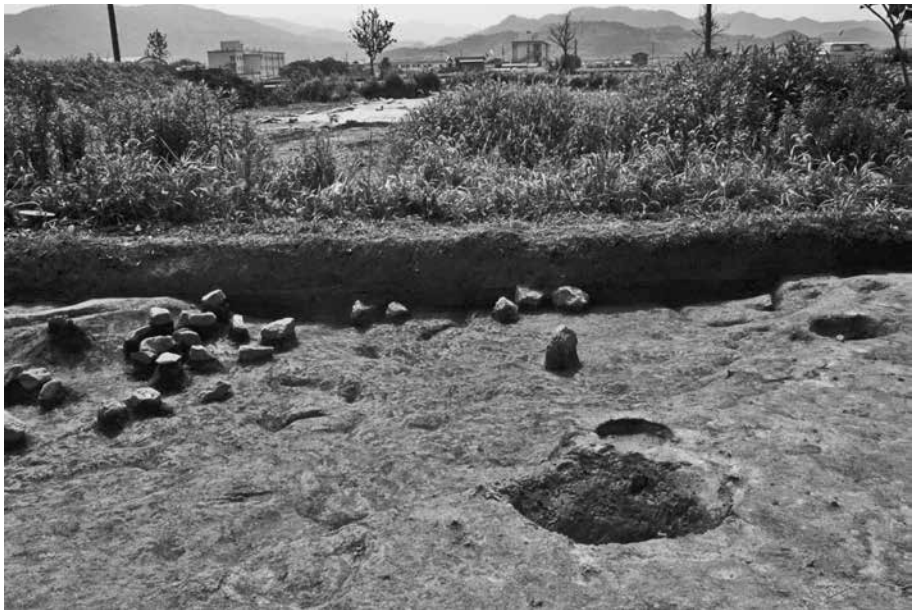
（２）17次Ｌ４地区
時塚６号墳遺物出土状況（東から）



（３）17次Ｌ４地区
時塚７号墳全景（北から）



（１）17次Ｌ４地区
時塚７号墳遺物出土状況
（北から）



（２）17次Ｌ４地区
時塚８号墳周溝
（東から）



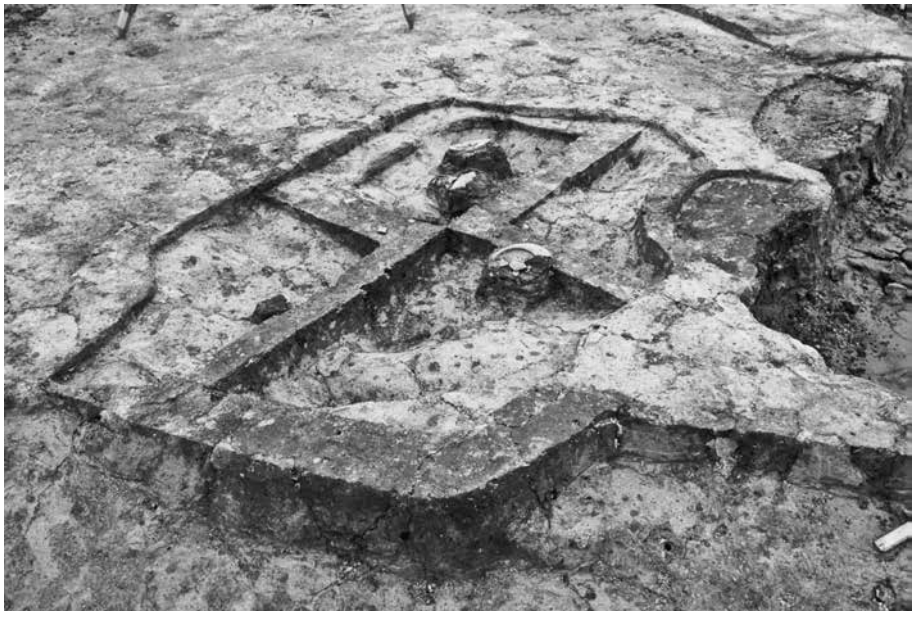
（３）17次Ｌ4地区
掘立柱建物跡ＳＢ01
（南から）



（１）17次Ｌ4地区
掘立柱建物跡ＳＢ02
（西から）



（２）17次Ｌ４地区
掘立柱建物跡ＳＢ03
（北から）



（３）17次Ｌ4地区
ＳＫ49
（南東から）



（１）17次Ｌ５地区全景（南上空から）



（２）17次Ｌ５地区全景（上空から、上が東）



（１）17次Ｌ５地区
17－２号墓全景
（南から）



（２）17次Ｌ５地区
木棺墓ＳＸ01
（西から）



（３）17次Ｌ５地区
17－３・４・15号墓
（南から）



（１）17次Ｌ５地区
ＳＤ136遺物出土状況
（南から）



（２）17次Ｌ５地区
木棺墓ＳＸ161
（東から）



（３）17次Ｌ５地区
17－１・６号墓全景
（南から）



（１）17次Ｌ５地区
ＳＤ125A遺物検出状況
（南から）



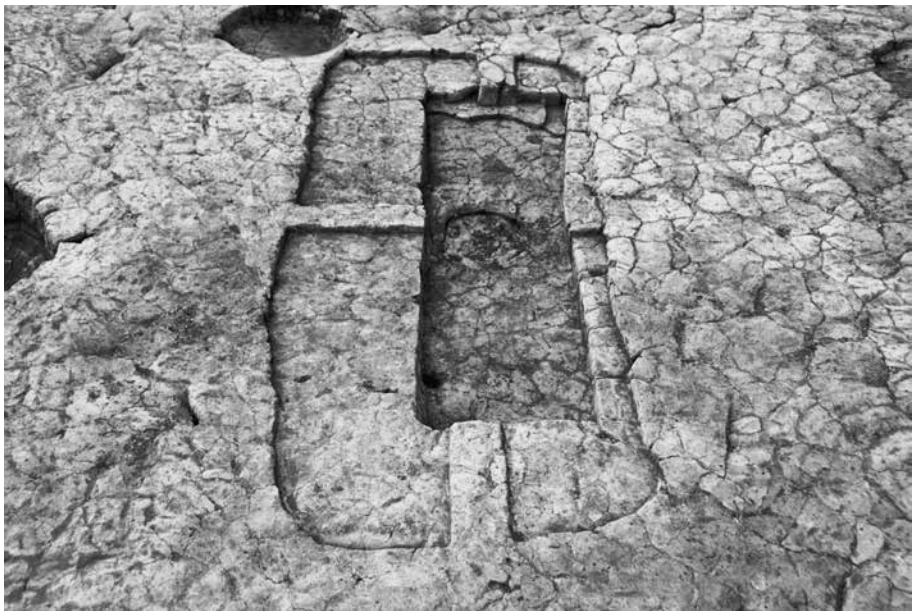
（２）17次Ｌ５地区
木棺墓ＳＸ153
（西から）



（３）17次Ｌ５地区
木棺墓ＳＸ154
（東から）



（１）17次Ｌ５地区
木棺墓ＳＸ150・151
（東から）



（２）17次Ｌ５地区
木棺墓ＳＸ67
（東から）



（３）17次Ｌ５地区
17－７・15・16号墓
（東から）



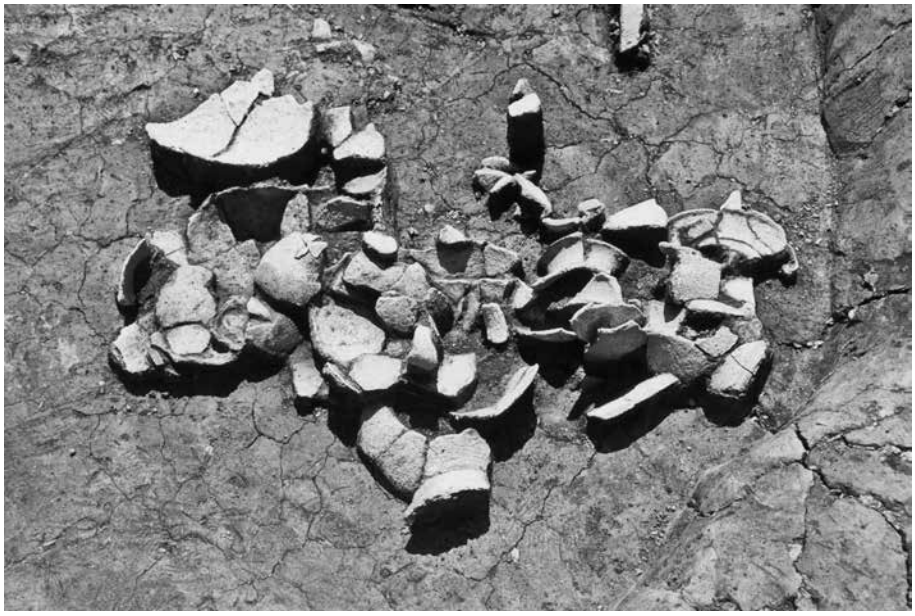
（１）17次Ｌ５地区
木棺墓ＳＸ68掘削状況
（西から）



（２）17次Ｌ５地区
17－９・17・18号墓
（東から）



（３）17次Ｌ５地区
木棺墓ＳＸ162
（北から）



（１）17次Ｌ５地区
ＳＫ149遺物出土状況
（北から）



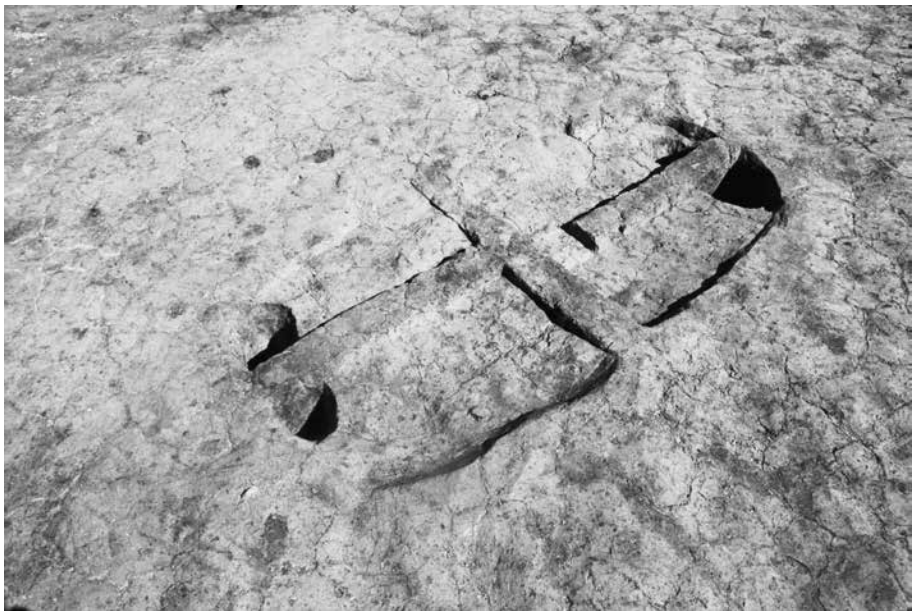
（２）17次Ｌ５地区
17－10～14号墓
（北から）



（３）17次Ｌ５地区
ＳＤ77北西部遺物検出状況
（北から）



（１）17次Ｌ５地区
ＳＤ113遺物出土状況
（南から）



（２）17 次Ｌ５地区
木棺墓ＳＸ 138
（南から）



（３）17次Ｌ５地区
北東部掘立柱建物跡群
（南から）



（１）17次Ｌ５地区
掘立柱建物跡ＳＢ06
（北から）



（２）17次Ｌ５地区
掘立柱建物跡ＳＢ05
（東から）



（３）17次Ｌ６地区全景
（南から）



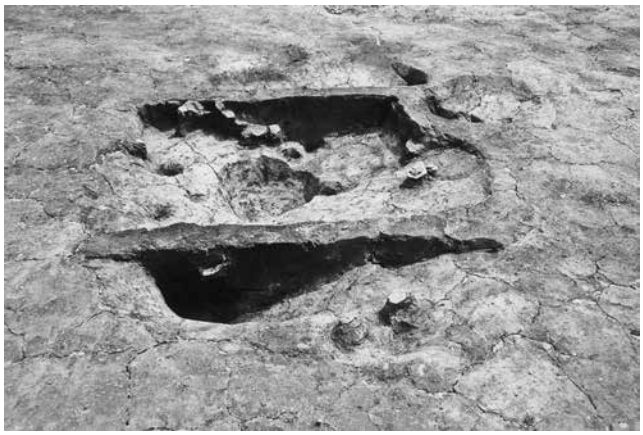
（１）17次Ｌ５地区 ＳＫ169（北から）



（２）17次Ｌ６地区 土器棺墓１検出状況（南から）



（３）17次Ｌ６地区 ＳＫＢ（南から）



（４）17次Ｌ６地区 ＳＫＣ（南から）



（５）17次Ｌ６地区 時塚４号墳全景（西から）



（６）17次Ｌ６地区 掘立柱建物跡ＳＢ01、ＳＡ01（北から）



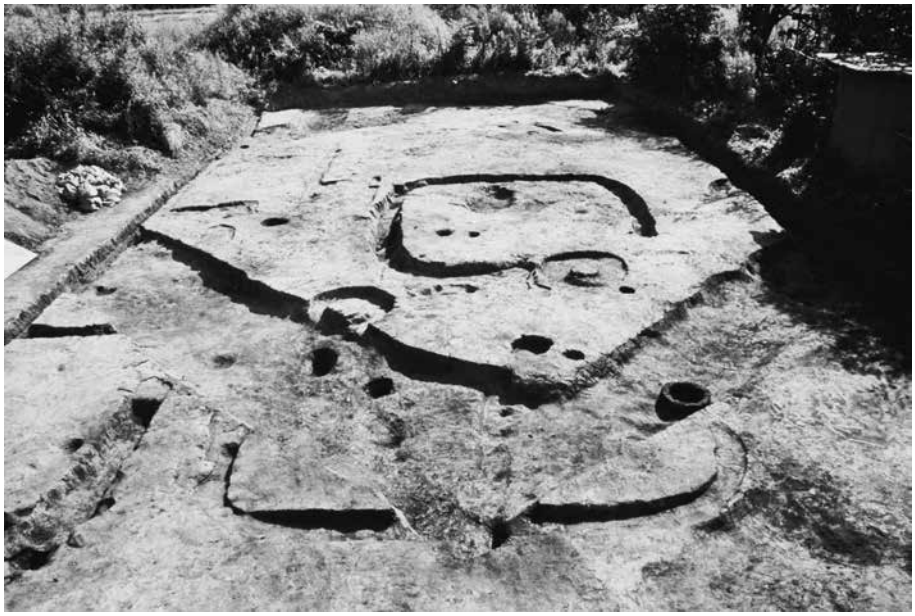
（７）17次Ｌ６地区 南西部掘立柱建物跡群（南から）



（８）17次Ｌ７地区北排土置き場遺構露出状況（東から）



（１）17次Ｌ７地区全景
（上空東から）



（２）17次Ｌ７地区
東半部遺構検出状況
（西から）



（３）17次Ｌ７地区
17－20号墓
（東から）



17 － 14 上



17 － 14 下



18 － 20



18 － 34



19 － 35



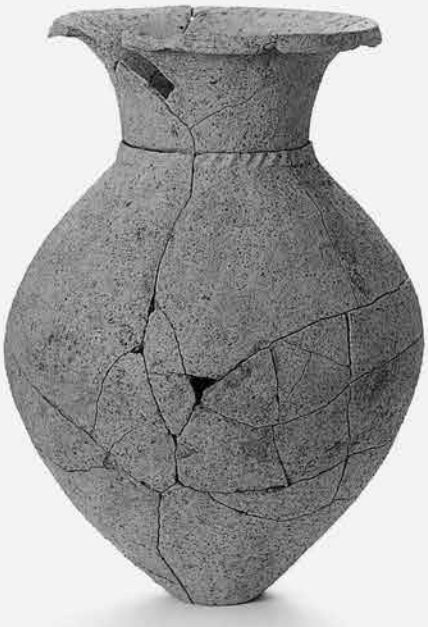
19 － 36



19 － 43



32 － 183



21 － 66



32 － 188



31 － 178



32 － 187



33 － 190



33 － 197



33 － 198



34 － 207



35 － 217



35 － 222

出土遺物 3


35 － 225


73 － 11


130 － 2


137 － 14


119 － 1


74 － 27


146 － 1


146 － 2

出土遺物 4


156 － 2


156 － 10


156 － 6


156 － 7


157 － 17


157 － 35


157 － 26


157 － 36


157 － 34


157 － 38

出土遺物 5


157 － 39


157 － 32


211 － 4


211 － 5


211 － 12


157 － 33


157 － 41


164 － 11

報告書抄録

ふりがな	
書名	
副書名	
巻次	
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第135冊
編著者名	
編集機関	（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内40-3　　Tel. 075（933）3877
発行年月日	西暦2009年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		㎡	
ときづかいせきだいじゅうごじ 時塚遺跡第15次	きょうとふかめおかしうまじちょうときづか 京都府亀岡市馬路町時塚	262064	6	35° 03′ 50″	135° 33″ 55′	20060904 ～ 20070222	5,400	ほ場整備
ときづかいせきだいじゅうななじ 時塚遺跡第17次	きょうふとふかめおかしうまじちょうときづか・すじちがい 京都府亀岡市馬路町時塚・筋違	262064	6	35° 03′ 47″	135° 33′ 55″	20070423 ～ 20070927	4,320	ほ場整備

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
時塚遺跡第15次	集落・墓	弥生時代	竪穴式住居跡／方形周溝墓／木棺墓	弥生土器／石器	多量の弥生土器を出土
		古墳時代	円墳	須恵器／土師器	新たに時塚3号墳を確認
		飛鳥時代	竪穴式住居跡	須恵器／土師器	
		奈良時代	掘立柱建物跡／溝／土坑	須恵器／土師器／黒色土器／製塩土器	「神」と書かれた墨書土器を出土 官衙か
		平安時代	掘立柱建物跡	須恵器／土師器／緑釉陶器／灰釉陶器／瓦器	
時塚遺跡第17次	集落・墓	縄文時代	陥し穴	石器	
		弥生時代	方形周溝墓／土坑／木棺墓	弥生土器／石器	方形周溝墓28基
		古墳時代	竪穴式住居跡／円墳／方墳	土師器／須恵器	新たに方墳9基、円墳2基を確認
		飛鳥時代	竪穴式住居跡	須恵器／土師器	
		奈良時代	掘立柱建物跡／溝	須恵器／土師器	
		平安時代	溝／柱穴	土師器	

所収遺跡名	要　約
時塚遺跡第15・17次	時塚遺跡は、亀岡市域を代表する弥生時代中期の集落遺跡である。今回は墓域の部分を主に調査し、新たに47基の方形周溝墓を検出し、多量の土器が出土した。また、埋葬施設が良好に遺存するものも多く確認された。 古墳時代では、時塚3号墳をはじめとする円墳3基(後期初頭～後期前半)、方墳9基(中期後葉～後期初頭)を確認し、造出付方墳である時塚1号墳に後続する古墳群の実態が明らかとなった。 奈良時代では、後半代を中心に、遺跡の広範にわたり、掘立柱建物跡群が展開する様相が明らかとなった。中には施設の区画溝とみられる遺構もあり、「神」と書かれた墨書土器や多量の製塩土器の存在から官衙的性格をもった遺跡であると考えられる。 平安時代にいたっても掘立柱建物群の造営は継続するが、その範囲は狭くなり、中世段階にはほとんど遺構が見られない状況が明らかとなった。

京都府遺跡調査報告集 第135冊

平成21年３月31日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Tel (075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三星商事印刷株式会社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代)　Fax (075)231-7141